

鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡
(II)

一般国道 157 号改良事業に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1985

石川県立埋蔵文化財センター

鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡 (II)

一般国道 157 号改良事業に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

石川県立埋蔵文化財センター



航空写真（南から）



第4次調査区航空写真（東から）



第2次調査区全景（南から）



第2・3次調査区全景（北から）

例 言

- 1 本書は石川県石川郡鶴来町白山町地内に所在する白山遺跡・白山町墳墓遺跡の第2～4次発掘調査報告書である。第1次発掘調査区は「鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡」として、昭和55年度に刊行されているので、本報告書には（II）を付している。
- 2 本遺跡の第1次発掘調査は、石川県企業局の手取川水道用水供給事業に係る緊急発掘調査事業で昭和54年度に実施している。第2～4次発掘調査は、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所管内の国道157号線（鶴来バイパス）改築事業に係るもので、昭和55・56年度に実施している。第1～4次発掘調査は石川県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本遺跡の第2次発掘調査は、浅田耕治、西野秀和（石川県立埋蔵文化財センター）が担当し、滋井 真（石川考古学研究会）、伴場 博（辰ノ口町教育委員会）、五十川 稔（鶴来町教育委員会）、木田 清（金沢大学）、岡本恭一（奈良大学）、吉田敬治（京都産業大学）の協力を受けた。第3・4次調査は、小嶋芳孝、垣内光次郎（石川県立埋蔵文化財センター）が担当し、遺物整理にあたっては、宮下栄仁、藤田邦雄、田畑 弘、本田秀生の協力があった。
- 4 調査の実施にあたっては、建設省金沢工事事務所、鶴来町教育委員会、白山町町内会、㈱セントラル航業の助言、協力を受けた。
- 5 発掘および遺物整理にあたって、次の各位の御教示を賜った。
谷口正幸（鶴来町立博物館長）、藤 則雄（金沢大学教授）、浅香年木（国立石川工業高等専門学校教授）、中西国男（金沢高校教諭）
- 6 本遺跡の出土遺物等の整理作業は、石川県埋蔵文化財協会に委託した。
（担当一 小屋玲子、正木直子、新谷由子、戸澗かがり、辻森由美子、河端敦子、米沢富士枝、北 洋子、土井真知子、勝島栄蔵、大藤雅男）
- 7 石器、石造遺物の石質鑑定は、藤 則雄氏に依頼し、「石器圏」についての玉稿を受けた。
- 8 中世の古文書等に関する事柄は、中西国男氏に依頼し、玉稿を受けた。
- 9 本書の編集は、垣内、西野があたり、次の各氏で分担執筆を行った。執筆分担は目次の項に記載した。
藤 則雄、中西国男、本田秀生、垣内、西野
- 10 本遺跡の遺構、遺物実測図、写真、出土遺物等の資料は、本センターにて一括して保存管理にあっている。
- 11 本書の遺構・遺物挿図、写真図版の指示は、次の通りである。適宜変更したものについては、挿図に明示した。
 - （1）方位は磁北を表示するが、真北をさすものは図上に表示した。
 - （2）水平基準は海拔高で表示する（単位 m）。
 - （3）挿図の縮尺は、表題に明示した。（例 3分の1→1/3）
 - （4）写真図版中の遺物の縮尺は統一していない。
 - （5）写真図版中の遺物番号は、挿図内番号と一致する。
 - （6）本文中にある遺物の計測値の単位は、cm、gである。

目 次

例言

第1章 遺跡の環境

- 第1節 地理的環境（垣内光次郎）……………1
- 第2節 歴史的環境（西野 秀和）……………1

第2章 調査の経緯と概要

- 第1節 調査の経緯……………5
- 第2節 第1次調査（1979年）の概要……………6
- 第3節 第2次調査（1980年）の概要……………8
- 第4節 第3次調査（1981年）の概要（垣内）……………9
- 第5節 第4次調査（1981年）の概要……………9

第3章 遺構の配置と層序

- 第1節 第2次調査区の遺構と層序（西野）……………12
- 第2節 第3・4次調査区の遺構と層序（垣内）……………15

第4章 遺 構

- 第1節 縄文時代の遺構（西野）……………21
 - 1 住居址、2 炉址、3 埋甕
- 第2節 中世の遺構……………24
 - 1 墳墓址、2 道址、（西野）3 石室、4 配石遺構、5 土壇、（垣内）

第5章 遺 物

- 第1節 縄文時代の遺物……………35
 - 1 土器、2 土偶、土製品（西野）、3 石器（本田秀生）
- 第2節 中世の遺物……………112
 - 1 土壇出土土器、2 舶載陶磁器、3 国産陶磁器

第6章 まとめ

- 第1節 石器の石質とそれに基づく石器圏（藤 則雄）……………135
- 第2節 縄文土器の概観について（西野）……………141
- 第3節 白山本宮と白山町墳墓遺跡（中西国男）……………148
- 第4節 中世、北加賀の陶磁器流通について（垣内）……………157

挿 図 目 次

- 第1図 鶴来町の位置……………1
- 第2図 周辺の遺跡（1/25,000）……………3
- 第3図 石切小原遺跡、白山遺跡採集石器（1/3）（吉岡康暢氏原図）転載……………5
- 第4図 遺跡の地形と試掘溝配置図（1/3,000）……………6
- 第5図 第1次調査区遺構配置図（I）（1/500）……………6
- 第6図 第1次調査区遺構配置図（II）（1/500）……………7
- 第7図 1号配石址実測図（1/40）……………7
- 第8図 5号配石址実測図（1/40）……………7
- 第9図 第2～4次調査区配置図（1/2,500）……………10

第10図	第2次調査区遺構配置図 (1/250)	12
第11図	土層断面図 (1/80)	13
第12図	遺物取り上げ番号図 (1/200)	14
第13図	第3次調査区遺構全体図 (1/200)	15
第14図	第4次調査区遺構全体図1 (1/300)	17
第15図	第4次調査区遺構全体図2 (1/300)	18
第16図	第4次調査区遺構集中地区平面図 (1/100)	19
第17図	縄文土器出土状況図 (1/40)	20
第18図	住居址平面図 (1/60)	21
第19図	住居址平面図 (1/60)	22
第20図	石囲炉、埋甕の配置 (1/60)	23
第21図	石囲炉実測図 (1/20)	23
第22図	壺出土状況実測図 (1/20)	23
第23図	埋甕実測図 (1/20)	23
第24図	埋甕実測図 (1/20)	23
第25図	中世墳墓実測図 (1/60)	25
第26図	中世墳墓平面図 (1/60)	26
第27図	中世墳墓基礎平面図 (1/60)	27
第28図	道実測図 (1/120)	27
第29図	道断面図 (1/80)	27
第30図	石室・カマド状遺構実測図 (1/40)	29
第31図	土壇・配石遺構実測図 (1/40)	31
第32図	土壇実測図1 (1/80)	35
第33図	土壇実測図2 (1/80)	36
第34図	縄文土器拓影 (1) (1~70) (1/3)	39
第35図	縄文土器拓影 (2) (71~116) (1/3)	40
第36図	縄文土器拓影 (3) (117~151) (1/3)	41
第37図	縄文土器拓影 (4) (152~217) (1/3)	47
第38図	縄文土器拓影 (5) (218~281) (1/3)	49
第39図	縄文土器拓影 (6) (282~351) (1/3)	51
第40図	縄文土器拓影 (7) (352~391) (1/3)	55
第41図	縄文土器拓影 (8) (392~454) (1/3)	56
第42図	縄文土器拓影 (9) (455~509) (1/3)	59
第43図	縄文土器拓影 (10) (510~565) (1/3)	60
第44図	縄文土器拓影 (11) (566~613) (1/3)	63
第45図	縄文土器拓影 (12) (614~644) (1/3)	64
第46図	縄文土器拓影 (13) (645~691) (1/3)	67
第47図	縄文土器拓影 (14) (692~707) (1/3)	68
第48図	縄文土器拓影 (15) (708~749) (1/3)	69
第49図	縄文土器拓影 (16) (750~772) (1/3)	70
第50図	縄文土器拓影 (17) (773~820) (1/3)	72
第51図	縄文土器拓影 (18) (821~846) (1/3)	73

第 52 図	縄文土器拓影 (19) (847~885) (1/3)	74
第 53 図	縄文土器拓影 (20) (886~903) (1/3)	76
第 54 図	縄文土器・弥生土器拓影 (21) (904~941) (1/3)	77
第 55 図	土製品実測図 (942~948) (1/3)	79
第 56 図	打製石斧計測グラフ (1)	87
第 57 図	石器組成のダイヤグラム	87
第 58 図	打製石斧計測グラフ (2)	88
第 59 図	石器実測図 (1) (1/3)	91
第 60 図	石器実測図 (2) (1/3)	92
第 61 図	石器実測図 (3) (1/3)	93
第 62 図	石器実測図 (4) (1/2)	94
第 63 図	石器実測図 (5) (1/4)	95
第 64 図	石器実測図 (6) (1/4)	96
第 65 図	石器実測図 (7) (1/4)	97
第 66 図	石器実測図 (8) (1/4)	98
第 67 図	石器実測図 (9) (1/4)	99
第 68 図	石器実測図 (10) (1/4)	100
第 69 図	石器実測図 (11) (1/4)	101
第 70 図	第 7 号土坑出土土器実測図 (1/3)	112
第 71 図	第 16・17・19・40 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	113
第 72 図	青磁実測図 (1/3)	114
第 73 図	白磁・染付・他実測図 (1/3)	116
第 74 図	瀬戸・美濃実測図 (1/3)	118
第 75 図	珠洲焼実測図 (1/3)	119
第 76 図	越前・加賀焼実測図 (1/3)	121
第 77 図	土師質土器実測図 (1/3)	122
第 78 図	近世陶磁器実測図 (1/3)	123
第 79 図	須恵器実測図 (1/3)	124
第 80 図	砥石・硯・瓦質土器実測図 (1/3)	125
第 81 図	金属製品・鞆の羽口実測図 (1/3)	126
第 82 図	石鉢・行火・五輪塔実測図 (1/4)	128
第 83 図	石造遺物実測図 1 (1/4)	130
第 84 図	石造遺物実測図 2 (1/4)	131
第 85 図	石造遺物・石臼実測図 (1/4)	132
第 86 図	石臼実測図 1 (1/4)	133
第 87 図	石臼実測図 2 (1/4)	134

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	1
第2表	縄文土器出土地点表	80
第3表	底部集成表	83
第4表	石器計測表	102

図 版 目 次

巻頭図版1	航空写真（南から）、第4次調査区航空写真（東から）
巻頭図版2	第2調査区全景（南から）、第2・3次調査区全景（北から）
図版1	遺跡周辺の航空写真（セントラル航業撮影）
図版2	第2次調査区全景（南から）、第2次調査区道全景（南から）
図版3	第2次調査区ピット群近景（南から）
図版4	第2次調査区ピット群（北西から）、第2次調査区ピット群近景（北から）
図版5	1石囲炉の検出状況、2石囲炉、3壺出土状況、4～6埋甕
図版6	遺物出土状況、1打製石斧、2石鎌、3石錘、4鏢節型石器、5石刀、6球形土製品
図版7	中世墳墓（西から）
図版8	中世墳墓の調査前の状況と調査風景
図版9	遺物の出土状況 1水輪、2・3空風輪、4地輪、5遺骨の出土状況、6遺骨を取り上げた後
図版10	1～4道の検出状況、5紀年銘地輪の出土状況、6北端部試掘坑
図版11	第3次調査区全影（上一北から・下一南から）
図版12	石室全影（北から）、カマド状遺構、瓦質土器・茶臼・砥石出土状況
図版13	第4次調査区全影（西側、上一北から・下一南から）
図版14	第4次調査区全影（東側、上一北から・下一南から）
図版15	第4次調査区遺構全影（東から）、縄文土器出土状況（北から）
図版16	第2・3号配石遺構全影、第1号配石遺構全影
図版17	第5号土壇全影、第7号土壇遺物出土状況
図版18	第4・6号土壇全影、石臼出土状況
図版19	第8号土壇全影、第12号土壇全影
図版20	第19号土壇全影、第23号土壇全影
図版21	第28号土壇遺物出土状況、第40号土壇遺物出土状況
図版22	瀬戸・美濃・石硯・染付・鉄蓋・火箸・くつわ・牛歯出土状況
図版23	縄文土器（1～89）（1/3）
図版24	縄文土器（76～211）（1/3）
図版25	縄文土器（69・70・205～309）（1/3）
図版26	縄文土器（311～405）（328～333—1/2、他1/3）
図版27	縄文土器（407～530）（418～430—1/2、他1/3）
図版28	縄文土器（529～613）（1/3）
図版29	縄文土器（614～681）（1/3）
図版30	縄文土器（682～739）（701、702は任意、他1/3）

- 図版 31 縄文土器 (638~807) (1/3)
- 図版 32 縄文土器 (810~886) (838 は任意、他 1/3)
- 図版 33 縄文土器・土偶・弥生土器 (888~945) (890 は任意、943~945 は 1/2、他 1/3)
- 図版 34 縄文時代石器 (1) (1/3)
- 図版 35 縄文時代石器 (2) (1/2、46~53 は 1/3)
- 図版 36 縄文時代石器 (3) (1/3)
- 図版 37 縄文時代石器 (4) (1/3)
- 図版 38 縄文時代石器 (5) (1/3)
- 図版 39 縄文時代石器 (6) (1/3)
- 図版 40 土師質土器 (第 70 図)
- 図版 41 土壇出土遺物・青磁 (上一第 71 図、下一第 72 図)
- 図版 42 白磁・染付・瀬戸・美濃 (上一第 73 図、下一第 74 図)
- 図版 43 珠洲焼・瓦質土器 (第 75 図、右下一第 80 図)
- 図版 44 越前・加賀焼・土師質土器 (上一第 76 図、下一第 77 図)
- 図版 45 近世陶磁器・須恵器・金属製品 (上一第 77 図、中一第 79 図、下一第 81 図)
- 図版 46 砥石・石製品・五輪塔 (上一第 80 図、下一第 82 図)
- 図版 47 石造遺物
- 図版 48 石臼

第1章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

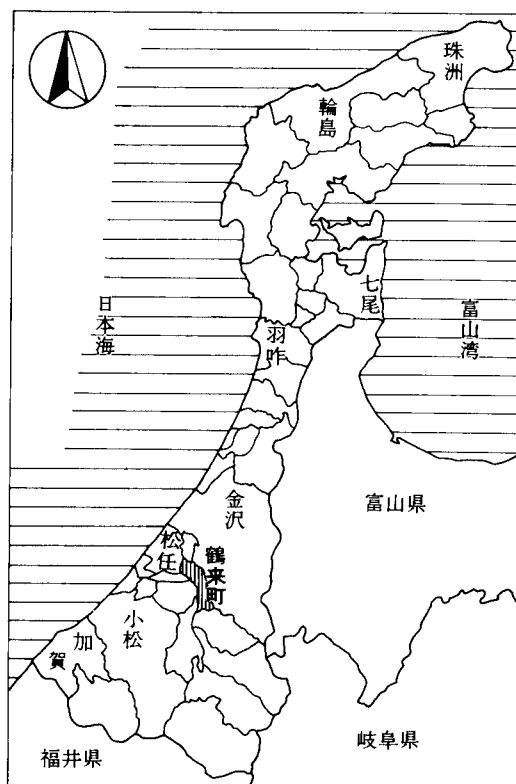
北陸の霊峰白山の大汝峰（標高2,684m）に源を発した手取川は、白山の北西部に連なる山脈から流下した小河川を合流しながら、白山麓の手取渓谷を北流する。中流域では手取川峡谷や河岸段丘を刻みながら、谷口の鶴来町にて流れを西へ変え美川町で日本海へ注いでいる。その流程は約70kmで、県下最大の河川であるが、その流れは急で水運には適さない。また、下流域では県内の代表的な扇状地である手取川扇状地（曲率半径12km、扇形の開角度110度）を形成している。一方、中流域の鳥越村から鶴来町にかけて発達した河岸段丘は、渓谷の一方だけに見られることが多い。この河岸段丘が最も発達した鶴来町南端の中島～白山町地内では、渓谷の西側を手取川が北流して、右岸には東に連なる獅子吼山系の山麓にかけて六段の河岸段丘が見られる。本遺跡はこの第二段目の段丘上（標高約110m）に営なまれ、地籍は鶴来町大字白山町である。これらの段丘は、洪積世末期の河岸段丘堆積物である礫層から形成されている。なお、第三段目には白山町の集落が広がり、第五・六段目には加賀一の宮である白山比咩神社の他に県林業試験場や県営浄水場などが位置している。これら南北に並列する段丘は東方の獅子吼山系から流下した小河川により区画される。本遺跡も北のウワツボ川と南の桂谷川により画かれて、遺跡を覆う土砂はこれらの河川により搬ばれ堆積したものである。

本遺跡の上流に広がる手取渓谷は、古くから奥美濃や越前への交通路として利用され、谷口に位置する鶴来町は、平野部の集落と渓谷に散在する集落の中継地として機能して、現在でも福井県勝山市に継がる国道157号は、金沢と勝山・大野間の近道として大いに利用されている。しかし、この手取渓谷は、鶴来町の市街地周辺から冬期の積雪量が多い豪雪地帯でもある。

また、下流域に広がる手取川扇状地は、石川平野の中心部を占める早場米の単作地帯である。この扇状地に開けた水田の灌漑は、七ヶ用水と称される農業用水網によるもので、七ヶ用水の整備が扇状地の開発に大きく関わるものであったことは明白である。現在の七ヶ用水は、本遺跡横の白山堰堤から取水しているが、明治36年の取水口合併以前は各用水が直接に手取川から取水していた。各用水は手取川の旧河道と考えられるが、その流れは比較的緩やかで水運にも利用されていた。これら農業用水を介して扇状地に広がる集落と鶴来町との結び付きは、時代は異なるが、本遺跡の立地要因としても見出されるが、それは白山比咩神社に代表される白山宮の傘下で成立・発展したものと見えよう。

第2節 歴史的環境

縄文時代の白山麓は、金沢平野を中核とする中期以降の集落址の研究成果と比較検討される地域として知られてきた。本遺跡の北方約1km、舟岡山の北麓に中期集落址舟岡山遺跡が所在している。昭和23年10月、石川考古学研究会の発会式と第1回総会が、白山公民館で開かれ、同日に記念発掘が



第1図 鶴来町の位置

実施されている。記念発掘は県下で最初の石囲炉址を検出し、翌年の調査の端緒となり、県下の縄文文化研究の魁となるものとなった。調査の結果、石囲炉址3基、磨製石斧15、石鎌1、石皿2、磨石37、打製石斧35、土器多数が得られている。土器は中期中葉の上山田式、古府式、大杉谷式が見られ、上山田式期に形成がはじまった集落址であった。現在は県立白山青年の家敷地となり、住居址2棟が復元されている。

昭和35年には鶴来高校に勤務されていた吉岡康暢氏の指導にかかる「手取川流域の縄文遺跡予報」が公刊され、本遺跡周辺の主だった縄文遺跡が網羅されている。

本遺跡の北西方向約2.7km、手取川の南岸には、辰ノ口町岩本遺跡が所在する。後期前半の遺跡で、打製石斧、石錘、土器片が得られていて、1点のみの表採品であるが後期気屋式土器片が知られ、能登を中核とする気屋式土器の分布圏の南限にあたることから、重要な意義を含んでいると考えられる。岩本遺跡の立地する能美丘陵北麓には、中～後期の長滝B遺跡、中期中葉の筋生遺跡、火釜遺跡、大口遺跡等多数の所在が知られている。

本遺跡の東南約0.5km、月惜山（標高442.9m）の山麓緩斜面に白山上野遺跡が所在している。通称「ウエノ」「キツネヅカ」と呼ばれる標高約120mの地点において、昭和34～36年に吉岡康暢氏の指導のもとに発掘調査が実施されている。調査の結果、4基の住居址、組石遺構1基の遺構と共に、磨製石斧14、打製石斧16、石鎌15、石錘76、凹石44、石匙4、石皿2、土器多数が出土している。土器は中期後半から後期初頭までの幅があるが、検出した住居址は中期後半の所産と考えられる。吉岡康暢氏の報告には、異形石器単独出土地点として、白山カツサカの遺跡名が見え、本遺跡をさしている。

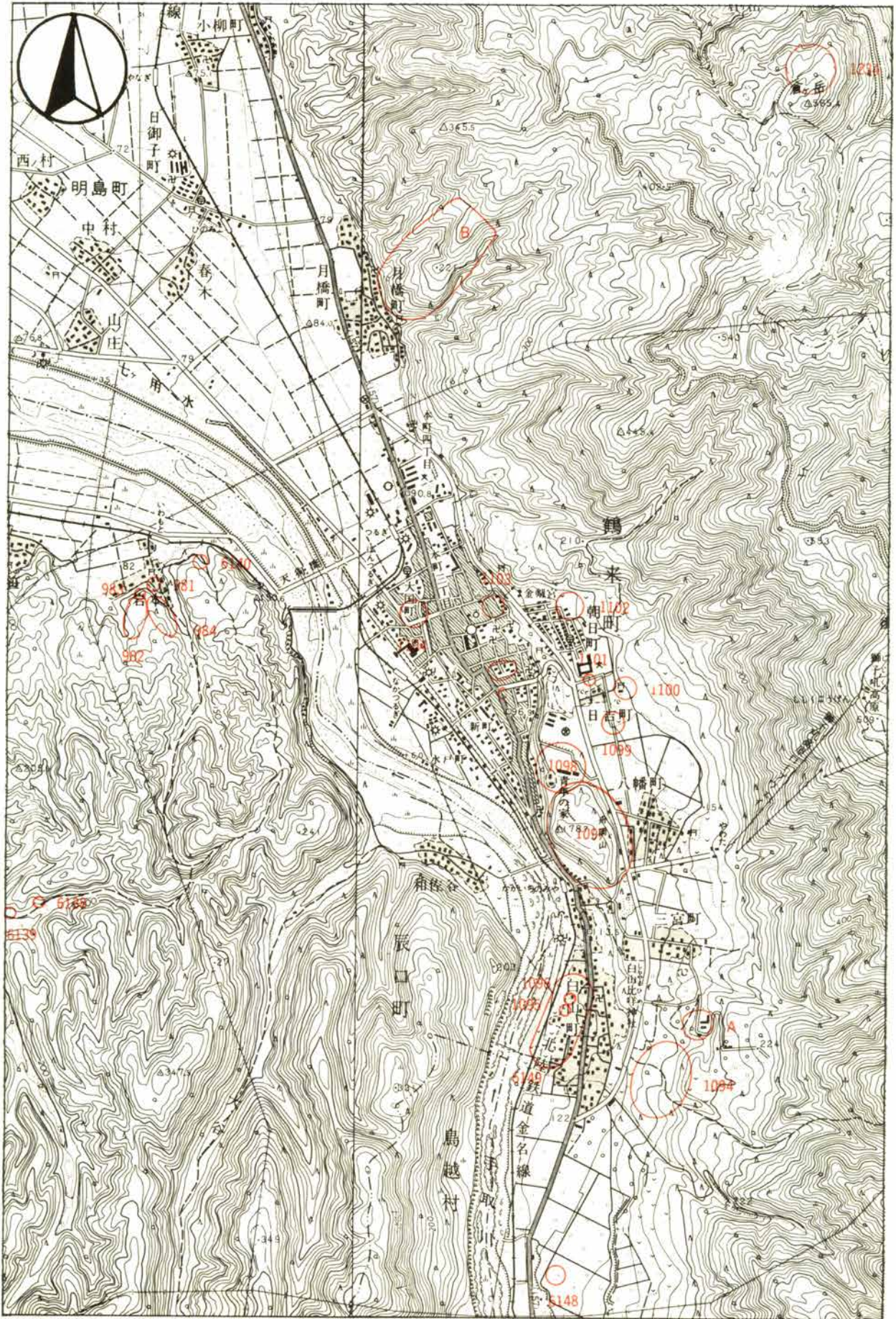
白山麓の河岸段丘上には後・晩期の遺跡が数多く知られている。鳥越村下野遺跡は晩期後半、大洞C₂式に併行する下野式土器の標式遺跡で、吉岡康暢氏による詳細な研究報告がある。同村下吉谷遺跡は、圃場整備に係る緊急調査が昭和52年に実施され、後～晩期の良好な資料が得られ、弥生式土器初頭の遠賀川式土器壺に類似するものが得られ、注目を集めた。昭和50年代、手取ダム建設工事に伴う調査が、尾口村御所の館遺跡、白峰村東島遺跡、白峰村象ヶ崎遺跡で実施され、数々の成果を上げている。その他には、鳥越村別宮出遺跡（後期）、尾口村尾添遺跡（晩期）が上げられる。

鶴来町を境に白山麓を北流してきた手取川は、その景観を大きく変え手取扇状地形を形成する。現在の手取川は能美丘陵に沿うごとくに西流して日本海に注いでいるが、扇状地末端部、地下水自噴地帯には、後・晩期の集落址が集中している。一部は金沢市犀川扇状地形と複合しているが、金沢市古府遺跡（中期中葉）、金沢市北塚遺跡（中期後葉）、金沢市中屋遺跡（晩期前半）、金沢市八日市新保遺跡（晩期前半）、野々市町御経塚遺跡（後期後半）、松任市長竹遺跡（晩期後半）が上げられ、発掘調査によって数多くの成果が上げられている。

本遺跡の立地は、白山麓の北端にあたり、平野部に立地する集落址と一線を画するとは言え、交易、交通の要所を占めていると考えられ、石器圏、土器圏の動向を知るうえで、重要なフィールドと言えよう。

弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の白山麓での状況は、極めて不鮮明であり発見されている遺跡も極めて少ないと言える。本遺跡の調査でも数例の須恵器片が検出されたにとどまる。鶴来町のなかでも北側の平野部では点々と集落址が検出されてきているとは言え、平安時代をのぞいては希薄であり、扇状地開発の困難さを指し示しているとも考えられる。本遺跡の北北西約4kmの知気寺町、荒屋町から北方域は、中世初頭の拝師郷在地領主だった林氏の本拠地と想定される地域で、安養寺遺跡群として把握されている。遺跡群は、上林地区、安養寺地区、柴木・部入道地区の3地域を包括したもので、掘立柱建物跡、溝跡、土壇等の遺構の他に、施釉土器をはじめとして多量の遺物が得られている。安養寺遺跡群の北方域は野々市町末松遺跡群が位置していて、遺跡の境界を把握するのが困難な状況を呈してきている。これらの扇状地扇状部分の開発の進展に何らかの関わりを有していたのが、鶴来町の金剣宮と白山比咩神社である。

本遺跡の北方約600m、安久溝ヶ淵をのぞむ古宮公園となっている所が、1480年の火災にあうまで白山比咩神社本宮がおかれた所と伝えられている。白山信仰は越前馬場で活動した泰澄大師によって広められ、平安時代半ばの加賀馬場は本宮四社（本宮、金剣宮、三宮、岩本宮）、手取川中流域の中宮三社（中宮、佐羅、別宮）を合せた白山七社を形成していた。白山本宮の初期の神主は、古墳時代北加賀の豪族道君と考えられ、平安後期から中世



「栗生」「鶴来」分載

1 : 25,000



第2図 周辺の遺跡

はじめにかけての上道氏の世襲が知られている。11世紀末から12世紀初頭にかけて、拝師郷（安養寺遺跡群を中核とする）の再開発に林氏が領主的展開をはかり、水源の確保や平野部の領有をめぐる争いが引き起こされてゆく。白山本宮白山寺は久安3年（西暦1147年）に、比叡山延暦寺別院となり、中央権力を後盾とした在地領主的性格をもって新興勢力と対峙してゆく。林氏は治承・寿永の内乱、承久の乱を経て没落してゆき、在地領主の地位は富樫氏にとってかわられる。

中世後期には本宮前、金剣宮前は物資の集散地としての門前町に発展し、野々市を經由する大野湊までの交易路が発達していた。現鶴来町中核部のはじまりである。市街地内には、日吉町遺跡、日詰町遺跡、薬師寺跡、清沢願得寺跡等の遺跡が知られ、大洪水や火災の影響を受けているとは言え、市街地全域に中世門前町の埋蔵文化財が眠っているとして大過ないと思われる。

文明3年（西暦1471年）に本願寺蓮如が越前吉崎に道場をひらき、一向宗の北陸進出がはかられ、加賀国は以後100年以上の歴史を一向宗を中核として展開してゆく。鶴来以南の白山麓地域は山内庄と呼ばれ、加賀一向一揆最後の拠点として良く知られているところである。本遺跡の北方500mにそびえる舟岡山城は、山内庄の前進基地としてその性格を当時もっていたのであろうか。現在は杉林となっているが、郭、堀切等は良く旧状を保存していると見られる。

参考・引用文献

- 「一ノ宮郷土誌」 1983 一ノ宮公民館
 「手取川流域の縄文遺跡予報」 1960 鳥越村役場・県立鶴来高校地歴クラブ
 「石川郡鶴来町舟岡山住居址遺跡の調査」『石川考古学研究会々誌 第2号』
 「石川県石川郡鶴来町白山上野住居址群 第1・2次調査概報」 1968 『石川考古学研究会々誌 第11号』
 「安養寺遺跡群発掘調査概報（安養寺・柴木・部入道地区）」 1975 石川県教育委員会
 「角川日本地名大辞典 17 石川県」 1981 角川書店
 「鶴来町の古代中世遺跡」 1963 県立鶴来高校地歴クラブ
 「県下の貝塚と古墳」 1958 石川県図書館協会
 「幻の舟岡山城址」 1980 鶴来町観光協会
 「鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡」 1981 石川県立埋蔵文化財センター

第1表 周辺の遺跡一覧表

県番号	名 称	所 在 地	種別	現 況	時 代	出 土 品
981	岩本岩根宮遺跡	辰口町岩本	包含地	平地・社地	縄文中後期	土器、石錘
982	岩本中世墓遺跡	〃 〃 (テラタニ)	墳 墓	台地・山林	中 世	五輪塔
983	岩本家清館跡	〃 〃 (〃)	館 跡	〃	不 詳	
984	岩本1～6号経塚	〃 〃	経 塚	丘陵・山林	中 世	
1094	白山上野遺跡	鶴来町白山町(キツネツカ)	包含地	〃・畑地	縄文中期	土器、土偶
1095	白山遺跡	〃 〃 (カツサカ)	〃	平地・〃	縄文後晩期	異形石器
1096	白山町墳墓遺跡	〃 〃 (〃)	墳 墓	〃・〃	中 世	五輪塔
1097	舟岡城跡	〃 八幡町(フナオカヤマ)	城 跡	丘陵・山林	不 詳	
1098	舟岡山遺跡	〃 〃	包含地	台地・宅地	縄文中期	土器、打斧
1099	石切小原遺跡	〃 日吉町(イシキリオハラ)	〃	平地・山林	縄 文	石器単独出土
1100	薬師寺跡	〃 〃 (〃)	寺院跡	〃・畑地	中 世	
1101	日吉町墳墓遺跡	〃 〃 (〃)	墳 墓	台地・荒地	鎌 倉	五輪塔、板碑
1102	清沢願得寺跡	〃 朝日町	寺院跡	〃・社地	不 詳	
1103	日詰町遺跡	〃 日詰町	包含地	平地・宅地	鎌 倉	土師質土器
1104	大国社跡	〃 大国町	宮 跡	平地・宅地	不 詳	
1234	倉ヶ岳城跡	金沢市倉ヶ岳町(ジョウヤマ)	城 跡	山頂・山林	鎌 倉	
6138	大口B遺跡	辰口町大口	包含地	平地・水田	平 安	
6139	大口A遺跡	〃 〃	〃	丘陵斜面	奈良・平安	
6140	岩本B遺跡	〃 岩本	〃	〃	平 安	
6148	白山町墳墓遺跡(II)	鶴来町白山町	墳 墓	平地・畑地	中 世	五輪塔
6149	白山町遺跡	〃 〃	集落跡	〃・〃	〃	陶磁器
新A	白山上野B遺跡	〃 〃	包含地	平地・山林	縄文・中世	土器、五輪塔
〃 B	月橋城跡	〃 月橋町	城 跡	丘陵・〃	不 詳	
〃 C	市宮跡(恵比須社跡)	〃 本町	社 跡	平地・宅地	〃	

第2章 調査の経緯と概要

第1節 調査の経緯

昭和40年代の日本は、いたるところで巨大開発計画が進行していたが、石川県においては手取ダム建設がその筆頭に上げられる。昭和46年、県教育委員会文化財保護課に県企画開発部から手取ダム建設計画が示され、埋蔵文化財保護に関する協議が開始されている。白山麓の自然とくらしを大きく変える開発は多岐にわたる。手取ダム本体に関わるものや、ダムの貯水による水没地区、発電所用地や導水管、送電線鉄塔建設用地、工事用道路などの用地にとり込まれた遺跡も数多い。昭和49年には尾口村東二口地内に所在する御所の館縄文遺跡(縄文後～晩期の墓址)の調査が実施されたのをはじめとして、昭和50年度には白峰村桑島・東島遺跡(縄文中期の集落址)、同村桑島象ヶ崎館跡(近世初頭の館跡)の発掘が続いている。桑島象ヶ崎館跡は昭和53年度まで継続して調査が行われ、縄文時代後期初頭の竪穴式住居址1棟を検出した桑島象ヶ崎遺跡もあわせて発掘が実施されている。また、ダムによって水没する地区の住民の代替地宅地造成に係る調査が、昭和49年鶴来町安養寺地区で実施され、上林・柴木・部入道地内へも広がる広大な安養寺遺跡群として把握されるに至り、古代拝師郷の林氏に関わる遺跡として注目を集めた。

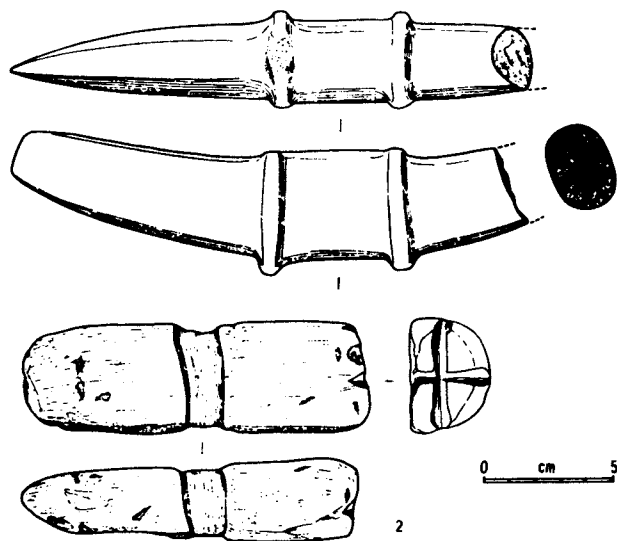
手取ダムは多目的ダムで、能登半島は能登島町まで、加賀は加賀市までの4市10町に水道用水を供給する事業も併行して進められ、本遺跡の南方約1.5kmに急速濾過池32池を持つ浄水場が建設されている。本遺跡の第1次調査は、浄水場から各市町の受水池や調整池を結ぶ導水管埋設工事に係るものであった。水道事業に伴う緊急調査は本遺跡の他に、鶴来町安養寺遺跡、宇ノ気町鉢伏茶白山遺跡、鹿西町宮地遺跡、七尾市岩屋古墳群、能登島町須曾うわだら遺跡などで実施されている。

鶴来町は原始時代からの交通の要所であり、現在もその重要性に変化はないが、自動車交通の進展によって主要道路の整備が急がれた。昭和35年に鶴来町の東丘陵地に山の手バイパスが企画され、昭和46年12月に全延長3,730m、幅11mの道路を開通させている。しかし、手取ダム建設工事の進展や砂利需要の増大にともなう土石運搬車輛の増加がすすみ、小・中・高校、博物館、青年の家などの文教施設が山の手バイパス沿いにある事も考慮され、交通量緩和を計るうえから、手取川水道用水供給計画と併行して、鶴来バイパス新設計画が進められた。

本遺跡の第2～4次調査は、鶴来バイパス新設に係るもので、第2次調査は昭和55年7月17日から同年12月11日まで現地作業を行った。第3・4次調査は翌年7月15日から11月17日まで実施した。

白山遺跡の発見は昭和30年代前半と考えられる。昭和34年に公刊された吉岡康暢氏の「石川県石川郡鶴来町白山上野住居址群 第1・2調査概報」に異形石器採集地点として、白山カツサカの地名が見える。本遺跡周辺の畑地全体をカツサカと通称している点や、地形図に記入されている地区が本遺跡包含地を指している点などから同一地点として間違いのないであろう。また、遺物の表採可能な地点としては、中世墳墓に寄せられた礫に混じっていた可能性が高いと考えられる。

白山町墳墓遺跡は戦前から知られていたもので、通称カツサカ、「与助の首塚」と呼ばれていて、上

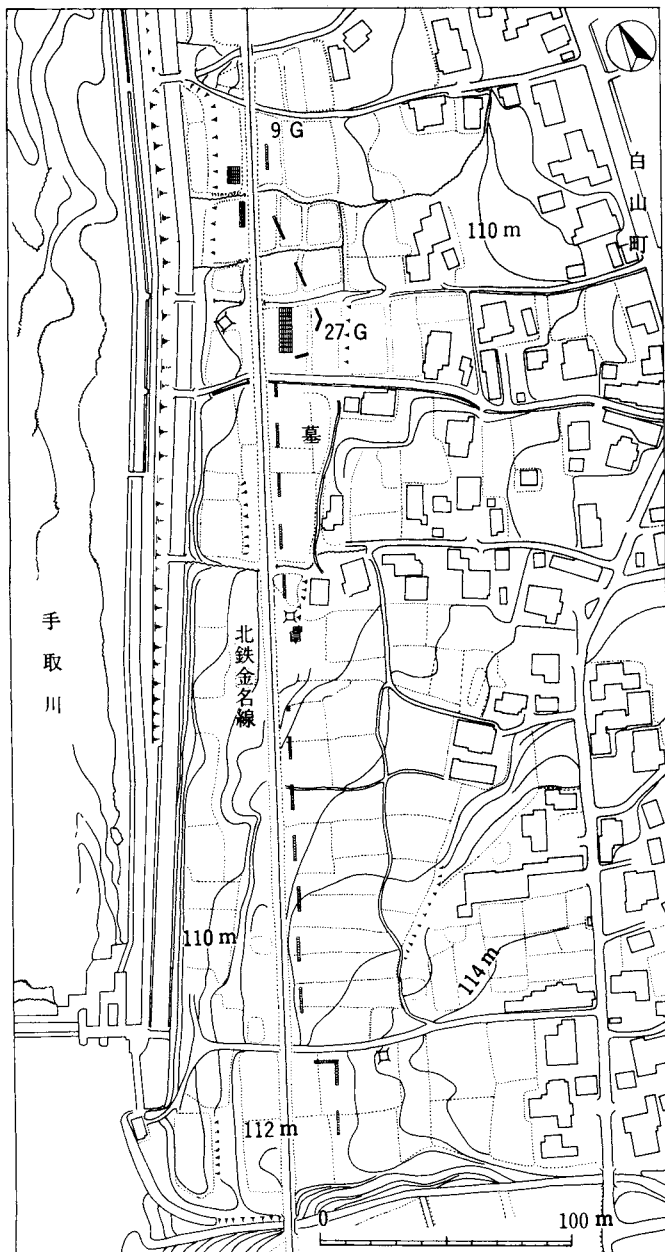


第3図 石切小原遺跡、白山遺跡採集石器 (1/3)
(「白山上野住居址群」から転載)

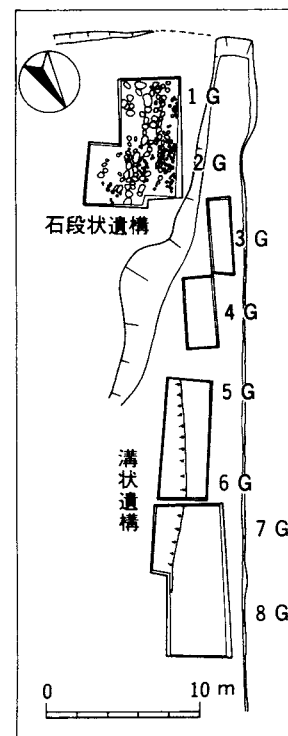
に安置されていた石仏が、浄養寺の一面に移築されたと伝えられている。浄養寺境内には五輪塔地輪に紀年銘を持つもの3例が安置されている。

第2節 第1次調査(1979年)の概要

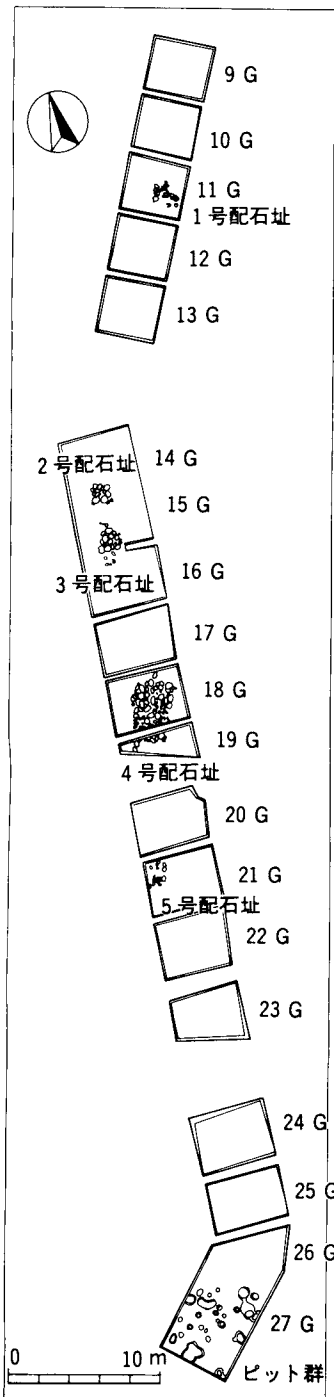
昭和54年5月22日付で、企業局水道建設課から県立埋蔵文化財センターに、手取水道用水供給事業の水道管理設工事にかかる、白山遺跡・白山町墳墓遺跡の範囲確認調査依頼が提出された。墳墓遺跡の中核そのものは把握されていたが、墳墓をつくり上げた中世の関連遺跡や異形石器採集地点である事から、数度の現地踏査を試みた。現地では畑地ではあったものの、雑草が繁茂していて、地表観察が困難な状態ではあったが、広い範囲に珠洲焼片、土師質土器を採集した。同年7月23日から8月10日までの延9日間、試掘調査を実施した。試掘溝は水道管(径180cm)埋設の中軸線に沿って、幅1m、長さ10mのものを10m間隔に設定した。南北の範囲約450mに22箇所による。調査は包含層の有無と遺構の存否の確認を主として、地山面と考えられる深さまで掘り下げた。調



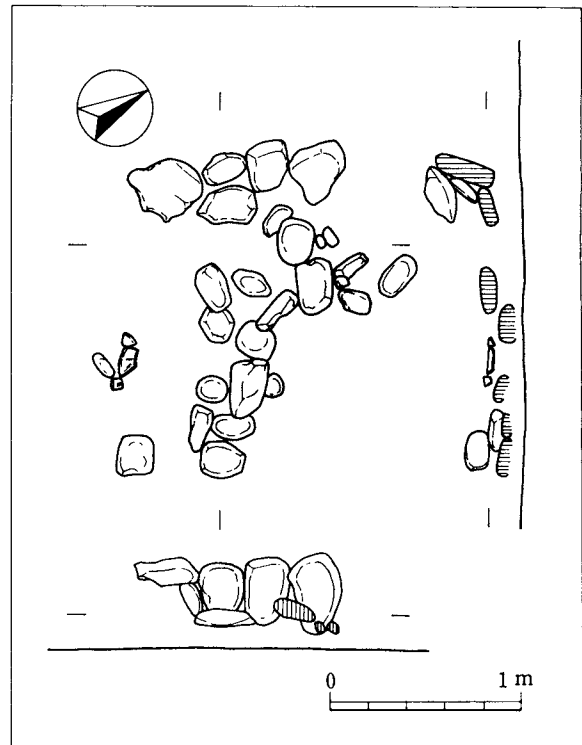
第4図 遺跡の地形と試掘溝配置図 (1/3,000)



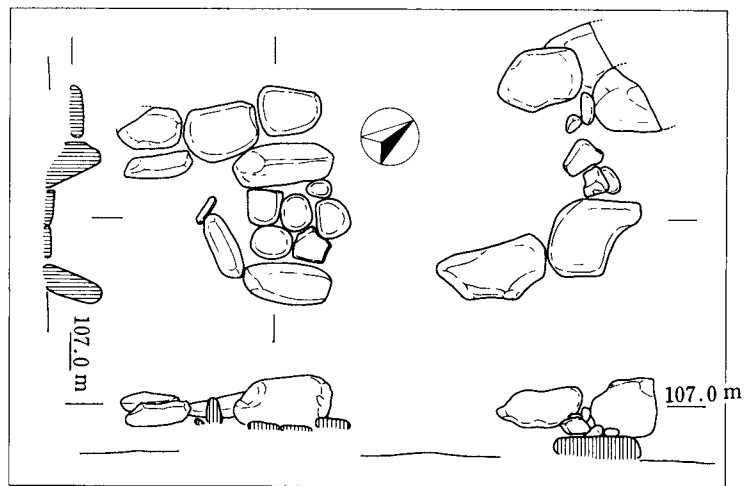
第5図 第1次調査区遺構配置図 (I) (1/500)



第6図 第1次調査区遺構配置図 (II) (1/500)



第7図 1号配石址実測図 (1/40)



第8図 5号配石址実測図 (1/40)

査地区は河岸段丘上および河岸段丘下などであり、傾斜面すなわち等高線の流れに沿うもので、水平位置に近い地勢の調査である。層序、地山面の状況は地点ごとの違いは大きく、砂層、砂礫層が細かい変化を示し、後世の攪乱、洪水のあと等が見られ、河岸段丘端部の微地形変化の激しさを見る事ができた。試掘調査で安定した包含層を検出した2地点、段丘傾斜面の南北40m、河岸段丘下の南北110mの範囲での調査を要するとの結果を得た。

昭和54年9月1日付で、石川県企業局長から調査依頼が本センターに提出され、同年9月5日から同年11月9日まで発掘調査を実施した。試掘調査の結果を受けて、2地点の試掘溝の幅を、水道管理設工事にかかる幅の5mに拡張し発掘区を設定し、南端からグリッド番号を付した。発掘区南端部、河岸段丘端部の傾斜変換線にあたる所から、列石を持つ遺構を検出した。石列のなかには五輪塔の地輪2個、宝輪1個が組み込まれていて、石造遺物の信仰心が失なわれた時期に所産するものと理解される。列石は石段、石垣の一部と想定できるものも含ま

れ、第2次調査で検出された道路跡（飛び石道）とつながるものと想定される。河岸段丘の傾斜面下では溝状遺構を検出している。南北方向での検出は14mを測り、深さは30～40cm程であった。南方にむかうにしたがい肩部の落ち込みがはっきりしなくなり、さほど長くは延びてはいないと判断された。覆土は淡黒褐色砂層が30～40cmばかり堆積し、土師質土器の破片を1,000点以上包含していた。北端部分では、5基の配石址を検出した。長径30～40cmの河原石を、平面長方形、方形、円形に配置している。1・5号配石址は側石や端石を斜めに立て並べる手法を持っていて注意された。1号配石址には珠洲焼鉢片が伴出している他は、配石址下および周辺には、時代を想定しうる遺物は得られなかった。河岸段丘の谷筋にあたる位置からは、青磁、白磁、天目を含む中世の遺物多数を得ている。遺物は小砂礫層中に包含され、割れた部分の角がとれたようになった陶磁器も見られ、洪水あるいは河道跡による流入という状況判断で理解できるようだ。それらの南側では谷筋の最も深い位置になる所であるが、下層位での包含層を認める事はできなかった。耕作土下位で検出したピット群の时期的な判断はできなかった。

第1次調査はトレンチ調査であり、遺構相互の関係性や、遺跡全体のなかでの位置付けなど不明と言わなければならない結果に終わった。しかし、河岸段丘には河原と同じ状況を呈するが、遺構、遺物が遺存しているとの判断が得られ次年度からの調査に期待がかけられた。なお、第1次調査の報告は、企業局の委託を受けて、1981年春に印刷、刊行しているので参照していただければ幸いである。

第3節 第2次調査（1980年）の概要

昭和54年8月27日付で、建設省金沢工事事務所から鶴来町白山町地内、松任市乾町～安養寺地内での鶴来バイパスにかかる遺跡についての協議が当センターあてに提示された。白山町地内については、企業局の水道管理施設事業に先立つ分布範囲確認調査の結果を基礎として、河岸段丘上全面にかかる範囲に遺跡が所在している由の回答を行った。

昭和55年6月21日付で、前年から協議を継続していた全面調査についての発掘依頼が、建設省から、当センターあてに提出された。調査対象面積は約4,000m²である。7月16日から現地作業を開始し、12月5日の降雪がその年の根雪となったために、第3次調査区分は表土除去を終了した段階で中止とし、12月11日に機材撤去を終え、第3次調査担当者へ引きついだ。第2次調査の発掘面積は約1,000m²である。

第2次調査区は河岸段丘上面にあたり、昨年調査区の東側である。道路センター杭25+40を起点とし、25+60から東に90度ふり込んで、東方の10m、15mに杭を打ち込んだ。F100、E100とし、南北方向をアラビア数字、東西方向をアルファベットで5m区画のグリッドを組んだ。

白山町中世墳墓の調査から開始した。墳墓は河岸段丘の端部に位置し、周辺から集められた礫でおおわれ、旧状を推定するのも困難な状態であった。礫層の状況を実測しながら、掘り下げていったところ、大きな河原石を長方形に組んだ基礎部分を検出した。手取川と平行する主軸を持ち、長辺約500cm、短辺約300cmの範囲に60～80cmの河原石で区画し、推定では三段程度まで積み上げられ、南辺では石段状の列石が2列組まれていた。墳墓の中軸線から西に寄った位置で、遺骨を納めた珠洲焼壺底部片が出土した。墳墓をおおっていた礫のなかには、縄文時代の打製石斧、磨石が多数見られ、五輪塔の空風輪、水輪、地輪が単独出土に近い状態で検出されている。そのなかで、水輪の1点だけではあるが、基盤の河原石の間に組み込まれたものがある。五輪塔を造立して供養を行った時期と墳墓を建立した時期が必ずしも同一時期ではないとの想定ではあるが、「与助の首塚」として地元で呼びならわされてきた墳墓であり、後世での改築も考えねばならない。五輪塔は墳墓から5点以上の出土があったものの、石質から見て同一の五輪塔に組み合わせを推定させるものはなかった。

墳墓の基盤の下は、縄文時代後～晩期の包含層で、河岸段丘面上をおおっている。しかし、第3次調査区では遺物の出土は希薄となり、集落址の範囲は河岸段丘上の北端部に限定されるようだ。調査は遺跡の西側端をおさえる形となっている。地山面はまさに手取川の河原で、大小の礫をかむ砂礫層が地山面で、小さくローリングし

ているところから包含層の黒褐色土層にもローリングがあらわれ、遺構検出は困難をきわめた。そして、掘り込まれているピットや土壇も、礫にはばまれて、十分に把握できたとは言いがたい。検出した遺構は、住居址にめぐるピット群を2～4基、石囲炉1基、埋甕4基で、石器は打製石斧が大半であるが400点以上を検出した。土器は小片となるものが多いが、後期うまばち式期から見られ晩期後半の下野式期まで出土していて、下野式期が主要な時期であった。縄文時代の包含地としての調査範囲、800m²程度のなかで、369点の打製石斧の出土はきわめて多量であり、集落の性格をも考える視点を持っている。また、北陸地域では類例を見ない中空土偶、壺形土器の検出は注目できる。

第4節 第3次調査（1981年）の概要

第3次調査の調査区は、前年の第2次調査期間中に表土の削除と主要遺構の検出が完了していた。今年は遺構調査を中心にして7月15日から、小嶋芳孝、垣内光次郎が担当して実施した。調査面積は道路敷地内約670m²である。第2次調査区とは町道を挟んで南側に位置して、全域から中世の遺構が検出された。第2次の調査区にて検出された縄文時代の住居址や多量の土器等は、本調査区からはごく少量の土器片が検出されただけであった。これは、本調査区が遺構面まで約0.3～0.5mと浅く数年前まで存在した民家等の攪乱にもよるが、本遺跡の中で縄文時代の遺構範囲に限られていたことによると考えられる。だが、室町時代に属すると認められた遺構は、石室や柱穴、土壇など比較的検出された。調査区の西側は工事用道路が付設されて、遺構面が段丘により落ち込む点から除外した。

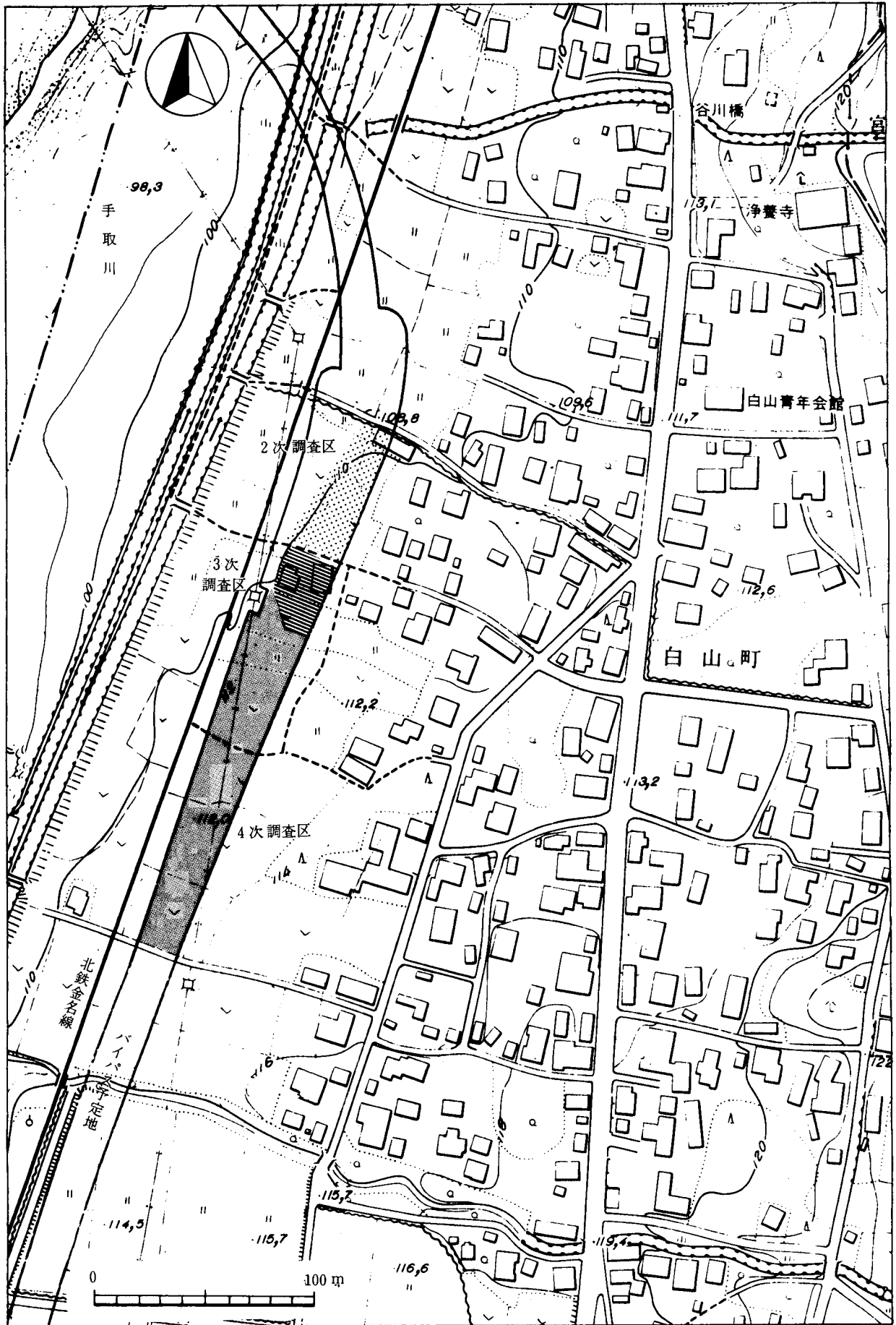
調査は遺構面が多量の円礫から成る河岸段丘堆積物であったので、遺構検出に時間を要した。遺構の覆土中には遺構面の礫を含んでいたが、礫間に含まれる褐色系の粘質土を目安に調査を行ない、覆土中の礫は基本的には覆土と同一視した。遺構調査は石の掘り出し作業そのものであった。検出された遺構は、調査区の北側では石組の室や性格不明の土壇が連なり、南側では掘立柱建物の柱穴等が主であった。

第5節 第4次調査（1981年）の概要

第4次調査は第3次調査の作業の大半が完了した8月下旬から開始された。調査は第3次調査に引き続き小嶋芳孝、垣内光次郎が担当して実施した。調査面積は道路敷地内約3,200m²であった。その範囲は第3次調査区の南端から幅約25mで、南方向（上流側）へ長さ約140mであった。調査に先立ち建設省から調査区内に工事用道路の常設が求められ、協議の結果調査区を東西に細長く二分割して、一方に工事用道路を敷設し残る一方を調査して、調査完了後に工事用道路の移設を行ない調査を実施することに決した。この協議に基づき工事用道路は、7月下旬に調査区東側に敷設された。なお、表土と道路の盛土とを識別する為に、調査区内ではビニールシートを敷いて盛土を行なった。

調査はまず西側半分について実施したが、後半に行なう東側半分との遺構実測図に正確を期すために、ヘリコプターによる航空写真測量を導入して、東西の二回に分けて行なった。これは、遺構面が木杭の打ち込みが不可能に近い礫層であった事にもよるが、結果的には調査期間の短縮となった。なお、航空写真の撮影は、第1回目が西側で10月6日、第2回目が東側で11月12日であった。

遺構面は第3次調査区と同様に中世の一面だけで、南側へ傾斜して調査区南端部では、地表から約1.6mのレベルに縄文土器の包含層が検出された。これは本遺跡の南辺を画している柱谷川により堆積した茶褐色砂層に覆われていたので、土砂と共に移動してきたものと考えられた。検出された遺構は、室町時代後期の集落を想定させる土壇や柱穴群であった。土壇は第3次調査区に比べて大型のものが多く、中には土壇墓と認められるものもあった。これらの遺構は、手取川流域における中世集落の一端を明らかにすると同時に、北方約500mに位置する白山比咩神社との関係からも注目された。第3次調査に引き続き行なわれた第4次調査は、11月19日の器材の撤収で



第9図 第2～4次発掘区配置図 (1/2,500)

全ての作業を終えた。

第3・4次発掘調査参加者名（順不同）

上梨松男、伴 吉成、建部つよ、辻 恭子、河原悦子、余所地みどり、多賀笑美子、五十川さよ子、辻 花子、千田花子、高橋外代子、針道郁子、吉本信子、大脇清子、駒木静子、谷口久子、松本いよ、伴 初枝、林 そと、半田春枝、河原公子、加藤なを（白山町）宮下明夫（小柳町）石浦茂樹（本町）松井克己（朝日町）橋爪利明（上東町）石浦めぐみ、北 久雄、吉田 弥、小林敦子、折戸 茂（金沢市）増田孝志、館石 亮、伊予部倫夫、大山泰成、石田文一、岡田静明、皆川昌子、早坂仁恵（国学院大学）福島日出海、遠藤考司、大槻 巖（立正大学）鈴木 信、寺内正明（同志社大学）岩元雅毅（立命館大学）広多清一（関西学院大学）木田 清、増山 仁（金沢大学）

第3章 遺構の配置と層序

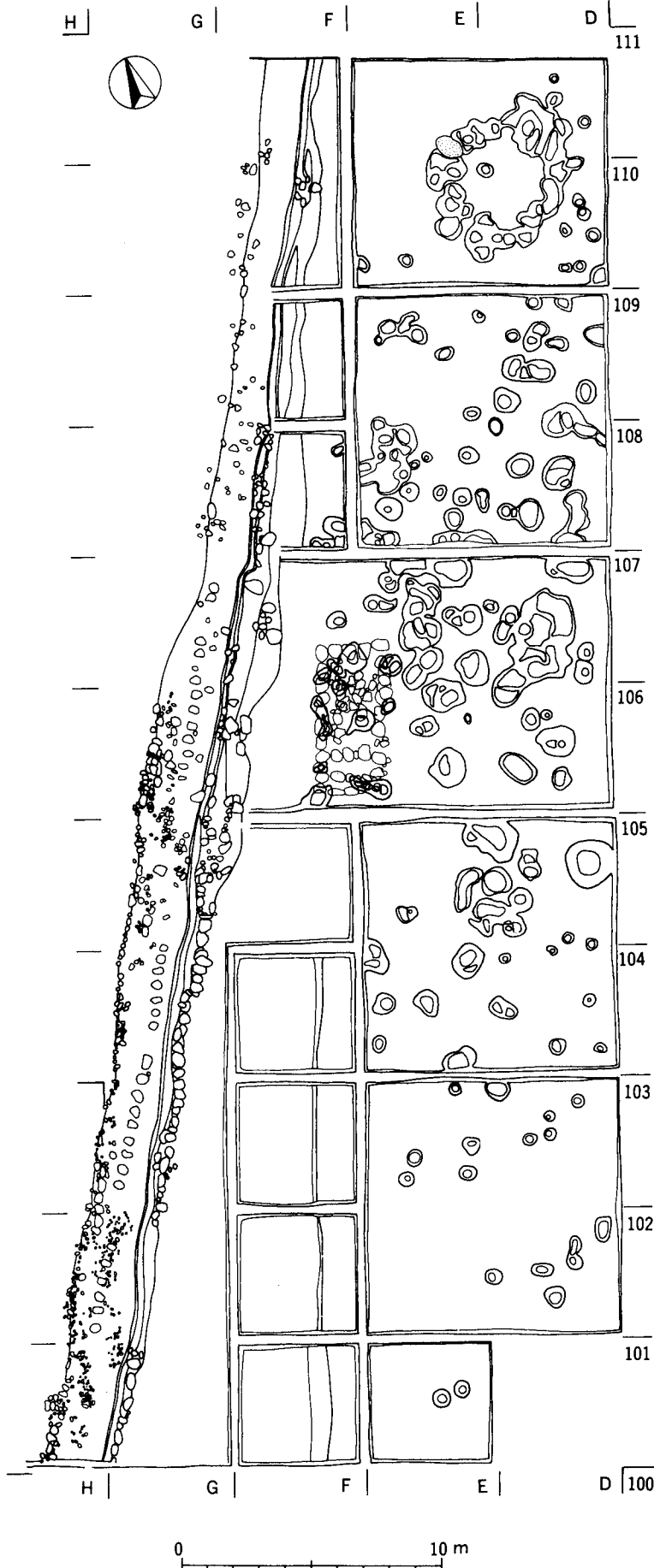
第1節 第2次調査区の遺構と層序

本遺跡が所在するのは、手取川の中流域の北端、標高約110mの河岸段丘上である。地山面は礫層からなっているため水田耕作は谷筋にかかる一角で行われているだけで、畑地、宅地として利用されてきた。手取川の河岸段丘に直行する位置に幾筋かの小川が流れ、平坦に見える河岸段丘下は砂層、礫層、砂礫層が錯綜して堆積している、遺構検出面は小さくローリングしている。そのため、中世期にかかる遺物包含層は地点ごとに砂礫を含む割合が異なる。

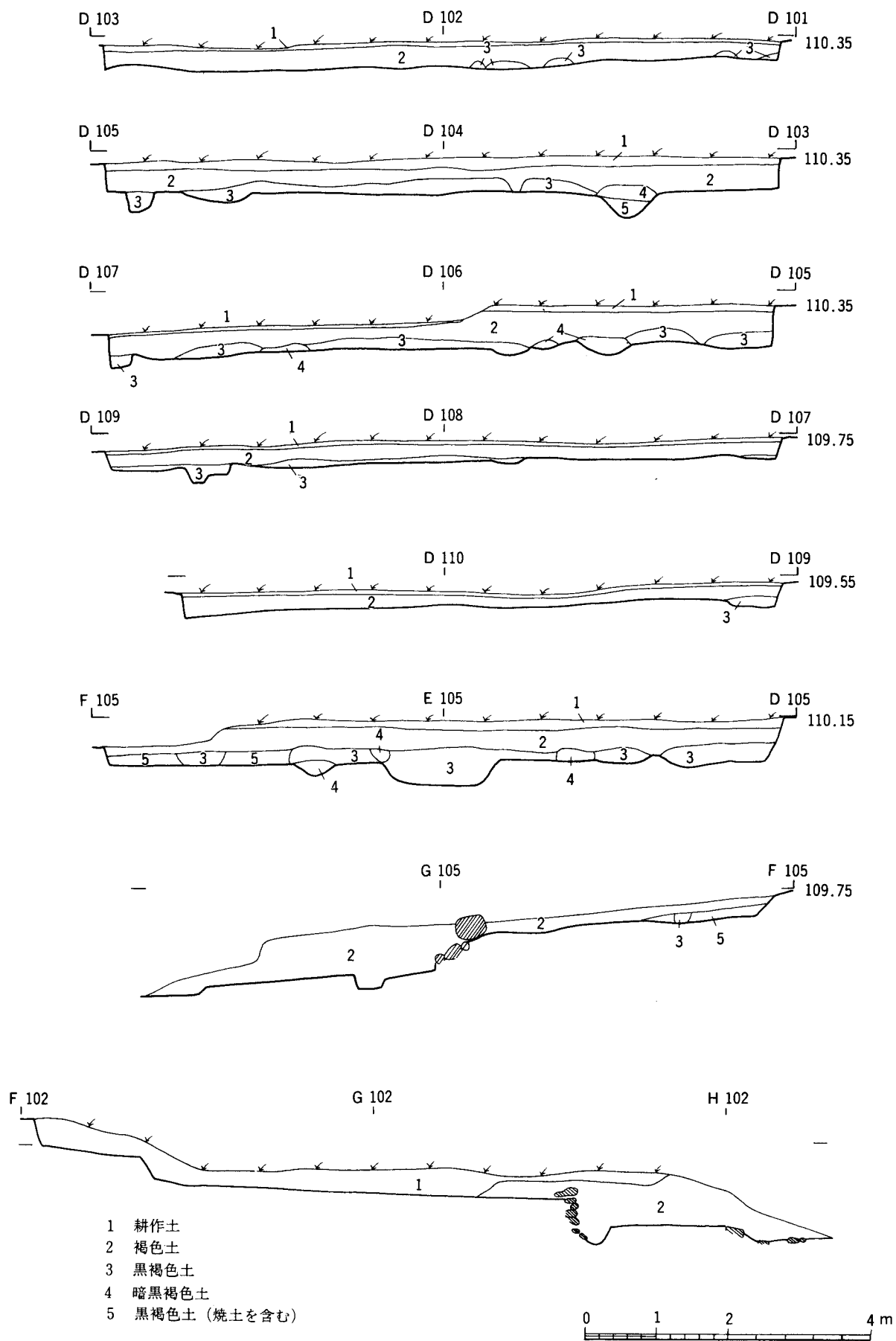
第2次調査区の縄文時代の包含層は、調査区北端部分で層厚が厚く、南側では薄くなる傾向にあり、第3次調査の南地区では、その遺物も散発的な在り方にとどまっている。縄文時代の遺構面は、調査区や中央部分で石罌炉址にかかる土層位のピットを幾つか検出する事ができ、2層面以上の遺存があるものと判断される。調査区北端部は標高を下けている事に加えて、表土層の形成が浅く、耕作等による攪乱が大きかったと判断される。中世墳墓址に集積された礫群のなかに打製石斧等の石器類が北部、西部に多かった状況に符合しているようだ。

縄文時代の遺跡は、以上の検出状況や地形、層序の在り方から、河岸段丘の北端部分に位置し、南北方向約60m、東西方向も同程度の広がりを持つものと判断され、中央部分での包含層が厚くなる状況が想定される。なお、北辺部分には、小さな谷筋が入り込んでいるが、遺跡の境界として把握できるかどうかは未知数である。

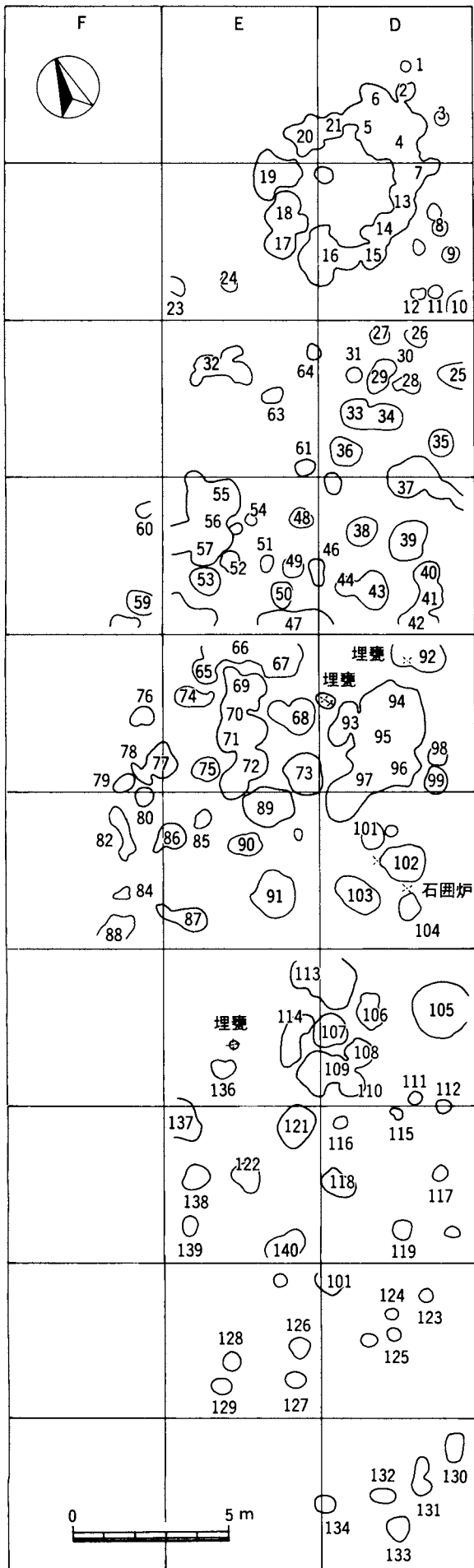
縄文時代での基本的層序は、I表土層5~15cmが全体をおおい、II褐色土礫混じりが15~35cmの厚さで堆積し、土器・石器



第10図 第2次調査区遺構配置図 (1/250)



第11図 土層断面図 (1/80)



第12図 遺物取り上げ番号図 (1/200)

111 等を包含している。III黒褐色土包含層は10~30cmで地山礫層をおおっていて、ピット・土坑等の遺構内に暗黒褐色土、黒褐色土が堆積している。黒褐色土層のなかには時おり焼土粒が認められ、炭化物の包含が他に比べて多い傾向が見られる。地山面で見ると、調査区北部では径30~40cmの大きな石をかむ礫層であるが、南部では礫の包含が少くなる傾向にある。

109 遺構は調査区北半部分が濃密で、南半部分および手取川方向にのぞむ西縁辺では薄くなる。径約1~1.5mの不整円形のピットが連結するようなかたちで並び、外郭径5~6.5mの平面円形状プランをなす。円形プランを想定しうるのは2例見られ、住居址内の柱穴群を考えている。その他の遺構では、石囲炉址1基、底部欠損の埋葬4例の検出が、調査区中央部分で見られた。

107 中世墳墓は調査区の中央部分、褐色土層と黒褐色土層の境界に基礎をおき、40~50cmの大石を外郭長軸6m、短軸3mの範囲に長方形に並べる。3段程度まで積み上げてあったのが検出された。後世には耕作に支障をきたす礫でうまり、南北方向に長い楕円形プラン(8×5m)、高さ1.5mの塚状盛り上がりとなって残されていたものである。墳墓の中央から南寄りの位置で、珠洲焼に納められている遺骨を検出した。

105 河岸段丘が手取川にむかって1.5~2mの落差を持って落ち込むのであるが、段丘面の縁辺に径30~50cmの石を飛び石状に配し、幅約2m、現況での長さ約53mの道を検出している。道がつくられた時期としては、中世墳墓の築かれた時期と同じか、若干下の時期が想定された。第1次調査区のなかで、南端区の1・2G(グリッド)で検出した石段状遺構との関連が、地形的な側面や石列と段状になる部分などに結びつく要素を認める事ができる。

103

102

第2節 第3・4次調査区の遺構と層序

第3・4次調査は第2調査区の南端から南方向である上流に向かって、河岸段丘上の道路敷地内を南北に細長く帯状に調査区を設定して調査を行なった。その結果検出された遺構は、標高約110mを測る河岸段丘堆積物から成る礫層面に広がることを確認されたが、第2次調査区の南側では地表面が高さを増して、遺構面上の堆積層が厚くなるために、一見したところ遺構面が落ち込む様に見られた。また、第3・4次調査区で検出された遺構の大半は、中世の室町時代の所産と考えられるもので、縄文時代に属する遺構は数ヶ所のピットと調査区南端に検出された縄文土器だけで、土壇等の大型の遺構の検出されなかった。これは、後世の攪乱等によるものではなくて、本遺跡に於ける縄文時代の遺構及び遺物包含層が第2次調査区を中心とした北側に偏在することによる。

中世に属する土壇やピット等の遺構は、第3・4次調査区のほぼ全域に広がり、その分布状況から大きく3グループに分けて把握することができる。

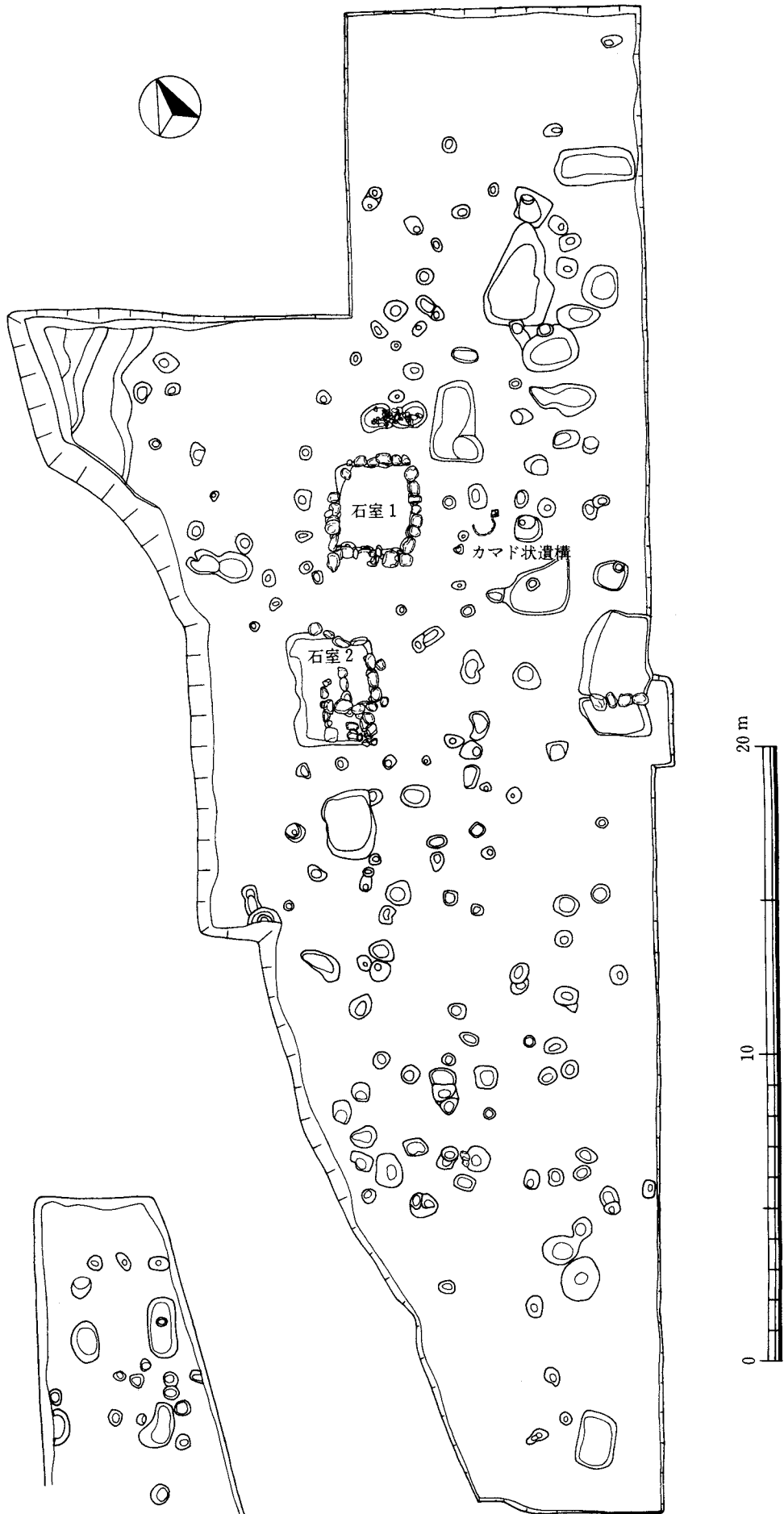
第I群の遺構群は、第3次調査区の全域から第4次調査区の北端部まで、石室と土壇やピット等が検出された。地表面から遺構面までは、約25～40cmと比較的浅くて、後世の攪乱が各所に認められ、遺構も他の地区に比べて小型で、浅いもので占められていた。その中でも二基の石室が注目される。第1号石室は第2号石室に比べて整然とした石組が行なわれて、形態も良好であった。土壇などからは茶臼や鉄製品が出土し、ピットなどからは青磁や瀬戸・美濃などが出土した。また、カマド状遺構なども検出された。

第II群の遺構群は第4次調査区のほぼ北半分で、第I群との間には遺構の空白地帯が、東西方向に幅約3mで認められた。この空白地帯は北に広がる第I群の遺構群との分離帯の様相を呈して、屋敷境や道などが想定できると推察している。遺構では土壇や配石遺構等の大型の遺構を検出した。配石遺構は空白地帯に近い北側で3基が検出されたが、いずれも偏平な円礫を敷き詰めたもので、円礫の間から五輪塔の地輪や台座が出土した。近くには土壇墓と推定される第5・7号土壇が検出されて、その関係が注目される。土壇は調査区中央に弓なりに連なって19基も検出された。また、土壇間にはピットが多数検出されたが、その多くは掘立掘建物の柱穴の可能性が高い遺構ではあるが、確実な掘立柱建物は検出されなかった。これは、建物跡が存在しなかったことではなくて、本遺跡が立地している環境から起因する点が大いと考えられる。それは、本遺跡の遺構面である河岸段丘堆積物から成る礫層は、多量の円礫と砂により堅く締り、小さな穴を掘るにもツルハシなどを利用して、多くの礫を掘り出さねばならない状況で、建立柱建物を1棟建るにも多大な時間と労力を必要であったと推定される。しかし、礫層は堅く締る反面排水が良好で、主要な柱を埋設するだけで十分に棟上げできる状況から起因すると考えられる。

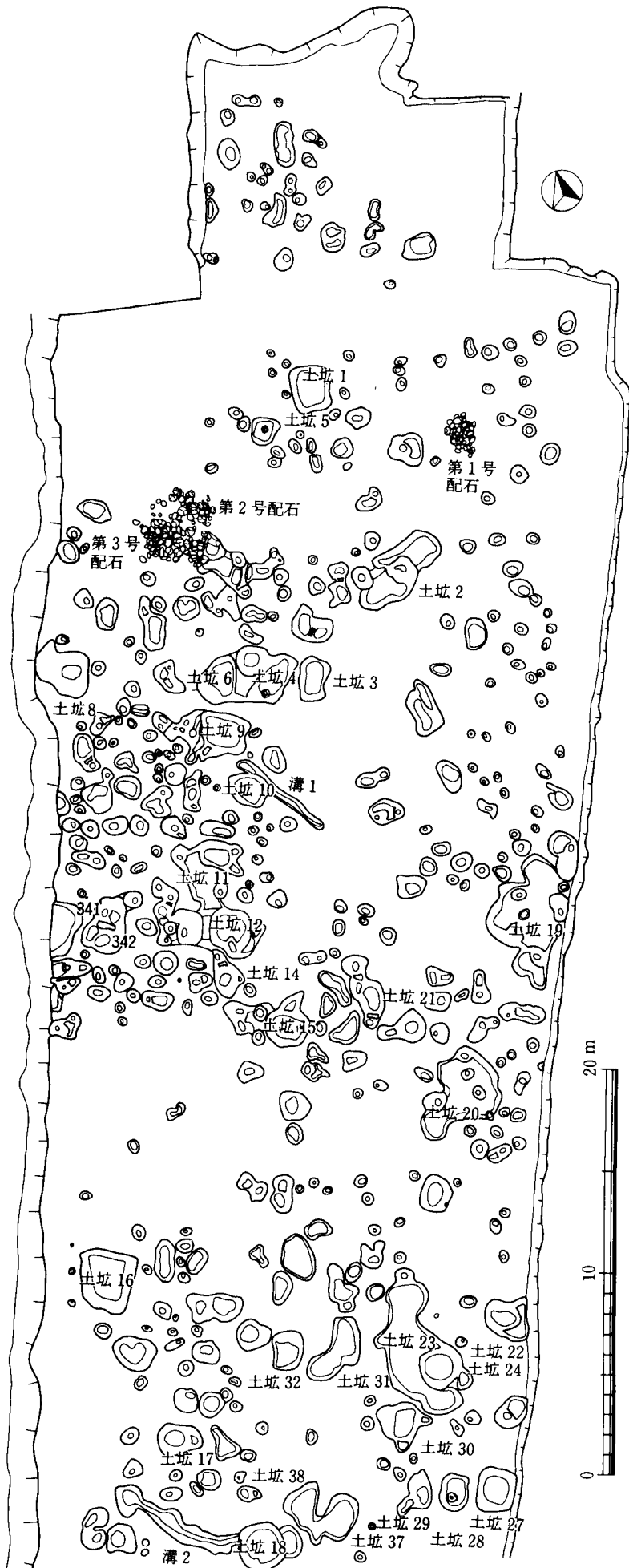
また、西側には遺構集中地区(第16図 図版15)が検出された。この集中地区は土壇を主体としながら、土壇間からは第341・342号ピットのように大型のピットが多数検出された。各土壇からは出土遺物は比較的多く陶磁器や鉄製品が目立った。中でも第2号土壇の底から出土した一括の土師質土器、第12号土壇の鉄製の紡錘車、第15号土壇の包丁や刀子等が注目される。

第III群の遺構群は第4次調査区の南半分である。遺構は土壇を中心として検出されたが、その密度は第II群に比べ弱い。遺構面は他の地点と同一の礫層であるが、南(上流)へ向かうにつれ地表面が高まり、包含層が厚みを増してくる。第22号土壇周辺では土表から約50cmであったが、第33号土壇の所では約80cmと厚くなり、南端の縄文土器出土地点では約160cmとなっていた。土壇は不整形なものを含めて22基検出された。これに対してピット等の小型の遺構の検出は少なかった。検出した土壇は不整形なものが多くて、その形態も多様化している。出土遺物では、陶磁器の他に鉄製の蓋やクワなどの特殊な遺物も検出された。それらは本遺構群の中でも特に東側の第22～29号土壇の地区に集中する傾向が認められた。それら土壇の中でも、陶磁器類では第16号土壇出土の一括陶磁器類、第40号土壇の瀬戸・美濃の花瓶と香炉があり、鉄製品では第24号土壇のクワと第28号土壇の鉄製の蓋が注目される遺物であるが、他に第18号土壇出土の牛の歯がある。

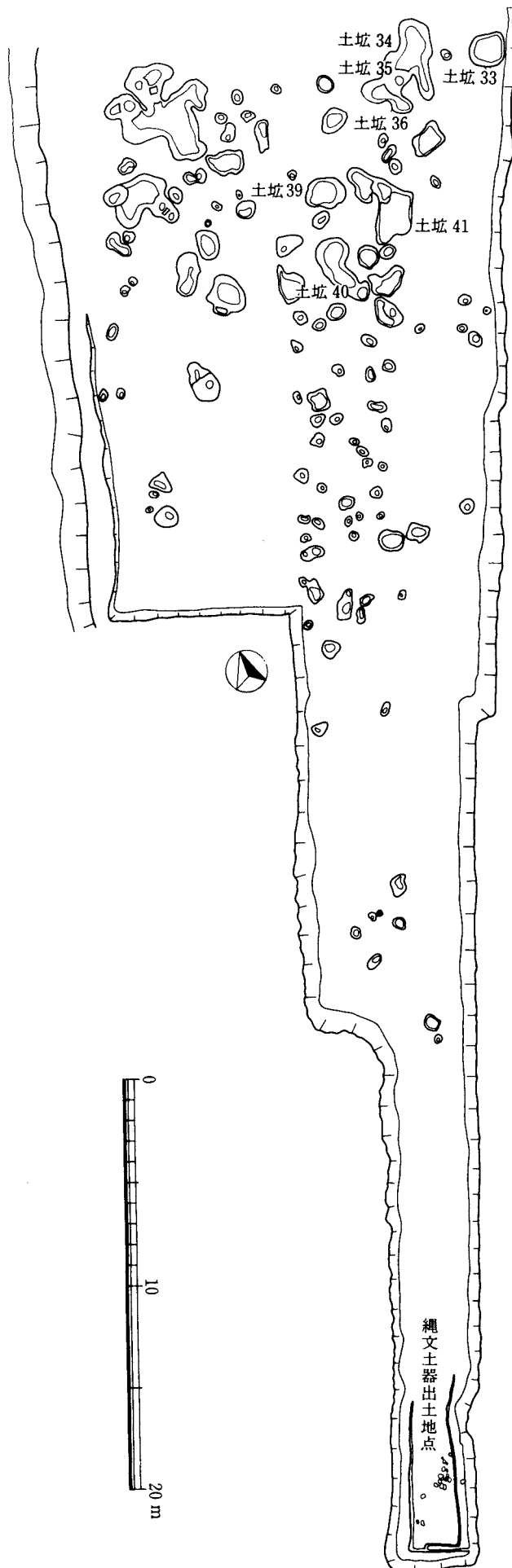
第4次調査区南端部で検出された縄文土器(第17図 図版15)は、遺跡の南辺を画する桂谷川が形成している



第13図 第3次調査区遺構全体図 (1/200)



第14図 第4次調査区遺構全体図1 (1/300)

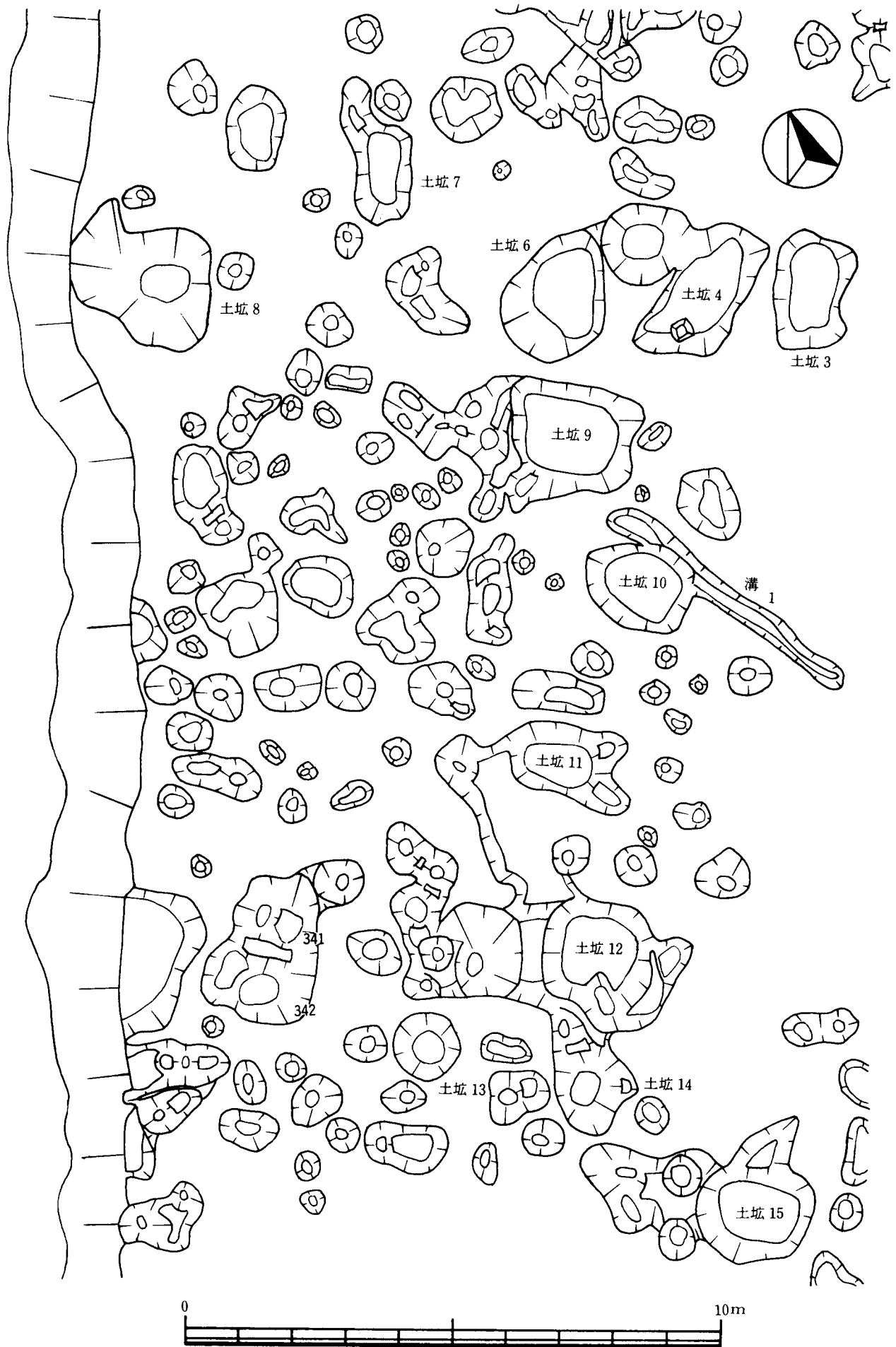


第15図 第4次調査区遺構全体図2 (1/300)

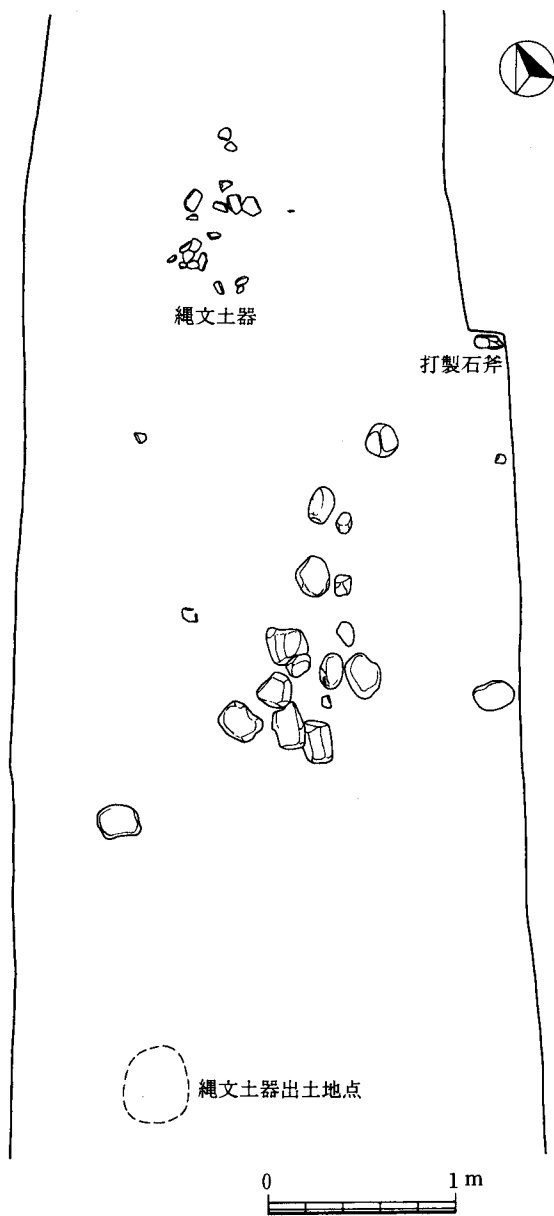
小扇状地形の扇端部に位置している。縄文土器が出土した層位は地表から約110 cm下の茶褐色砂質土層(16 cm)で、土砂と共に上流部から移動堆積した可能性がある。

第2次調査区から第4次調査区南端までの土層の堆積状況は、調査区東側にて行なった。その結果第3次調査区の基本層序は、I耕作土(暗灰褐色砂質土層、10~20 cm)、II暗茶褐色粘質土層(包含層、10~20 cm)の2層だけでそれ以下は礫層であった。第4次調査区に近づくにつれ各層は厚味を増して、第4次調査区北端では、I耕作土(暗灰褐色砂質土層、10~15 cm)、II茶褐色砂質土層(15~40 cm)、III灰褐色粘質土層(包含層、30~40 cm)、IV暗灰褐色粘質土層(遺構面、10~15 cm)で、以下は礫層であった。これが調査区中程では、I耕作土(暗灰褐色砂質土層、20~30 cm)、II茶褐色粘質土層(30~40 cm)、III灰茶色粘質土層(30~40 cm)、IV灰黄色砂質土層(包含層、20~30 cm)である。この層序は南端では各層が厚くなりI耕作土(暗灰褐色砂質土層、20 cm)、II茶褐色粘土層(50 cm)、III灰褐色粘土層(中世以降の包含層、34 cm)、IV暗褐色砂質土層(縄文時代の包含層、16 cm)、V暗灰褐色砂質土層(10 cm)、VI暗茶褐色砂質土層(縄文時代の包含層、22 cm)であった。このように遺構面上の堆積層は、南(上流)に向い厚くなるが、中世の遺構面の広がりからすると、調査区を東西方向に走る河岸段丘上の微高地を中心として展開していると理解される。そして、縄文時代の包含層は、この尾根状の微高地から下った地点に広がると言えよう。

なお、第3・4次調査区の方位は全て真北を指すものであることを付け加えておく。



第 16 図 第 4 次調査区遺構集中地区平面図 (1/100)



第 17 図 縄文土器出土状況図 (1/40)

第4章 遺構

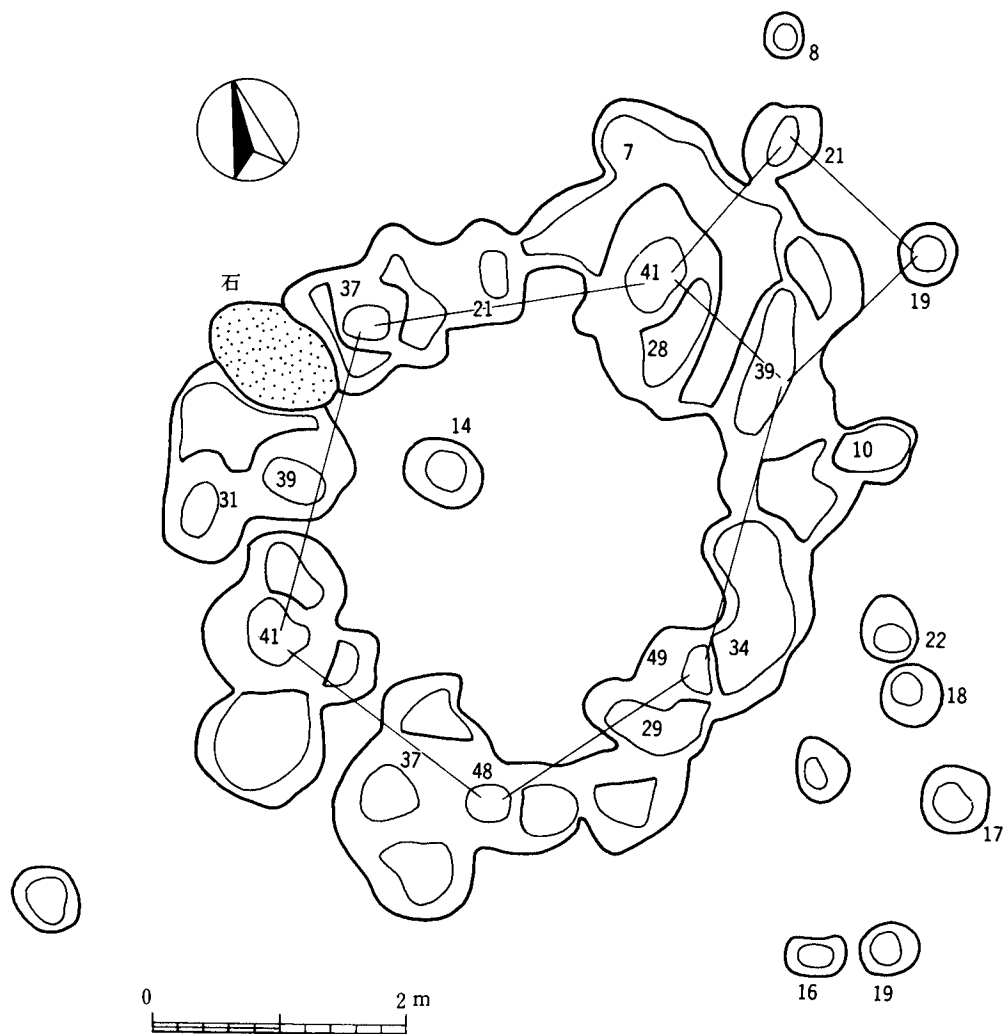
第1節 縄文時代の遺構

(1) 住居址

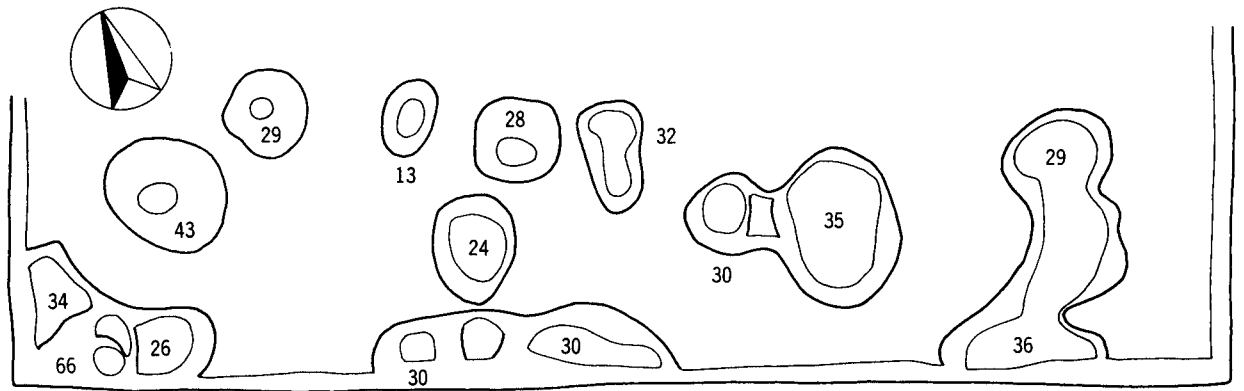
第2次調査の北端、北側の谷水田をのぞむ河岸段丘端部に位置する。E・D110・111グリッドにまたがるもので、竪穴の壁は検出できなかったが、円形にめぐるピット群の在り方から判断した。範囲は7×5mの平面楕円形プランを見る。ピットの平面プランは極めて不整形で、それぞれのピットが隣接したり切り合ったりしている。径が100~200cmの間で、幾つもの段を形成して、検出面から約40~50cmの深さにまで掘り下げられている。ピットの覆土は黒褐色土が茶褐色砂礫層に食い込み、ブロック状況となっており、地山層中の礫ではばまれ掘り切れなかったものと判断される。そのため、ピットの掘り込みは直線状ではなく、極めて凹凸がはなはだしい。ピット覆土には垂飾品の完形品を含めて、おのおのから、土器・石器が出土している。

ピットの深さを考慮して結ぶと、長径約400cm、短径約370cmの平面楕円形プランを呈し、北東位置での出入口が想定される。

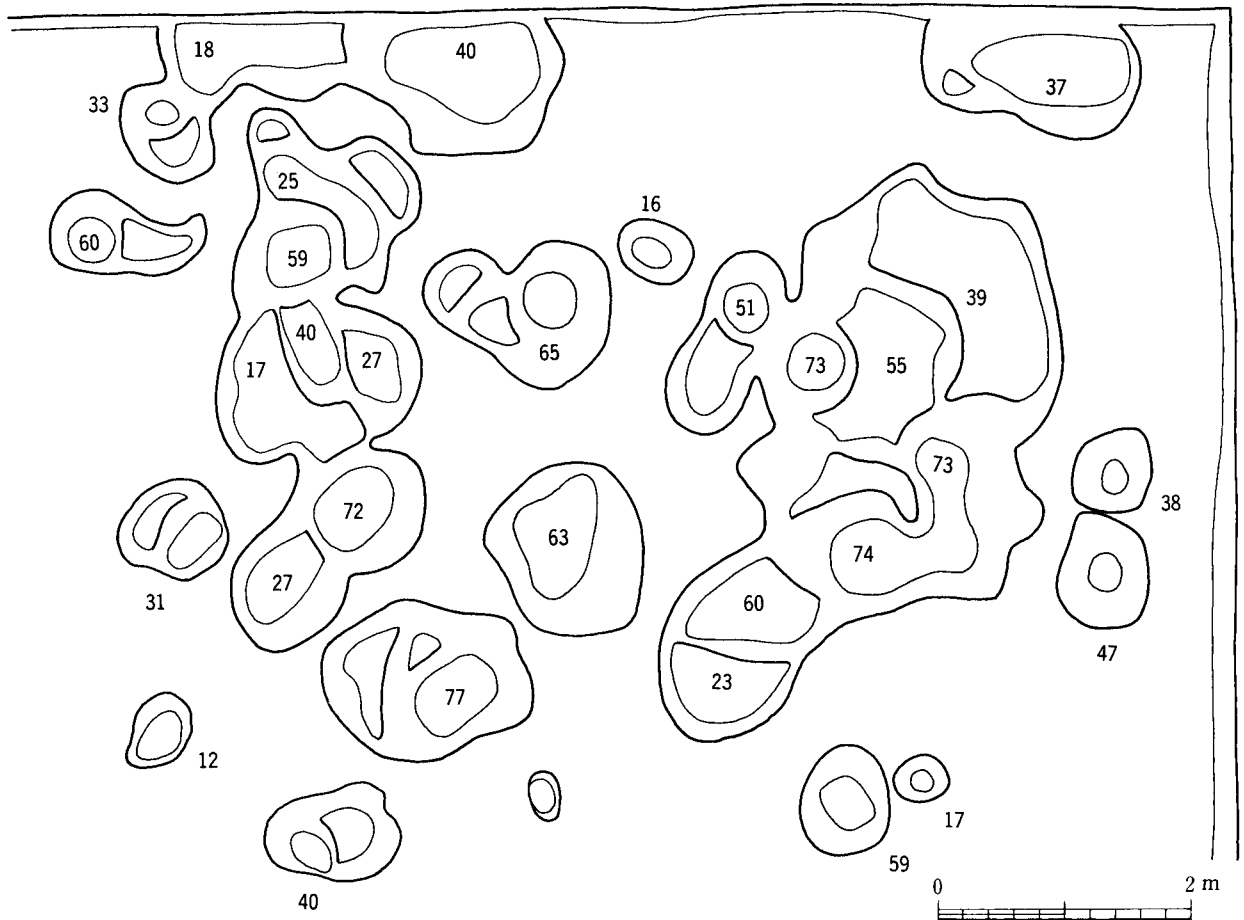
床面は礫層にあたり、凹凸がはなはだしく、炉址その他の遺構の検出はなかった。なお、西側のピット列にはさまれたかたちで、長径110cm、短径70cmの大石が見られるが、当時から現位置に在ったものと考えられる。



第18図 住居址平面図 (1/60)
(数値は掘り方面からの下降値、cm)



畦 畔 (土層観察用)

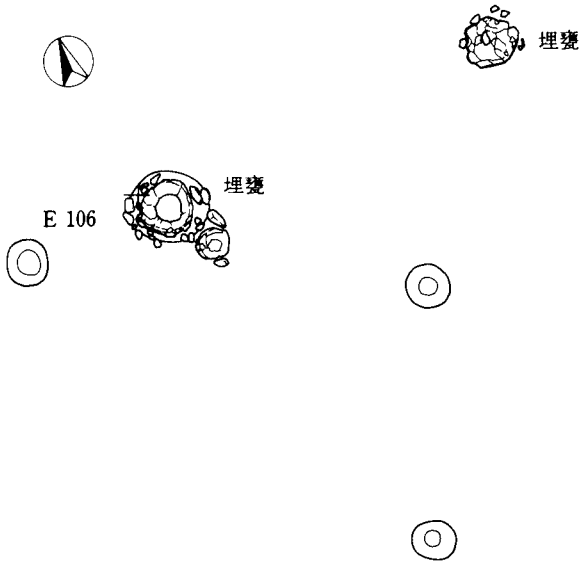


第19図 住居址平面図 (1/60)
(数値は掘り方面からの下降値、cm)

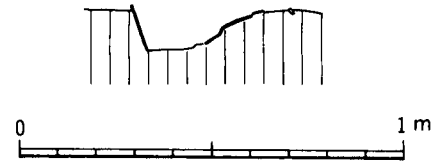
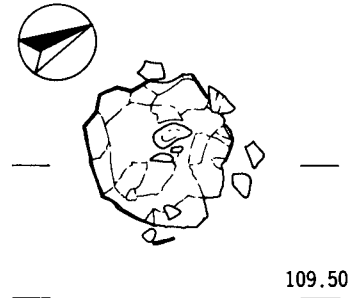
第2次調査区の中央部分、D108グリッドで検出した2個納置している埋甕や、D107グリッドで検出した石囲炉址や壺形土器の出土状況を考慮してみたが、重複関係を持つように見られ、十分な把握ができなかった。地山面は北端部に比較して礫の露出は少くなる傾向にあり、検出したピットの覆土も茶褐色砂礫層のブロックが少く、黒褐色土の堆積が顕著であり、径2mを越える土壇等ではレンズ状堆積を示すものも見られた。

(2) 炉 址

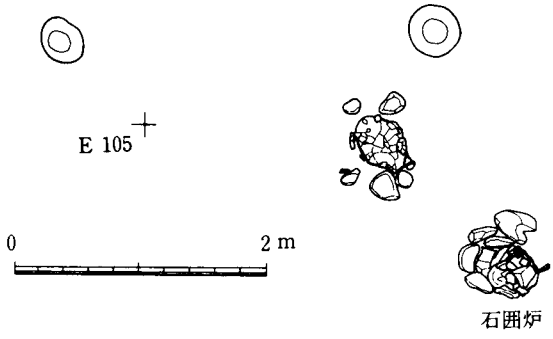
第2調査区の中央部、D106グリッドで検出された。耕作土下の褐色土を除いた段階で石囲いが現われたもので、黒褐色土の上位に構築されたものである。中軸線は北28度西に置く。長径20~30cmの楕円形の河原石6個を円形にめぐらし、内部に深鉢1個体を横位置にすえる。土器の下にも河原石が見られるが、敷かれたものか、地山についたものかはつかみ切れない。河原石の外郭で長径62cm、短径70cmをはかる。炉内の覆土は黒褐色砂質土で



D 106 +

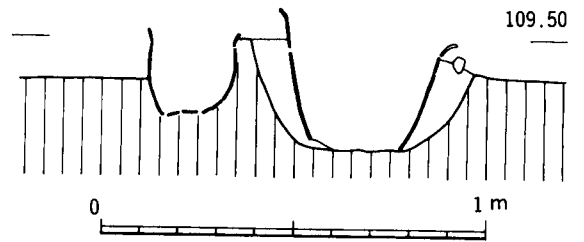
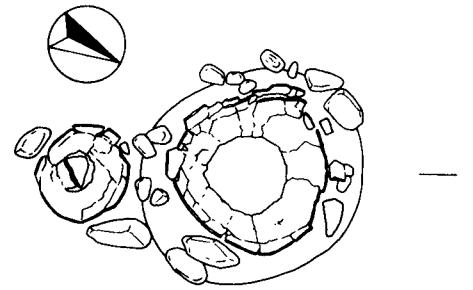


第24図 埋甕実測図 (1/20)

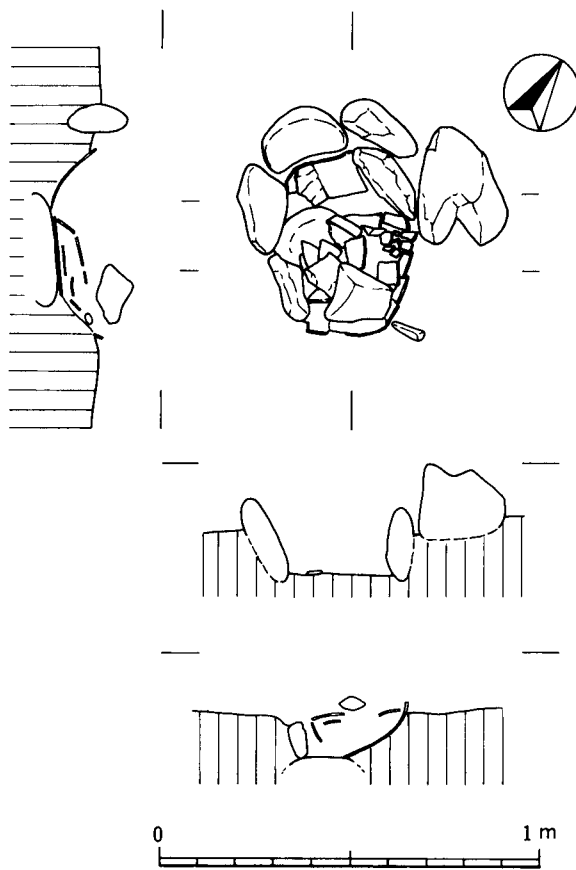


第20図 石囲炉, 埋甕の配置 (1/60)

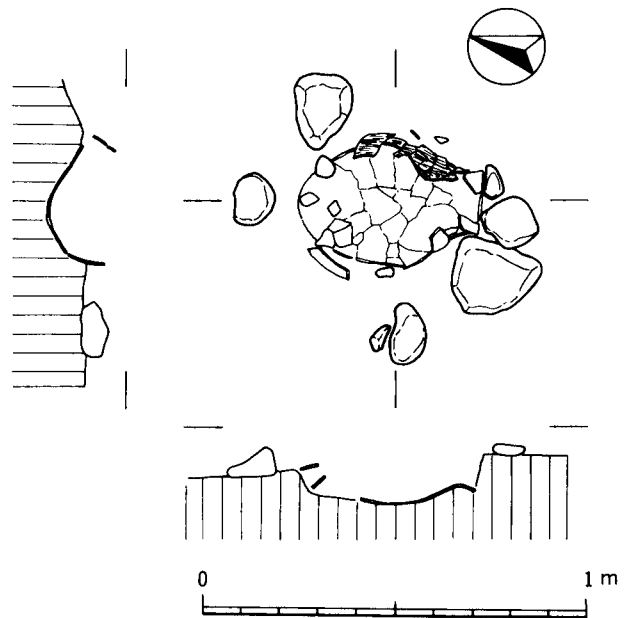
D 105 +



第23図 埋甕実測図 (1/20)



第21図 石囲炉実測図 (1/20)



第22図 壺出土状況実測図 (1/20)

炭化物は含まれていない。炉石の変色も顕著ではない。

石田炉址から北西方向約70cm離れた位置に壺型土器が横たわっていた。上位にあたる口縁から胴部、底部の約半分を欠いていたが、復元する事ができた。

(3) 埋 甕

埋甕は第2次調査区の中央部分で、4例の検出を見た。

D107グリッドでは、口縁、胴部上半を欠損しているもの1例がある。検出上端での径が40cmで、深さは12cmまでを測る。底部を全く欠いていて、径15cmを測り、大型深鉢を使用している。覆土は黒褐色土で、特別の遺物は認められなかった。

同じD107グリッドで、南西方向約2.3mの距離に並置された埋甕2個を検出した。埋甕には大型品の深鉢が使用され、並置された中軸線は、北24度西に置いている。埋甕には大型品と小型品の深鉢が使用され、大型品の掘り方は60cm近くになり、深鉢との間にすきまができていて、小型深鉢の掘り方は土器とほとんど変わりのない大きさにおさめられていて、2個の埋甕の前後関係は把握できなかった。大型品の深さは、土器の口縁部からで37cm、小型品は同じく23cmを測る。底部はともに打ち欠いている。覆土は黒褐色砂質土の単一層でなっており、掘り方肩部に磨石が1個出土した他に、遺物の検出はなかった。

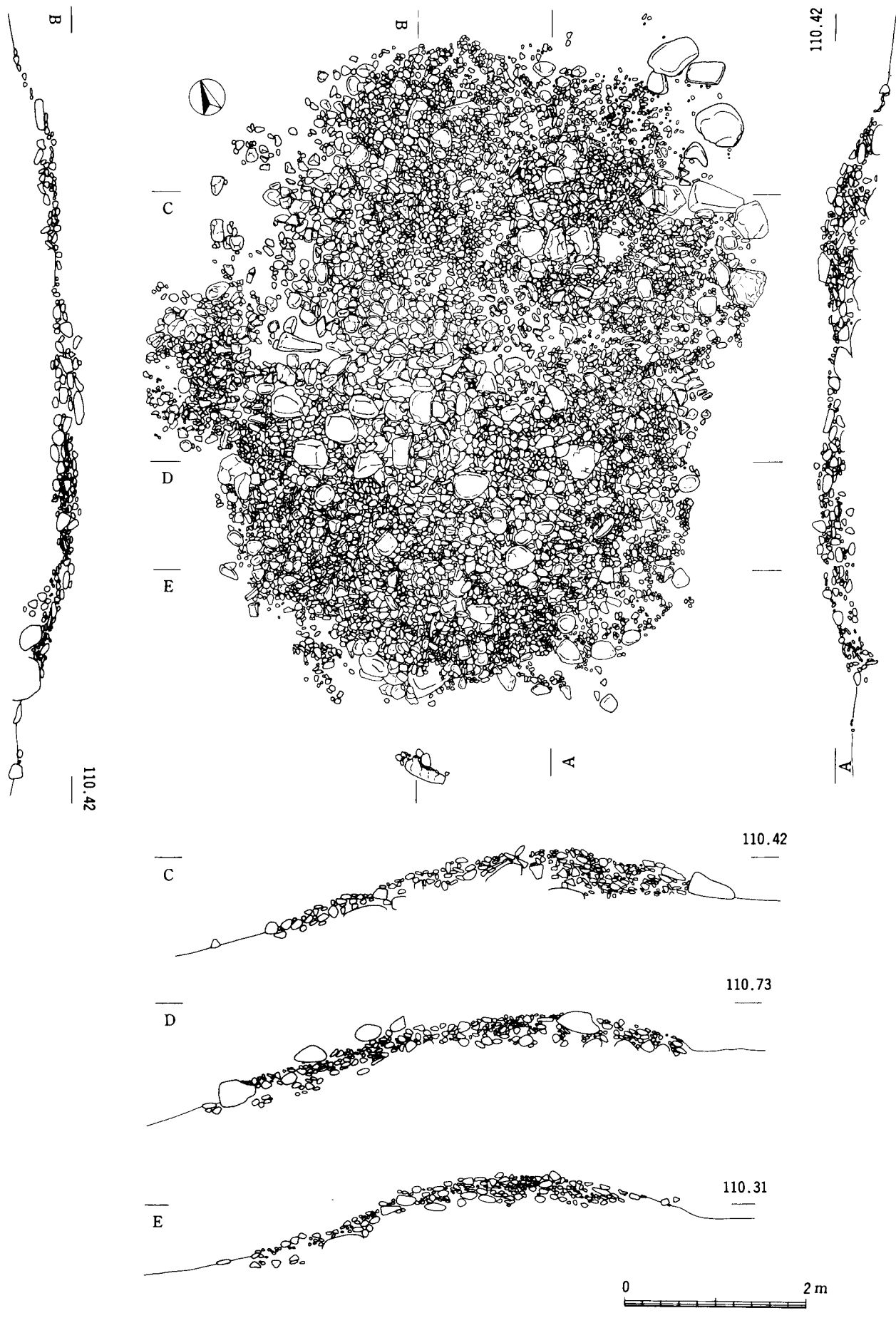
石田炉址から南西約7mのE105グリッドで1例の埋甕が見られた。小型の深鉢を使い、口縁および底部を欠いていた。検出面は黒褐色土を取り除いた地山面で、ピット検出の段階で見つかったものである。晩期前半の中屋式土器である。

第2節 中世の遺構

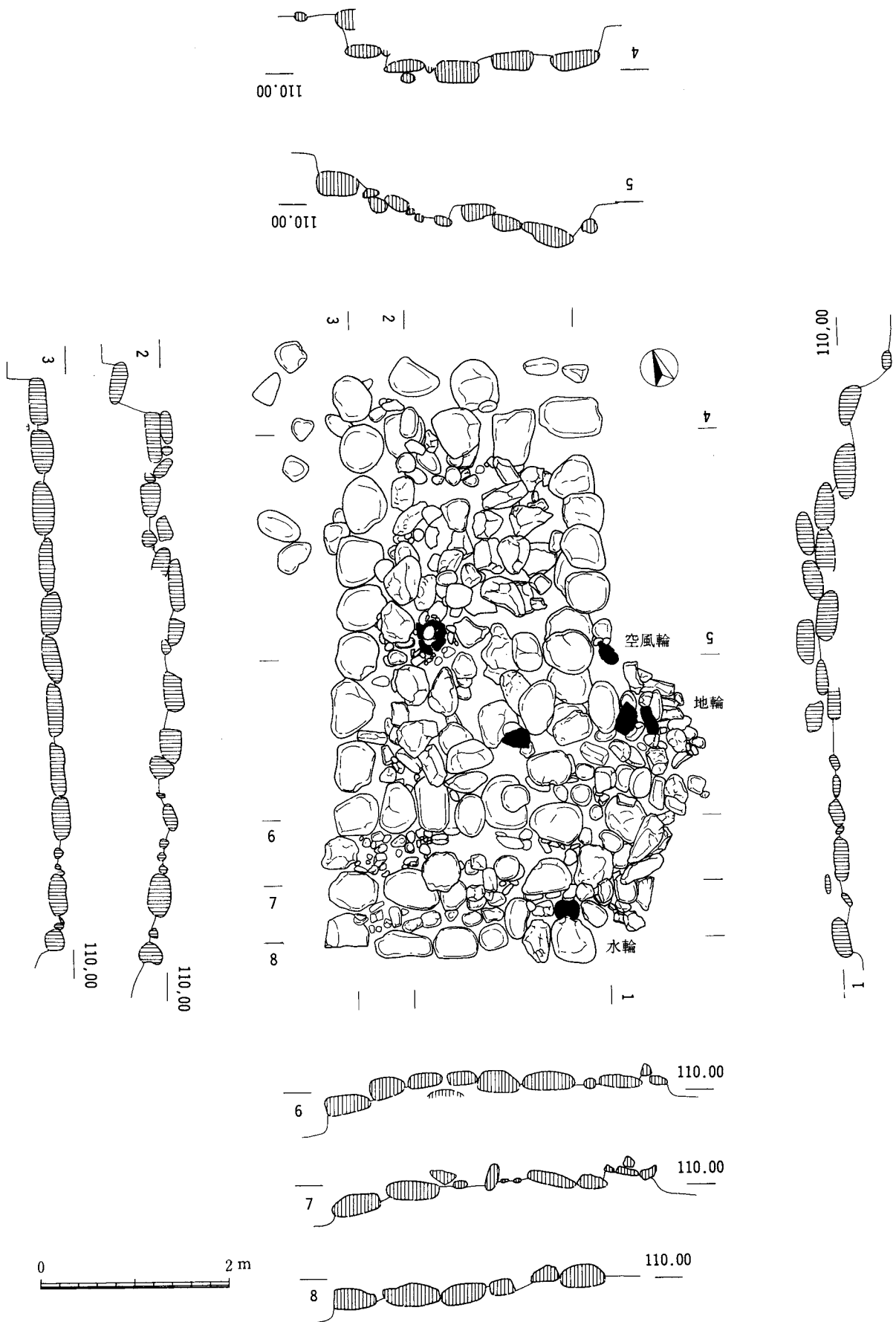
(1) 墳 墓

第2次調査区の中央部、河岸段丘面が西方向に標高を下げる傾斜変換線上に位置している。E106・107、F106・107グリッドにまたがる。調査当初、生い繁る雑草を取り除いた段階では、北東部に植えられている梅の木の地点が最も高くなる、礫で被われた石の塚があらわれた。西側の表土上には大きな地輪がころがり、塚を被う礫に混じって縄文時代の石器、土器、中世の珠洲焼、土師質土器、近・現代の陶磁器片が顔をのぞかせていて、周辺地から耕作によって現われた礫の捨て場になっているものと考えられた。平面プランは等高線の走る南北方向が細長い楕円形をなしている。南北約730cm、東西約680cm、西側からの高さ約110cm、東からの高さ約60cmを測った。礫の状況を見ると、東北隅に大きな石で区画したようになり、中央から西にかけて大きな石を置いて小礫で埋めつくされているところから、東側の畑地から捨てられた礫が多いように理解された。発掘は小礫を少しずつ取り除いてゆく事とし、礫の平面図を作製した後、断面図を測りながら下層位へ下げていった。が、礫と礫の間は土ではなく、空間となっている事から、実測途中での保全を図るのが極めて困難な状態に立ち至った。中央部分の断面図C列で約40cm下位から、径40cmを越える石が顔をのぞかせ、面をなすように見うけられた。また、塚の北西部分で礫の堆積が他に比較して薄かった事もあって、直線的に並べ置かれた石を確認したところから、墳墓の形状を予想しうるまでになったので、以下の礫は全て取り除いて区画をなす石の追求にとりかかった。上位約40cmの小礫の下は、片手では持ち上げられない程の石が多くなり、五輪塔の空風輪、水輪等があらわれ、珠洲焼底部に遺骨をおさめたものがあらわれた。遺骨の位置は、中軸線から西に寄っており、珠洲焼の底部近くだけの遺存である所から、複数の納骨と後世の破壊が考えられる。五輪塔地輪も残欠片となっているのも、破壊を示す傍証と考えられる。

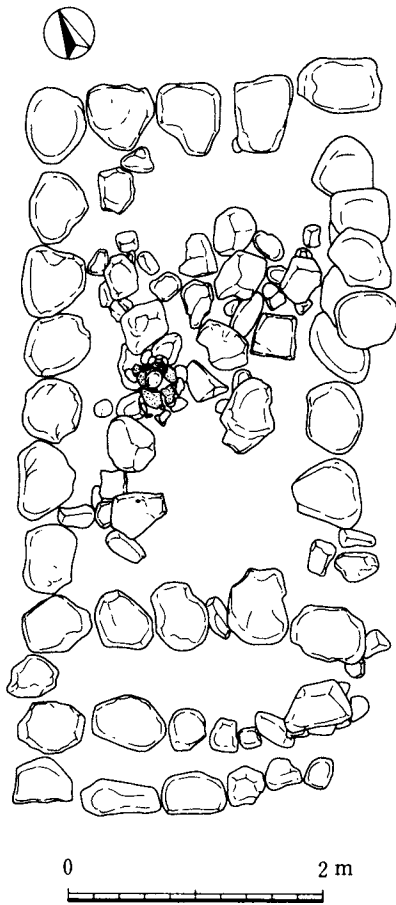
墳墓は石によって平面長方形プランを呈し、長軸640cm、短軸290cm、現状での高さ65cmを測る。主軸は北21度東に置く。区画をなす石は、手取川の河原で通有に見られる石で、不整形形を持つ石が多く、長径50～70cm、厚さ20cm程の扁平なものが、選別されて使われている。南辺には中央部分の乱雑な石の置き方と異なり、3列の



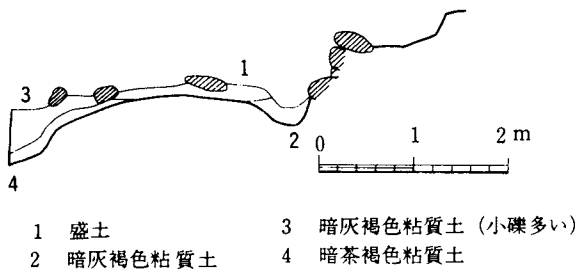
第25图 中世墳墓実測図 (1/60)



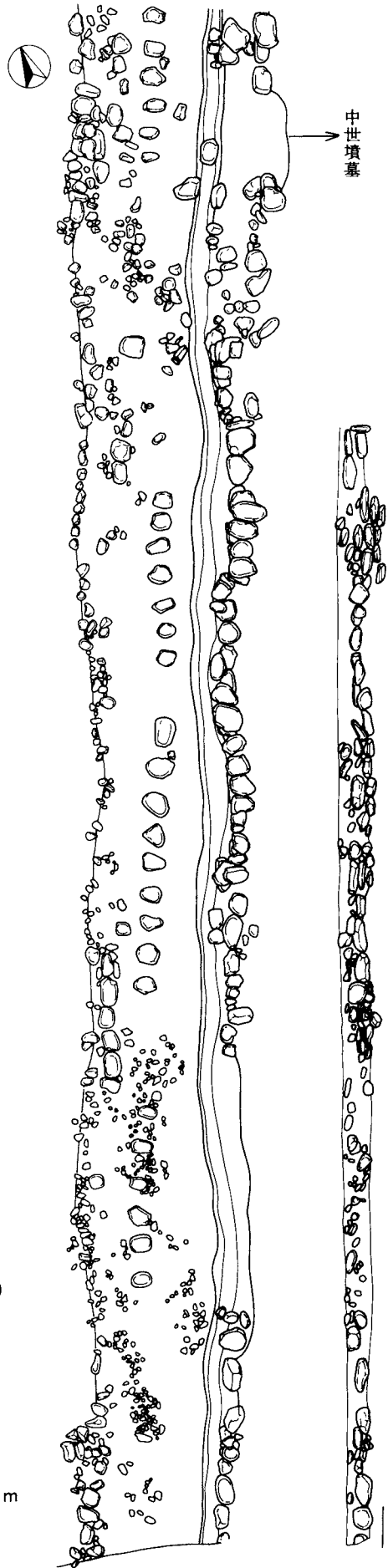
第26图 中世墳墓平面图 (1/60)



第27図 中世墳墓基礎平面図 (1/60)



第29図 道断面図 (1/80)



第28図 道実測図 (1/120)

列石を認める事ができる。根石に近い位置での検出ではあるが、階段施設の石組みと推定される。その石組のなかに、五輪塔水輪が1個組み込まれているところから、施設は後世に組み上げた可能性も考慮しなければならない。3列のうち、南側2列の石の大きさや長軸線の生かし方が若干異なるように観察される点も注目しておきたい。

出土した五輪塔5例以上あるが現位置を保持しているものはなく、南側部分に集中している。五輪塔には組み合うものはなく、それぞれ別の塔の残欠であり、少くとも5基を越える五輪塔が建てられていたものと想定しておきたい。

(2) 道 址

第2次調査区の西側、河岸段丘傾斜面上の等高線に沿う位置で検出した。覆土は約50~70cmの厚さで褐色砂質土が堆積していて、東側の畑地の延長部分となっていた。調査区の平坦地は、F101~106、G101~104の平面三角形の地区で1段落ち込み、道址を越えてさらに大きく落ち込んでゆく。その三角形の平坦地縁に石を組んだ土留めが、延長約29mの間で行われている。石組みは高さ約50~100cmの間で、扁平な河原石の側縁を外に出して積み上げていて、一部には4段の高さにまで見られる。中世墳墓に最も近づく、F105・106グリッドでは石組みの方角が変化し傾斜角度がゆるやかになるのは、石で組んだ階段がつくられていたものと考えたい。道の中央にある飛び石の施設が、中世墳墓の位置で途切れる点も、墓と道の関係の深さを物語ると言えよう。石組の下は道路側溝が、幅約30~40cm、深さ約20cmにまで掘り込まれていて、暗褐色粘質土が認められた。

道は主軸を北28度東に置き、幅2~2.3mの間で北上し、途中、中世墳墓のある位置から、1.0~1.2mと幅を大きく変える。道路肩の西側は礫を置いて土留めとしているものの、一部を除いて小礫が目立ち大部分は流失したものと考えられる。道中央には、長径約40~50cmの扁平な丸石を、約20~30cmの間隔で敷き並べている。延長約29mを測り、検出した道が54mであるから過半を越えている。

道の敷設工事は、段丘傾斜面の東側を切りとり、土留めと側溝をつくり、道の西側へ残土を捨てたものと考えられる。道は飛び石を置く部分に5~10cmの小礫を多く含んだ暗黄褐色砂質土を敷いている。

出土遺物は少く、飛び石を検出した面(F103グリッド)で古銭2枚と珠洲焼、土師質土器の小片を得ている他、F109グリッドにかかる道東側傾斜面で紀年銘を持つ五輪塔地輪が出土している。

(3) 石 室 (第30図 図版-12)

第3次調査区の中央部近くで二基検出された。北の形が整った石室を第1号として、南の不整形な石室を第2号とし、二基共に第二次調査の後半に検出し内部の調査を実施しているが、出土遺物は珠洲焼の小片が数点出土したが、時期の確定までには至らなかった。第二次調査を担当した西野による覆土の観察では、二基共に中世よりも新しい時代に廃棄された可能性が認められた。また、本項でカマド状遺構の説明を扱いたい。

第1号石室

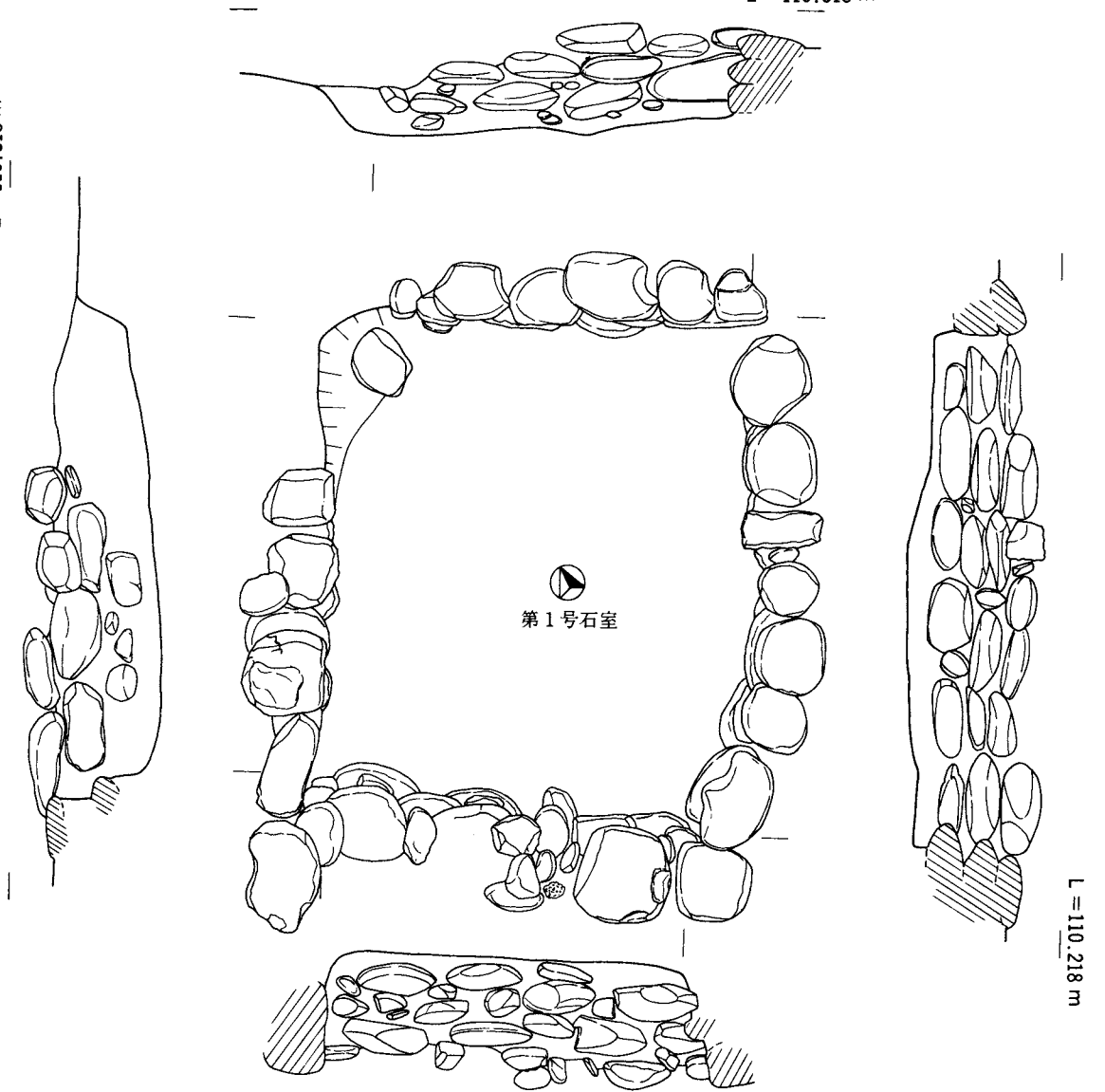
側壁の四面とも偏平な円礫を組んだもので、北方のコーナーは石組は欠けているが、その他の石組の遺在状況は良好である。内部は長軸方向270cm、短軸方向230cm、深さ約70cmで、四壁面中では東側と南側の石組は整然としている。東側は壁高75cmで、長さ18~50cmの礫を利用して組まれるが、主体は40~50cmの偏平な礫を6列に3段組上げている。やや胴張りを呈している。南側は壁高60cmで、32~45cmの礫を利用して組まれているが、東側に比べると礫は小さく、雑然とした感がある。西側と北側の壁は、壁高70cmで組まれている礫も15~55cmとほぼ同一大のである。北方のコーナーの手前では石組は無く、構築当時から出入口等として、石組が存在しなかったことも考えられた。

第2号石室

第1号石室の南に6m離れて検出されたが、その長軸方向は少し北へずれている。内部は長軸325cm、短軸240cmで、石組は西側には検出されなかった。また、東側の壁高も約40cmと浅いものであった。内部の石組は南北の二つの小室に仕切られてるが、北側の小室は長軸170cm、短軸65cm、深さ50cmで、西側に段状の石組があ

L = 110.318 m

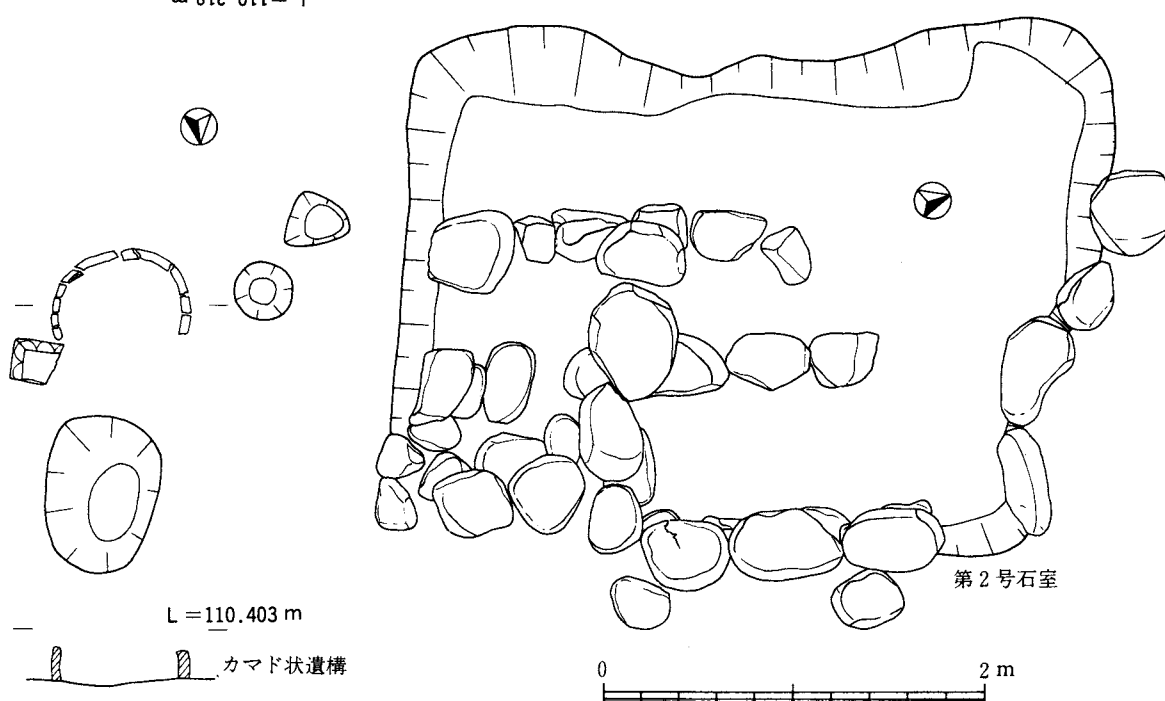
L = 110.318 m



第1号石室

L = 110.218 m

L = 110.318 m



第2号石室

L = 110.403 m

カマド状遺構



第30図 石室・カマド状遺構実測図 (1/40)

る。南側の小室は長軸 110 cm、短軸 60 cm、深さ 15 cm 程であった。西側の石組は無い部分は、この石室のかつての掘方と考えられ、機能途中で規模の縮小が行なわれ、現在の形態に変化したと推定された。

カマド状遺構（第 30 図 図版—12）

第 3 次調査区の第 1 号石室の東に北方に口を開けて半円形を呈する石製品が検出された。石製品は長径 75 cm の凝灰岩製で、東側の端部には五輪塔の台座と思われるものが置かれていた。半円形の石製品は現高 18 cm で、厚さ 8 cm で上部は欠損しているが、内外面は縦方向にノミで調整されて、下端は面取りされている。石製品は遺構面である礫層上に置かれ、付属的な遺構は認められないが、半円形の中央部がわずかに凹んでいた。検出当初は大型の石鉢の口縁部が、伏せて置かれた物と考えたが、脇の台座や口縁の傾きから石製のカマドとして考えておきたい。

(4) 配石遺構（第 31 図 図版—16）

次 4 次調査区の北側で 3 基の配石遺構が検出された。東から順に第 1 号、第 2 号、第 3 号とした。各配石遺構は偏平な礫を主体とするが、その礫間からは五輪塔の地輪や台座等の石造遺物も検出された。なお、各配石遺構下の未調査のために不明である。

第 1 号配石遺構は長軸 220 cm、短軸 150 cm の半円形を呈して、礫は 10～40 cm の偏平なもの 15 個であるが、20 cm 程の小礫で間をうめている。礫の上面は、やや凹凸となっている。また、五輪塔の地輪が 1 点礫に混じって出土した。第 2・3 号配石遺構は第 1 号配石から離れて第 4 次調査区の北西端から 2 基が接して検出された。南には遺構集中地区が有り、数多くの土壇やピットが検出された。

第 2 号配石遺構は長軸 240 cm、短軸 160 cm で、礫は 10～50 cm のものが利用されているが、30～50 cm の礫 13 個を配して間を小礫でうめている。礫の上面は、ほぼ水平位置にならされている。出土遺物は石造遺物を含めて認められなかった。

第 3 号配石遺構は、長軸 420 cm、短軸 265 cm で略長方形を呈する範囲に 40～95 cm の偏平な礫を 34 個配置して、その間を小礫でうめている。配石中央に五輪塔の台座が 1 点置かれていた。礫の上面は、ほぼ水平位置にならされている。出土遺物は、台座以外に少量の珠洲焼と土師質土器があった。

(5) 土壇（第 32～33 図 図版—17～21）

第 3・4 次調査区を通じて 44 基の土壇が検出されたが、これらは出土遺物から全て鎌倉時代から室町時代の所産と考えられる遺構であった。検出範囲は第 3 次調査区北側から第 4 次調査区全域に及んでいる。特に第 4 次調査区では土壇の群集が認められ、北側では弓なりに連なって検出された。一方、南側では群中の密度は弱い広い範囲から検出されている。これら土壇はその形態・規模はかなり多様であったが、土壇の平面形や規模、覆土の状態や配置状況等と、出土遺物から各土壇の性格が、墓や貯蔵穴や井戸などと推定される。ここでは、前記の諸点から土壇を大きく 6 タイプに分類整理してみた。なお、図示した土壇実測図の中には、土層断面図に石が表示されているが、平面図方には表示されていない土壇がある。これは、覆土中の石は大小に関係なく土と同一視して調査したが、土層断面の石は覆土の堆積状況から土層図作成時に図から削除できなかったことによる。また、本項では第 4 次調査区の土壇に関して説明したい。

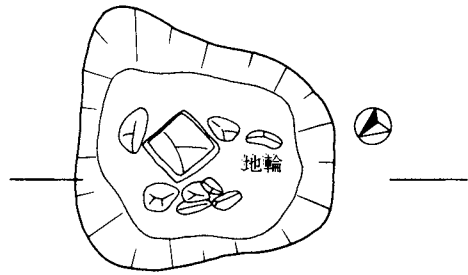
A 類 上面プランが隅丸方形あるいは円形を呈して、深さは 45～90 cm と比較的深い土壇で、壇内の覆土がレンズ状の堆積状態のもの。覆土中又は上面に礫を伴う場合が多い。

B 類 上面プランが長方形あるいは楕円形を呈して、深さ 20～50 cm の土壇で、壇内には礫の混入が無く、底面はほぼ平坦であるもの。覆土中又は底面から遺物の出土を伴う。

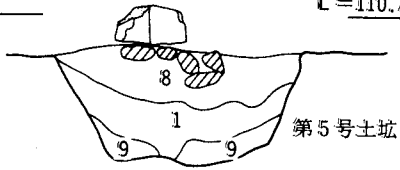
C 類 上面プランが円形を呈する場合が多くて、深さ 50～100 cm と深い土壇で、壇内には小礫の混入が多いもの。覆土中から炭化物や灰などを伴ない、人為的に埋め戻された形跡がみられる。

D 類 上面プランが方形あるいは略方形を呈して、規模の面でも A～C 類よりも大型で、深さが 30～60 cm のものが多く、底面が平坦である。

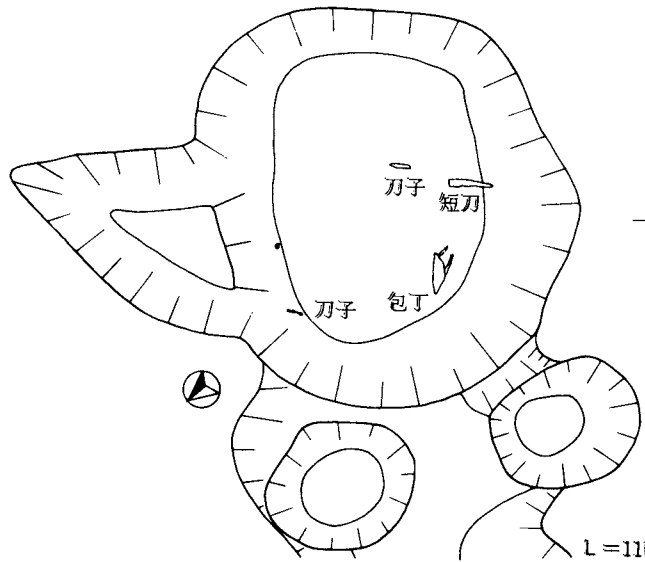
E 類 上面プランが不整形で、一定の形態を呈することが無く、深さが 20～30 cm と浅いもの。底面も



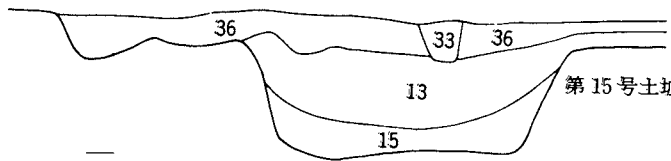
L = 110.700 m



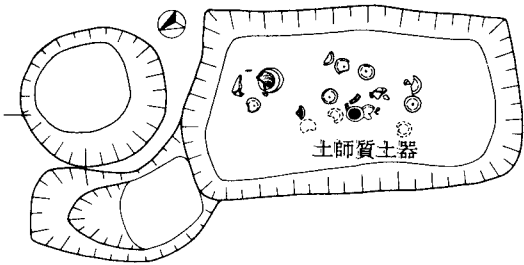
第5号土坑



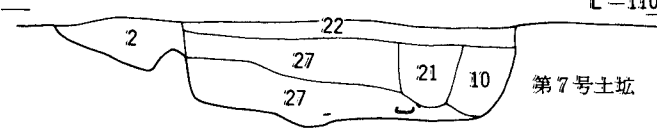
L = 110.890 m



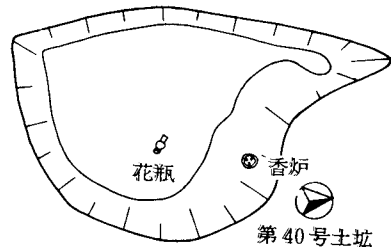
第15号土坑



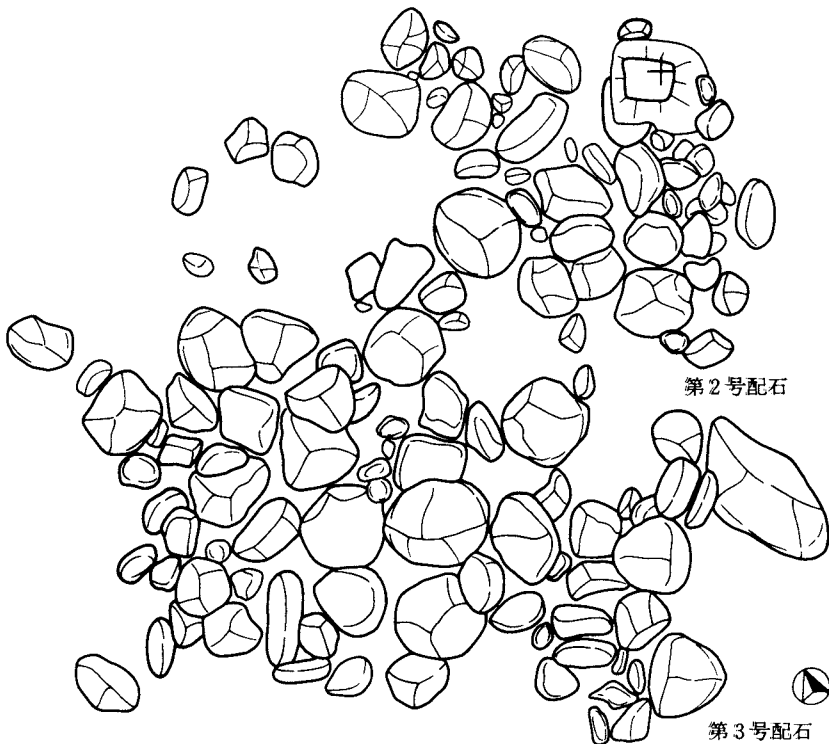
L = 110.530 m



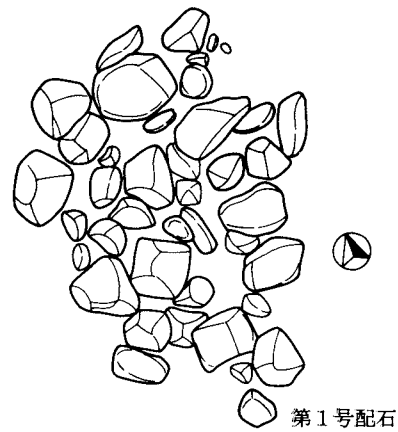
第7号土坑



第40号土坑



第2号陪石



第1号陪石



第3号陪石

第31图 土坑·陪石遺構実測図 (1/40)

凹凸が目立ち、ピットを伴なう場合が多い。

F類 上面プランがやや不整形な長円形を呈する土壇が二基接合して、深さが20～60 cmとバラツキが多いもの。

A類に分類整理できた土壇は、第5・11・15・18・33号土壇の5基であった。以下、順に説明を加える。

第5号土壇(第31図 図版一17)は、第4次調査区(以下調査区と略する)の北端に位置し、第1号土壇とは東に1m隔てている。平面プランは不正形な略方形に近くて、土壇上面には現位置を保つと考えられる五輪塔の地輪(28×30cm、高さ22cm)が検出された。規模は上面で長軸135cm、短軸120cmで、深さは中央部で60cmを測る。地輪下の礫は、10～20cmのものである。覆土は底面の両側に明茶褐色粘土層が堆積した上に、暗茶褐色砂質土層、明茶褐色砂質土層がレンズ状の堆積をしている。土師質土器と銅銭が底面近くから出土している。

第11号土壇(第32図)は調査区北側の第二遺構郡中の遺構集中地区より検出された。平面プランは楕円形を呈している。規模は上面で長軸220cm、短軸130cmで、深さは88cmである。覆土中の中程に礫を含んだ暗灰褐色砂礫土層が堆積して、その上下には暗灰褐色砂質土層の堆積が認められた。

第15号土壇(第31図)は第11号土壇と同様に遺構集中地区の東側より検出された。平面プランは隅丸方形を呈して、規模は第11号土壇と類似した土壇で、長軸210cm、短軸130cm、深さ52cmを測る。底面には暗褐色砂礫層が堆積して、その上に鉄製品などが出土した暗褐色砂質土層が、レンズ状の堆積を呈している。出土遺物は金属製品だけで、釘、包丁、短刀、刀子の他にリング状銅製品が出土した。

第18号土壇は(第32図)調査区南側の第III遺構群の一角にて、第2号溝と接合して検出された。平面プランは円形を呈して、規模はA類中では最も大型のもので、長軸245cm、短軸230cm、深さ78cmを測る。覆土中からは12～28cmの礫が出土したが、土壇東側の上面に堆積した茶褐色砂礫土層中から礫と一諾に牛の歯が出土した。歯は磨滅が認められることから、かなり年老いた牛ではないかと推定される。(1)

第33号土壇(第33図)第18号土壇の東の調査区脇から検出された。平面プランは隅丸方形を呈して、規模は長軸174cm、短軸156cm、深さ36cmを測る。平面プラン・規模は第11号土壇と違うが、覆土の堆積状況は、第11号土壇と同様相を呈している。覆土はレンズ状の堆積を呈して、中程に16～34cmの礫を多く含んだ茶褐色粘質土層が認められた。

B類に整理された土壇は、最も多くて第3・4・6・7・27・28・29・30・40号土壇の9基であった。中でも壇内からの出土遺物の点で、第7・28・40号土壇の3基が目される。

第3号土壇(第32図)は調査区北側の第II遺構区の北で、第4・6号土壇と並んで検出された。平面プランは、隅丸長方形を呈して、B類中では標準的形態である。規模は長軸220cm、短軸130cm、深さ30cmを測る。覆土は第4・6号土壇と同様に暗茶褐色砂質土層の単一土層である。

第4次調査区検出遺構土層一覧表

No	土層名	No	土層名	No	土層名	No	土層名
1	暗茶褐色砂質土層	10	暗灰褐色砂質土層	19	濁暗茶褐色砂質土層	28	暗黄褐色砂質土層
2	暗茶褐色粘質土層	11	暗灰褐色粘質土層	20	濁暗茶褐色粘質土層	29	暗茶灰色砂質土層
3	暗茶褐色砂礫土層	12	暗灰褐色砂礫土層	21	明灰褐色砂質土層	30	明褐色砂質土層
4	暗茶褐色礫層	13	暗褐色砂質土層	22	明灰褐色粘質土層	31	濁赤褐色砂質土層
5	茶褐色砂質土層	14	暗褐色粘質土層	23	黒褐色砂質土層	32	濁暗灰褐色砂質土層
6	茶褐色粘質土層	15	暗褐色砂礫土層	24	黒褐色粘質土層	33	黄茶褐色粘質土層
7	茶褐色砂礫土層	16	暗褐色礫層	25	灰茶褐色砂質土層	34	黄褐色粘質土層
8	明茶褐色砂質土層	17	濁茶褐色砂質土層	26	灰茶褐色粘質土層	35	黄褐色砂礫土層
9	明茶褐色粘質土層	18	濁茶褐色粘質土層	27	灰褐色砂質土層	36	褐色粘質土層

第6号土坑(第32図)は第4号土坑の西側より検出された。平面プランは不整形な楕円形を呈して、規模は長軸250 cm、短軸195 cm、深さ40 cmを測る。覆土は暗茶褐色砂質土層の単一土層が堆積するが、出土遺物は無い。

第7号土坑(第31図 図版-17)は調査区の北側にて、第2・3号配石遺構と3 m隔てて検出された。平面プランは長方形を呈して、B類中で最も形が整った土坑である。規模は長軸176 cm、短軸98 cm、深さ約50 cmを測る。四方の壁は直立し、底面も平坦である。覆土は灰褐色砂質土層が、45 cmの厚さで堆積して、その上に明灰褐色粘質土層が浅く堆積する。南側の壁面近くに径34 cmで、深さ32 cmのピットが明灰褐色砂質土層のブロックとして見られる。底面近くからは、約20個体の土師質土器が、一括出土した。土師質土器の大半を占める小皿は、底面中央に正位置で置かれていたが、坏形の土器は底面の北端に、口を合せ置かれていた。また、土師質土器以外には、出土遺物は無いが、検出遺構の年代決定資料として重要なものである。

第27号土坑(第33図)は第III遺構群東側に、第28・29号土坑と並んで検出された。平面プランは方形を呈して、底面は平坦であった。規模は長軸220 cm、短軸180 cm、深さ40 cmを測る。出土遺物は無く、覆土は底面に暗茶褐色砂質土層が堆積して、その上に茶褐色砂質土層が覆っていた。

第28号土坑(第33図 図版-21)は第27号土坑と40 cm離れて検出された。平面プランは楕円形を呈するが、長軸方向は北北東と同一である。規模は長軸184 cm、短軸130 cm、深さ25 cmを測り、底面に径42 cm、深さ22 cmのピットが穿かれている。覆土は茶褐色砂質土層が堆積し、ピットには茶褐色砂礫土層と黄褐色砂礫土層で埋っていた。底面の東隅より径17.6 cmの鉄製の蓋が出土した。北方4 mに位置する第24号土坑中からは鉄製のクワが出土している。

第29号土坑(第33図)は第28号土坑と24 cm離れて検出された。平面プランは不整形な楕円形を呈して、規模は長軸209 cm、短軸108 cm、深さ22 cmを測る。覆土は第27・28号土坑と同一の茶褐色砂質土層が堆積し、坑内からの出土遺物は無かった。

第30号土坑(第33図)はE類に整理される第23号土坑の南から検出された。平面プランは不整形な楕円形を呈して、規模は長軸226 cm、短軸240 cm、深さ40 cmを測る。覆土は暗茶褐色砂質土層と灰茶褐色土層が水平堆積し、灰茶褐色砂質土層中からは銅銭が出土した。

第40号土坑(第31図 図版-21)は調査区南側で、遺構密度が弱くなる地点から検出された。平面プランは不整形な楕円形を呈し、規模は長軸195 cm、短軸122 cm、中央部で深さ20 cmを測る。覆土は暗褐色砂質土層で、坑内より瀬戸・美濃の花瓶と香炉が各1点ずつ出土した。両者とも口縁を一部欠損するが、ほぼ完形である。花瓶は坑内中央近くで横になり、香炉は北側の肩で伏せた状況で出土した。

C類に分類整理できた土坑は、第17号土坑、第341・342・396・396号ピットであった。その中で、第17号土坑と第396・397号ピットは覆土中から多量の炭化物が出土している。

第17号土坑(第32図)は調査区南側の中程に位置して、第18号土坑とは4.4 m離れて検出された。平面プランは円形を呈して、規模は長軸216 cm、短軸170 cm、深さは100 cmを測る。底面は南へ傾斜している。覆土は暗茶褐色砂質土層が、72 cmの厚さで堆積し、炭化物と灰、礫や陶磁器が混入した状態で出土した。出土遺物としては、青磁碗、白磁皿、染付の皿と碗、瀬戸・美濃の天目茶碗、瓦質の花瓶、土師質土器、刀子、火箸などがある。覆土の堆積状況などから、炭化物や灰を含んだ覆土を一括して廃棄したと考えられる。

第396・397号ピット(第32図)は、形態的には土坑に近く、第17号土坑の北5 mの位置で検出したので、本項で整理報告した。平面プランは8字を呈して、規模は長軸270 cm、短軸130 cm、深さ50 cmを測る。底面は両ピット共に平坦で、覆土は水平堆積を呈する。第396号ピットは暗茶褐色砂質土層・濁暗褐色砂質土層が堆積するが、底面と両土層の間には、灰を多量に含んだ黒褐色砂質土層が堆積した。第397号ピットにはこの黒褐色砂質土層は認められなかった。これは覆土の切合い関係からも、第396号ピットの方が第397号ピットより新しいことによる。

D類に分類整理できた土壇は、第1・12・16号土壇の3基であった。

第1号土壇(第32図)は調査区の北端で検出された。平面プランは長方形を呈し、底面は平坦で、地山の礫層による凹凸も少ない。規模は長軸225cm、深さ32cmを測る。覆土は暗灰褐色粘質土層が主体で、壁際に明灰褐色粘質土層・灰茶褐色粘質土層が堆積している。

第12号土壇(第32図 図版-19)は遺構集中地区南端に位置し、周辺には第11・14・15号土壇が位置する。平面プランは不整形な楕円形を呈するが、底面は平坦である。規模は長軸240cm、短軸200cm、深さ54cmを測る。覆土は下から暗灰褐色砂質土層、暗茶褐色砂質土層、茶褐色粘質土層の順で堆積し、壁際には暗黄褐色砂質土層が積る。

第16号土壇(第32図)は第III遺構群の北西端に位置する。平面プランは略長方形を呈し、底面は平坦で、凹凸なものも少ない。規模はD類中最大型の土壇で、長軸285cm、短軸280cm、深さ60cmを測る。覆土は濁黄褐色砂質土層と暗茶褐色砂質土層で、下位の濁黄褐色砂質土層からは、青磁碗、白磁皿、越前焼の小壺等の出土遺物があった。

E類に分類整理できた土壇は、第19・20・23号土壇の3基であった。分類整理上土壇としたが、覆土の堆積状況が示すように、前記の3基の土壇は、複数の土壇やピットが切り合う。平面プランも土壇により大きさが異なる。深さは10~25cmと平均して浅い。第19号土壇について説明を加える。

第19号土壇(第32図 図版-20)は調査区西側にて検出され、平面プランは不整形な方形に近い。規模は長軸440cm、短軸330cm、深さ24cmを測る。底面には6個のピットが穿かれている。覆土は濁茶褐色粘質土層・濁暗茶褐色砂質土層が堆積している。ピットは径60~140cmで、濁暗茶褐色砂質土層で埋まっている。

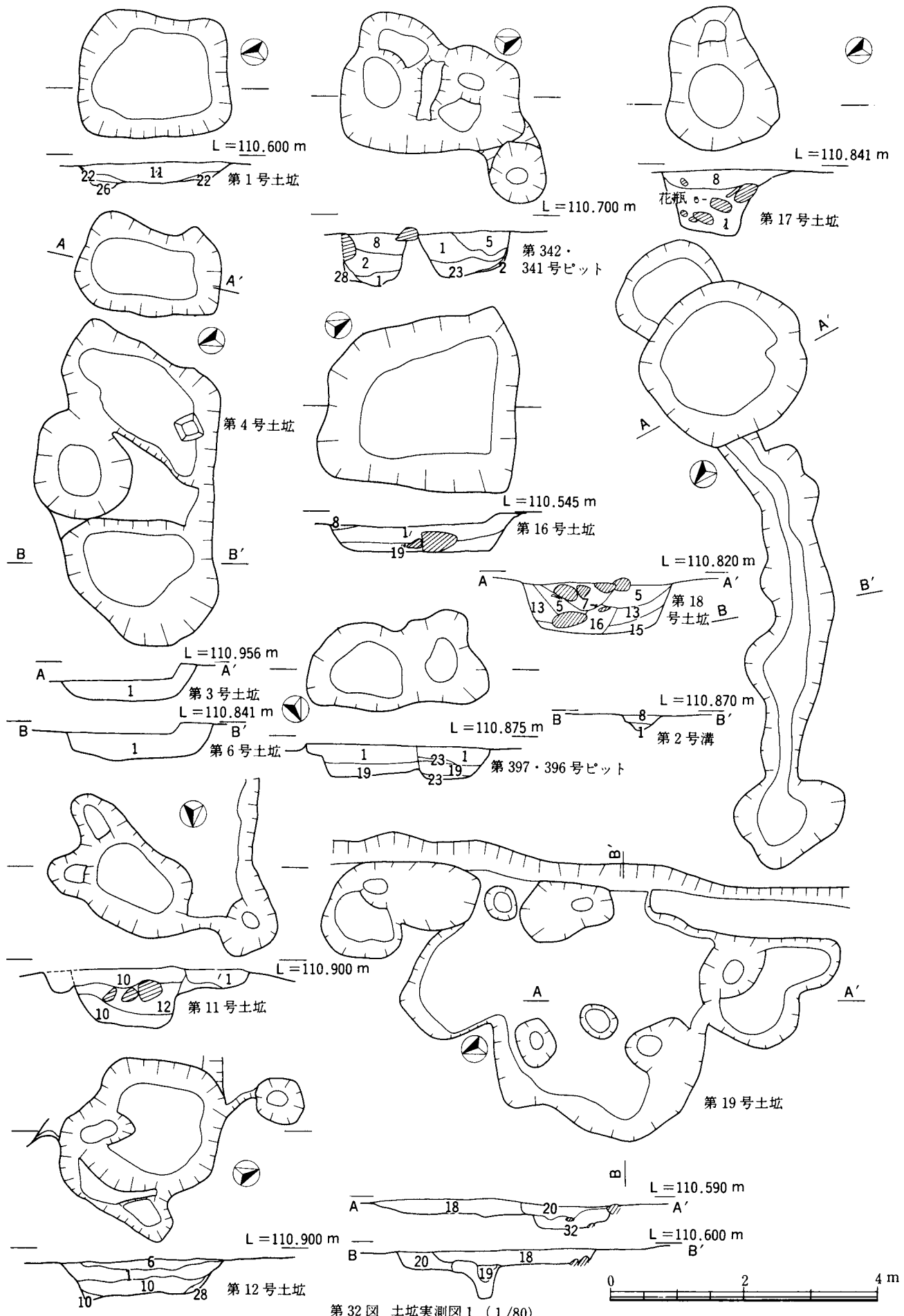
F類に分類整理できた土壇は、第21・34・37・38・41号土壇の5基であった。5基共に平面プランが極めて不整形で、A~E類には含まれず、他の土壇やピットと接合・切り合っている。規模の点では似通う点が多い。また、底面が平坦なものが多いが、地山の礫による凹凸が目立っている。また、出土遺物等も少ない土壇である。第21・37・38号土壇に関して説明を加えたい。

第21号土壇(第33図)は第15号土壇の東2mに位置し、平面プランは楕円形を呈する。規模は長軸168cm、短軸150cm、深さ58cmを測る。覆土から本土壇が除中で、径108cmのピットとして利用されていたと知られる。

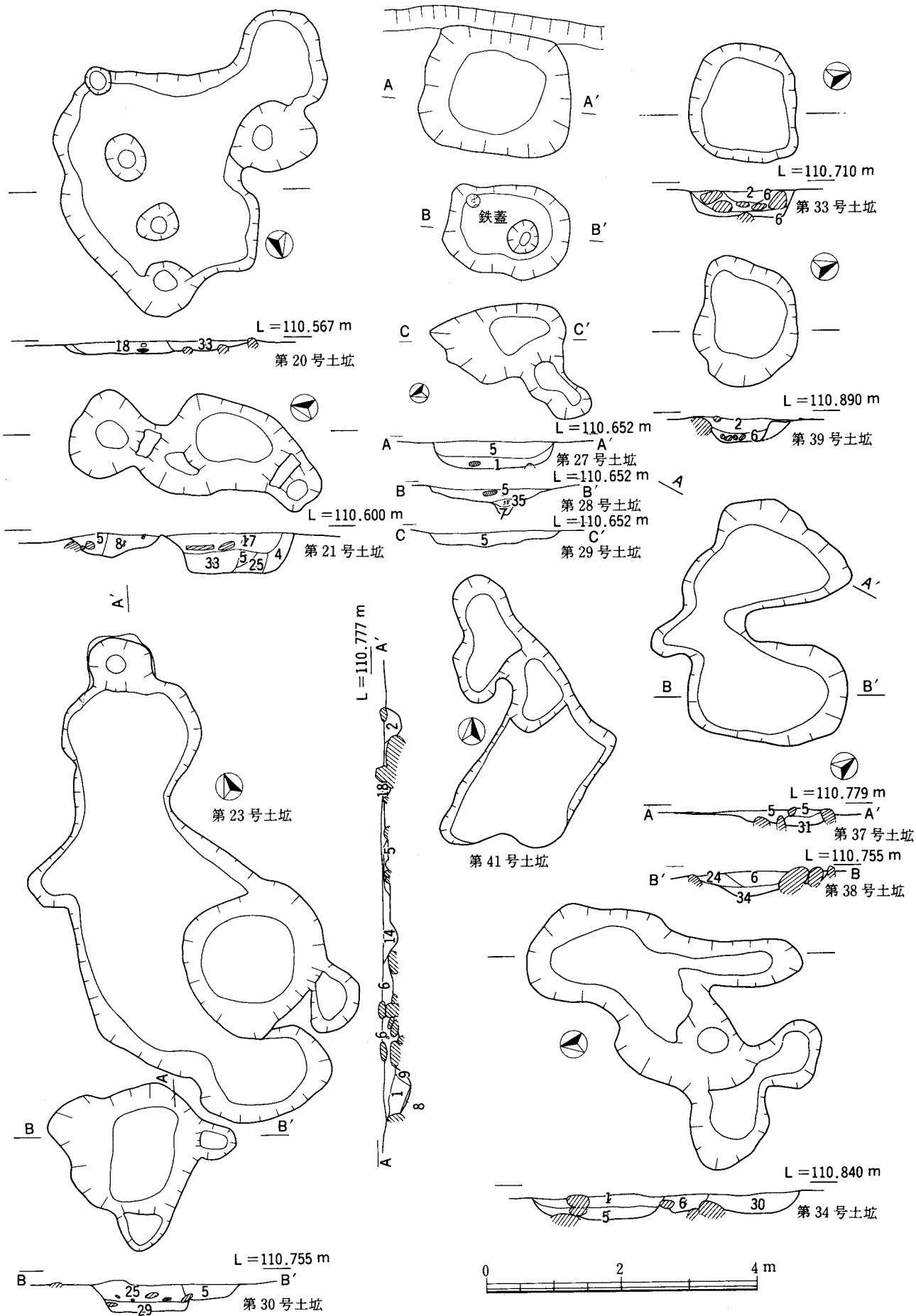
第34号土壇(第33図)は調査区南側に位置し、第33号土壇と1.8m離れている。平面プランは不整形な楕円形を呈し、規模は長軸275cm、短軸160cm、深さ36cmを測る。底面はほぼ平坦で、覆土は茶褐色砂質土層と暗茶褐色土層が堆積している。

第37・38号土壇(第33図)は二基の土壇が接合したものと考えられた。共に平面プランは楕円形を呈して、規模は第37号土壇が長軸215cmで、深さが25cmである。第38号土壇は長軸236cmで、深さ38cmである。覆土は共に一定しない。

土壇をA~F類に分類整理して報告してきたが、ここで各土壇の性格を分類に基づき簡単に触れておきたい。



第32図 土壇実測図1 (1/80)



第33图 土坑实测图2 (1/80)

第5章 遺物

第1節 縄文時代の遺物

(1) 土器

縄文時代の遺物の出土の分布は、第2次調査区のもの大部分で、第1・3次調査区では散布している少数片を得たにとどまる。土器の出土を見ると、ピット、土壇等の遺構の密集する地区に多く、河岸段丘の北方、西方、南方にむかっては漸減してゆく傾向にあり、集落址とはほぼ重なり合うものと推定できる。打製石斧等の石器では遺存の状態は、他の遺跡と比較してさほどの相異は見られないが、土器片は小破片となるものが多いと思われた。炉址や埋甕に使用された土器を除くと全形を想定できるものは極めて少数例である。ピットや土壇に包含されているものも、包含層から得られたものも、地山面とした礫層や包含層に多量に介在する大小の礫によって傷められたものと想定され小片となるものが大部分で、接合する事のできたものも少数例を上げるにすぎない。ピット、土壇等に包含されていたものの分類を行った後に、包含層の土器の分類を行うべきだが、図示に耐えるものが少く、型式学的分類での報告となった。共伴関係や一括土器としての認識は、石囲炉址、埋甕を上げうるのみである。

縄文時代の土器は整理箱で45ケースにのぼる。粗製土器の胴部片の量が大きく、文様の判断できるもの、粗製土器の口縁部片をあわせて900点以上の採拓を実施した。以下、群、類別の概略を記述してゆく。

第1群土器

深鉢1A類 (1～7)

波状口縁を持ち口縁端部が内屈するもので1類とした。沈線を施文した後に縄文を施すのが通例で、突起を持つものも同様の施文順序が観察される。1は波頂部にワラビ手状の曲線文を施文した後に左右の平行沈線を引くもので、内面平滑になでられ、内外面とも炭化物が付着している。2は波頂部に棒状具による刺突をおき3条の平行弧線文でかこむもので、右方に曲線文が見られるが判然とはしない。波頂部口唇に3条の沈線が引かれている。内面は砂粒の移動が見られ、強いナデが施されている。3も波頂部の左側片で、口縁端部近くに刺突文が1つ施されている。4は尖り気味の波頂を持つもので、内外面平滑に調整されている。6は口縁部文様帯が内屈するタイプで、1～5までの器形と異なるものである。

深鉢1B類 (8～14)

平口縁の深鉢で、沈線文と縄文を施文するものをまとめたが、小片のために疑問点の残るものも含まれる。8は口唇が肥厚して内傾するもので他の器形をとるとも考えられる。外周には煤が付着している。9は口唇部内側をそいでいるタイプで、LRの斜縄文を入れた後に沈線を引いている。10は口縁内側に粘土を継ぎ足すタイプで、口唇に縄文が施文されている。内外面に炭化物が付着している。内面の調整は粗雑である。11は大きく外傾する口縁部を持つもので、第1群土器では唯一の器形を持っている。幅広の平行沈線間を縦に区切り、4個の刺突文を加えて、区画文を起点とする平行沈線をつけ加える。沈線の引き方は間隔が不揃いで乱暴である。12はいったん外湾して内屈する口縁をもつもので、口縁部内面は平滑に調整されている。外周には煤が付着している。13は口唇が肥厚して内面に明確な稜をつける内屈する口縁部で、円および四角の区画文を描く。14は口縁端部片で、文様施文が縄文から沈線施文となり、文様自体も後出的な施文ではある。

深鉢1C類 (15～21)

1A・1B類の胴部片と想定されるもので一括した。曲線的な沈線と縄文が組み合うものである。15・16は沈

線で渦巻文様を引いてから縄文を施文するもので、15では渦巻文の間に磨り消しを加え、内面に丁寧な磨きを行っている。17～19は沈線で小さな区画をつくり出すもの。20は刺突文が入れているもので、破片のため上下左右が判然としない。21は胴部下半の破片と見られるもので、蛇行する沈線を引いた後に平行沈線文を加えている。

壺1類 (22)

口径約13cm、器高約3.5cmの小型品で口唇が平坦にならされ、底部は丸く入念に磨かれている。Sの字状文を中心として沈線を引き、LRの縄文を施文している。縄文と沈線の施文順序は磨耗のため判然としない。色調は明るい黄燈色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

深鉢2B類 (23～28)

沈線文のみで施文されるものを一括している。23は口唇部が肥厚するもので、沈線は比較的深くに引かれている。外周には煤が付着している。25～27は大きく外展してきた口辺部が端部で内屈して「く」の字を呈するもので、屈曲部をはさんで上下に沈線が引かれるのが特徴的である。27の口辺には複雑な沈線文が置かれているが、全形はつかめない。内外面とも比較的丁寧なナデが加えられ、焼成は堅緻である。28は内屈する口縁に1条の沈線を入れ、口頸部に曲線文を入れるものであるが、文様単位が判然としない。暗褐色を呈し、胎土、焼成は良い。

深鉢2C類 (29～36)

沈線文が引かれる胴部片をまとめた。29～30は蛇行する沈線文を切るようにして平行沈線文が施文される。29は蛇行文施文のあと、磨き加えられ沈線がつぶれたようになっている。32には赤彩痕が見られる。33・24は同一個体片で、彫りの深い沈線文が引かれている。内面の調整は粗雑である。36は屈曲する部位にあたる破片で刺突文を起点とする沈線が引かれており、若干後出的とも考えられる。内面の色調は黒褐色を呈し、丁寧なナデが施されている。

深鉢3類 (37・38)

口縁端部外周に粘土を足して段状にして口縁帯をつくるタイプである。37には刺突文と縄文が加飾されている。

深鉢4A類 (39・40)

棒状にとび出す波頂部を持つもので、39は波頂部から下りる隆帯に接続させて、口縁部と平行する隆帯を貼付し、口縁端部、隆帯側縁、波頂部上端に細かな刺突を加えるもので、口縁部内面下端にも1条の沈線が引かれている。刺突を行う工具が2種類使われたと見られる。40は隆帯のわきに縦位に刺突文が置かれ、平行沈線が引かれている。器表面が荒れているために細部の調整はつかめない。

深鉢4B類 (42・43)

比較的薄手のつくりを持つ口縁部で、沈線文が三角形の区画を持つと推定されることから、波状口縁を呈する可能性がある。沈線文を施文したあとに列点を置いている。

深鉢4C類 (41・44)

棒状工具と竹管状工具による刺突文を持つもの。41は下半に弧線文が見られ、後出的な要素が見える。色調は明るい茶褐色を呈し、胎土に細かい石英砂粒が見える。内面の調整は平滑である。44には径4mmの竹管刺突文が見られる。

深鉢5A類 (45～47)

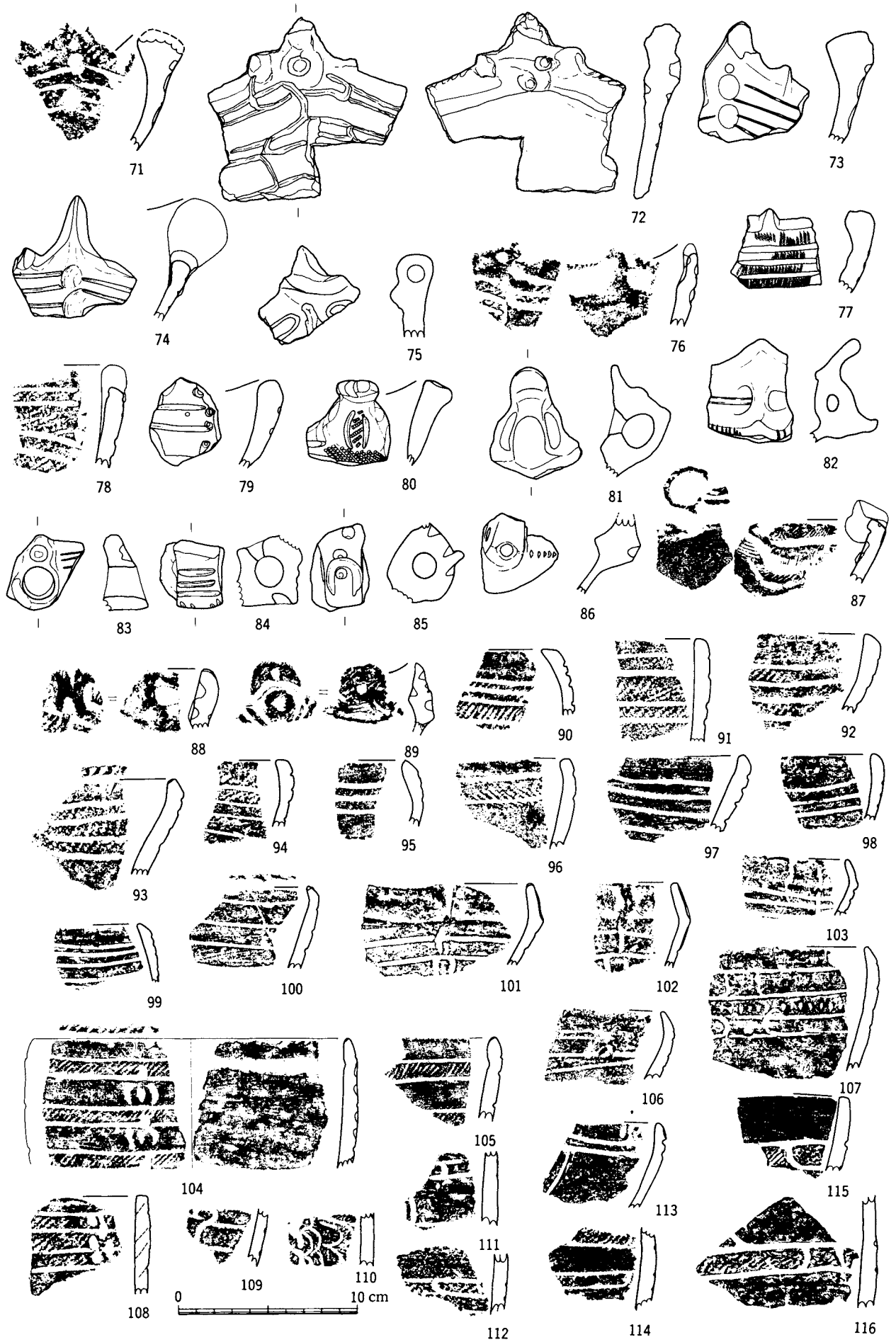
全体形が判然としないものをまとめた。群別についても疑問がのこるものである。45は内屈する口縁帯に沈線文と縄文が入れられ、口唇部分に列点が置かれるもの。46は口縁下端に突帯がつけられているもの。47は口縁帯下端に縦位の列点が加えられているもの。

鉢1C (48)

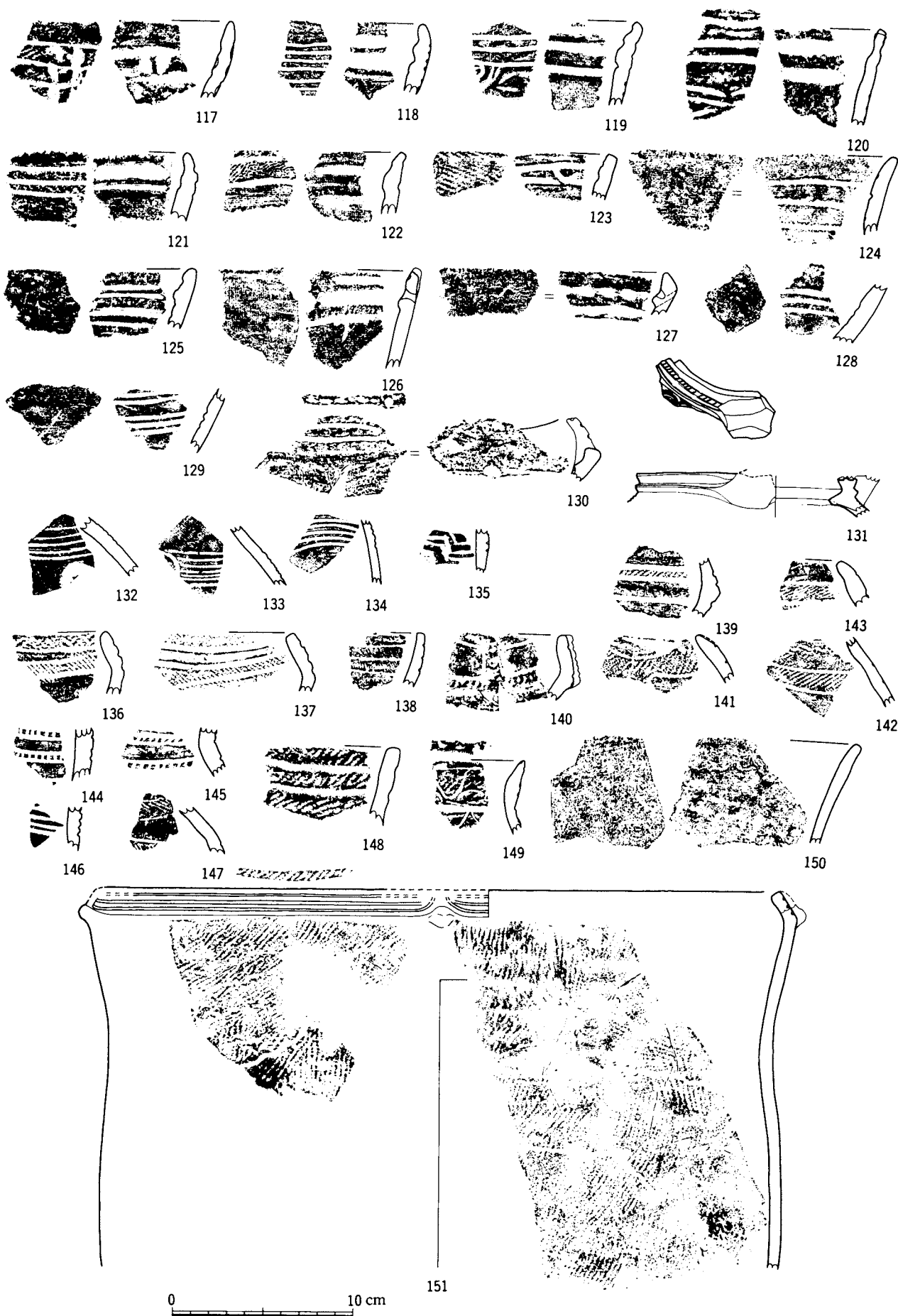
内面が入念に研磨されているもので、沈線文が胴部に見られるが、文様モチーフが判然としないもので、やはり、本群に仮に含めた。



第34図 縄文土器拓影(1) (1~70) (1/3)



第 35 図 縄文土器拓影(2)(71~116) (1/3)



第 36 図 縄文土器拓影(3) (117~151) (1/3)

第2群土器

深鉢1B類 (50~53)

櫛状工具を想定される平行する細い沈線が等間隔に引かれるものを第2群土器としてまとめた。条痕文土器との名称もつけられているが、北陸の晩期に通有の粗製土器の条痕調整とまぎれそうなので以下条線文土器として記述してゆく。条線文土器のなかで沈線文で区画をとらないもので1類とした。50はわずかに肥厚して平坦面をつくる口厚部に斜めの列点を加えるもので、口縁端部を無文とし残している。器表には若干の煤が付着している。52・54の口唇部には縄文が施文され、粗雑に条線文が引かれている。線の間隔は不揃いで、ひっかいたようにも見られる。47は平行線の重なりも少く、丁寧に引かれている。

深鉢1C類 (62~66)

1類土器の胴部片で、63・66では蛇行する沈線が、条線文のあとに施文されている。いずれも内面の調整は丁寧で、暗褐色の色調を呈し、胎土・焼成とも良好である。

深鉢2A類 (49)

沈線で区画をなし、条線文を沿わせるもので2類とした。波状口縁をなすと見られるものは1点のみの出土である。43では条線の単位が0.6cm幅で4本単位という工具が想定される。口唇部は平坦になでられた縄文が施文されている。口縁端部が角張るようになっている。内面は平滑に磨かれ、焼成は堅緻である。

深鉢2B類 (54)

沈線で区画された部分に条線文をつけるもので、曲線的な区画、直線的な区画を持つ2種に細別できそうである。54は口唇部に縄文が施文されている。器表面に煤付着。

深鉢2C類 (55~61)

55~57、60、61は直線的な区画に沿って条線文を施文するもので、比較的幅のひろい沈線で区画されている。破片であるため、上下の部位が判然としない。61には縦縄文が施文されているのが注目される。58はへう先による沈線が区画している。59は口頸部片と見られ、外展する口縁部を想定させる。外面は平滑に磨かれ、胎土、焼成とも良好である。

注口土器 (67~70)

破片であるために、上下の部位は不明確ではあるが、内面への調整を見ると粗雑で凹凸が激しいものを注口土器片として判断している。68は口縁部片である。69は刺突文と幅広の沈線が加えられている。

第3群土器

深鉢1A類 (71~89)

刺突文、沈線、縄文を施文するもので、突起を持つ波状口縁深鉢をまとめた。三角形に尖り気味の波頂部と口縁帯に突出して把手状を呈するもの、その他に細分ができる。71~79までは前者で外傾気味に立ち上がる口縁部の端部が大きく肥厚して内側にせり出すものである。平口縁の1B類に分類したもののなかに、本類に含まれるものがあると考えている。71~74の波頂部は大きなもの1個を中心に左右の脇に小突起が貼付され、3個で1組となる構成をとるが、左右の小突起は同一ではなく若干の違いを持つ。それが特に72では大きく変化し、正面左側が大きく、中央突起をはさんで同じ高さにそろえられている。なお、71~73の中央突起はひねり込みが加えられている。71は地文として斜縄文が入れられている。内外面に炭化物が付着している。72の地文にもかろうじて斜縄文が施文されているのが認められる。波頂部を除いた口唇部に刻み目文が施文されている。内面では波頂部下の刺突文下端から段がつけられ、口縁部内側をきわ立たせている。外周に施文されている沈線を区切るように

して、弧線が粗雑に引かれている。73の地文にも斜縄文が認められる。内面に炭化物が付着。74の内面は横方向の条痕が見られ、強いナデが加えられたものと見られる、75には煤が器表全体に付着している。76の地文には斜縄文が見られ、段違いの区画文が施文されている。内面には刺突文と口縁に沿う幅広の凹線が見られ、口唇部に刻目が加えられている。77の地文には燃糸文が施文され、内面には断面三角形の幅広の凹線が2条引かれている。器表に煤付着。78・79には波頂部下の口縁帯に、縦位の刺突文が入れられている。78での刺突は斜め下方から上に向かって施されたかと観察される。

80は台形状の突起で、端部および両側面にくぼみが、正面に「ハ」の字状の沈線が入れられている。全体の調整は既述したものに比較して丁寧と言える。82は口唇部、口縁帯下端が前面に突き出て三角形の突起となり、間をブリッジ状に接合させている。口縁帯下端の突起に刻み目文が加えられている。81は突起部分が大きく伸び上がり巻き込むようにブリッジをつくり、端部をさらに伸ばしている。把手状の背後から穿孔が加えられている。83は波頂部下に刺突と注口土器の注ぎ口状の穿孔が入れられ、深鉢器形からはずすべきかもしれない。84・85は把手状となり、欠損してはいるが、81と同じような伸び上がる端部がつくようだ。ともに、把手正面には刺突が加えられている。86は赤彩痕がのこる小型品である。88・89は小突起の波状で、刺突文を核として沈線を引く。89では突起上も含めて、刺突文、沈線文を施文した後に縄文をころがしている。口唇上には沈線と縄文が施文されている。

深鉢1B類 (90~100)

平行口縁を推定させる平行沈線文、縄文を施文する深鉢で、内湾気味の口縁帯に端部が内面に飛び出す器形を持つものをまとめた。小片のため、A類器形のものが含まれている可能性が高い。90~95までは、地文に縄文を施文するもので、外周面にそれぞれ煤が付着している。97~99の5点には平行沈線文のみで施文されているもの。100の口唇部端が突き出て、断面三角形をなしているのは、他の類と同じ口唇調整であるが、特にきわだった為である。やはり、器表面には煤が付着している。

深鉢2B類 (101~103)

外傾して立ち上がる口辺に内屈する口縁部を持つもの。101・102は同一個体である。器壁が減じて段を持ち口縁帯は無文となり、弧状をえがいて立ち上がる隆帯がおかれ、口辺部分の縦方向の文様部とつながる。平行沈線文は弧状をえがく短線で切られている。上が1条、下が2条の単位となるようだ。内面には厚く炭化物が付着している。103の無文の口縁部には、隆帯ではなく、縦の沈線が置かれている。

深鉢3B類 (104~108・113)

鉢器形と見られるが、胴部片との関わりから深鉢としてあつかった。むかい合う弧線を持つものでまとめた。104は口径約18cm、現器高7cmをはかるもので、105と同一個体である。口唇に斜めの刻み目をおき、尖り気味の口縁内面に断面三角形の1条の沈線が置かれている。鉢器形の内面に凹線を入れるものとの関連が考えられる。外周は縄文帯と磨り消し無文帯とに若干の幅を持たせて分け、棒状工具による刺突と沈線を施文している。縄文帯と無文帯にかけての単位が読みとれる。沈線は起点の刺突から引き、終点では弱い刺突を加えて止める。色調は外周暗褐色を呈し、煤が付着している。内面は茶褐色を呈し、横方向のナデ調整痕が見られる。113は波状口縁を呈する可能性が見られるもので、口縁端部は刺突で加飾されている。おそらくむかい合う弧線文となるのであろう。108は口唇が平坦にされたもので、縄文の磨り消しは沈線ごとではなく、幅の広い単位で行っているようだ。口縁近くの外周に煤が付着している。

深鉢3C類 (109・110)

109は沈線を切る「の」の字状の蛇行文が見られる。110は刺突を起点とする弧線文が見られ、周囲に弧線文と縄文が施文されているものであるが、内面の器壁に凹凸が見られ、注口土器の胴部片の可能性もある。

深鉢4B類 (107)

1点のみであるが、弧線文の円弧の部分で向き合うもので4B類とした。ナデ調整された平行沈線文の間に弧線文がむき合い、間に刺突が加えられる。沈線間に押引文が幅4mmの工具で加えられている。内外面ともに炭

化物が付着している。

深鉢 5 B 類 (115・116)

平行沈線内で円弧がむき合うタイプを 5 類とした。後出的なものであろう。115・116 は同一個体片で、丁寧に研磨され赤彩されていた土器である。胎土、焼成が他の土器と大きく異なる所から移入品と推定される。

深鉢 5 C 類 (111、112、114)

平行沈線間を円弧で結ぶタイプである。112 には刺突文が加えられている。

鉢 1 B 類 (117)

1 点だけであるが、向き合う弧線文をつけるもので 1 類とした。弧線文は幅広で粗雑につけられている。内面には 2 個の刺突が加えられている。色調は茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多く良くない。

鉢 2 B 類 (118～122)

外周に沈線文を引き、内面に 2 条の段をつける鉢で 2 類とした。118 の外周には、やはり、煤が付着。121 は口縁端部が段を持って内屈し、稜線をはさんで沈線文が引かれている。沈線文を結ぶ弧線文が認められる。内面の沈線はやや弱いようである。122 の口縁に LR の単節縄文が施文され、沈線以下は磨り消されている。内面には段状のものをはさんで沈線がめぐらされる。

鉢 3 B 類 (123)

外周が縄文のもので 3 類とした。1 点のみの出土である。内面には 2 条の沈線と沈線からおろされる弧線文が下向きにして施文され、やや特異な文様構成を見せている。

浅鉢 1 B 類 (124)

外周が無文となっているものを浅鉢とした。内面に平行沈線文がめぐらされ、縄文が施文されているもので 1 B 類とした。

浅鉢 2 B 類 (125・126)

隆帯を持つもので 2 類とした。125 で隆帯状になるのは、口唇近くのも含めて 2 条で、上位が角張る沈線が 4 条以上引かれているようだ。126 には補修孔がうがたれているもので、最下にある隆帯上には斜め方向の刻み目文が弱く入れられている。口唇部分に突起につながるかと思われるもり上がりが見られ、波状となる可能性がある。

浅鉢 3 B 類 (127)

口唇部分が大きく内屈するもので、内面の隆帯は尖り気味となり、口唇と隆帯の間には右方向からの刺突文が連続して引かれている。

浅鉢 4 B 類 (128・129)

口縁部分を欠いているが、浅鉢と判断されたもので 2 例の出土があった。2 例とも 3 条 1 単位の沈線文をめぐらしてゆくようだ。

浅鉢 5 A 類 (130)

台形状の波頂を持つもので、器体から段を有して立つ波頂部の両側に刺突が加わり、口唇上に烈点が施文される。正面には刺突文を押し引く沈線文 2 条がおかれる。内面には、沈線と大きな刺突があるが、全形が判然としない。暗褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。

注口土器 (131～135)

注口土器は 4 点の出土であった。全体をうかがう資料はないが、加曾利 B 1 様式に通有のものと考えられる。131 は口縁部分で把手のつく部分にあたる。口唇部には 2 条の細い隆線がめぐり、内側の隆線に刻み目文が入られる。口縁部は断面三角形の隆帯がつくられ、頸部に沈線文が引かれる。S 字文を持つと見られる 132、円形文を持つ 133、134 と共に、胎土、焼成とも良好である。移入土器であろうか。

第4群土器

深鉢1A類 (136・137)

内屈する口縁を持つもので、口縁端に結節縄文が認められる。136、137は同一個体片で、器表面全体に煤が付着し、内面にも炭化物が見られる。

深鉢2B類 (139)

内屈する口縁部を持つもので、平行沈線で区画された縄文帯がつけられ、頸部につながる屈曲部にも沈線が1条めぐらされている。内外面ともナデ調整は丁寧である。

鉢1A類 (138)

小型土器とも見られるもので、口縁に沿う3条の沈線に刺突が見られ、溝底刺突文をつけるもので、細かい斜縄文が付されている。内面は平滑にみがかれている。

注口土器1B類 (140)

外反して口縁が内屈するもので、縦位に隆帯をつけ列点をつける。口縁部下端には刻目文、口縁部を縁どる沈線は、溝底刺突文が付されているが、縦方向には刺突は行なわれてはいない。拓本では溝底刺突があらわれてこない。口縁部内面の調整はやや粗い。

注口土器2B類 (141・143)

141は注口土器の口縁部であるが、端部を欠損しており突帯がめぐらされていたものと想定される。曲線的な区画をつける溝底刺突文が引かれ、区画内にLRの斜縄文が施文されている。暗茶褐色を呈し、焼成がやや軟調である。

注口土器3C類 (142)

結節縄文を施文するタイプで、沈線には溝底刺突文は見られない。頸部近くの破片と見られ、内面の調整は押圧した跡がのこり粗雑である。

第5群土器

加曾利B2式期に併行するものとして、第5群土器とした。

注口土器1C類 (144～146)

沈線間に連続する刺突を持つもので1類とした。145は頸部片と見られる。

注口土器2C類 (147)

縄文を施文するもので、本遺跡では他の器形を含めて羽状縄文系土器が極めて少く、時期差、地域差を考慮する視点を提供している。

深鉢1B類 (148)

粗製の深鉢土器であろう。口縁縄文帯に幅広の凹線を引くもの。暗黄褐色を呈し、胎土、焼成は並である。

鉢1B類 (149)

弧線文を主文様とする小型土器である。

深鉢2B類 (150)

1例のみの出土である。口縁内面に2段の結節縄文が施文されている。時期的には把握できず仮に位置づけておく。

第6群土器

深鉢1B類 (151)

口径約 38 cm、現器高 21 cmの大型品で、内屈する口縁帯に 3 条の沈線と縦の隆帯、口唇には縄文が施文されている。胴部には LR の斜縄文が施文されている。色調は褐色を呈し、器表面に煤が付着している。

深鉢 2 B 類 (152~156)

152 は内屈する口縁部に縄文と沈線文をめぐらすもの。暗茶褐色を呈し、胎土、焼成ともやや良くない。内外面のナデ調整はやや粗雑である。

深鉢 2 A 類 (157)

口縁端部で内屈し、口縁部分を肥厚させるタイプ。

深鉢 3 B 類 (158~162)

内屈気味に立ち上がる口縁帯に、隆帯を貼付するものをまとめているが、同一系統の土器とは考えがたい。158 には縦の隆帯に刻目を入れ、口縁帯に沈線による区画をつくり出すもの。159 での隆帯は円弧状を呈していて、口縁に沿う隆帯と口縁下端の隆帯に沿って粗雑な沈線文が引かれている。160 は小型土器で波状口縁を呈すると思われる。口唇上と隆帯上に連続刻目文が施文されている。162 では隆帯の両脇に連続した刺突文が施文されている。無文部位は丁寧に磨かれている。器表面に煤が付着している。

深鉢 4 A 類 (163)

内屈する口縁部分が素文となるタイプで、類としておく。

深鉢 5 B 類 (164)

平行沈線文と縄文が施文されるもの。直立する口縁部に LR の斜縄文を入れ、断面三角形になる平行沈線がめぐらされる。器表にわずかに煤の付着が認められる。

深鉢 5 C 類 (165・166)

165 では平行沈線文の間に、磨りけし無文帯がつけられている。

深鉢 6 C 類 (167~170)

弧線文をつけるものをまとめているが、器形を想定しうるまでには至っていない。167 では弧線文と斜方向の沈線文が引かれているもの。168 は 2 重になる弧線文が引かれ、平滑なまでに器面調整が行なわれているもので、時期的に下る可能性がある。169 は粗雑な形で弧線文が連続して施文されるもので、器表面に煤が付着している。170 では小さな弧線文が付されている。沈線の上には細い沈線が加えられている。

浅鉢 1 B 類 (171~174)

口縁端部を斜めに調整して口縁帯とする浅鉢で、171、172 の口縁部に赤色顔料が塗彩された痕跡を認める事ができる。171 は沈線と縄文が施文されている。174 は前 2 者に比較して口縁帯を除いて調整が粗くなっている。171、172 の器表に炭化物が付着している。

鉢 1 類 (175~182)

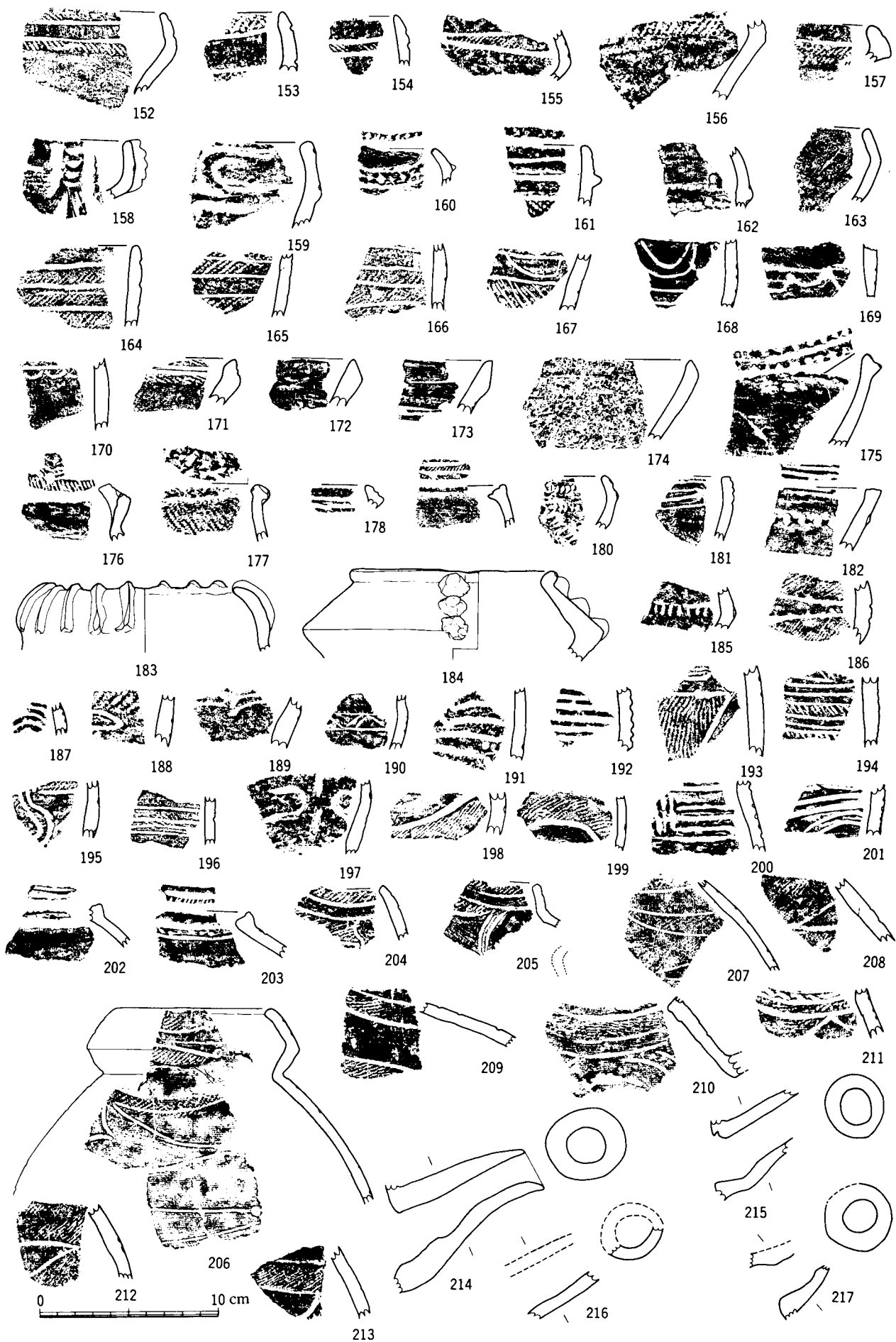
小片であったり、文様構成がつかめないもの、独自の文様を施文する等充分に把握ができなかったもので鉢 1 類とした。小型土器片が多い。175 は波状口縁となる無文の鉢で、口縁端に粘土紐を貼付して列点文を加飾している。体部には煤が厚く付着している。176 は外反口縁をつけるもので、口唇上に連続刻目文を引き突起を付す。突起には刺突文 1 個が押されている。内外面丁寧なナデが行なわれ、暗褐色を呈する。177 は灰白色を呈する特異な色調を示している。口縁端部を肥厚させ「V」の字状に粘土紐を貼付した後に、縄文を施文している。外反器形をなすようだ。178 は波状口縁をなす小型土器と見られる。179 は口唇部を両側に肥厚させるもので、体部は無文となる。180 は隆帯上に刻目文がつけられている。181 は平行沈線間に細かな縦線が入れられているもので、内外面ともに平滑に磨かれている。182 は口唇に沈線文が、口縁部に列点文が加えられている。

鉢 2 B 類 (183)

湾曲して内屈する口縁を持つもので、縦位に粘土紐を貼付する。内外面とも炭化物が付着している。

鉢 3 B 類 (184)

「く」の字状に屈折する体部を持つもので、口縁端部は小さく外展させる。口辺部に縦位の団子状突起を貼付



第 37 図 縄文土器拓影(4)(152~217) (1/3)

する。器壁は厚ぼたく造られ、内外面の調整はやや粗雑である。

深鉢 7 C 類 (185~201)

器形、文様の把握が充分に行えなかったものをまとめている。深鉢としたが、器形的に問題を残すものも含まれている。185、186は屈曲する胴部を持つもので、屈曲位置に縄文、列点文等が施文されている。187は沈線による円形文が、189には竹管状工具による平行沈線文が施文されている。190は小型土器で平行沈線間に斜方向の沈線を引いて、三角形の無文区を交互に作り出している。191は竹管状工具による刺突文をつけるもの。193は屈曲する体部が想定できるもの。197は色調明褐色を呈し、器面の調整が粗雑なもので、粗く文様が施文され、中期に所属する土器であるかもしれない。200は頸部下にあたる破片で直線的な沈線文を引いた後に、ナデ調整が加えられている。後期所産には疑問がのこる。

注口土器 1 類 (202・203)

口縁端部が若干肥厚して突帯状をなす口縁で、第4群土器注口土器に含めるべきかもしれない。202は貼付した隆帯頂部に縄文が施文され、体部は横方向に入念に研磨されている。内面の調整も比較的丁寧である。203には貼付した隆帯上に小さな刻目文が入れられ、突帯下には連続刺突文と沈線を加飾している。

注口土器 2 類 (204・205)

大きく内傾する口縁部で、磨消縄文帯をつけ、蛇行文を付しているが、方形区画を持つと見られる沈線があり、204と同一個体と見られ、注口部の位置がかなり口縁部に近いと言える。

注口土器 3 類 (206)

206は口径約8.5cm、現器高10.5cmをはかり、内屈する口縁部と算盤玉状の体部がつく特異な器形を示す。口縁部と体部に刺突文を起点とする弧線が引かれ、縄文が施文されている。色調明褐色を呈し、胎土、焼成とも良好であり、移入土器と想定される。器表面の一部に炭化物の付着が認められる。

注口土器 4 類 (207~213)

弧線が引かれて区画をなし、区画内に縄文を施文するもの。209には赤彩が施されている。210には沈線間に櫛状工具による刺突文が施文されているもので、口縁部分が外展する器形を持つようだ。

注口土器 5 類 (214~217)

注口部分は器体に対して幾分上向きかげんで取り付けられているようだ。注口部には加飾は施されず、ナデ調整によって丁寧に磨かれている。214、215には一部に煤の付着が認められる。

第7群土器

井口Ⅱ式土器に比定されるものをまとめて第7群土器とした。数量、器種とも少数例である。

深鉢 1 A 類 (218~220)

幅広の凹線文が施文されるもので、218は波頂端部が横に広がるタイプで、側面部分が肥厚している。220は波頂部につながる口縁部で2条の凹線が引かれている。ともに濁黄褐色を呈し、胎土に砂粒は少い。219は刺突を中央につける波頂部分で、幅の狭い沈線文がつけられている。淡黒褐色を呈し、全体が丁寧に磨かれている。

深鉢 1 B 類 (221)

口唇が平坦で、わずかに外反する深鉢で、横方向の凹線文を切るようにして、縦位に刺突文を置き、幅広の凹線が伸ばされている。口縁端部内面には凹線が引かれ段状を形成している。

深鉢 2 B 類 (222)

口縁部分で外反するもので、口唇に突起をつける波状口縁深鉢になる可能性がある。右下を欠損しているが、粘土紐で隆帯を「U」の字状に貼付するものと理解できる。文様部分から引かれる沈線は幅の狭いもので、比較的深くに施文されている。器表に炭化物が付着している。

深鉢 2 C 類 (223・224)



第 38 図 縄文土器拓影(5)(218~281) (1/3)

押圧痕を間にして沈線が引かれる胴部片である。

深鉢 3 B 類 (225)

湾曲して外反する口縁部片で、おそらく波状口縁を呈するものであろう。口径 23.5 cm をはかる。凹線は断面三角形を呈し、全体に入念な研磨を行なっている。色調は淡黒褐色を呈し、胎土、焼成は良好で、器表面には煤が付着している。

鉢 1 B 類 (226)

1 点の出土である。口縁端部に連続刻目文が施文されている。

鉢 2 B 類 (227~234)

凹線文がめぐらされている鉢で、いずれも器表は丁寧に磨かれている。230 では全面に赤彩が施されている。228、229 には口唇部に 1 条の沈線がはいる。232 では押圧痕が入れられ、斜め位置にあるのが注意される。いずれの口唇部も角のある平坦面をなしている。234 では口縁部の上端、下端に凹線が入れられている。227、228、233 の器表面には煤が付着している。

鉢 3 B 類 (235)

沈線と刺突文で口縁帯に施文するもの。内外面研磨がゆき届いている。

深鉢 4 A 類 (236)

素文とされるもので、波頂部は山形状をなしている。

鉢 4 B 類 (237)

口径 16 cm、現器高 6.5 cm をはかる。全体に粗いナデが加えられている。

第 8 群土器

深鉢 1 A 類 (238~241)

口縁帯の平行沈線文を三角形の押し引き刺突文で区切る手法やそれに類する文様を施文する深鉢器形のをまとめた。238 は波頂端部を欠くもので、中央に縦の沈線を入れて変化をつけている。口縁帯の沈線がそれに向けて斜めに施文されているのが注意される。239 は波頂部に内屈させるひねりが加えられ、内面の段が大きくなっている。240 は台形状の波頂部を持ち、刺突文を起点とする太目の沈線と細い沈線が平行しているもので、三叉状の大きな削りが入れている。241 の「X」字状のものは、器面に対して直に近い角度で入れられている。

深鉢 1 C 類 (242~245)

胴部片で前者 2 点に三叉状の切り込み、後者 2 点は沈線の両サイドから削り取りが入れられ、向い合う小三叉状文とする。245 には沈線内に刺突文が加飾されている。

深鉢 2 A 類 (246~252)

平行沈線文が縦位短線 1~4 条 1 単位で区切られるもので、平行線文を切る手法とは異なる施文方法をとる。すなわち、平行沈線文を引いた後に縦位短線を入れ、それを起点にしてさらに平行沈線文を引いてゆく手法であり、波頂部を単位とする文様の割りつけが決められている事を裏づけるものと言えよう。246 では内側へのひねり込みがなされ、波頂部に粗い三叉状文が単独に施文されている。247 は赤彩痕が見られ、内面が入念に研磨されているところから、波状口縁鉢器形も考えられる。波頂部はゆるやかに山形状をなし、波頂部に横位の沈線が 1 条置かれている。248~251 は波頂部片で 250、252 にはひねり込みが観察される。

深鉢 2 B 類 (253)

平縁としたが、小片の為に確実とは言えない。内外面とも入念に研磨が施こされている。

深鉢 2 C 類 (254~256)

縦位短線で文様を区切るといふ施文であり、区画文的な色あいの強いものと判断され、連結三叉状文の祖型としての位置づけには首肯される。



第39 器繩文土 拓影(6)(282~351) (1/3)

鉢 2 A 類 (257)

口縁帯の狭いもので、やはり、内面へのひねりが観察できる。内面には炭化物が付着している。

深鉢 3 A 類 (258～277)

波頂部の沈線文が端部の縦位短線と結び合って生まれたのが、「山」の字状三叉文で、口縁、胴部文様帯の平行沈線文を区切る縦位短線と結合したものが連結三叉状文で、後者の場合は沈線文と結びついた形で展開してゆくものと推定される。それは文様帯系列の規制として働き、波頂部施文は比較的ゆるやかな規範のなかにあったものとも考えられる。器形的には4山の波状口縁深鉢が引き続き盛行し、関西系の土器圏の土着化として理解され、後期終末に位置づけられる。258は波頂部全体につながる沈線文を施文する。直につながる沈線の接合部は、斜め位置に沈線をつなぐようにし、2類土器に分類したものは明らかに異なる施文意図が推定できる。波頂部全体がわずかに内傾している。259～261までは波頂部に「山」の字状三叉状文が施文されるもの。260の波頂部下の文様帯が上下に幅をひろげる沈線を引いているが、261では菱形に削り取りがなされている。269は大きく内側にひねりが加えられているもので、連結三叉状文が1条ひかれているだけである。264では沈線文が加えられ、265では中央に刺突文が置かれ、波頂部両脇に大きな三叉状文を向き合わせている。269、265、267には器表面に煤の付着が見られる。271の内面は口縁帯を際立たせる段がつけられ、鉢型土器の可能性もある。272、276は口縁部文様帯のもので、他は波頂部ないしそれにつながる破片である。277は口縁内側端部が肥厚するもので、深鉢以外の器形も考えられる。

深鉢 3 C 類 (278～300)

波状口縁の深鉢器形をとるが、連結三叉状文となるか、縦位短線文を施文するか不明のものでまとめた。280には赤彩痕が残る。282は小波頂部片、283は波頂部につながる破片と見られる。284～293は口縁部片で、2条から6条までの沈線文が引かれ、4条を境とする細分類が可能とも考えられる。290には赤彩痕を認める。297～300は深鉢の破片で、296、300に連結三叉状文が施文されている。

深鉢 4 A 類 (301・302)

小型品の2例で4類とした。平行沈線文は2条単位で、口縁端の内屈傾向が弱く、外反気味の口辺がそのまま伸びてゆく。302には口縁部内側にも2条の沈線がめぐらされている。なお、平行沈線文の文様帯が口縁、頸部、胴部の三ヶ所に施文する手法が、どのように生起し、器形にいかなる変化を与えているかは、後期後半の編年作業を進めるうえで重要な視点と考えられる（家根祥多氏教示）。

鉢 3 B 類 (303・304)

口縁端部が内屈して、口縁文様帯をつくる器形を持ち連結三叉状文を施文するもの2例が出土している。303は口縁部に3本の粘土紐を貼付し、縄文を施文する。304は縦位の隆帯間に沈線が施文され、連結三叉状文は幅広の太い沈線です。器表には煤が付着している。ともに口縁部分には赤彩が施されている。本群のなかでは縄文施文のものが少なく、位置づけには注意したい。

鉢 4 B 類 (305～323)

三叉状の削り込みやそれに類する施文を持つものをまとめた。口縁部分が内屈気味に立ち上がり、丸底気味の底部にとりつくのが一般的な在り方と見られる。305、306は笹の葉状の区画文をつくり、葉脈状に沈線を加えるもので、切れ目を三叉状にけずり込む手法を持つ。後者には棒状具による刺突が加えられている。308、309は口縁下に三叉状の削り取りがなされ、それに沿う形で沈線が加えられているものである。太目の沈線で三叉状文をつけ、周囲に平行沈線、列点文を付するものが、311～319までと言えよう。赤彩されているものは、306、309、310、315、321～323と多数が上げられる。321は体部に稜線がつけられ、通有の鉢とは異なる器形を持つようだ。

浅鉢 1 B 類 (324～337)

口唇部分を肥厚させ、沈線文、隆帯、縄文で飾る浅鉢。324では口唇と口縁内側に連結三叉状文が施文されているもの。326、328、329、333では隆帯、沈線を起点として、連結三叉状文を施文しているもの、体部、内面へのナデ調整は丁寧になされている。口唇部に赤彩痕が認められるものは多く、325、328、331、333、336が上げられ

る。

第9群土器

深鉢1 A類 (338・339)

338は縄文地文の波頂部に連結三叉状文を施文するもの。「山」の字状三叉状文ではない点に注目しておきたい。器表に煤が付着している。339とともに沈線の引き方が深く鋭くなっている。

深鉢2 A類 (340～343)

玉抱き三叉状文を施文するもので分離した。縄文地文のものと、素文地のものに細別される。340は波頂部片で円形刺突文を中にして三叉状文が施文され、縄文地への磨りけしがなされている。341では内面に幅広く凹線が入れているのが注意される。ともに、三叉状文となる沈線が鋭く引かれ、曲線的な在り方を指向しているのが、第8群土器の沈線文との大きな違いと言えよう。342は山形波状口縁ではなく、内側へひねり込まれた口縁に、ボタン状突起がつけられているもので、口縁内面に凹線が引かれている。

深鉢2 C類 (334・345)

刺突文を間にして三叉状文が向かい合うもので、素文地文とされている。

鉢2 B類 (346～349)

玉抱き三叉状文が施文されているものをまとめたが、器形、文様でさらに細別が可能と考えられる。347は円形沈線文の中心と三叉状文の部分に削りとりが行われているもので、内外面とも入念に石磨が施されている。343内外面ともに刺突文を置いた三叉状文が入れている。348は口唇部がわずかに肥厚し平坦面をつけるもので、第8群土器の鉢類口縁部と異なるものの、文様構成は相通じるものが認められる。円形沈線文の両脇と、文様帯の上下に向かい合う三叉状文が削りとられている。349は円形突起部に刺突を加えるもので、注口土器になる可能性が考えられる。346は口縁部内面に施文するもので、口唇部に1条の沈線が入れている。

深鉢3 A類 (350・351)

351は台形状の山形口縁深鉢で、波頂部に入組三叉状文、内面に三叉状文が施文されている。器表面が荒れているため判然とはしないが、沈線文のあとに斜縄文が施文されているようだ。波頂部内面の三叉状の削り取りを中心にして、波頂部縁に幅広の沈線と、口縁部下に沿う沈線が認められる。波頂部口唇は欠損してはいるが、無文にとどめられているようだ。器表面に煤付着。

第10群土器

深鉢1 A類 (352～363)

外傾する波状口縁を持ち、端部がわずかに内屈するもので、波頂部に沈線文をつけるもので1類とした。波頂部内面に沈線や刺突文、幅広の凹線をつけるものが多い。352、353は山形波状口縁の上半部をそぎ落して、台形状に近い波頂部とするもので、口唇部を肥厚させ平坦面を造作する。波頂部に沿って沈線文を入れ、内面にも1条の沈線を引く。352には単独の三叉状文が、353では列点文が波頂部中央に置かれる。色調は本群土器深鉢で一般的な暗茶褐色を呈し、ほとんどの深鉢には煤の付着が顕著と言える。354は波頂端部が内側にひねり込まれているもので、波状口縁に沿う縄文施文帯がつけられている。内面には波頂に沿う幅広の凹線がつけられている。色調は灰褐色を呈し、風化が著しく進んでいるようだ。355は内湾気味の口縁を持つ深鉢の頸部である。356も頸部片である。357はゆるやかに山形波頂をつくり出し、波頂端部に押圧を加えてひねりを与えている。頸部には沈線の境が判然としないまでに磨き込んで、縄文帯をめぐらす。内面には口縁に沿う弱い凹線、頸部近くには幅広の凹線が引かれる。全体に横ナデ調整を丁寧に行っている。361は波頂部径約25cmをはかるもので、山形波状をそぎ落した波頂部をつける。口唇部は若干肥厚して平坦につくられ沈線を引く。波頂内面に縄文を施文する。波頂

部には縦方向の沈線から派生する沈線で三叉状文をつくり、縄文帯をはさんだ頸部以下の文様部は波頂部文様とは縦方向でずれを生じているが、左端の縄文帯が口縁部と縦に接続するよう観察される。内面には幅広の凹線と押圧文が施文されている。362は同一個体の胴部片で、工字文風の施文をいかに考えるかは大きな問題点である。363は平口縁をなす可能性も認められるもので、列点文と凹線文で施文される。口唇部分に内側へひねりが入れられ、器表面が盛り上がる程強い凹線が内側に入れられている。

深鉢 2 A 類 (364~371)

波状口縁の深鉢で、器表面への施文がないものの、内面に幅広の凹線を引くものをまとめた。364は波頂部端が丸くおさめられ、たけの低い口唇突起が押圧されているもので、台形状波頂部の右端と想定される。365は同様の口縁部で、内面に押圧文が加えられている。366、367は浅鉢器形とも考えられる。368は波頂部内面に三叉状凹線が加えられるもの。

深鉢 1 C 類 (372~389)

胴部破片で深鉢 1 A 類につくと思われるものをまとめたが、文様の全体形がつかめず疑問の残るものも多い。372は頸部から口縁部にかけての破片で、内面に1条の凹線が認められる。沈線文で限られた内部には三叉状文が施文されているものと想定される。373、374は胴部最大径が深鉢の下半近くにつながる本群深鉢の特色を示しているもので、373では縄文地にかこまれた三叉状文と縦位置に置かれた工字文の施文が認められる。375~377は幅広の沈線文で比較的自由的な曲線文をつけるもので、1 A 類との器表面施文の手法との違いが認められ、いくらか疑問が持たれたが、器形的な側面の共通性をもって本類に含めたものである。376では列点文や曲線文を引く工具と幅広の凹線を引く工具が異なるように見られる。沈線の内面には細い筋状の線が認められる。378では区画内に縦線を間にする三叉状文が施文されている。他の破片については判然とはしないが、仮に本類に含めておく。

注口土器 (390~404)

無頸の形をとるのが、本群に含まれる注口土器の特徴的器形であるが、時期的に下るものについてはつかみ切れていないのが現状である。390は口唇部を肥厚させ三叉状文を施文し、体部に縦位置に2類深鉢に施文されている工字文風の文様が入れている。391は口唇部分に突起が付され隆帯がめぐらされているもので、時期的に下る可能性がある。392も口唇部が連続する突起がつけられているもの。393は体部片で、391を除いて赤彩痕が認められる。394~402までの注口土器体部片は、内面の粗い調整痕や胴部の丸味を推定してまとめているが、御経塚式としての特色を上げうるものは、394、396、398、397、402であり、他の破片についてはさらに検討が必要と見られる。394、395、402には赤彩痕が認められる。

鉢 1 B 類 (405~412)

内屈する口縁を持つもの、外傾するものに細別できる。405は赤彩痕をのこすもので、内外面とも入念な磨きが入れている。器表に三叉状文の沈刻が認められる。406、409~411では単独の三叉状文が施文されているもの。407~409には赤彩痕が認められる。

蓋型土器 (413~416)

いずれも赤彩痕が見られるもので、413は大型品のつまみ部分である。器表面にはアトランダムを引かれる三叉文があるようだ。縄文は無節のものである。縄文帯を除いて研磨が施されている。414は沈線による円を並列させ両脇に三叉状文を施文するもの。415はT字形三叉状文と弧線文を組み合わせたもので、規則性に欠除しているものと見られる。器面全体にゆがみが生じている。416は沈線ではさまれた縄文帯で区画をつくり、区画内に三叉状文を施文するものようだ。内外面とも入念に研磨が施されている。

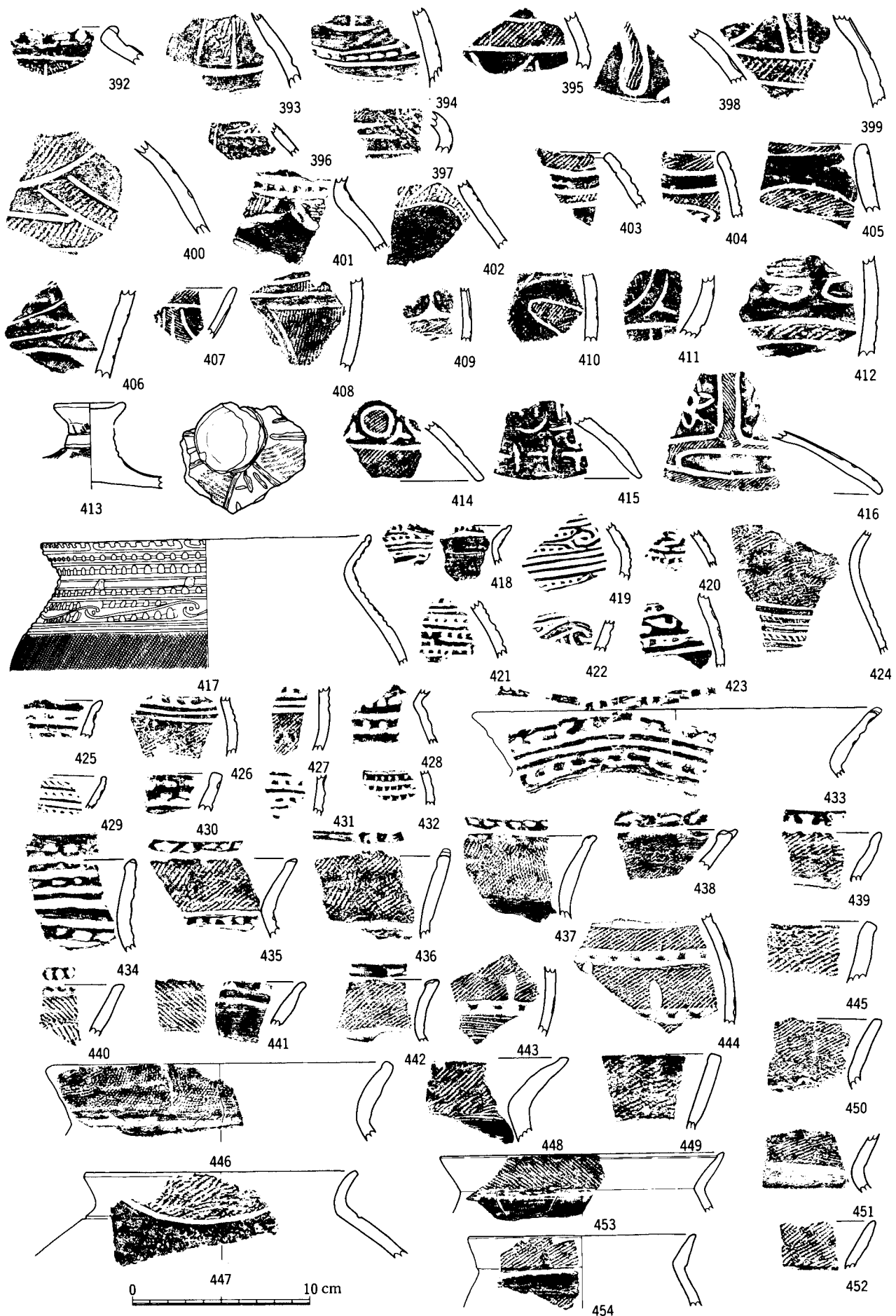
第 11 群土器

深鉢 1 B 類 (417)

列点文と沈線を細かく施文し、さらに器表と沈線文の境に磨きを施し、浮彫的な構成となるもので、大洞 B C



第40図 縄文土器拓影(7) (352~391) (1/3)



第41图 繩文土器拓影(8)(392~454) (1/3)

式期に対比できる土器群である。北陸の中屋式期に併行するものである。417は口径約18.6cm、現器高7cmをはかるもので、頸部に小突起をつけるもので口縁文様帯と頸部文様帯とに分け、沈線文で胴部縄文部と分けている。口縁内面端部には沈線文1条が引かれている。頸部文様帯には所謂入組羊歯状文が細長く施文され、口頸部突起と単位をともにするようだ。内面全体は入念に磨きがかけられている。色調は茶褐色から黒褐色を呈し、胎土は精選され、焼成も良好である。

小型土器 1 B類 (418~420)

羊歯状文を施文すると推定できるものでまとめたが、小型品で占められている。418はミニチュア土器と見られるが、口縁内面に1条の沈線を入れ、施文手法も深鉢と変わらない。419、420には赤彩が認められる。

深鉢 2 C類 (424)

列点文と沈線を引くもので2類としたが、さらに別の文様が加えられているかもしれない。黒褐色を呈し、頸部には無節の縄文が施文されている。

小型土器 2 B類 (425~432)

口縁が外傾する「く」の字状口縁を呈するものと考えられる。425ではB字状突起が口唇部に付されている。432、429には赤彩痕が認められる。いずれの土器も内面は入念に研磨が施されている。

深鉢 2 B類 (433・434)

口径約23cmをはかる「く」の字状に外傾する口縁部片である。口唇には等間隔にB字状突起をつける。列点や沈線文には細い条線が認められる。色調は明るい褐色を呈し、焼成は良好。

第12群土器

深鉢 1 B類 (435~444)

外傾する口縁部に細かいよりの縄文を施文するタイプで、口唇にB字状突起や切り込みを入れるものをまとめた。頸部以下には研磨調整を施した無文帯が置かれ、入組三叉状文が施文されるのが通例で、大洞BC式期に併行する中屋式土器深鉢の指標となるものである。435は口唇部分がわずかに肥厚し、平面三角形の切り込みを施すもので、439、441でも同様の手法がとられている。それらのなかで、439は切り込みが2個1対の突起をなし、B字状突起に近い形をなしているのが注意される。436は肥厚する口唇部分にB字状突起が貼付されている。437、440では列点文となっている。438の口唇部は突起の上から棒状工具で引きずり三叉状をなしているのが注目される。442でも同様に突起の両脇に三叉状の刺突が残る。442の胴部片、443、444で使用されている原体が判然とせず注意しておきたい。

深鉢 2 B類 (445~452)

「く」の字状口縁の深鉢で、口唇に突起をつけないものをまとめた。446は口径約19.5cmをはかるもので、口縁端部が肥厚し内面に段をつくり出す。449、453でも同様の手法が見られる。453は口径16cm、454は口径約13cmの中型品で、頸部に研磨無文帯がおかれ、胴部文様帯を浮き上がるようにして、やはり、入組三叉状文ともなう特徴的な手法である。453の口縁部には赤彩の痕跡が認められる。450には結節縄文が認められ、大洞BC式期の特色ある縄文として注意しておきたい。447は口径約15.5cmをはかり、口縁部と肩部の境に通常引かれる沈線が、肩部側に寄りついている。肩部には横方向のナデが入れられている。茶褐色を呈し、本類のいずれの土器も精選された胎土を使用しているのに、砂粒が多く良くないと言える。

深鉢 3 B類 (455)

外傾する口縁部に入組三叉状文を施文するもの。

深鉢 1 C類 (456~471)

外傾する口縁を持つ深鉢の胴部片をまとめた。分類の基準として入組三叉状文を持つものや頸部に無文帯をつくり出すものである。しかし、胴部破片であるところから鉢型土器に含むべきものが若干数推定される。456、457

は大型品で、457は胴部最大径約31cmを測る。E 105グリッドで検出された埋甕で、ピットのなかには口縁部、底部を欠損したかたちで埋められていた。458は胴部文様帯に幅広の凹線が入組三叉状文を施文するものであるが、掘り込みが弱く文様が判りにくい。内外面ともに炭化物が付着している。460は頸部近くの破片である。三叉状文の掘り込みが弱く、また、施文具の幅の広いものが使われる傾向にあり、拓影でようやくそれと判別できるものが多いと言える。

蓋型土器 (473~490)

入組三叉状文および細いよりの縄文を施文し、暗褐色に研磨を施したもので蓋型器形が想定できるものをまとめた。489を除いた全てに赤彩痕が認められる。施文されている入組三叉状文は深鉢器形に施文されているそれと同様に、浅目の沈線で施文されているために判然としているものはないと言える。473は口径約17.6cmをはかるもので、三叉状文や沈線を施文している工具に細い条線が認められ注意しておきたい。内外面とも入念に研磨され黒褐色を呈する。474は三叉状文に削りとりを行っているもの。475は口径11.2cm、器高3.7cmをはかるもので、三叉状文は例の如くに読みとりにくい。つまみ部は平面楕円形で中央部分をえぐり取り去るものである。穿孔は焼成後になされたものである。488、490はつまみ部破片であるが、突帯部分に沈線が入れられ、下野式期の眼鏡状隆帯のようにも受け取れる。489では隆帯には上位置から三角形の削り取りが行われている。内面は486、476、489を除いて入念に行われている。487は碗器形とした方が適切かもしれない。

特殊土器 (491・492)

突起をつけ、器面に窓をつける土器である。時期的にも本群とは別個であるかもしれない。492は台形状の胴部片で両側面が窓となるもので、同一個体片であろう。赤彩が施されている。

鉢型土器 (493~516)

ミニチュア土器、浅鉢土器を含めて鉢型土器としてまとめた。493は大きく外反する口縁部を持ち、口唇部が内側にわずかに肥厚するもので、495、499でも認められる特徴である。494は口唇部分に三角形のえぐりを施すもの。497は頸部に列点文を入れるもの。504からは胴部片で入組三叉状文が目立ち、赤彩されているものが多い。513は結節縄文が施文されているもの。514はサンゴ状装飾が貼付されているもの。515、516は丸底となる小鉢で、516の胴部最大径は約13cmをはかる。

深鉢4B類 (517)

小型品である。頸部に無文帯と列点文をつけるもので、中屋式のなかで後出的な位置づけが可能と見ている。

浅鉢 (518~521)

無文のもので全体が丁寧に研磨されたもので1類を設けた。520は黒褐色に研磨されたもので、内屈する口縁端をつけるもの。521は皿状を呈するものの底部片と見ている。518は口径約24.5cmをはかるもので、内外面とも入念に研磨されている。器表面には煤が付着している。

第13群土器

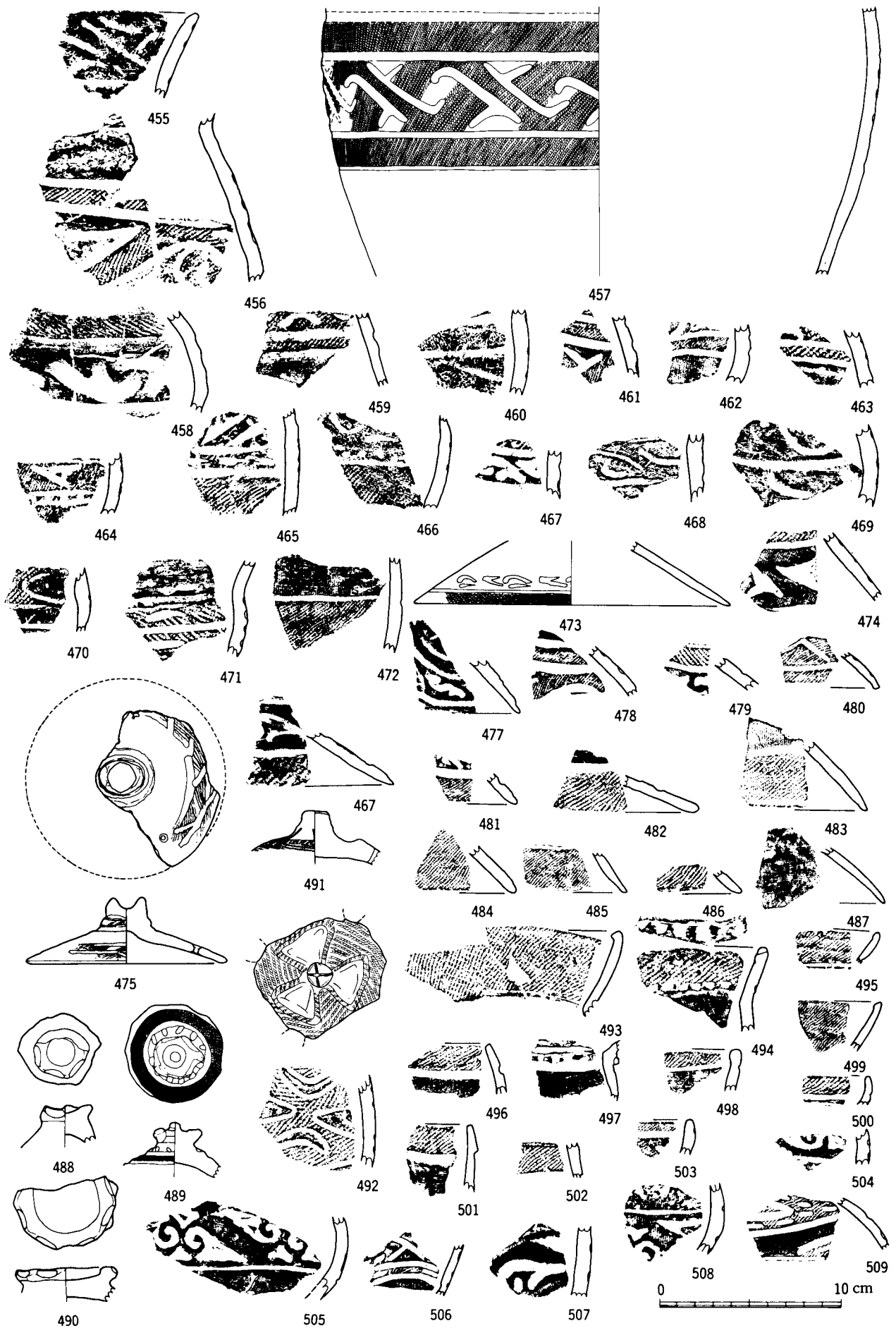
深鉢1B類 (522)

外傾気味に立ち上がる口縁部に、鍵の手文を施文するもので、縄文で加飾する。口唇にB字状突起が付され、内面に1条の凹線がめぐらされる。頸部以下および内面は丁寧にヘラ研磨が施されている。口径約21.4cmで、器表に煤が付着している。

深鉢2B類 (523~528)

外反傾向の口縁部で、平行沈線文と縄文帯を施文するものをまとめた。口縁端を欠いているものばかりであるが、平口縁をなすものと予想している。528は口縁部に弧線による文様があるが判然とはしない。内外面とも入念なナデが入れられ、茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好で、530と同様の仕上がりを示している。

深鉢3B類 (529)



第 42 図 縄文土器拓影(9)(455~509) (1/3)



第 43 図 縄文土器拓影(10) (510~565) (1/3)

大型土器である。口唇部に間隔をもって突起を付し、内側から三角形の突起を付す。内面には彫の深い沈線が1条めぐらされている。器表は斜め方向のナデ調整が粗く施され、赤彩されている。内面の調整は入念である。

壺 1 B類 (530)

頸部には縦方向の磨きを加えられ、全体の調整は入念である。茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。

壺 2 A類 (531)

小さな波頂2個がつながる台形状を呈する波状口縁を呈する。酒見式期のものである。

壺 2 B類 (532~535)

外傾してのびる口辺部に沈線で区画した縄文施文口縁がつけられるもの。533~535には煤が付着している。壺 2 A・B類は後期の酒見式期につくものと判断され、本群から削除しておきたい。

深鉢 1 C類 (536~548)

深鉢の胴部片で鍵の手状文および工字状文を施文するもので1 C類とした。鍵の手状文と見られるものに539、543、545、546、547が上げられる。545は施文が細かい点から他の器形をとるものとも考えられる。

注口土器 (549~551)

549、550は赤彩された頸部片である。鉢器形となる可能性も考えられる。551はT字状三叉状文を入り組ませて施文するもので、内面のナデ調整が文様帯と異なる方向を示しているところから判断した。

深鉢 2 C類 (552~554)

胴部最大径にあたる破片で、平行沈線で区切られた横位縄文帯である。554には赤彩痕が残る。

蓋 (555~559)

鍵の手文を施文するもので、全てに赤彩痕が認められる。列点文との共存が多くなる。

浅鉢 (560~563)

口唇部が肥厚し、幅の比較的広い沈線が1条だけ引かれているもの。560、563の器表には炭化物の付着が認められる。

鉢 1 B類 (564・565)

口唇が外側へ肥厚し、沈線と列点が施文されている。内外面に赤彩の痕跡が認められる。565は口唇に突起が付されているもので、器表の平行沈線文の間には、縄文施文ではなく、細い工具で引っかいた様になっているのが注意される。器表には赤彩がなされ、内面には樹脂状を呈する黒褐色のものが付着している。

鉢 2 B類 (566)

口唇部でわずかに肥厚し、沈線を引いた後にボタン状の突起を貼付してゆく。器表面の沈線は同じ圧で引かれたものではなく、口縁側により大きな力が入れている。内外面とも研磨調整が丁寧に行われている。赤彩が施され、炭化物の付着が見られる。

鉢 3 C類 (567)

赤彩された鉢で、頸部以下の施文文様がつかめず本群に含めた。胴径約21cmをはかる。

鉢 4 C類 (568・569)

雲形文に近い浮彫手法をとるものが2例存する。568は底部近くの胴部片で彫込みの浅いものである。器表に煤が付着している。569は赤彩された破片であるが、曲線的な浮彫手法をよく示している。胎土には微砂粒が均質に混和していて、移入品と想定できる。

小型土器 (570・571)

外反する口縁をつけ、頸部以下に鍵の手状文を施文するもの。571は口唇に刺突が加わるもの。

鉢 5 B類 (572・573)

内外面ともに沈線文を引きめぐらすもの。572は赤彩されている。

第 14 群土器

列点文と沈線文が施文されるものであるが、口縁の状態がつかめず、指標とすべき特色を見い出せないところから 1 群としてまとめた。晩期の中屋式新段階から列点文が多用され、下野式期の粗製深鉢にまで継続している事を考慮すれば、晩期後半段階に位置づけて大過ないものと思われる。なお、さらに推定を加えるならば、文様帯に縄文が併用されている類は、中屋式期の範疇に含める事も可能と考えられる。

深鉢 1 C 類 (574~579)

574 の施文順序を見ると縄文、沈線、列点文の手順が読みとれる。沈線の溝底には細い条線が走る。575、576 は連続して刺突したもので、他の 3 点は短い沈線を引いているもの。

深鉢 2 C 類 (580~597)

580 は口頸部片、無文帯で文様部を浮かび上がらせる手法をとり、中屋式と推定できる。581 は赤彩痕の見られるもの。582、583 は頸部に近い破片で、583~585 は同一個体である。刺突文は細い工具を使い、深く突かされている。文様帯をつなぐように弧線文が引かれている。色調は黒褐色から茶褐色を呈し、器表面は平滑にナデられている。594 は赤彩されたもので、沈線の溝底に細い条線が認められる。596、597 は頸部片で、とぎれる沈線文が引かれるもの。注口土器とも考えられる。

蓋 (598、599)

沈線文と列点文で施文されるもの 2 例がある。

深鉢 3 C 類 (600、601)

600 は細めの平行沈線文が引かれているもので、平板な破片となっているところから器形的にも判断がむずかしい。

第 15 群土器

鉢 1 C 類 (602)

足が湾曲する大きな T 字形沈線が施文されている。左端から引きはじめ右で止めたあと、左へもどして湾曲部分を引き下す。体部は平滑に磨かれ、赤彩され、上半部分は何によったかは不明であるが黒味を帯びた銀色にひかって見える。608、637 にも同様の器表面が認められ、本群土器のひとつの特徴として上げる事ができる。

鉢 2 B 類 (603~609)

外傾して立ち上がる体部に内屈しない直立気味の口縁がつき、口縁端部が外方へわずかに伸びて突帯を形成する。口縁部分は素文でおさめられ、体部との境に置かれた小突起を結ぶ沈線が引かれ、眼鏡状突帯と呼ばれるものを造る。体部は沈線文で飾られるものが多く、縄文が施文されるのはわずかである。603 は口唇に突起がつき、体部に縄文が施文されている。器表に煤が見られる。605~607 は同一個体片であるが接合できなかったもの。608 は口径約 21 cm、現器高 7 cm をはかる。列点文間に意図不明の沈線が細く引かれている。609 は突起部分を置かないで体部との境界に沈線を引いている。

鉢 3 C 類 (611)

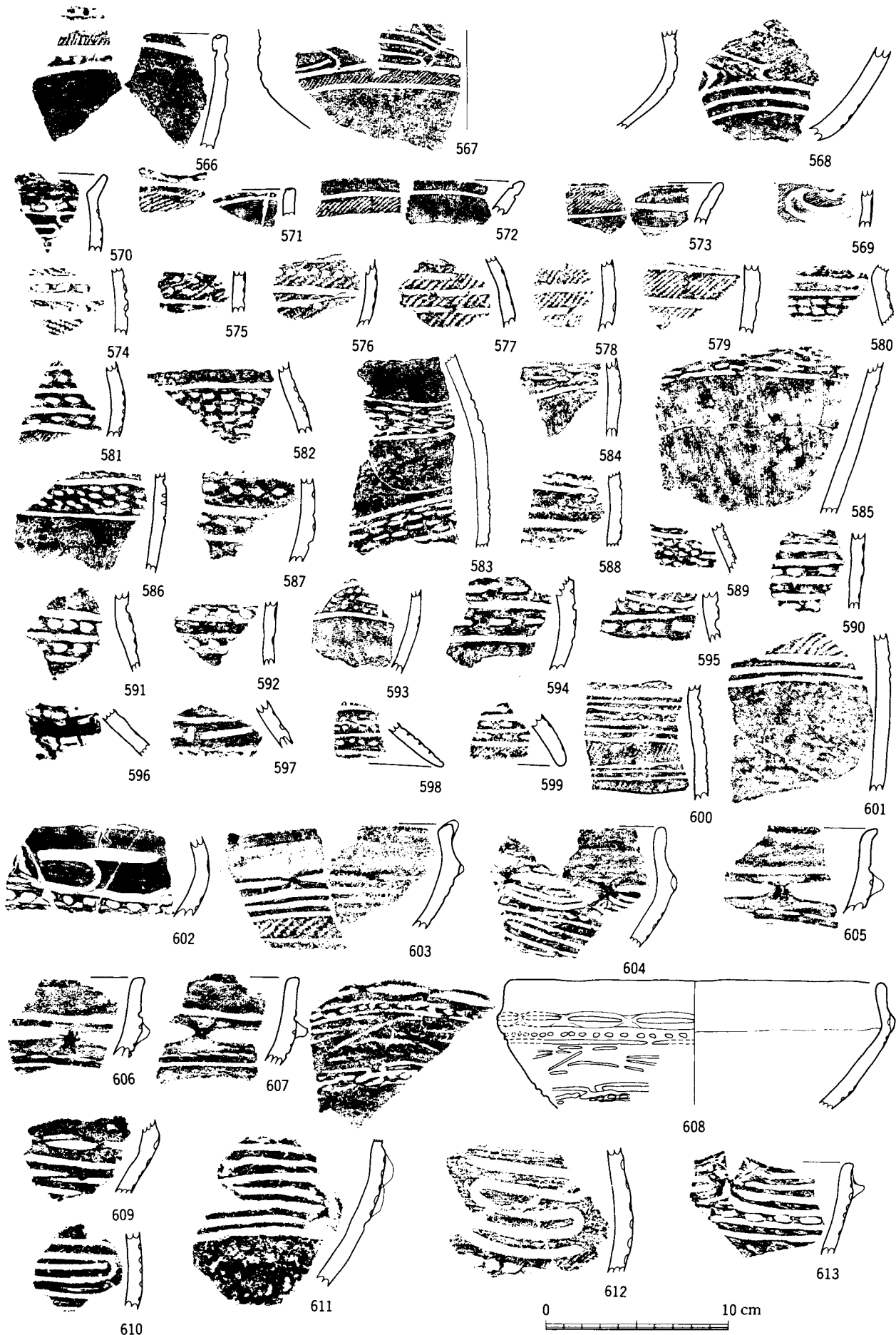
611 は沈線を引くことによって浮かび上がった隆線の丸いコーナーに突起を付しているもの。内外面とも器表が荒れている。濁黄褐色を呈し、胎土は精良である。器表に煤付着。

鉢 4 C 類 (610)

沈線で区画文をつけるもの。器表に煤付着。

深鉢 1 C 類 (612)

粗製土器で胎土には砂粒が多く、器表は著しく荒れている。列点にはさまれた文様帯に蛇行文を大きく施文している。



第 44 図 縄文土器拓影(1)(566~613) (1/3)



第 45 図 縄文土器拓影(12) (614~644) (1/3)

鉢 5 B 類 (613)

口縁端に寄って突起が付され、それを起点とする沈線文が引かれている。溝底には細い条線が認められる。赤彩が施され、明るい茶褐色を呈し、焼成は良い。

鉢 6 A 類 (614～617)

山形の小波頂をつけ、器表には口縁端に突起を貼付する。口唇部は全体に角張る幅広の沈線が引かれている。器表には煤が付着し、色調は茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。615 は外反する口縁部に山形波頂を連ねるもので、口縁に沿う隆帯と水平に貼付された隆帯で三角形の区画が波頂部分につくり出される。波頂部間には沈線が引かれる。器表には煤が付着し黒色を呈し、内面は暗褐色を呈している。胎土、焼成とも 614 とは大きな違いが認められる。616 は突起をつけて沈線を引いてつなぐ。突帯は断面が角張る粗い調整をうかがわせる。617 は赤彩痕が残る。

鉢 7 C 類 (618)

鉢 2 B 類と同じ形で眼鏡状突起をつけ、平行沈線文を施文するもの。2 B 類の退化形と見られる。

鉢 8 B 類 (619)

口縁端に沿って突帯を貼付するもの。

鉢 9 B 類 (620)

口縁端に沿う突帯に連続して押圧を加えるもの。器表に炭化物が付着している。

鉢 10 C 類 (621・622)

無文地上に突帯を貼付し、刻みを入れてゆくもので、622 は外反口縁を持つものと判断される。

鉢 11 B 類 (623～625)

外反するものから内屈するタイプまでまとめてしまったが、無文地に点列文を施文するもの。

鉢 12 B 類 (626～634)

外反する口縁部に 2 条から 5 条の平行沈線文をめぐらすものをまとめた。口唇の断面で見ると口唇が外側へ伸びる傾向を持ち平坦面を造り出すものと、そうでないものに大別されるようだ。631 の溝底には条線が認められる。632 は口唇上に突起を貼付し、沈線を加えているもので、内面に 1 条の沈線が引かれている。口縁端に焼成前の穿孔が施されている。627～629 は同一個体片で、626、632 と共に赤彩が施されている。

鉢 12 A 類 (635～637)

山形の小波状口縁を呈するもので、635 は口縁端に鉢 2 類に施文されている眼鏡状隆帯に近い施文を行っている。636 は波頂口唇に沈線が加えられているもの。

鉢 13 B 類 (638)

内外面ともに平行沈線文が引かれているもの。

鉢 14 B 類 (642)

外傾しながら直立する口縁をつける単純な器形を持ち、口縁部分に沈線文と列点文で簡略な施文をする粗製土器である。溝底には細い条線が 640 を除いてははっきりと確認できる。

壺 1 B 類 (643・644)

2 例の出土があった。長胴型の胴部に判然としない肩部がつき、頸部でゆるくくびれて口縁に立ち上がる。口縁端は肥厚し、口唇を平坦におさめる。頸部から上は無文、肩部から縦位の条痕調整をおこなう。内面には横方向のナデ調整が入れられる。643 は口径 15.5 cm、644 は 17.5 cm、胴部最大径 30.6 cm、現器高 39.5 cm をはかる。

第 16 群土器

縄文を施文する粗製深鉢土器で第 16 群とした。時期的にも大きな幅を持つと想定されるが、本遺跡出土土器と

しては少数と言える。

深鉢 1 A 類 (645)

直立気味に立ち上がり口唇に縄文を施文し、波頂部分口唇に刻み目を入れるもので、縦位置に縄文が入れられている。

深鉢 1 B 類 a (646)

縦位置の縄文が施文されるもので、口唇部をまるく調整するもの。

深鉢 1 B 類 b (647・648)

縦位置に縄文が施文され、口縁端に横ナデ、口唇に押圧文が加えられているもの。

深鉢 1 B 類 c (650)

鉢器形となるのかもしれない。口唇に縄文が施文されるもので、内面の研磨は平滑に仕上げられている。

深鉢 2 B 類 a (651~653)

斜行縄文を施文するもので、口唇部分が平坦に調整されているもの。LRのもので占められる。

深鉢 2 B 類 b (654~659)

斜行縄文を施文するもので、口縁端部の内側に尖り気味に口唇部分が調整されるもの。

深鉢 2 B 類 c (661~666)

口唇部分に縄文が施文されるもの。

深鉢 2 B 類 (667)

口唇部に縄文が施され、口縁内面から押圧を加えるもの。

深鉢 4 B 類 (668)

外反する口縁部を持つもの。

鉢 1 B 類 (669)

鉢 2 B 類 (670・671)

単節の縄文を施文するもので、口唇部にも縄文を入れるもの。

深鉢 5 C 類 (672~674)

672 は頸部がくびれる深鉢で、結節縄文をつける所から中屋式期の所産と見られる。674 には燃糸文が見られる。

深鉢 6 B 類 (675)

口径 15.8 cm をはかるもので、ゆるく外反する口縁部内面に段をつくり、頸部に平行沈線文と列点文を施文する。口唇部内面に列点文を加える。

第 17 群土器

条痕調整を口縁、胴部に施すもので第 17 群土器とした。口縁が外反するものや直立する深鉢を条痕調整の方向と口唇部分への加飾をもとにして細分した。

深鉢 1 B 類 (676~702)

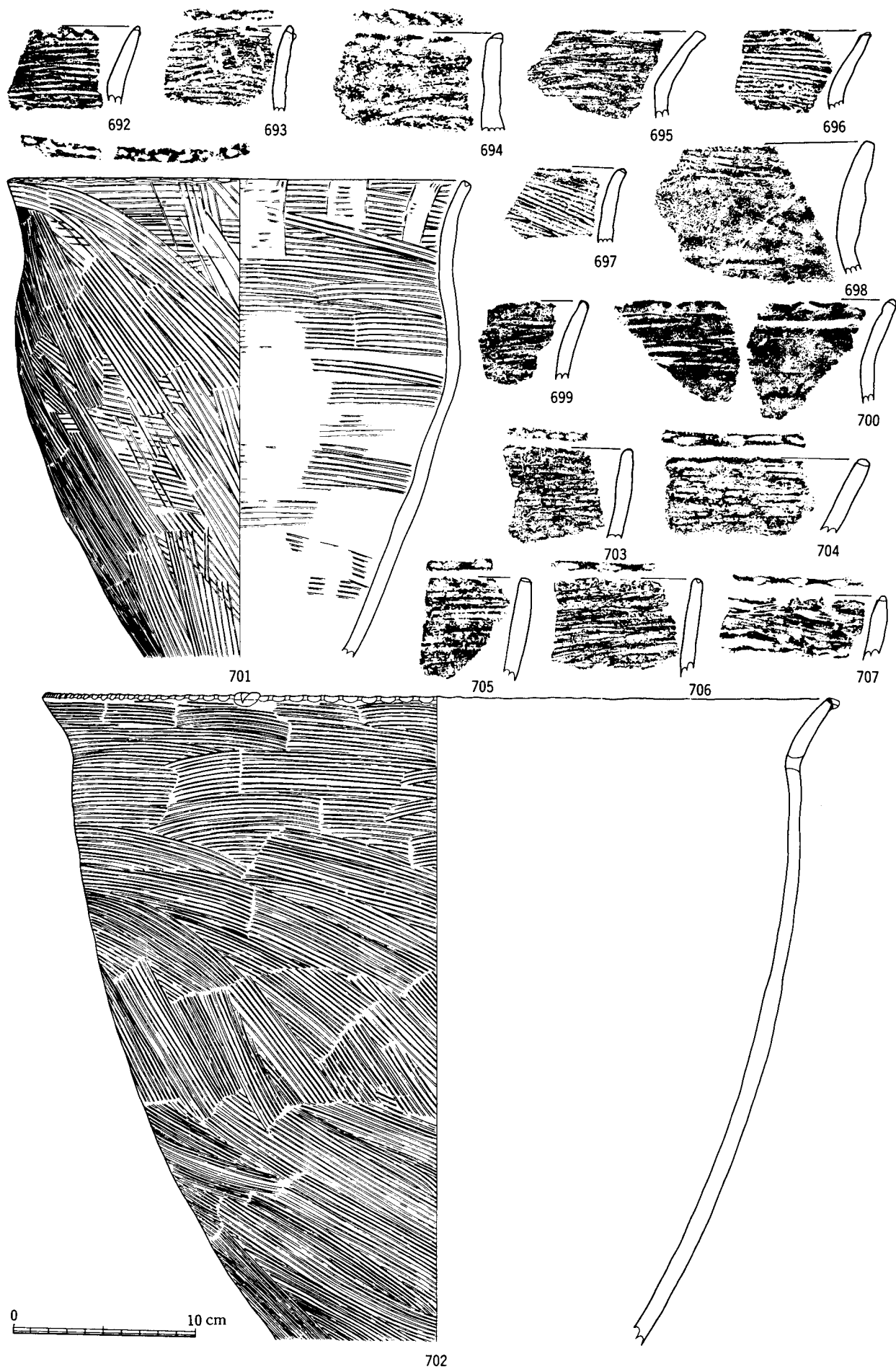
横方向の条痕調整を行うもので、外反する口縁を持ち、口唇部分に列点文をつけるもので 1 類とした。外反が強く、内面で判然と稜ができる例 (678、679) は少数例で、わずかにくびれ部分が判別できるようになる例が多い。676 は口唇に切り込み、679 は押圧が入れている。680 は内面に横ナデ調整が、681 では頸部以下に条痕調整がなされている。701 と 702 は底部を欠いているが復元できた例である。D 107 グリッドの 2 個併立して埋められていたものである。701 は口径 24.5 cm、現器高 26 cm、702 は口径 43 cm、現器高 35 cm をはかる。702 では口唇に B 字状突起をつけ、間を押圧文でつなぐようだ。頸部に 2 個の補修孔があげられている。

深鉢 2 B 類 (703~722)

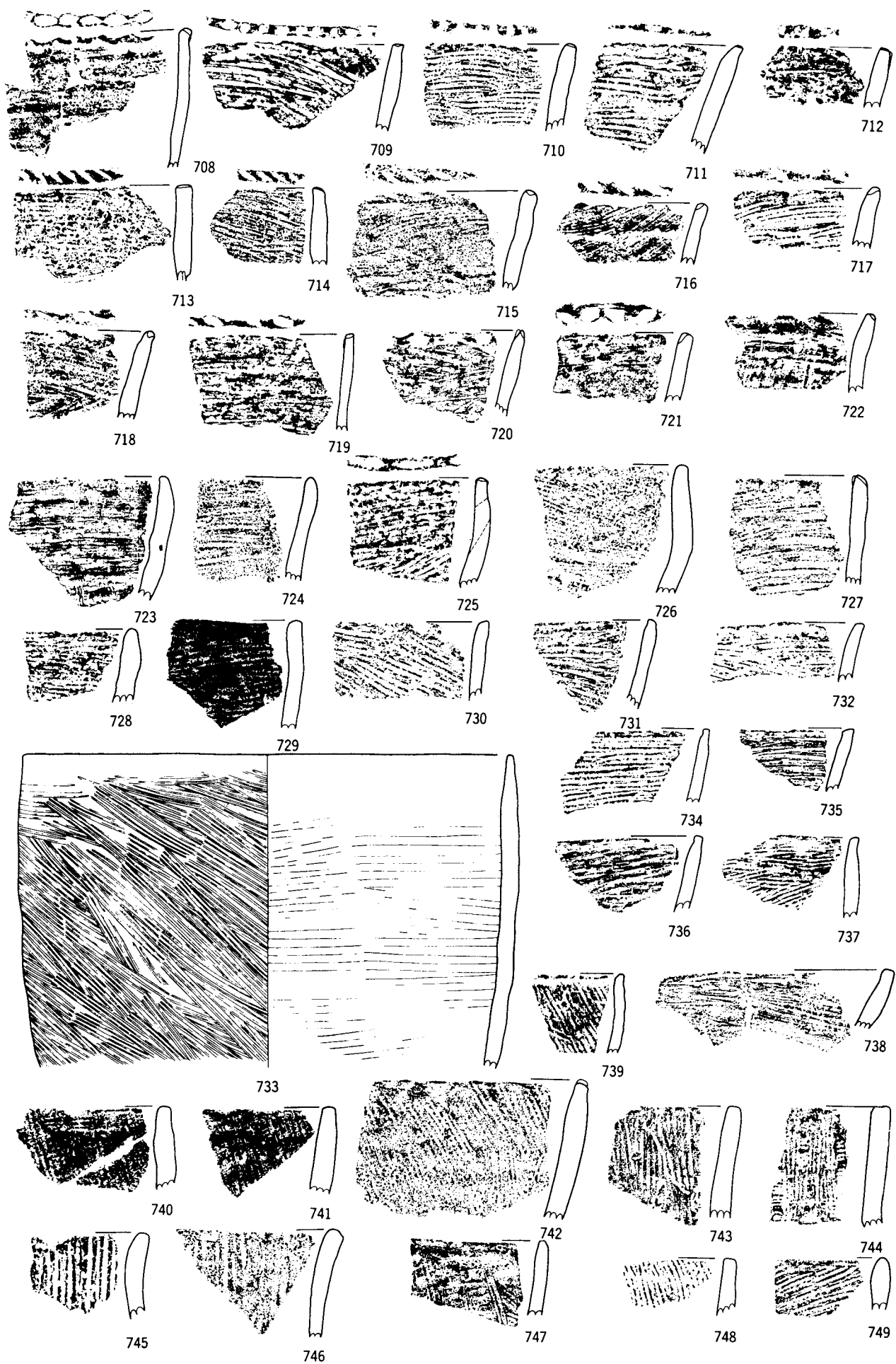
直立ないし外傾気味に立ち上がる口縁をつけるもので、口唇部へ列点を加えるものが多い。703~707 は口唇部



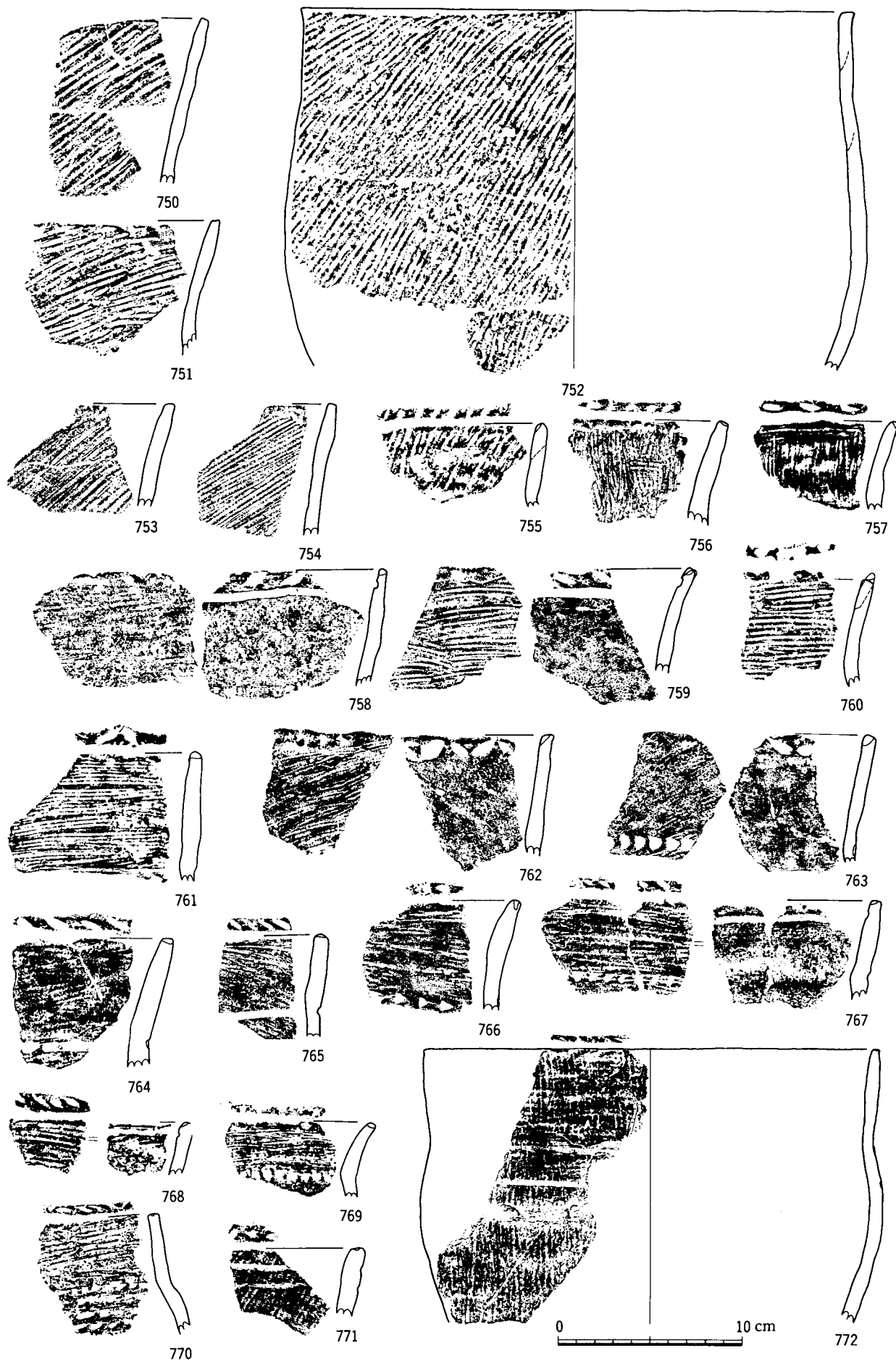
第46図 縄文土器拓影(13) (645~691) (1/3)



第 47 図 縄文土器拓影(14)(692~707) (1/3)



第 48 図 縄文土器拓影(Ⅱ)(708~749) (1/3)



第 49 図 縄文土器拓影(6) (750~772) (1/3)

分の流れに平行する形で列点を加えるもの。709～712は刻みに近いかたちで列点をならべるもの、713～719は口唇に対して斜め方向から列点を加えるもの、720～722は口唇に対して斜め上から押圧を加えるものに細別される。

深鉢 3 B類 (723～725)

口縁部分が内屈気味に立ち上がるもの。

深鉢 4 B類 (726～738)

外傾ないし直立する口縁の端部を平坦にならしてととのえるタイプである。735には赤彩痕が認められ、他の器形をとるのかもしれない。733は口径27.4cmをはかるもので、口縁端部が薄くととのえられナデ調整が入れられている。胴部では条痕調整は斜め方向となっている。738は鉢である。

深鉢 5 B類 (740～748)

条痕調整が縦位位置となっているものをまとめた。740～742は同一個体片である。厚く煤が付着している。

深鉢 6 B類 (749～754)

条痕調整が斜位にのこるもので6類とした。口縁部が外反するものに751が上げられる。752は口径30cmをはかるもので、口縁部の立ち上がりが内傾して直立している。

深鉢 7 B類 (755～757)

外反する口縁に縦位の条痕が見られ、口唇に列点文をおくものをまとめた。

深鉢 8 B類 (758、759)

外傾する口縁部を持ち、口縁内面に列点文と沈線文を入れるもの。

深鉢 9 B類 (760)

外傾する口縁部を持ち、口唇にB字状突起を貼付するもの。1例の出土だけである。

深鉢 10 B類 (761～769)

外傾する口縁部を持ち、頸部に押引列点文、沈線文を引くものをまとめた。口唇部に列点文や口縁端部内面に「ハ」の字状列点文、沈線文を置くなどのバラエティが見られる。

壺 (770)

直立する口縁部をつけ、肩部に4条の列点文を平行させて施文するもので、やはり煤が付着している。

深鉢 11 B類 (771、772)

縦位の条痕調整を施し、平行沈線は口縁部および頸部に弱い調子で引くもの。722は口径25cm、現器高15cmをはかる。

深鉢 10 C類 (773～808)

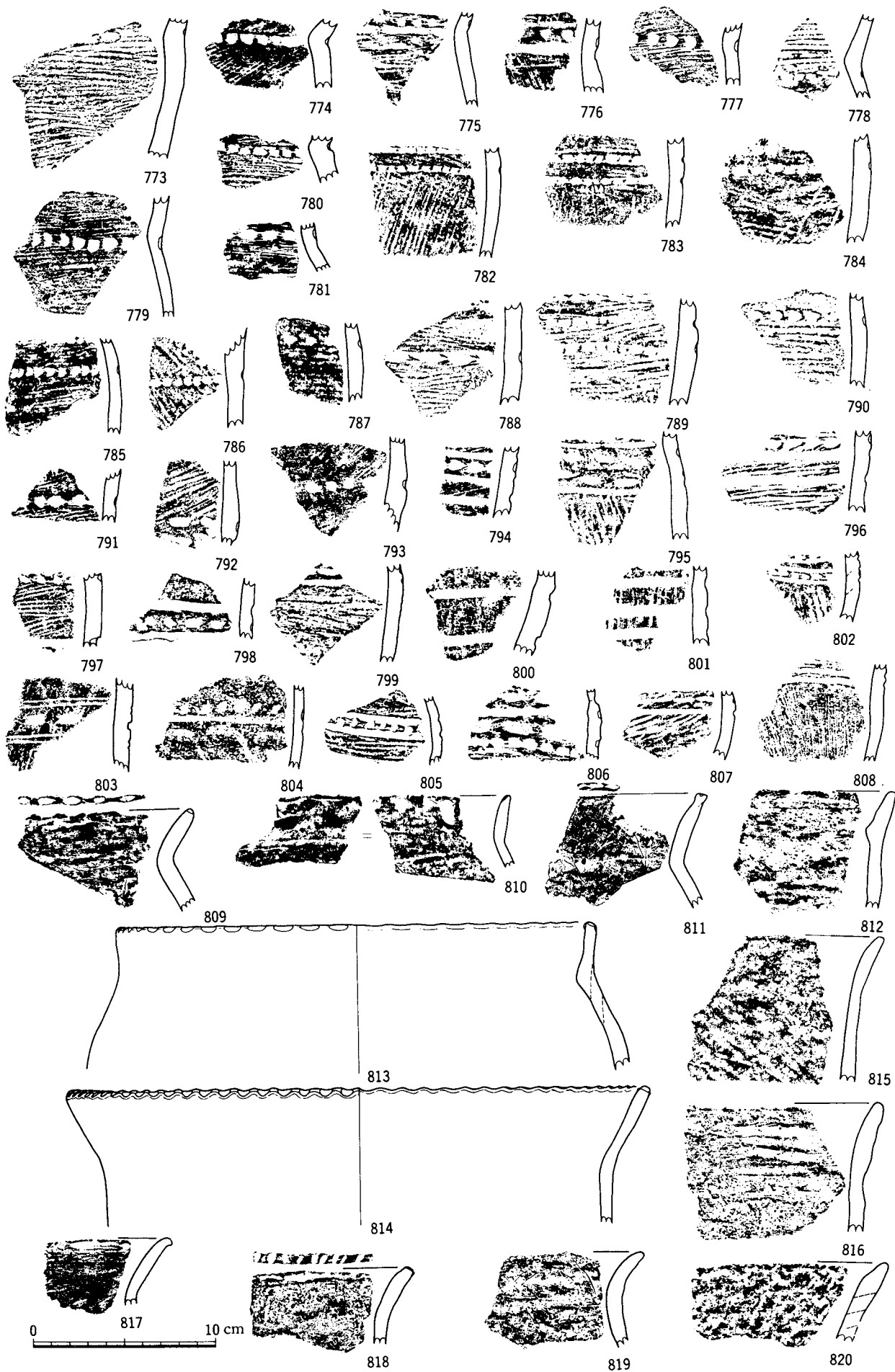
頸部および胴部に列点文、平行沈線文を施文する胴部片をまとめた。774、780は沈線内に列点文を同時に施文するもの。778は列点文下の胴部に研磨する無文帯があるところから、中屋式期に所属するものであろう。782から808までは胴部の破片である。782は列点文をはさんだ上下の条痕調整の方向が違っているのが注意される。802、805、808は小型土器片と見られる。沈線、列点の溝底に、草本茎の条線が認められるものでは、801、803が上げられ、縦位の条痕調整が見られるのは注意しておきたい。

第18群土器

無文でナデ調整が施されているもので1群とした。深鉢、鉢器形と見られ、口縁形状によって類別を行った。拓本と断面図だけである為、器形の状態が充分にとらえきれていない。

深鉢 1 B類 (809～814)

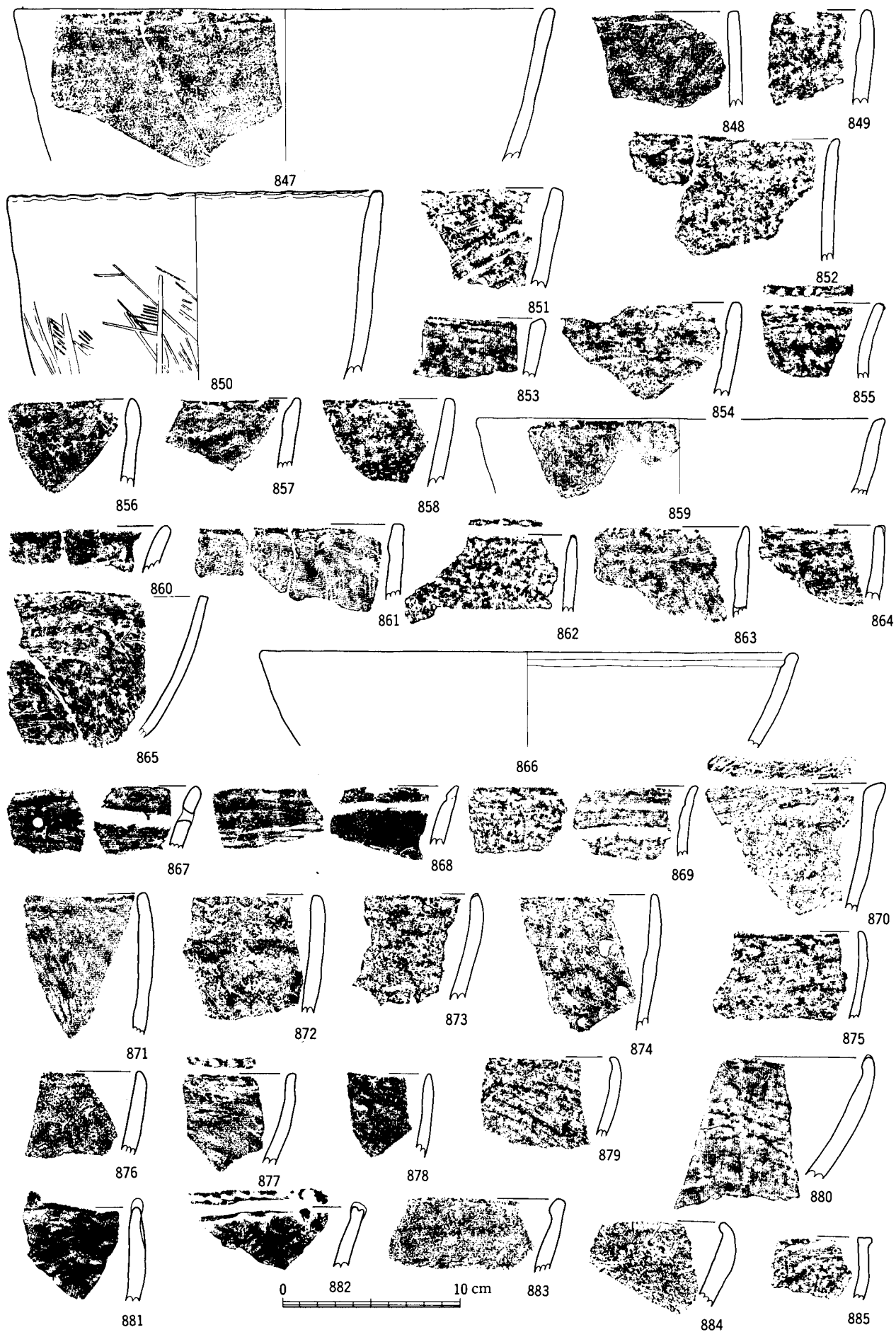
「く」の字に外折する口縁を持つもので、数量的には少数である。809、811は口唇部に刺突文が、810、813では口唇部分に押圧が施されるもの。811の外周は平滑に磨かれている。



第 50 図 縄文土器拓影(773~820) (1/3)



第 51 図 縄文土器拓影(18(821~846) (1/3)



第 52 図 縄文土器拓影(19) (847~885) (1/3)

深鉢 2 B 類 (815～829)

口縁端部が外展するが、1 類のように内面に稜は形成されず、ゆるやかに屈曲するタイプ。

深鉢 3 B 類 (830～854)

口縁部が直立ないしはゆるく外傾気味に立ち上がるタイプ。830 では口唇部分に押圧が、832～833 には口唇部分に内側から三角形の切り込みが入れられている。837、838 は口径 32.4～35.8 cm をはかるもので、口唇部分が平坦にナデ調整されている。845 は補修孔が見られる。847 は口径 30.4 cm をはかるもので、口唇は丸くおさめられ、内外面とも横ナデ調整が加えられている。850 は口径 21 cm をはかるもので、口縁部分が横ナデ、胴部に縦の調整が粗く入れられている。内面への調整も荒い。

鉢 1 類 (855～865)

口径が小振りで、立ち上がりが外傾気味のを想定して鉢器形とした。859 は口径 22.8 cm をはかるもので、内外面とも入念なナデ調整が加えられている。865 は皿器形となるかもしれないもので、口唇が平坦にナデられ、薄い器壁を持っている。内外面とも細い条痕が認められ、器表には煤が付着している。

鉢 2 類 (866～869)

口縁部内面に凹線をつけるものでまとめた。866 は口径約 38 cm をはかるもので、内外面ともに軽くナデ調整が入れられている。867 には凹線のなかに補修孔があげられている。

鉢 3 類 (870)

口唇部分を外側に大きく肥厚させ、縄文を施文するもの。

鉢 4 類 (871～879・881)

口縁部分が内屈するタイプで、中型と小型品がある。879 は小型品で口唇端が内側にせり出すもの。881 は口唇に突起をつけるもので、内外面とも入念に磨かれている。

鉢 5 類 (882)

口唇に B 字状突起をつけ、連続刺突文を付すもの。

鉢 6 類 (880・883・884)

口縁端部の内面に段があり、玉縁状を呈するもの。880 は内外面とも入念に研磨されている。

鉢 7 類 (885)

小型土品で、口唇部が内外面にせり出すタイプ。

鉢 8 類 (886～890)

外反する口縁部をつける小型土器をまとめた。886 は 2 個の小波状を見るもので、口径 15 cm をはかる。内外面ともに丁寧に磨かれ、外周には煤が付着している。890 は口径 19.5 cm をはかり、器高 21.8 cm をはかる。

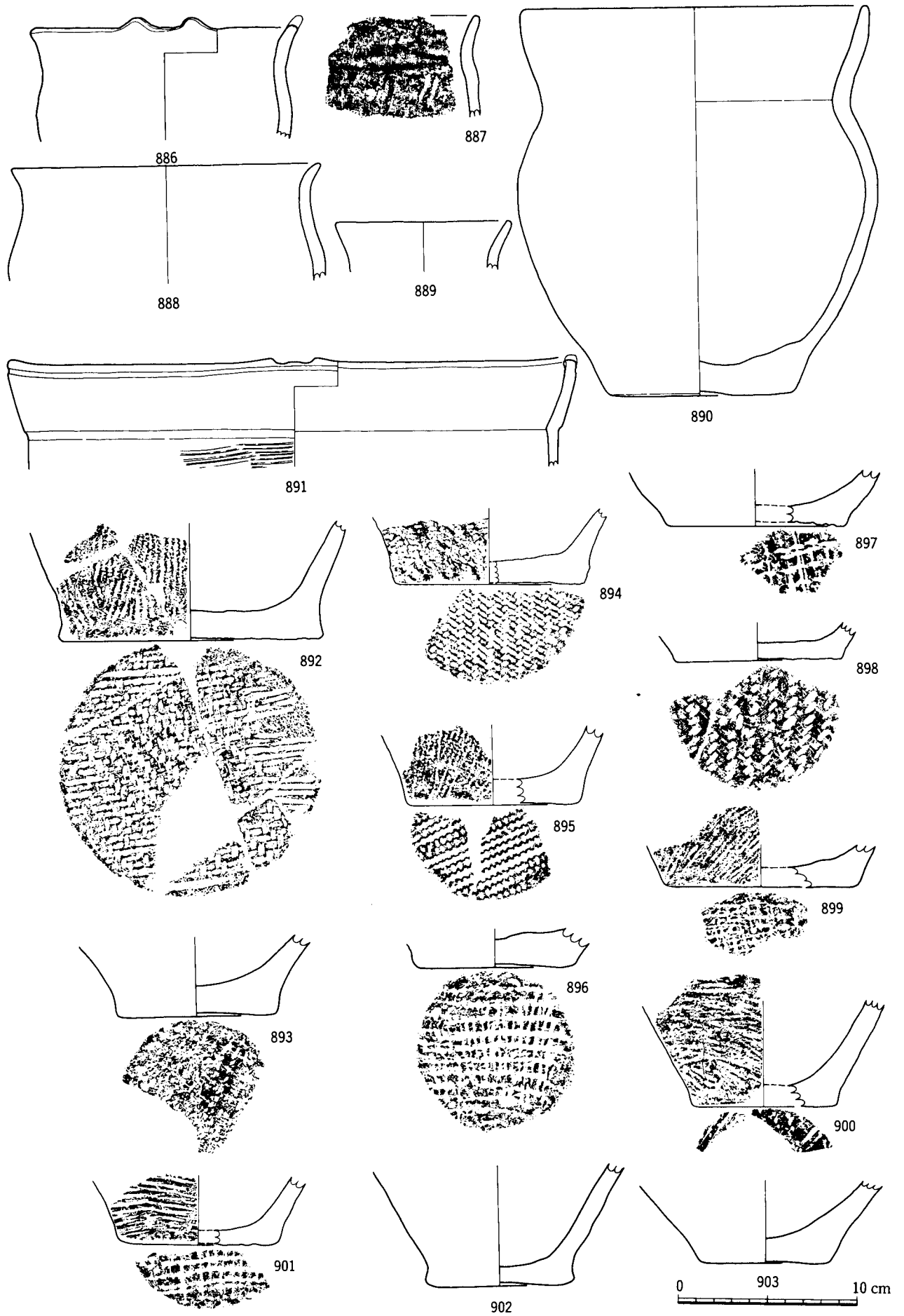
深鉢 4 A 類 (891)

移入品である。小波状口縁の形で図示したが、1 対の突起をつけるものとも判断できる。内傾気味に立ち上がる口縁部は丁寧に研磨され、内面頸部には稜が形成される。外周の頸部以下には横方向の条痕調整が加えられている。外表には煤が付着している。おそらく、関西系の土器と思われ、滋賀里 II 式土器に比定できるようだ。

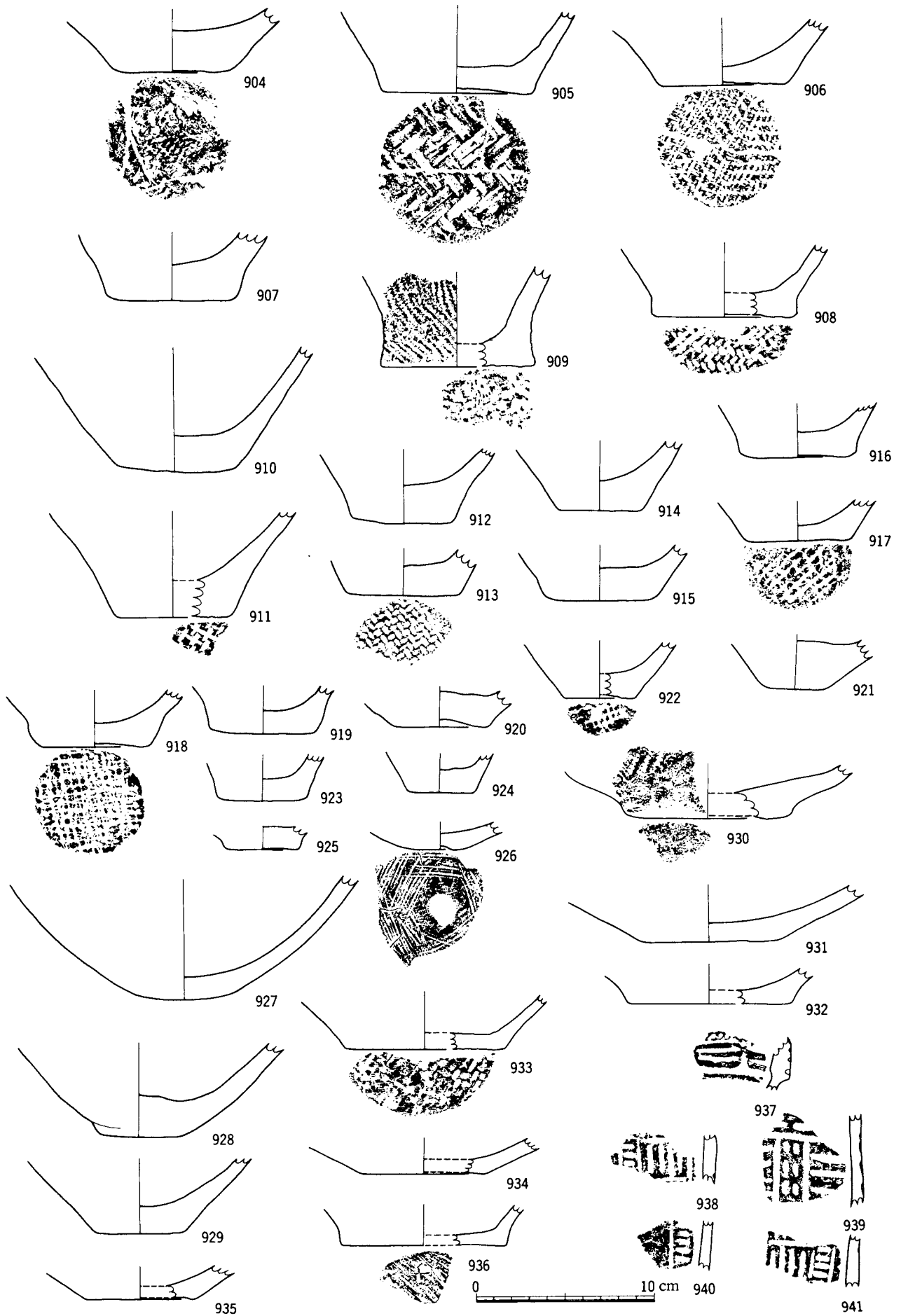
底 部

底部は発掘区全体で 562 個体を計測した。第 1～18 群土器のなかで底部まで確定しえた個体をも含めた数値である。胴部施文の縄文、条痕文、無文、精製、不明の 5 タイプに大別している。精製土器は研磨調整が入念であるもので分けている。不明のものは胴部が欠損しているものである。底径で見ると 15 cm を越えるもの、4 cm 以下のものが少数で、6～10 cm の間に集中する傾向を示している。底径がつかめない 216 個を除いた数量では 60% を占めることになる。

胴部文様で見ると無文土器の占める割合が格段と大きくなり、胴部不明のものを除くと 70% となる。これは器



第 53 図 縄文土器拓影②(886~903) (1/3)



第54图 繩文土器・弥生土器拓影(2)(904~941) (1/3)

面全体に調整を施さない個体も含まれているものではあるが、全体としては胴部下半部が無文化している状況を示していると見られよう。縄文土器、条痕土器がそれぞれ約10%と値が小さいのは無文土器に含まれた可能性が上げられるものの注目しておきたい。

細別は底径および形態によって分類を行った。

1類 (892)

底径15cmをはかる大型品である。胴部には縦縄文が施文されていて、第1群土器にともなうものと想定できる。色調は明茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良い。網代は2本超え、2本潜り、1本送りで、底部全体をカバーするひろがりには至っていない。これは、土器づくりのためだけに編まれたものと想定される。

2類 (893~908)

底径が11cm~6cm程度で、大型・中型品の深鉢につくものをまとめた。厚手の底部を持ち斜めに胴部に立ち上がる通有のものである。893は内外面とも丁寧な研磨調整が入れられている。894、895は縦縄文、撚糸が胴部に施文されているもので、894は2本超え、2本潜り、1本送り、895は単位幅が大きく異なる1本超え、1本潜り、1本送りのタイプと見られる。内面は入念にナデ調整が入れられている。896はスグレ状圧痕をつけるもので、結び目の縄の条が細い線となって見られる。スグレ状圧痕は897、899にも見られる。899~901の胴部は条痕調整が施されていて、内面の調整は901が丁寧である。904もやはりスグレ状圧痕を見るもので、内外面ともに調整は丁寧である。905の網代原体は幅5mmをはかり、平行条線を見る事ができる。4本超え、4本潜り、2本送りとなるが、2本を1単位と見ると2-2-1の編み方と見られる。

3類 (909)

胴部に縄文がころがされ、底部が大きくくびれるタイプで3類とした。

4類 (910~917)

底径が7cm以下で、底部から立ち上がり角度が2類に比較して小さくなるタイプ。910は丸底気味で底部にナデが加えられているもの。912も底部には粘土が足されて網代痕をぬりつぶしているものと想定される。913の網代は2本超え、2本潜り、1本送りで見られる。916の器表面には縦の条線文が見える。917のはスグレ状圧痕である。

5類 (918)

底部立ち上がりでくびれ大きく外展して立ち上がるタイプ。スグレ状圧痕がのこる。

6類 (920)

いわゆる凹み底をなすもので、935と同じ時期の所産であろう。器表に条痕調整がかすかに認められる。

7類 (919・922~925)

底径が5~4cmの小型品である。

8類 (921)

尖り気味の底部で、小さく平底をつくり出すタイプ。

9類 (926)

凹み底とするもので、条痕調整が底部周囲にめぐらすもの。内面には厚く炭化物が付着している。

10類 (927)

丸底となるもので内外面とも入念に研磨が施されている。

11類 (928・929)

底部と胴部との境がはっきりしないくらいに、ナデ調整が施されているもの。

12類 (930)

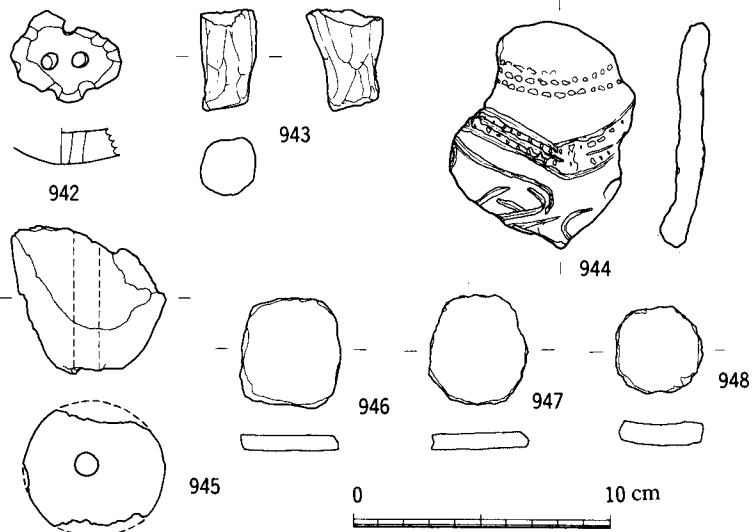
底部にあたる部分を貼付しているもの。体部に縄文が施文され、赤彩痕が見られるもので、浅鉢器形になるものであろう。

13類 (931~933・936)

体部が大きく開く浅鉢器形で、内外面とも研磨が施されている。

14類 (934・935)

凹み底をつくる浅鉢型土器の底部である。研磨が入念である。



第55図 土製品実測図(942~948) (1/3)

弥生式土器

柴山出村式期の所産と見られるものが、5点出土している。同一個体片と考えられる。937は口縁部片で縁帯状の口縁に刺突と沈線文が引かれ、彫りが深いと言える。内面には段を形成する。938~941は胴部片で、939をのぞいて同一個体片と想定できる。黄褐色から暗褐色を呈し、胎土に砂粒は少なく焼成も良好である。内面へのナデ調整も丁寧である。

(2) 土偶・土製品

瓢状底部 (942)

丸底状の形状を持ち、径4~6mmの穿孔が、小片ではあるが10個を確認できる。茶褐色を呈し胎土、焼成とも良好である。

土偶 (943・944)

2点の土偶が出土している。943は右脚部に想定されるもの。944は中空土偶の背面部分と想定しているものである。色調は褐色から黄褐色を呈し、全面に赤彩痕が認められる。頸部には3条の列点文、肩部からなだらかに下がる条の沈線文を中央部分の突起でとめる。沈線間には刺突文が加えられている。背面の沈線文様は判然としないが、入組三叉文のように見える。内面の色調は黒褐色を呈し、凹凸がはなはだしくのこる。

球形土製品 (945)

土錘状を呈する半欠損品である。最大径約6cmをはかり、中央に径0.9cmの穿孔が入る。外周は丁寧な磨きが施される。

円盤状土製品 (946~948)

3点の出土があった。いずれも無文土器の胴部片を利用しているものである。

(3) 石器 (第59~69図、図版34~39)

本調査で出土した石器は、磨製石斧、板状磨石、石錘、磨石、石皿、スクレイパー、岩版、垂飾、石刀、石鋸型石器、鏗節型石器、不明石器などである。

(1) 磨製石斧 (第59図1~8、図版34 1~8)

3点出土している。すべて定角式のものであり、多くは頭部幅が刃部幅より小さく、側縁のやや張った形態の

第2表 縄文土器出土地点表

遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点
1	E 106	42	E 106	83	D 106	124	95 P	165	D 111	206	E 106
2	D 104	43	D 105	84	F 107	125	E 106	166	E 106	207	E 106
3	37 P	44	D 106	85	97 P	126	D 106	167	114 P	208	D 103
4	53 P	45	86 P	86	E 106	127	E 107	168	E 105	209	D 104
5	68 P	46	14 P	87	37 P	128	D 105	169	66 P	210	E 106
6	D 110	47	D 105	88	97 P	129	E 106	170	不明	211	"
7	35 P	48	93 P	89	95 P	130	93 P	171	70 P	212	D 105
8	E 108	49	E 105	90	E 106	131	E 107	172	86 P	213	不明
9	14 P	50	39 P	91	F 107	132	73 P	173	24 P	214	D 105
10	24 P	51	D 108	92	D 106	133	F 107	174	89 P	215	97 P
11	E 104	52	D 108	93	D 107	134	38 P	175	D 106	216	D 105
12	58 P	53	39 P	94	135 P	135	70 P	176	E 107	217	D 105
13	D 106	54	D 106	95	F 107	136	82 P	177	16 P	218	67 P
14	18 P	55	E 106	96	D 111	137	E 107	178	19 P	219	E 106
15	F 104	56	68 P	97	73 P	138	D 108	179	68 P	220	E 106
16	72 P	57	E 105	98	E 106	139	D 104	180	39 P	221	E 108
17	D 105	58	42 P	99	67 P	140	E 105	181	D 106	222	37 P
18	D 106	59	E 107	100	E 107	141	136 P	182	D 107	223	E 104
19	D 107	60	E 107	101	F 105	142	D 105	183	D 105	224	19 P
20	73 P	61	F 107	102	F 105	143	19 P	184	39 P	225	D 111
21	D 105	62	68 P	103	D 105	144	E 106	185	D 103	226	D 105
22	69 P	63	E 103	104	E 107	145	"	186	E 108	227	19 P
23	70 P	64	D 108	105	E 106	146	70 P	187	E 106	228	15 P
24	E 103	65	37 P	106	D 105	147	26 P	188	E 107	229	34 P
25	D 106	66	107 P	107	"	148	E 103	189	113 P	230	133 P
26	P 96	67	94 P	108	94 P	149	139	190	25 P	231	19 P
27	D 105	68	59 P	109	E 105	150	D 105	191	D 105	232	97 P
28	E 106	69	D 106	110	72 P	151	93 P	192	"	233	15 P
29	D 107	70	D 105	111	69 P	152	D 105	193	E 105	234	E 105
30	F 104	71	135 P	112	140 P	153	"	194	42 P	235	121 P
31	D 108	72	D 104	113	92 P	154	D 108	195	E 106	236	19 P
32	F 107	73	E 105	114	D 105	155	D 105	196	F 110	237	D 105
33	E 106	74	D 105	115	"	156	D 105	197	D 105	238	25 P
34	"	75	"	116	"	157	105 P	198	6 P	239	38 P
35	73 P	76	E 106	117	"	158	D 106	199	E 105	240	E 106
36	89 P	77	F 106	118	E 106	159	D 107	200	69 P	241	E 109
37	D 108	78	D 107	119	E 107	160	35 P	201	D 105	242	D 108
38	D 110	79	D 106	120	37 P	161	E 108	202	D 103	243	107 P
39	73 P	80	94 P	121	72 P	162	D 107	203	55 P	244	56 P
40	E 107	81	D 106	122	E 106	163	42 P	204	113 P	245	95 P
41	D 105	82	D 105	123	37 P	164	"	205	D 106	246	E 104
247	D 104	288	D 104	329	107 P	370	13 P	411	D 106	452	E 103
248	D 111	289	4 P	330	6 P	371	122 P	412	58 P	453	D 105
249	E 104	290	"	331	D 110	372	D 105	413	E 104	454	"
250	"	291	E 105	332	D 105	373	38 P	414	18 P	455	E 104
251	6 P	292	E 104	333	20 P	374	D 105	415	E 104	456	D 103
252	D 105	293	D 107	334	68 P	375	E 105	416	15 P	457	E 105
253	P 26	294	D 108	335	107 P	376	89 P	417	4 P	458	139 P
254	E 104	295	D 105	336	37 P	377	D 103	418	不明	459	D 105
255	D 104	296	E 105	337	D 105	378	D 105	419	D 105	460	F 107
256	135 P	297	D 109	338	70 P	379	E 106	420	"	461	E 105
257	E 105	298	E 105	339	D 109	380	D 102	421	D 111	462	D 110
258	E 108	299	"	340	42 P	381	D 105	422	D 110	463	D 104
259	D 106	300	E 109	341	E 105	382	96 P	423	E 104	464	D 102
260	36 P	301	D 105	342	42 P	383	D 104	424	F 105	465	E 105
261	D 104	302	D 106	343	F 107	384	D 105	425	E 105	466	D 104
262	105 P	303	34 P	344	5 P	385	D 104	426	107 P	467	D 106
263	14 P	304	E 105	345	D 111	386	不明	427	D 111	468	F 104
264	E 110	305	37 P	346	17 P	387	4 P	428	D 110	469	E 105
265	4 P	306	"	347	16 P	388	73 P	429	G 105	470	E 106

遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点
266	135 P	307	135 P	348	E 109	389	E 109	430	D 110	471	13 P
267	D 106	308	38 P	349	38 P	390	20 P	431	D 110	472	E 103
268	47 P	309	73 P	350	17 P	391	34 P	432	95 P	473	67 P
269	D 107	310	14 P	351	D 105	392	94 P	433	D 108	474	99 P
270	37 P	311	38 P	352	F 104	393	E 106	434	D 105	475	E 105
271	38 P	312	E 108	353	107 P	394	"	435	23 P	476	E 107
272	17 P	313	17 P	354	E 111	395	D 105	436	137 P	477	D 105
273	37 P	314	D 106	355	E 105	396	E 105	437	70 P	478	D 104
274	D 107	315	E 104	356	E 104	397	107 P	438	E 105	479	E 106
275	D 105	316	E 105	357	D 109	398	D 105	439	F 104	480	D 111
276	"	317	D 105	358	D 106	399	69 P	440	E 105	481	E 104
277	D 109	318	E 103	359	D 105	400	E 106	441	D 110	482	D 107
278	E 106	319	39 P	360	47 P	401	D 106	442	E 105	483	E 105
279	E 104	320	23 P	361	E 104	402	D 105	443	D 106	484	D 104
280	E 105	321	E 108	362	E 105	403	"	444	E 105	485	D 107
281	D 109	322	92 P	363	37 P	404	D 104	445	6 P	486	E 103
282	D 104	323	107 P	364	D 105	405	D 103	446	E 104	487	18 P
283	E 108	324	37 P	365	122 P	406	E 108	447	22 P	488	G 105
284	D 105	325	107 P	366	32 P	407	67 P	448	F 106	489	16 P
285	D 109	326	D 111	367	E 105	408	不明	449	137 P	490	G 105
286	D 105	327	E 105	368	E 104	409	D 111	450	D 105	491	E 106
287	D 107	328	D 105	369	D 105	410	D 102	451	E 106	492	"
493	D 105	534	17 P	575	6 P	616	D 106	657	E 104	698	D 106
494	D 102	535	D 105	576	E 107	617	D 109	658	D 107	699	D 103
495	15 P	536	E 105	577	E 105	618	D 102	659	"	700	E 105
496	14 P	537	F 104	578	D 111	619	D 109	660	E 106	701	D 107
497	E 105	538	E 105	579	D 104	620	D 106	661	D 105	702	"
498	"	539	105 P	580	"	621	D 106	662	D 106	703	D 105
499	15 P	540	D 111	581	E 106	622	D 103	663	26 P	704	E 106
500	E 103	541	D 108	582	D 105	623	E 105	664	E 107	705	E 106
501	D 104	542	105 P	583	D 104	624	F 105	665	E 108	706	D 106
502	D 104	543	E 104	584	F 104	625	E 108	666	D 111	707	不明
503	E 106	544	D 103	585	E 105	626	D 106	667	36 P	708	E 104
504	99 P	545	D 107	586	D 105	627	D 106	668	67 P	709	33 P
505	18 P	546	15 P	587	D 107	628	"	669	20 P	710	D 106
506	4 P	547	E 104	588	E 105	629	102 P	670	72 P	711	D 106
507	E 105	548	89 P	589	96 P	630	D 107	671	74 P	712	92 P
508	16 P	549	D 107	590	5 P	631	E 106	672	D 103	713	E 107
509	19 P	550	D 105	591	不明	632	E 104	673	E 108	714	E 107
510	E 107	551	4 P	592	F 105	633	D 107	674	E 106	715	不明
511	D 104	552	D 104	593	F 105	634	D 106	675	53 P	716	D 106
512	F 105	553	"	594	100 P	635	D 106	676	95 P	717	E 106
513	D 106	554	E 104	595	E 104	636	D 107	677	D 105	718	D 106
514	86 P	555	D 107	596	E 111	637	"	678	D 106	719	91 P
515	E 106	556	22 P	597	E 106	638	E 106	679	99 P	720	E 105
516	91 P	557	94 P	598	E 105	639	D 102	680	E 107	721	D 106
517	94 P	558	D 105	599	E 105	640	D 107	681	E 106	722	E 106
518	E 104	559	22 P	600	E 108	641	D 108	682	E 107	723	D 107
519	E 106	560	E 104	601	E 106	642	E 103	683	D 106	724	D 106
520	86 P	561	95 P	602	71 P	643	D 106	684	4 P	725	107 P
521	D 106	562	E 105	603	E 106	644	"	685	D 106	726	D 107
522	E 104	563	E 104	604	34 P	645	D 108	686	"	727	D 107
523	"	564	65 P	605	E 106	646	14 P	687	73 P	728	D 105
524	D 105	565	D 107	606	E 106	647	82 P	688	E 106	729	D 110
525	D 105	566	E 105	607	E 106	648	D 103	689	D 107	730	D 106
526	D 105	567	39 P	608	23 P	649	E 104	690	E 104	731	D 105
527	15 P	568	22 P	609	127 P	650	F 108	691	97 P	732	E 106
528	D 105	569	F 104	610	D 105	651	D 104	692	D 106	733	D 107
529	D 106	570	D 106	611	D 108	652	E 107	693	D 107	734	243 P
530	D 105	571	"	612	D 105	653	E 105	694	105 P	735	D 107
531	E 105	572	D 105	613	130 P	654	"	695	D 105	736	E 105

遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点
532	"	573	68 P	614	D 106	655	D 103	696	"	737	34 P
533	D 104	574	58 P	615	D 102	656	E 106	697	E 105	738	D 106
739	不明	780	D 106	821	D 104	862	E 105	903	69 P	944	76 P
740	D 107	781	"	822	E 94	863	E 105	904	33 P	945	D 104
741	"	782	E 107	823	E 104	864	E 105	905	D 103	946	5 P
742	"	783	"	824	D 110	865	D 106	906	D 105	947	58 P
743	"	784	D 107	825	D 104	866	D 107	907	"	948	107 P
744	E 106	785	D 105	826	D 105	867	D 105	908	E 108	949	
745	"	786	E 106	827	E 105	868	E 106	909	F 109	950	
746	D 107	787	D 105	828	E 105	869	95 P	910	E 106	951	
747	D 105	788	E 106	829	E 106	870	E 105	911	F 104	952	
748	100 P	789	"	830	17 P	871	E 111	912	91 P	953	
749	E 106	790	D 104	831	D 105	872	E 104	913	15 P	954	
750	D 105	791	D 107	832	E 105	873	D 103	914	E 105	955	
751	D 106	792	D 108	833	E 106	874	D 105	915	D 105	956	
752	106 P	793	D 107	834	E 104	875	92 P	916	53 P	957	
753	D 106	794	"	835	D 105	876	D 105	917	F 104	958	
754	D 107	795	D 110	836	D 104	877	E 105	918	D 105	959	
755	99 P	796	95 P	837	E 105	878	D 106	919	"	960	
756	D 106	797	D 107	838	D 106	879	D 108	920	"	961	
757	E 106	798	F 106	839	E 105	880	97 P	921	E 104	962	
758	D 105	799	D 102	840	E 110	881	94 P	922	E 105	963	
759	D 106	800	D 106	841	E 105	882	E 103	923	D 104	964	
760	73 P	801	D 107	842	E 106	883	E 105	924	94 P	965	
761	E 106	802	E 106	843	E 105	884	E 107	925	D 108	966	
762	D 106	803	139 P	844	D 107	885	92 P	926	D 105	967	
763	"	804	E 104	845	E 104	886	72 P	927	D 106	968	
764	F 107	805	D 106	846	E 105	887	D 103	928	"	969	
765	D 106	806	E 105	847	38 P	888	D 105	929	E 103	970	
766	D 106	807	E 106	848	E 105	889	96 P	930	E 106	971	
767	70 P	808	68 P	849	D 106	890	D 107	931	"	972	
768	26 P	809	4 P	850	D 105	891	E 106	932	E 107	973	
769	E 106	810	14 P	851	不明	892	"	933	D 105	974	
770	D 109	811	不明	852	D 105	893	14 P	934	38 P	975	
771	D 108	812	E 106	853	28 P	894	104 P	935	D 111	976	
772	D 105	813	D 110	854	E 106	895	E 106	936	95 P	977	
773	E 107	814	D 105	855	D 106	896	D 106	937	D 104	978	
774	D 107	815	D 104	856	E 105	897	D 105	938	37 P	979	
775	E 106	816	D 106	857	E 105	898	D 106	939	E 106	980	
776	D 106	817	E 105	858	16 P	899	D 107	940	37 P	981	
777	"	818	不明	859	D 105	900	E 106	941	"	982	
778	E 107	819	"	860	4 P	901	D 107	942	D 102	983	
779	D 106	820	100 P	861	121 P	902	113 P	943	D 105	984	

ものである。1～4の大型のものと、5～8の小型のものに分けられ、刃部は、1・3・4が弧状となっており、5・7は直線状となっている。

(2) 板状磨石 (第59図9～15、第62図65、図版34 9～15、図版35、65)

8点出土している。白雲母結晶片岩あるいは黒色頁岩を、節理で5mm前後の厚さに剥がし適当な長さに折ったものを素材として、これらの側縁を両側から磨き刃部を作り出している。11・65が両側縁に刃部をもつほかは、側縁の一辺を刃部としている。また、これらの製品のほかに、素材となった白雲母結晶片岩の剥片が出土している。

(3) 石錘 (第59図16～22、図版34 16～22)

7点出土している。すべて、長楕円形の自然礫の両端を打ち欠く石錘である。大形のものと小形のものとに分けられる。北陸の後期～晩期の遺跡で打ち欠き石錘が出土する例は少なく、珍しい例であるが、これらは本遺跡に隣接する縄文中期の白山上野遺跡からの流入とも考えられるため、その所属時期には疑問が残る。

(4) 磨石 (第59図23～26、第60図27～42、第61図43～48、図版34 27～43、図版35 46～48)

26点出土している。ここでは、すべてのものに擦痕が見られるため、くぼみ、あるいは敲打痕を持つものも、すべて磨石として扱った。平面形では円形のものと楕円形のものがある。29、44には顕著なくぼみがあり、23～26、28、29、31～38、40、43、46～48には、表裏とも、あるいは表裏どちらかにくぼみが見られる。また、23、27、34、39、45には、側面に顕著な敲打痕が見られる。

(5) 石皿 (第61図49・53 図版35 49・53)

2点出土している。いずれも破損している。49は片面に通常の石皿と同様のくぼみを持ち、もう片面には3面の研磨面がみられる。面と面の境は階段状になっており、階段の下段となる部分には、有溝砥石のような溝があるので、この石皿は通常の石皿の機能のほかに、砥石あるいは有溝砥石としての機能も合わせ持っていたと考えられる。53は片面に通常の石皿と同様のくぼみがあり、この面にはタール状のものが付着している。またもう片面は平坦であるが磨かれている。

(6) 石鏃 (第62図54～60、図版35 54～60)

7点出土している。54、55は凹基、56～58は平基の無茎鏃である。58は裏面および基部には調整が施されておらず、未製品とも考えられる。59、60は柳葉形のものである。59は断面は菱形を呈し、重量がやや重い。60は断面レンズ状で、59に比べて幅が狭く重量も小さい。同じ柳葉形でありながら両者は対照的である。

(7) スクレイパー (第62図61～64、図版35 61～64)

3点出土している。61は縦長剥片の両側縁に裏面から調整を施し刃部としている。63は縦長剥片の先端部に両面から調整を加え刃部を作り出している。64は、表面が自然面である横長剥片を素材として、先端に裏面から調整を加え刃部としている。

(8) 岩版 (第62図66、図版35 66)

1点のみの出土である。下半分を欠損しているので全体はうかがい得ないが、隅丸の長方形あるいは台形となるものと思われる。また全面を磨きあげている。片面には貫通しない穴と数条の線刻が施されているが、もう片面にはなにも施されていない。

(9) 垂飾 (第62図67、図版35 67)

1点のみの出土である。黒色頁岩を素材としこれを磨き、平面長方形、断面台形に仕上げている。表裏ともに「X」をモチーフとした文様が陰刻されている。また、2個の穴があげられているが、これらは両面穿孔によるものである。

(10) 石刀 (第61図51、第62図68～71・74、図版35 51・68～71・74)

6点出土している。いずれも欠損品である。51・68・79・74は柄の部分であるが、68は弧状やX字状の線刻がほどこされており、八日市新保式期のものであろう。51は長楕円形、69は隅丸の三角形、68・74は楕円形の断面となっている。70・71は刃部である。両方とも胴の張ったくさび形の断面となっている。

(11) 鯉節型石器 (第 62 図 73・76、図版 35 73・76)

2 点出土している。2 点とも全面を磨きあげているが、76 は整形のための敲打痕を残している。73 は欠損しており全体をうかがい得ないが、両辺とも弧状に張る形となるようである。76 は、一辺が弧状にゆるく内曲し、三日月に近い形となっている。断面は両方とも胴の張ったくさび形となっている。

(12) 石鋸型石器 (第 62 図 72、図版 35、72)

1 点のみの出土である。両端が欠損しており全体はうかがい得ない。図の上を頭部とし下を刃部とするなら、頭部は断面四角形に、刃部はくさび形に仕上げられており、頭部と刃部の境には段を設けている。

(13) 不明石器 (第 61 図 52、第 62 図 75、図版 35、52・75)

52 は欠損品であり全体の形がどのようなものか不明である。側面がよく磨かれている。75 も両端が欠損している。断面はレンズ状に作り上げられており、長軸方向に若干の反りを持っている。全面がきれいに磨かれており、火を受けたのか全面が赤化し、表面に剝離した部分がある。

(14) 打製石斧 (第 63 図～第 69 図、図版 36～図版 39)

369 点出土しているが、これらの内 128 点を図示した。形態で大きく 3 つに分類される。

〔1〕 A 形態 (第 63 図、第 64 図、第 65 図 124～136、図版 36、図版 37 111～136)

従来短冊形と言われてきたものである。頭部幅と刃部幅がほぼ同じで、両側縁に抉りが入らず、長さに対する幅の比率が小さい値も取るもので、これらはさらに 2 分することができる。

(ア) A-1 形態 (第 63 図、第 64 図 103～106、図版 36)

長さに比して、厚さの薄いものである。長さ約 10 cm～約 20 cm のものも存在するが、16 cm 以下のものが多い。横断面は薄いレンズ状となり、後述する A-2 形態の同じ長さのものに比べて重さが軽くなる。刃部は直線的なもの、弧状のものとバリエーションがあるが、概して薄く作られている。

(イ) A-2 形態 (第 64 図 107～123、第 65 図 124～136、図版 37 107～136)

長さに対して厚さの厚いものである。長さ約 11 cm～約 18 cm のものが存在する。横断面は厚いレンズ状、ないしは楕円形に近い形態をとり、A-1 形態の同じ長さのものに比べて重くなる。刃部は弧状を呈するものが多く、概して厚く作られている。

〔2〕 B 形態 (第 65 図 137～139、第 66 図、第 67 図、図版 37 137～147、図版 38 150～169)

A 形態に比べて長さに対する幅の比が大きく、両側縁が内曲するもので、これらも 2 分される。

(ア) B-1 形態 (第 65 図 137～139、第 66 図 140～149、図版 37 137～147)

後述する B-2 形態に比べて、内曲の度合いが小さく小型のものである。長さ約 11 cm～約 15 cm のものが存在する。横断面は A-2 形態と同様、厚いレンズ状ないしは楕円形に近い形態を呈し、B-2 形態のものに比べて長さに対する重量の比が大きい。刃部は、弧状を示すものが多く厚く作られたものがほとんどである。また、刃部先端がつぶれて丸くなったものが多く存在する。

(イ) B-2 形態 (第 66 図 150～159、第 67 図、図版 38 150～169)

B-1 形態に比べて、内面の度合いが大きいものである。長さ約 12 cm～約 22 cm のものが存在するが、B-1 形態より大型のものが多い。また、B-1 形態より長幅比が若干小さく、長さに対する重量比が若干小さい。横断面は厚いレンズ状を呈するが、A-2、B-1 形態ほどではない。刃部は直線状、弧状いろいろであり、厚さは B-1 形態ほど厚くない。中には、169、171 のようにやや薄いものもある。また、189 は内曲した部分が磨かれている。

〔3〕 C 形態 (第 68 図、第 69 図 190～200、図版 38 172～180、図版 39 181～200)

頭部幅が刃部幅に比べて小さく、平面形が三角形あるいは扇形に近い形となるものである。3 つに分類される。

(ア) C-1 形態 (第 68 図 172～180、図版 38 172～180)

頭部が尖がり、平面形がほぼ扇形のものである。長さ約 10 cm～約 19 cm のものがある。横断面はレンズ状を呈する。刃部は直線状、弧状のものが存在するが、みな薄く作られている。長さに比べて軽いものが多い。

(イ) C-2形態 (第68図 181~189、図版39 181~189)

C-1形態の両側縁に抉りの入ったものであるが、頭部は丸みを持ったものが多い。ちょうどしゃもじのような平面形となる。長さ約13cm~約24cmのものがある。長さに対する重さの比はC-1形態とあまり変わらない。横断面もC-1形態と同様にレンズ状を呈し、刃部は弧状のものが多い。189は、特異なもので長さ23.8cm重さ1,230gを計る大形のもので、本遺跡出土の打製石斧の中ではとびぬけた重さのものである。

(ウ) C-3形態 (第69図 190~200、図版39 190~200)

頭部幅がC-1、C-2形態のものに比べて広いものである。長さ約14cm~約17cmのものが存在する。横断面は薄いレンズ状を呈し、刃部は直線状、弧状のものがあるがすべて薄く作られている。形的にはA-1形態、あるいはB-2形態に含めてもよいものがあるが、A-1形態ほど幅が狭くなく、またB-2形態ほど厚さが薄い。

〔4〕D形態 (第69図 201~205、図版39 201~205)

平面形態が楕円形を示すものであり、断面の薄いレンズ状を呈す。全長は約16cmのものが4点出土している。全周に調整が行なわれているが、これがこのままで製品となるのか、あるいは、もっと調整を加えて製品を作り上げるのか不明である。このままで製品となるのであれば、打製石斧であるとは考えられず、スクレイパー的用途で用いられるのであろう。これ以上調整を加えるのであれば、これらは石質などから打製石斧の素材剥片であると考えられる。今後の類例を待ちたい。

若干の考察

(1) 板状磨石について

本遺跡出土の板状磨石は、白雲母結晶片岩と黒色頁岩をその石材としている。これらの石材は節理によって板状に割れる性質を持っており、この性質を利用して5mm前後の板状の剥片を作り出している。また、これを折ることによって素材を適当な大きさにしているようである。この素材の側縁を、両面から磨いて刃部を作り出すのであるが、この作業には第61図49のような石皿を用いたものと考えられる。

さて、この板状磨石の出現は、北陸では後期に入ってからのものである。^(註1) ちょうど、石刀、石剣などの呪術的遺物の出現と重なり、これらの線刻などに使用されたのではないかと思われる。本遺跡では8点とその出土数は多くないが、後晩期の遺跡であれば多かれ少なかれ出土しているようである。とくに、野々市町御経塚遺跡では77点の出土があり、多量に生産、使用されたと考えられる。また、この遺跡では石刀、石剣などの呪術的遺物の出土量も多く、板状磨石と呪術的遺物の関係をよく表わしていると言えよう。

この呪術的遺物の増加、多様化は後期から始まるのであるがこれは祭祀の変化をうかがわせるのである。どういう変化が起ったのであろうか。山本暉久氏は、石棒祭祀の変化をとらえ、中期後半期の屋内石棒祭祀から中期末後期初頭をピークとする屋外石棒祭祀への移行を、個別堅穴成員祭祀から集落共同体成員祭祀への移行と意味づけておられる。^(註2) しかし、後期の呪術的遺物の増加、多様化は、個別堅穴成員祭祀→集落共同体成員祭祀の変化のみでとらえきれぬのかどうか疑問が残る。板状磨石と呪術的遺物の関係から見ると、その生産は集落共同体成員個人あるいは個別堅穴のレベルで行なわれていたのではないと思われる。これがイコール同レベルでの祭祀とはいえないが、呪術的遺物の多様化と合わせて考えると、少なくとも祭祀の多層化、多様化ということが言えるのではないだろうか。その祭祀は集落共同体の意図で行なわれたのか、個別堅穴成員の意図で行なわれたのか、それによってその意味は変わるであろうが、現在のところはそれが並存したと考える方が妥当ではないのだろうか。今後の研究を待ちたい。

(2) 打製石斧について

打製石斧の分類は、従来と異なった名称を使用した。基本的にはA形態—短冊形、B形態—分銅形、C形態—撥形となろう。しかし、「縄文文化の研究 7」の鈴木次郎氏の分類^(註3)のような厳密な物ではない。特にB形態は、

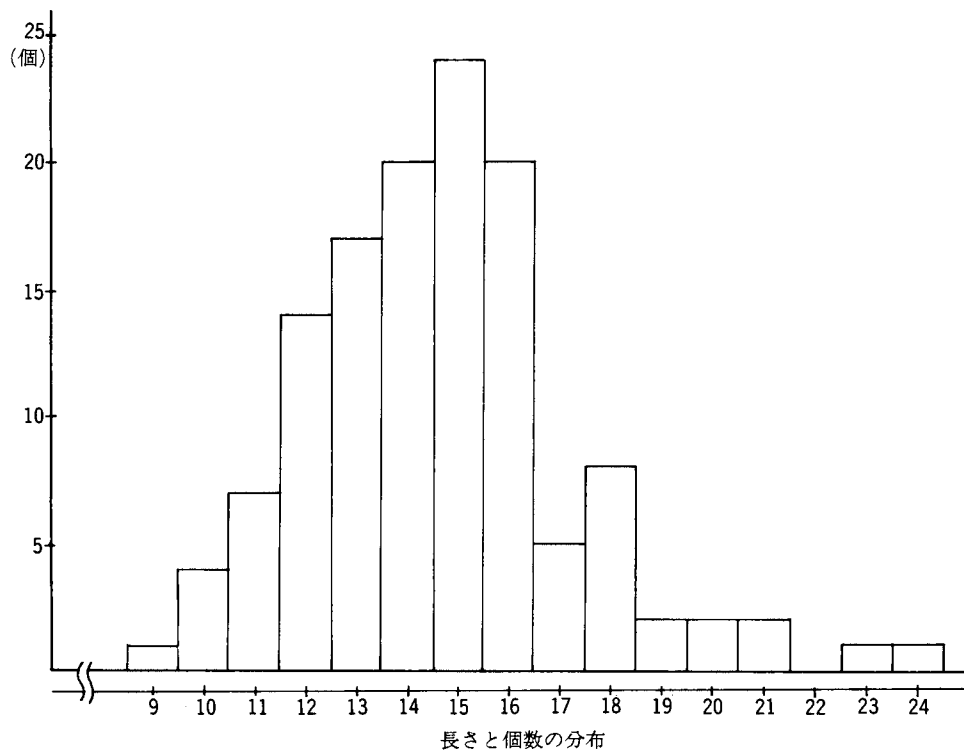
分銅形とはいえないものを多く含んでいる。また今回の分類では、実測図に書かれた平面形で分類したのではなく、実際に打製石斧を並べてそれを見比べたイメージで分類しているので曖昧な点もあるが、従来とは異なった面を見ることができたと思う。この点について述べてみたい。

打製石斧はその素材の形に大きく左右されるとよく言われるが、ある程度素材を使い分けて製作されたものと思われる。というのは、A-1形態、C形態では肉厚の薄い素材を用いて製作されており、逆にA-2形態、B形態では肉厚の厚い素材を用いて製作されているのである。この差は刃部や胴部の断面形や重量差となっている。これは打製石斧の使用方法を考える時の大きなポイントでもあり、打製石斧が形態別用途を持つと考えるとそれぞれの機能に適合する素材を選んで製作したと考えてもよいのではないだろうか。

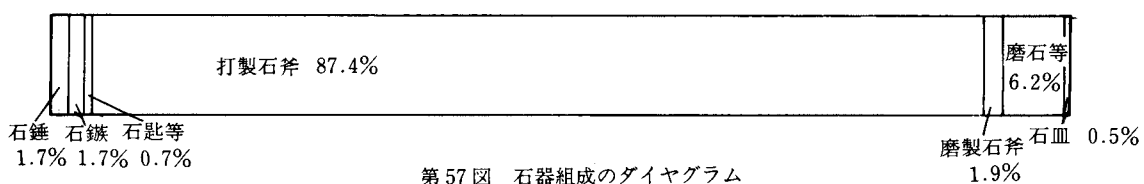
第58図は、本遺跡出土の打製石斧のうち完形のものについてその長さや重量の分布を形態別に示したものである。この図によると、A-2形態、B形態のものは、A-1形態、C形態のものに比べて長さに対する重量の比が大きくなっており、特にB-1形態は小形で重いといった特徴を持っている。またA-1形態は小形で軽いという傾向がうかがわれる。

刃部について見ると、A形態は他形態に比べて長さに対する刃部幅の比は小さく、B形態、C形態はその比が大きい。また側面図を見ると、A-1形態、C形態は角度の小さい刃部とそれに続く薄い胴部のものが多く、A-2形態、B形態では角度の大きい刃部と厚めの胴部のものが多い。

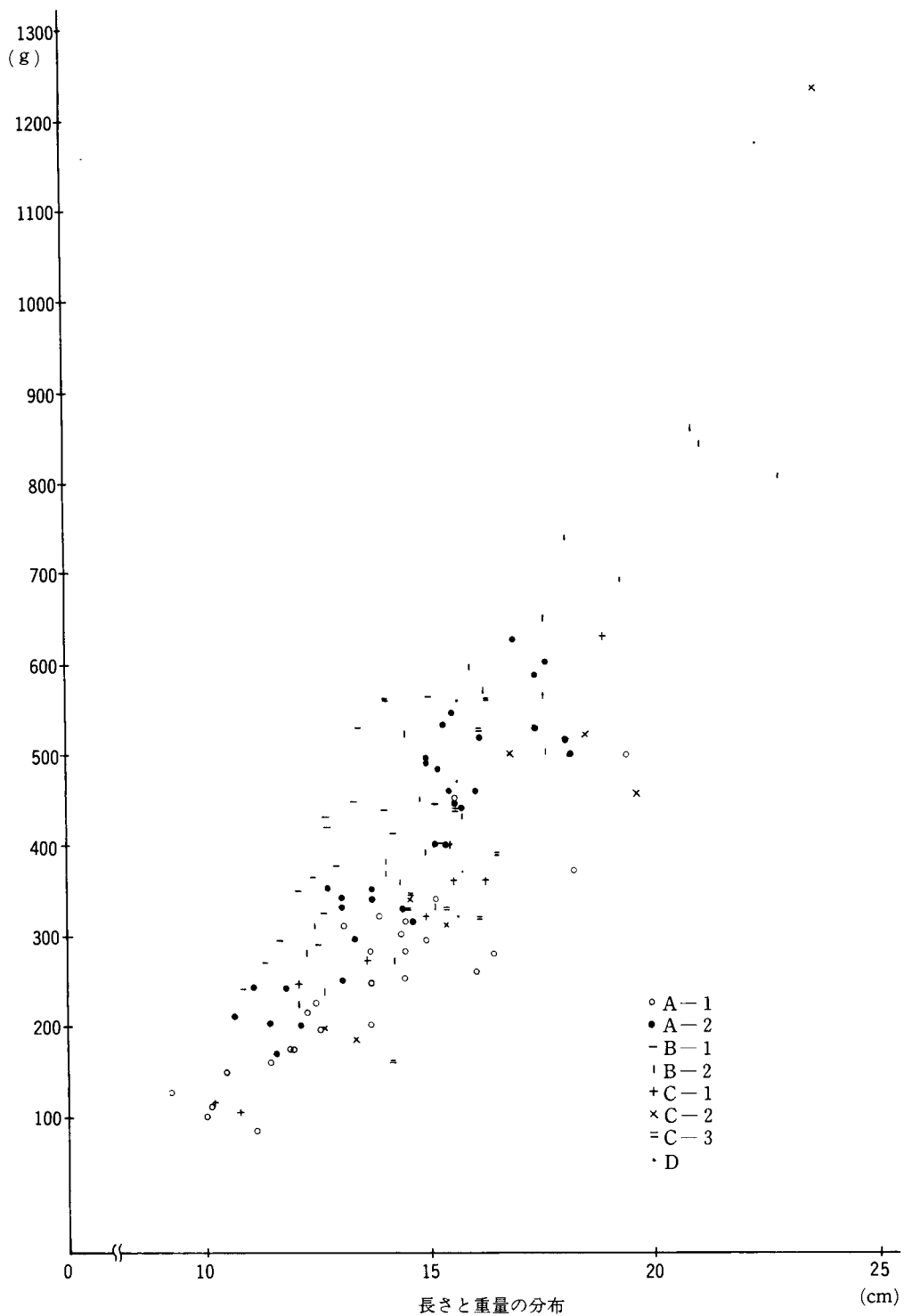
これらを総合するとそれぞれが別用途に用いられたと想定できないだろうか。少なくとも従来のように、打製石斧が掘り棒や鋤的な使用方法だけで用いられたのではなく、A-2形態やB形態のように重くて厚手の刃部を持つものは、柄につけて使用したと考えるなら、頭部に重心があり振り回して使用した（具体的には鍬や斧など）



第56図 打製石斧計測グラフ(1)



第57図 石器組成のダイアグラム



第58図 打製石斧計測グラフ(2)

と考えてもよいのではないだろうか。また、これを肯定して考えるならば同じ打製石斧と呼ばれているものの中で異なった機能があり、その素材となる剥片が異なっていたと考えてもよいのではないだろうか。これは長軸方向の反りの問題や使用痕などともからめて考えなければならない問題であり今後の課題としたい。

後晩期になると打製石斧は大きくなると言われているが、実際はどうなのだろうか。第56図は本遺跡出土の打製石斧の内、完形のものについてその長さや個数の分布を示したものである。これによれば、15 cmを頂点とした山形に分布しており12 cm～16 cmのものが多いと言える。北陸の中期のものが8 cm～15 cmに集中するという山本直人氏の分析結果^(註4)と比べるとやや大きくなっていると言えよう。

また後晩期になると、北陸では打製石斧の量が増加すると言われている。第57図は、本遺跡の石器組成のダイ

アグラムである。これを見ると打製石斧は90%近くを占めており、中期のものと比較した場合その差は歴然としている。^(註5) こういった傾向は汎西日本的なものと言われているが、能登地方の遺跡ではこういう傾向は見られないらしい。^(註7) また、打製石斧の増加する地域の中でも石鏃の比率も高い遺跡と、本遺跡の様にそうでない遺跡とがある。この問題は、遺跡個々の立地の問題や、打製石斧の大形化の問題を含めて考える必要があり、今後の研究を待ちたい。

以上、板状磨石と打製石斧について、本遺跡の資料整理の中で気づいた事について述べてみた。浅学のため、いろいろまちがいを侵しているものと思われる。皆様の御教授、御叱咤をお願いしたい。なお本稿を記すにあたり、西野秀和、山本直人、栃木英道、横山貴広、安宅 務、石田和彦、新城えり子、本 由美子の各氏から助言・御教示をいただいた。心より感謝申し上げます。

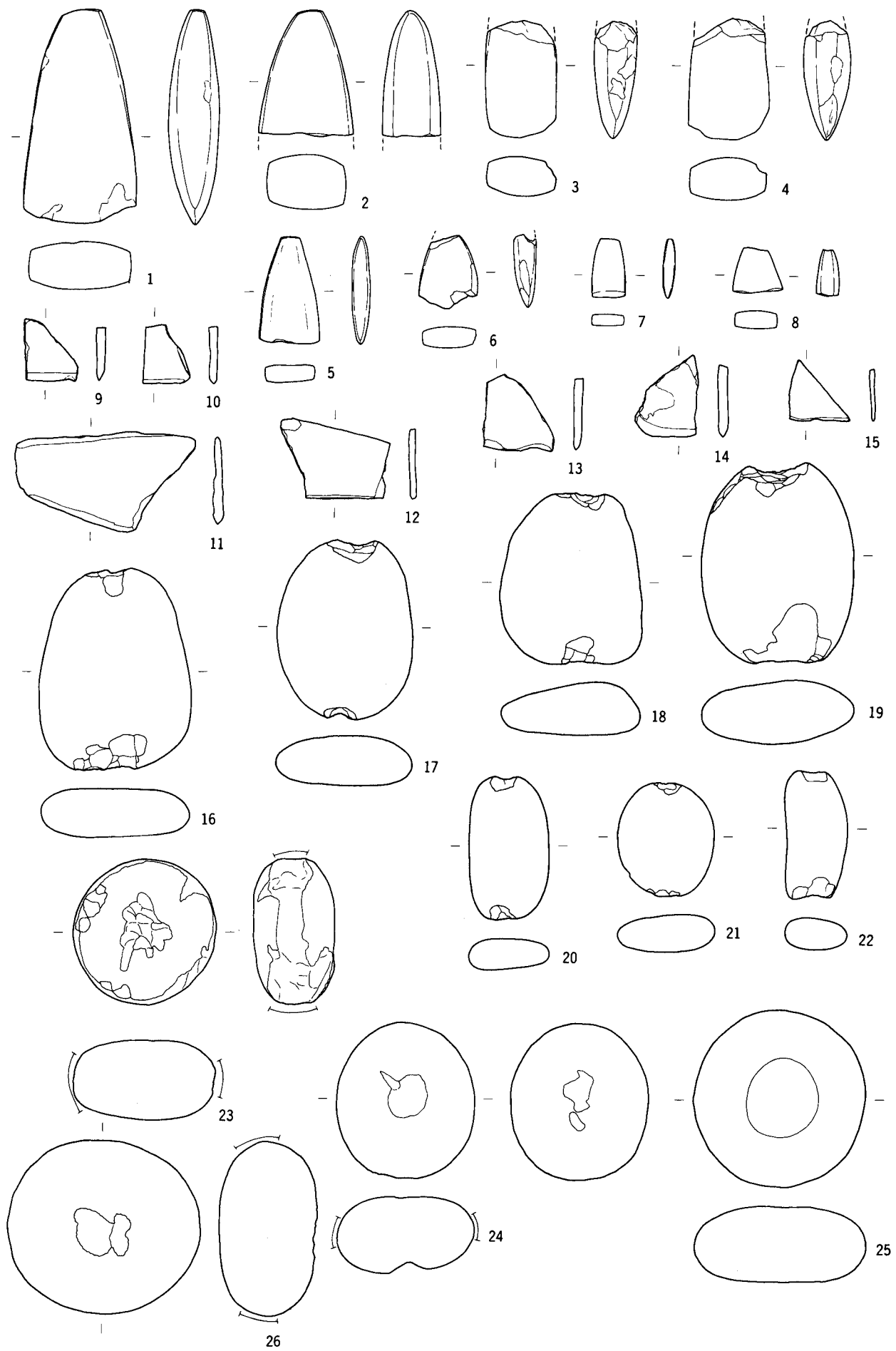
- 註 1 辻森由美子 1983 「擦切石器」『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会を参考にした。西野秀和氏より御教示をいただいた。
- 2 山田暉久 1983 「石棒」『縄文文化の研究 9』雄山閣、のみによっている。氏の本論である「石棒祭祀の変遷」古代文化第31巻11号・12号、1977、や、「縄文時代中期後半期における屋外祭祀の展開—関東・中部地方の配石遺構の分析を通じて—」信濃第33巻4号 1981、は手もとになく読んでいないので、氏の考えを誤解しているかもしれない。もしそうであれば、氏におわび申し上げる次第である。
- 3 鈴木次郎 1983 「打製石斧」『縄文文化の研究 7』雄山閣、による。氏は、3形態の分類の基準の数値を示しておられるが、本分類ではこのような数値に基づく分類は行っていない。
- 4 山本直人 1985 「石川県における打製石斧について」『石川考古学研究会会誌』28号による。
- 5 麻柄一志 1984 「縄文時代の石器組成と植生—いわゆるナラ材文化論へのアプローチとして」『大境』第8号 富山考古学会、南久和 1984 「縄文時代後晩期の木器・骨角器及び北陸の石器組成の諸問題について」『金沢市新保本町チカモリ遺跡—石器編』金沢市教育委員会、による。
- 6 同 上
- 7 西野秀和氏より御教示いただいた。また、山本直人氏よりも同様な御教示をいただいた。

参 考 文 献

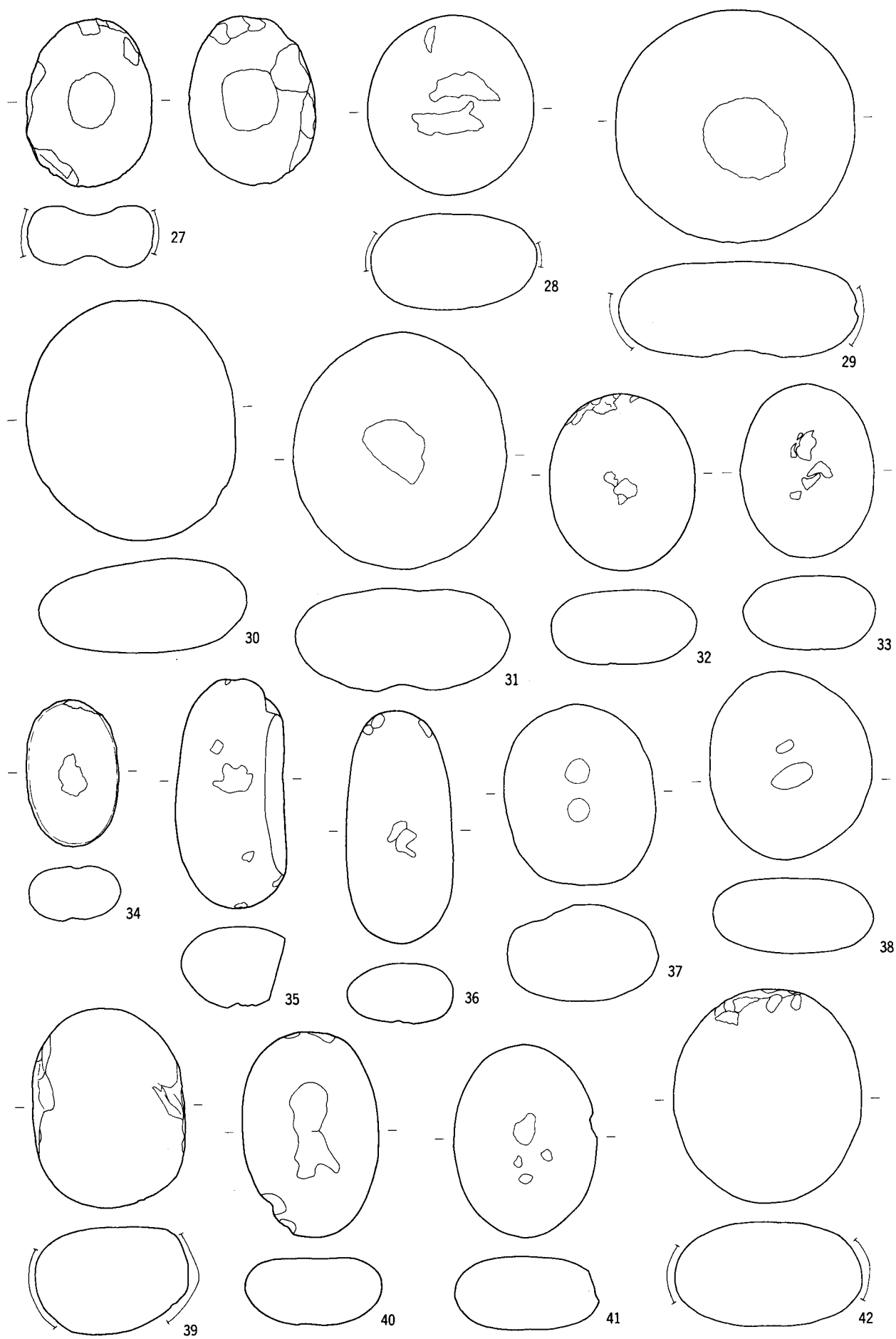
- 安達厚三 1983 「石皿」『縄文文化の研究 7』 雄山閣
- 池野正男 柳井睦 1973 「富山県立山町岩崎野遺跡」 富山県教育委員会
- 稲野彰子 1983 「岩版」『縄文文化の研究 9』 雄山閣
- 上田亮子 1981 「石器」『金沢市笠舞遺跡』 金沢市教育委員会
- 岡本 勇 1965 「労働用具」『日本の考古学 II』 河出書房新社
- 岡本孝之・河野喜映・鈴木次郎 1977 『尾崎遺跡』 神奈川県教育委員会
- 小田静夫 1976 「縄文中期の打製石斧」『どるめん』10 J I C C 出版局
- 金沢市教育委員会 1983 『金沢市新保本町チカモリ遺跡—石器編』
- 小島俊彰 1976 「加越能飛における縄文中期の石棒」『金沢美術工芸大学学報』第20号
- 小林達雄 1975 「方法論の問題 タイポロジー」『日本の旧石器文化 1』 雄山閣
- ” ・青木 豊・清水宣義 1982 『長者ヶ平遺跡』 新潟県佐渡郡小木町教育委員会
- 小林康男 1983 「組成論」『縄文文化の研究 7』 雄山閣
- 鈴木次郎 1983 「打製石斧」『縄文文化の研究 7』 雄山閣
- 鈴木道之助 1981 『図録・石器の基礎知識 III』 柏書房
- ” 1983 「石鏃」『縄文文化の研究 7』 雄山閣
- 砂田佳弘 1982 「打製石斧について」『東京都国分寺ヶ窪遺跡発掘調査報告III』 国分市教育委員会
- 田辺昭三編 1973 『湖西線関係遺跡調査報告書』 滋賀県教育委員会
- 辻森由美子 1983 「石製品」『野々市町御経塚遺跡』 野々市町教育委員会
- 中島栄一 1983 「石冠・土冠」『縄文文化の研究 9』 雄山閣
- 中島俊一 1977 『松任市長竹遺跡発掘調査報告』 石川県教育委員会
- 中島庄一 1983 「使用痕」『縄文文化の研究 7』 雄山閣
- 西野秀和 1978 『筋生遺跡』 辰口町教育委員会
- ” ・平田天秋 『鹿島町徳前C遺跡調査報告(IV)』 石川県立埋蔵文化財センター
- 野村 崇 1983 「石剣・石刀」『縄文文化の研究 9』 雄山閣
- 早川正一 1983 「磨製石斧」『縄文文化の研究 7』 雄山閣
- 麻柄一志 1984 「縄文時代の石器組成と植生—いわゆるナラ材文化論へのアプローチとして」『大境』第8号 富山考

古学会

- 宮下健司 1983 「有溝砥石」『縄文文化の研究 7』 雄山閣
矢島國雄・前山精明 1983 「石錘」『縄文文化の研究 7』 雄山閣
山本直人 1983 「加賀における縄文時代の網漁について」『北陸の考古学』 石川考古学研究会
" 1983 「石器」『野々市町御経塚遺跡』 野々市町教育委員会
" 1985 「石川県における打製石斧について」『石川考古学研究会会誌』28号 石川考古学研究会
山本暉久 1983 「石棒」『縄文文化の研究 9』 雄山閣
湯尻修平 1977 『加賀市横北遺跡発掘調査報告書』 石川県教育委員会
米沢義光・辻本 馨・市掘元一 1980 『曾福遺跡』 穴水町教育委員会
米田耕之助 1983 「土版」『縄文文化の研究 9』 雄山閣
渡辺 誠・片岡 肇・鈴木忠司 1979 『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』 平安博物館



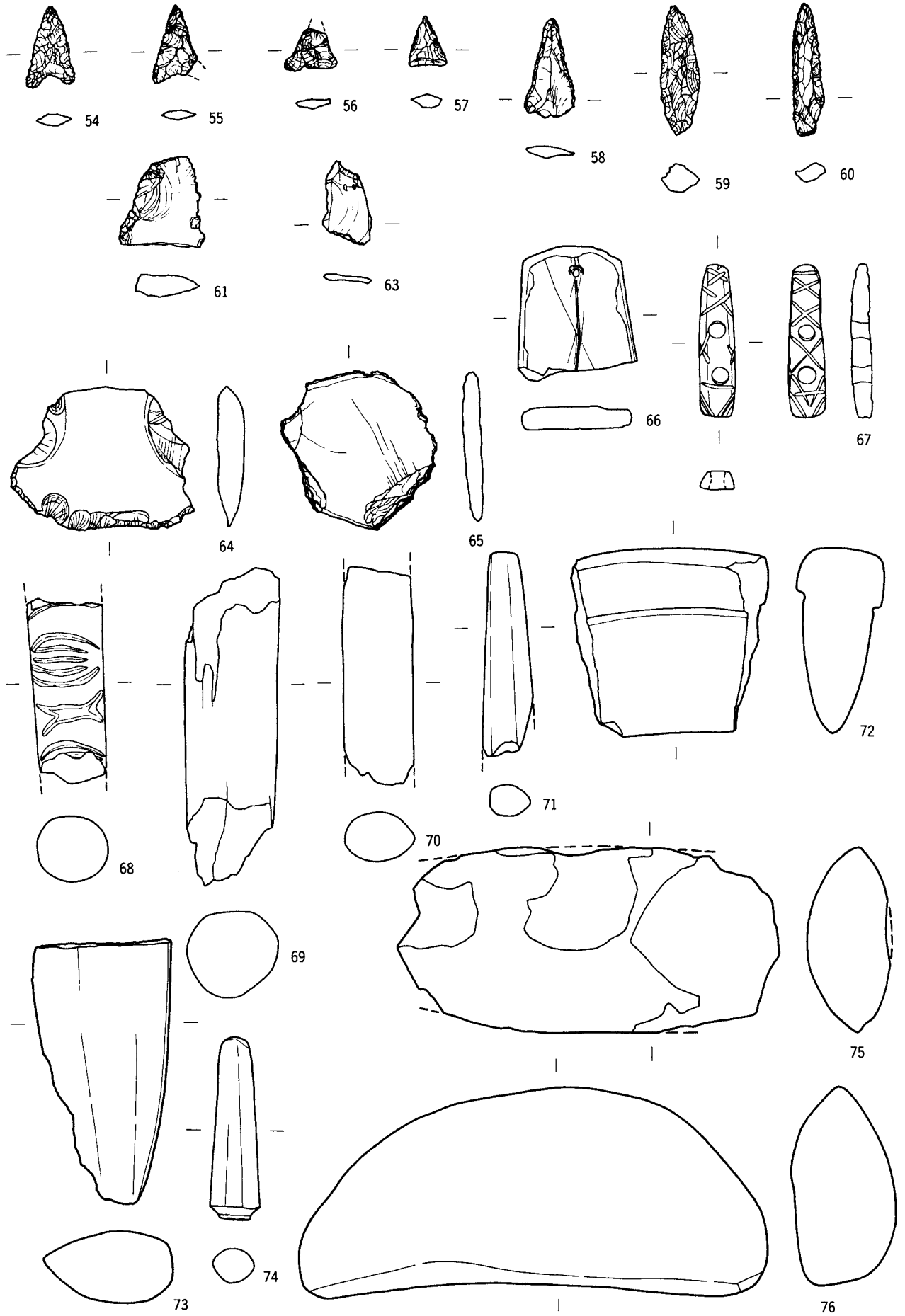
第 59 图 石器实测图(1) (1/3)



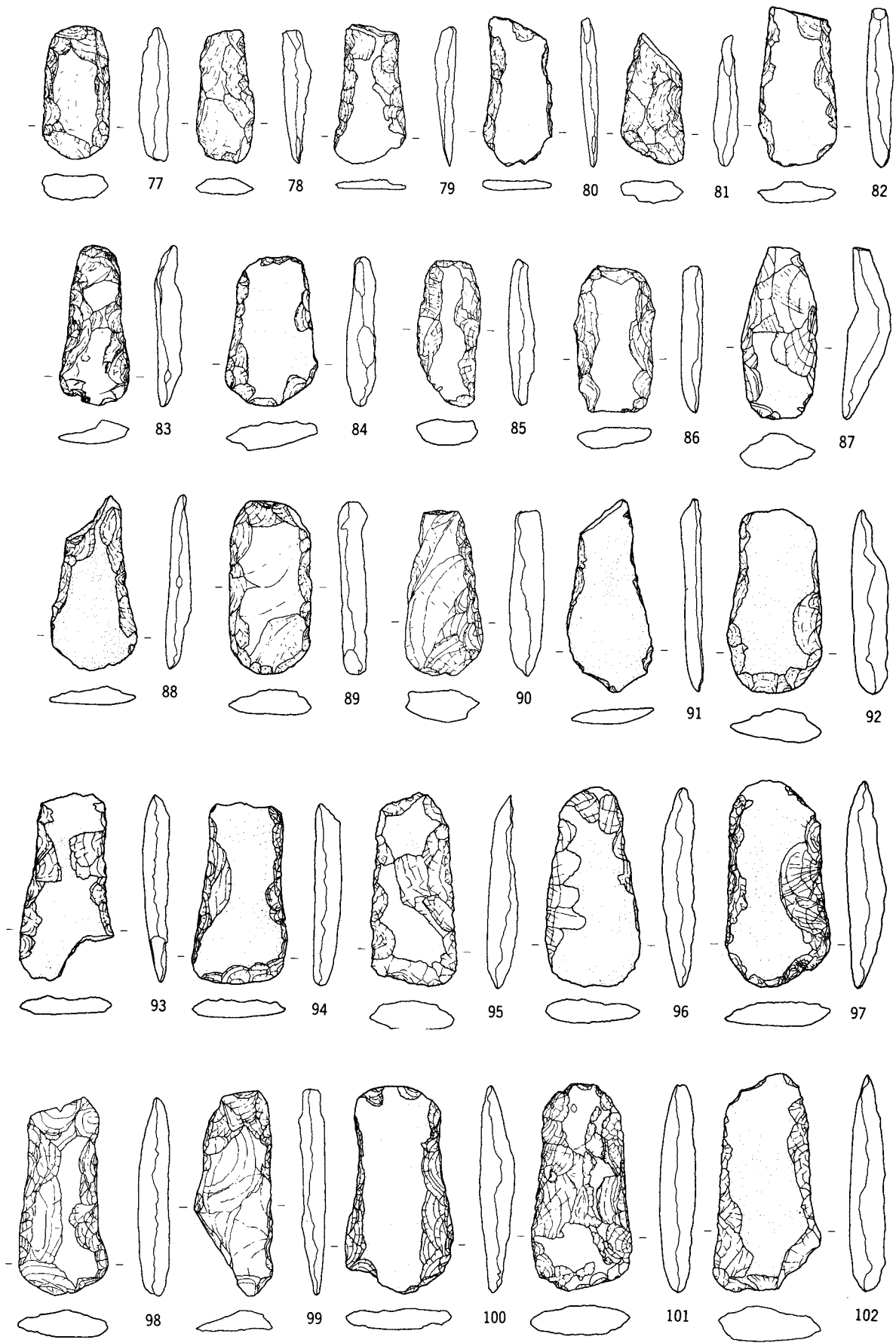
第 60 图 石器实测图(2) (1/3)



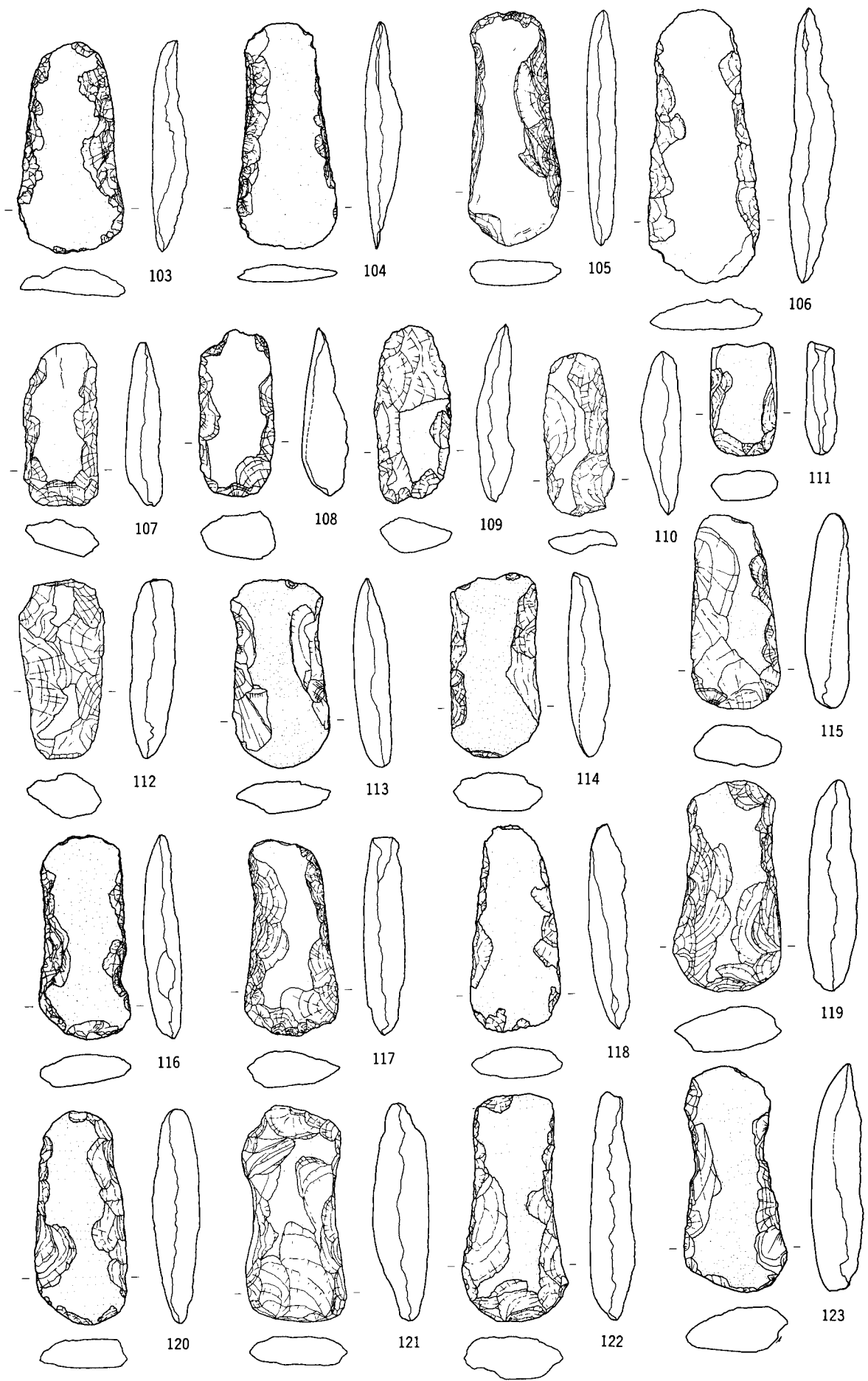
第61图 石器实测图(3) (1/3)



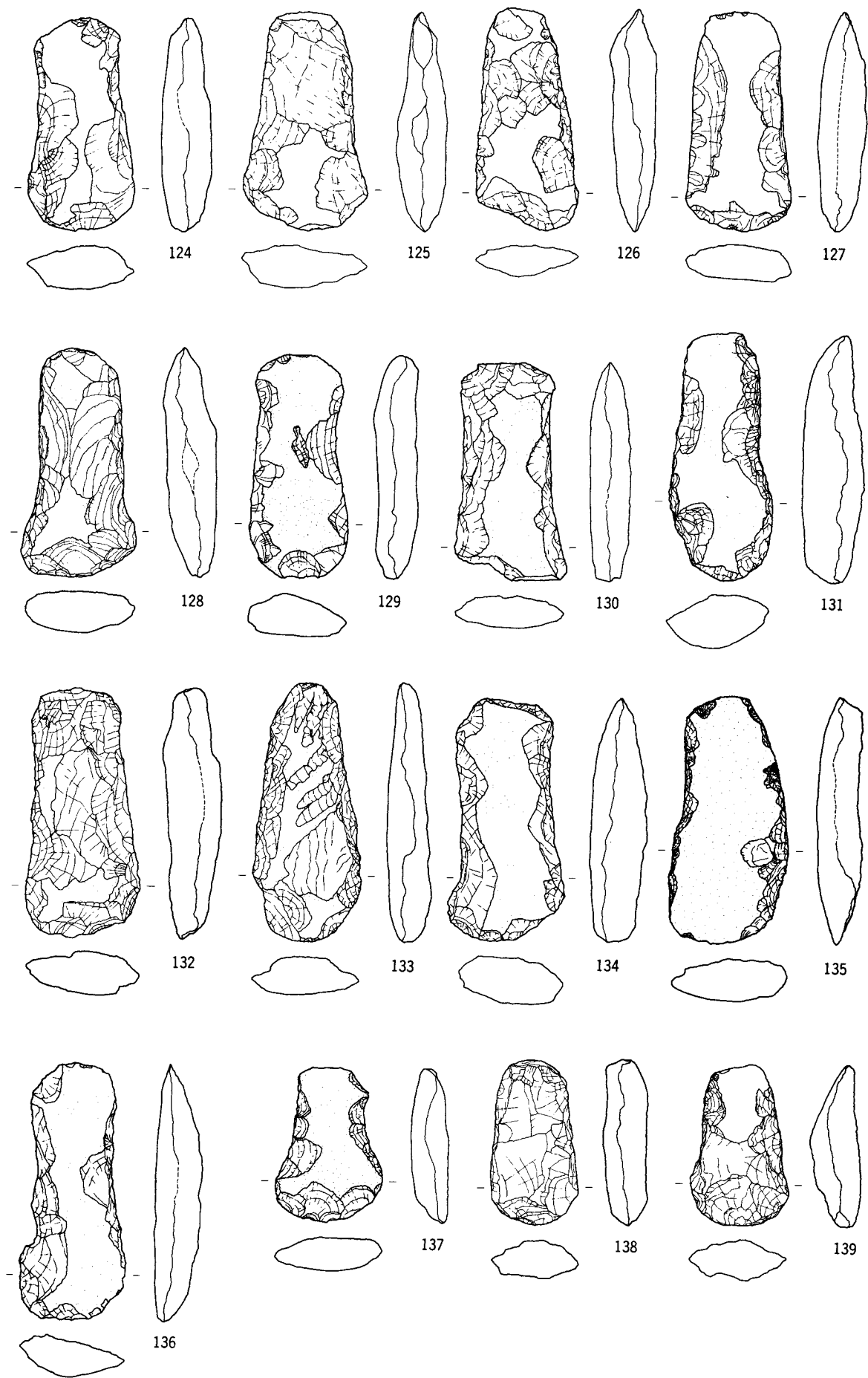
第 62 图 石器实测图(4) (1/2)



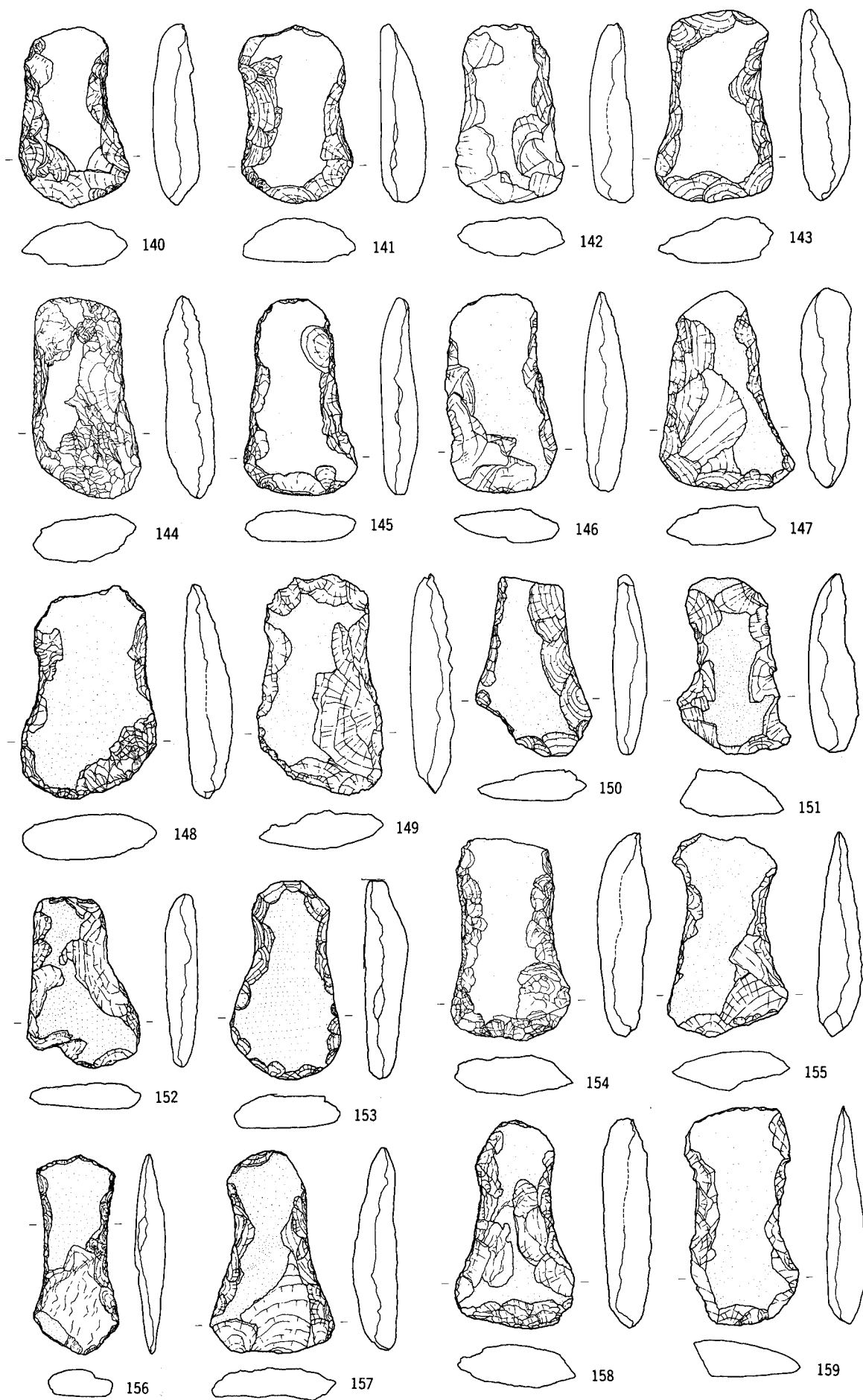
第 63 图 石器实测图(5) (1/4)



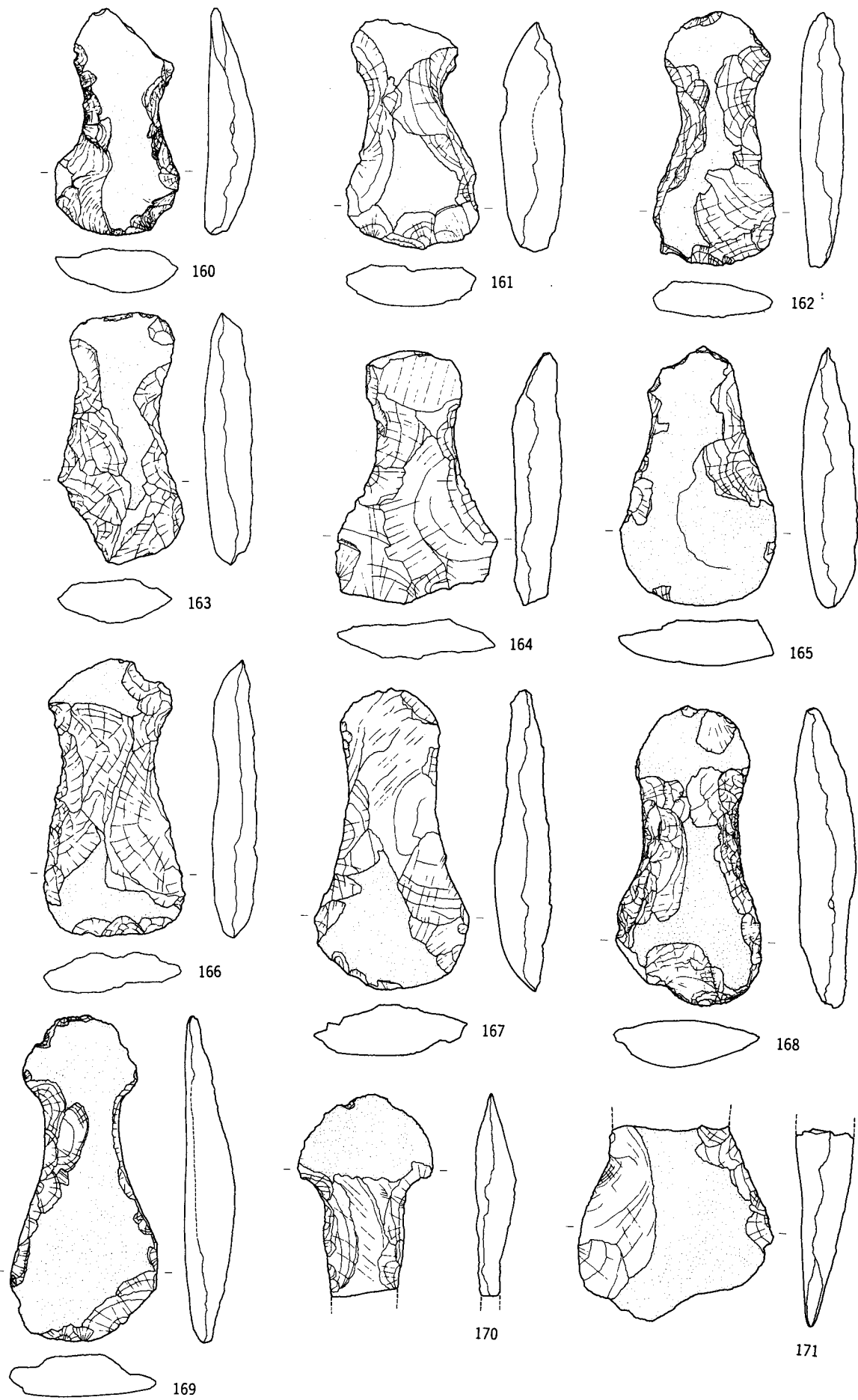
第 64 图 石器实测图(6) (1/4)



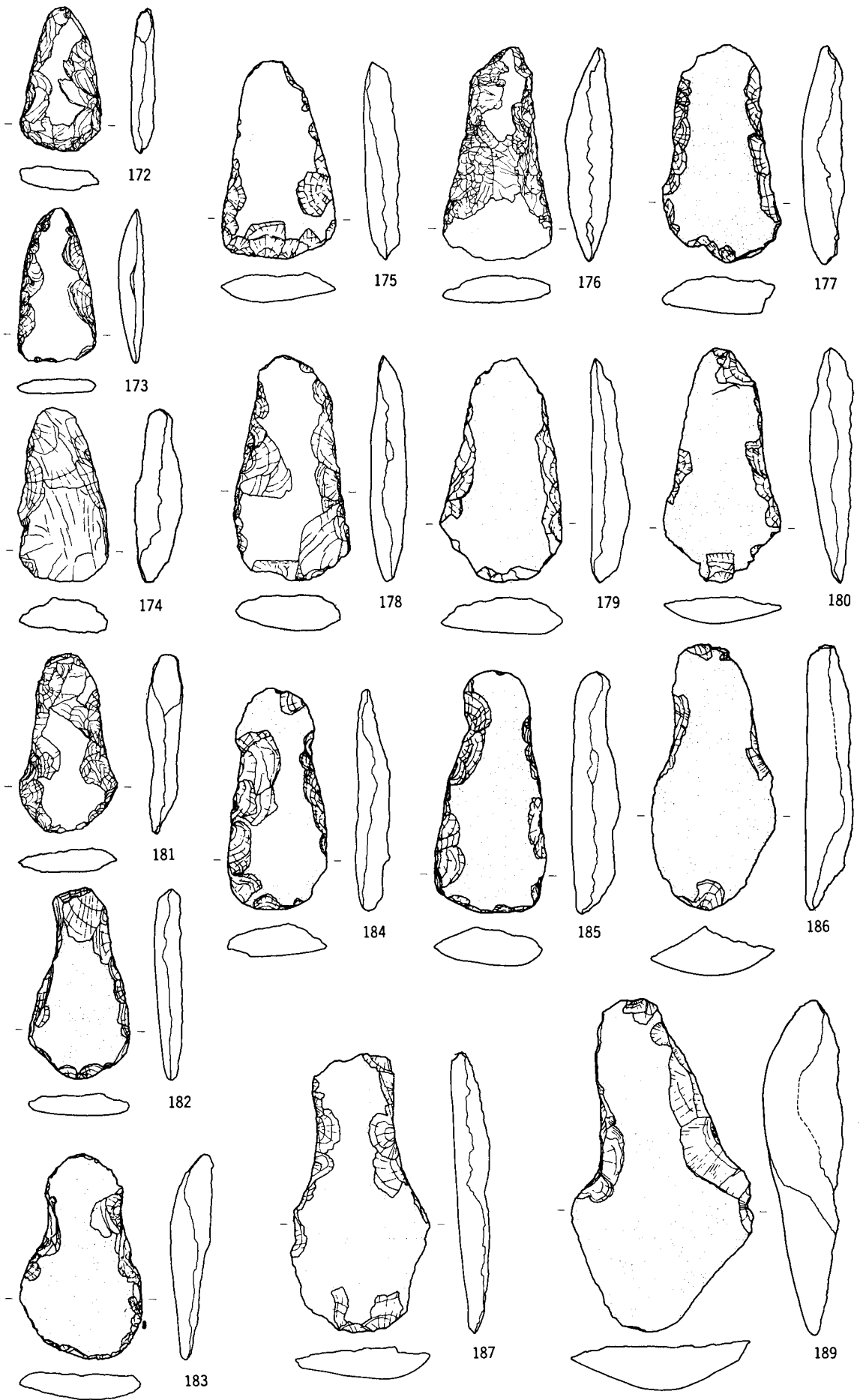
第 65 图 石器实测图(7) (1/4)



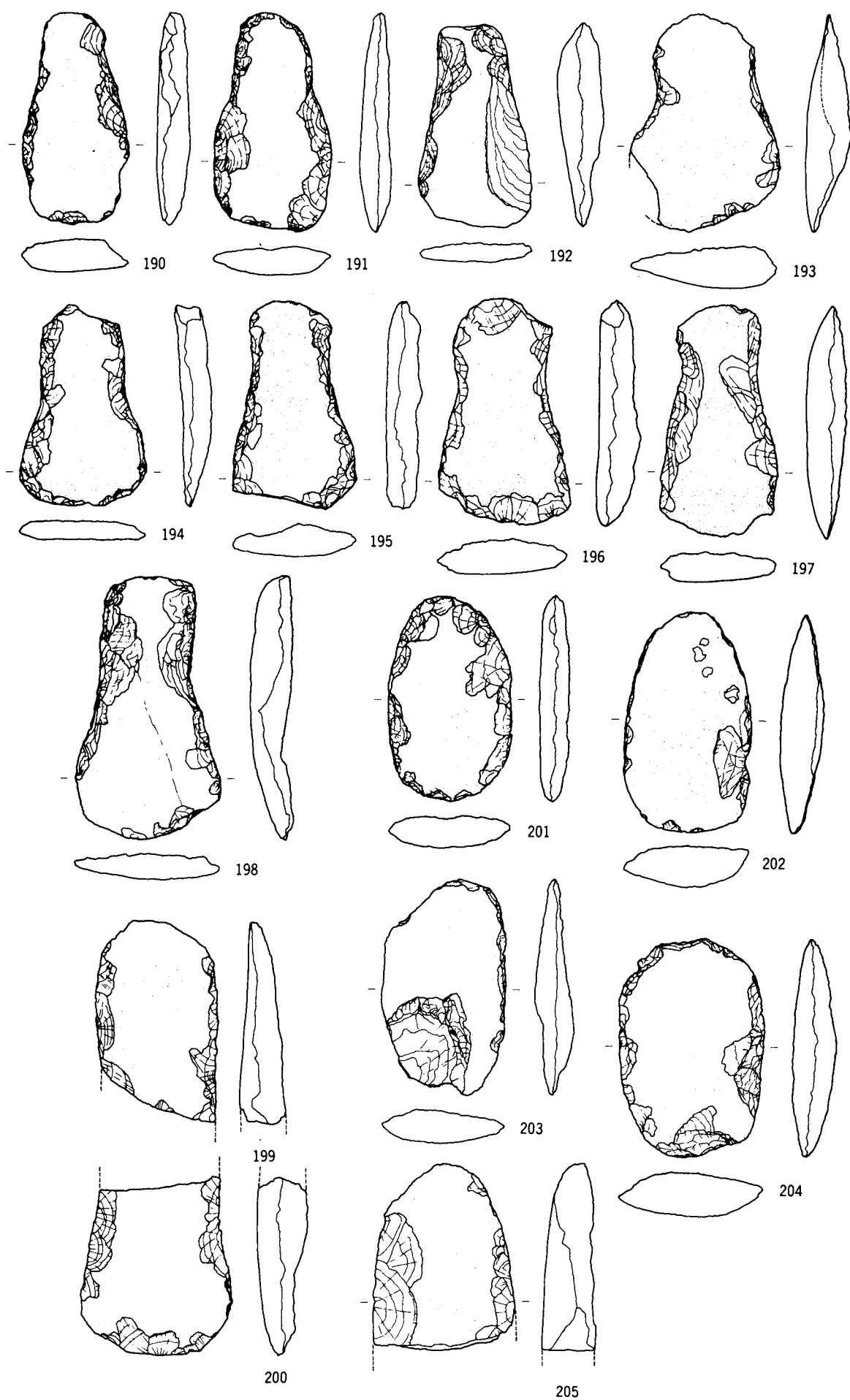
第 66 图 石器实测图(8) (1/4)



第 67 图 石器实测图(9) (1/4)



第 68 图 石器实测图(10) (1/4)



第 69 图 石器实测图(1) (1/4)

第4表 石器計測表 (単位、cm、g)

番号	石器名	分類	出土地点	長	幅	厚	重	遺存状態	石質	挿図番号	備考
1	磨製石斧		D 109	11.8	6.2	2.6	320	完形	濃飛流紋岩質凝灰岩	1	TH84
2	"		D 111	7.0	5.2	3.1	187		凝灰岩	2	TH109
3	"		D 107	5.7	3.3	1.9	31	完形	蛇紋岩質石灰岩	5	
4	"		E 107	6.6	4.4	2.4	120		" "	4	TH146
5	"		E 106	6.5	4.0	2.2	102		綠色片岩(綠泥石片岩)	3	
6	"		D 107	3.3	1.9	0.7	8	完形	結唱質石灰岩	6	
7	"		E 107	4.0	3.3	1.2	24		凝灰岩	7	P67
8	"		D 107	2.5	2.8	1.0	24		綠色片岩	8	P95
9	垂飾		D 110	5.7	1.3	0.7	8	完形	黑色頁岩	67	P15
10	磨石			15.9	9.2	4.7	10.50	"	中粒砂岩	43	TH150
11	不明		F109	11.4	5.8	3.7	273		凝灰質砂岩	52	
12	磨石			13.5	11.2	5.2	11.25	完形	石英粗面岩	30	南端
13	鏢節型石器		E 108	17.4	7.4	3.8	630		凝灰質砂岩	76	TH102
14	石鋸型石器		D 108	7.2	6.9	3.3	168		白色凝灰岩	72	
15	石刀		G 101	13.3	5.0	1.8	200		砂質頁岩	51	
16	"		D 104	8.0	2.7	1.8	62		黑色頁岩	70	TH22
17	"		E 106	6.9	1.9	1.4	24		"	74	
18	"		F 107	7.6	1.9	1.2	22		砂質頁岩	71	
19	"		D 106	6.9	2.9	2.4	75		"	68	
20	鏢節型石器		D 110	9.9	5.2	2.7	140		綠色凝灰岩	73	P14
21	岩版		D 104	5.0	4.5	0.9	28		凝灰質泥岩	66	TH99
24	石皿			17.9	24.8	6.0	5000		火山礫凝灰岩	53	
25	石刀		E 104	11.8	3.4	3.2	205		赤鉄鉱片岩	69	
26	磨石		表採	10.7	9.7	5.4	850	完形	中粒砂岩	26	中世墓北
27	"		"	11.8	10.3	5.9	1035	"	粗粒砂岩	42	"
28	"		G 103	12.9	13.2	5.3	1400	"	中粒砂岩	29	
29	"		表採	19.7	11.3	5.4	1720	"	"	47	中、北東
30	"		"	11.1	8.5	6.1	847	"	凝灰岩質砂岩	39	中、北西
31	"		"	13.5	9.7	6.3	1158	"	粗粒砂岩	44	"
32	"		"	13.3	8.5	4.7	880	"	"	45	"
33	"		"	10.1	8.3	5.3	585	"	"	37	中、北
34	"		E 101	13.1	12.0	5.7	1168	"	輝石角閃石安山岩	31	TH9
35	板状磨石		D 110	4.0	4.3	0.6	12	欠	白雲母結唱片岩	13	P13
36	"		E 108	6.2	4.5	0.4	16	"	"	12	P57
37	"		D 107	3.5	4.5	0.6	12	"	"	14	P96
38	"		"	3.0	3.4	0.6	7.5	"	"	19	"
39	"		D 110	10.0	5.5	0.6	38	"	"	11	P14
40	"		D 111	2.6	3.3	0.5	6	"	"	10	P5
41	"		E 105	3.3	3.4	0.3	4	欠	結唱片岩	15	
42	石錘		D 108	9.4	7.9	2.9	348	完形	石英安山岩質火山礫凝灰岩	18	P45
43	"		D 105	11.0	8.3	3.5	460	"	綠色凝灰岩	19	
44	"		表採	7.9	4.4	1.7	95	"	細粒砂岩	20	中、北西
45	"		D 105	7.0	3.3	1.8	70	"	閃綠岩	22	TH97
46	"		表採	11.1	8.4	2.6	405	"	石英安山岩	16	中、北西
47	"		E 106	9.9	7.5	2.7	283	"	細粒砂岩	17	
48	"		D 104	6.3	5.3	2.1	90	"	綠色凝灰岩質砂岩	21	TH96

番号	石器名	分類	出土地点	長	幅	厚	重	遺存状態	石質	挿図番号	備考
49	石皿		D 107	105	9.4	3.5	437	欠	粗粒砂岩	49	P95
51	磨石		表採	8.2	5.2	3.0	190	完形	粗粒砂岩	34	
52	"		E 102	8.4	6.7	3.3	267	欠	"	46	P134
53	"		表採	9.8	8.4	4.3	580	完形	"	25	中、北東
54	"		"	10.8	8.0	4.2	523	欠	中粒砂岩	41	"
55	"		D 108	10.4	8.9	4.2	565	完形	"	38	P40
56	"		G 103	12.7	5.8	4.5	470	欠	細粒砂岩	35	
57	"		D 104	12.9	6.0	3.4	345	"	中粒砂岩	36	TH101
58	"		D107	12.1	5.6	2.6	215	"	凝灰質砂岩	48	
59	"		表採	11.5	7.6	3.8	480	"	中粒砂岩	40	中、北西
60	"		E 106	9.8	8.1	4.1	487	完形	"	32	
61	"		表採	8.6	7.7	4.3	405	"	"	24	中、南西
62	"		"	9.9	7.0	3.4	290	"	軽石凝灰岩	27	中、北東
63	"		"	8.1	8.0	4.4	400	"	粗粒砂岩	23	"
64	"		E 104	9.9	9.3	5.3	700	"	"	28	
65	"		D 108	9.6	7.4	4.0	450	"	中粒砂岩	33	P42
66	スクレーパー		表採	5.2	6.5	1.0	45	"	輝石安山岩	64	中、北東
67	板状磨石		G 94	5.9	5.8	0.7	32	"	黒色頁岩	65	2号石室
68	スクレーパー		D 105	3.4	3.1	0.9	11	"	輝石安山岩	61	P107
69	石鏃		E 111	3.0	1.8	0.4	1.6	"	"	54	
70	"		D 109	3.6	1.8	0.4	2.6	"	流紋岩	58	P27
71	"		D 106	4.8	1.5	1.0	7.4	欠	黒色頁岩	59	TH68
72	"		E 105	5.0	1.0	0.7	3.5	"	フリント	60	TH137
73	"		D 105	2.6	1.5	0.3	1.2	"	玉髓	55	TH117
74	スクレーパー		F 105	2.8	1.8	0.3	2.8	完形	黒色頁岩	63	
76	石鏃		E 105	1.8	1.4	0.5	1.0	"	フリント	57	
77	"		D 107	1.5	2.0	0.4	0.9	欠	"	56	TH45
78	不明		"	14.2	6.9	3.0	390	"	白色凝灰岩	75	TH34
79	打製石斧	B-1	D 108	12.7	7.4	3.0	325	完形	変朽安山岩	140	P42
80	"	B-1	表採	12.5	7.9	3.2	365	"	粗粒砂岩	141	中、北西
81	"	A-1	E 103	16.5	6.5	2.1	280	完形	石英安山岩	105	TH2
82	"	C-3	F 104	14.2	6.0	2.2	160	"	角閃石安山岩質凝灰岩	156	
83	"	B-2	D 106	15.8	8.8	3.2	430	"	変朽安山岩	160	TH65
84	"	A-2	E 106	17.5	8.1	3.1	530	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩	135	
85	"	C-1	D 106	15.6	7.8	2.6	360	"	輝石角閃石安山岩	178	TH50
86	"	"	表採	15.5	8.5	2.7	400	"	玢岩	179	中、北東
87	"	A-1	"	19.5	7.9	2.8	500	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩	106	中
88	"	A-2	E 105	15.2	7.2	3.3	400	"	変朽安山岩	126	TH130
89	"	"	表採	15.5	7.4	3.3	460	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩	127	中、南西
90	"	A-1	D 108	11.5	5.5	2.4	160	"	凝灰岩	90	TH78
91	"	"	D 105	12.0	5.2	2.9	175	"	角閃石安山岩質凝灰岩	87	TH16
92	"	A-2	E 109	11.6	4.8	2.8	170	"	"	110	P32
93	"	A-1	E 105	10.5	6.4	2.0	150	"	石・安・火山礫凝灰岩	84	TH122
94	"	"	表採	9.3	4.6	2.1	125	"	珪化凝灰岩	77	中、南東
95	"	A-2	"	8.0	4.8	2.3	125	欠	中粒砂岩	111	中
96	"	B-1	D 107	11.4	6.8	3.4	270	完形	石・安・凝灰岩	139	TH35

番号	石器名	分類	出土地点	長	幅	厚	重	遺存状態	石質	挿図番号	備考
97	打製石斧	B-1	表採	11.7	6.2	3.0	295	完形	角・安・凝灰岩	138	中、南東
98	"	A-1	E 106	12.3	5.8	2.2	215	"	角・輝石安山岩	95	
99	"	C-2	D 108	13.4	7.1	1.8	185	"	綠色凝灰岩	182	TH81
100	"	"	D107	12.7	6.9	2.4	195	"	流紋岩質火山礫凝灰岩	181	P92
101	"	A-1	F 105	12.6	6.6	1.9	195	"	輝石安山岩	94	
102	"	"	D 106	13.8	6.3	2.2	200	"	輝石角閃石安山岩	98	TH18
103	"	C-1	D 104	10.2	5.6	1.6	115	"	輝石安山岩	172	TH12
104	"	A-1	表採	13.8	6.5	2.1	245	"	閃綠岩	96	中南東
105	"	"	"	12.8	6.5	2.5	225	欠	綠色凝灰岩	92	中、北東
106	"	"	D 107	12.0	5.7	2.1	175	完形	粗粒砂岩	89	TH43
107	"	"	E 107	14.4	5.5	1.8	130	欠	綠色凝灰岩	99	
108	"	C-1	D 104	10.7	5.5	1.8	105	完形	角閃石輝石安山岩	173	TH95
109	"	A-1	D 105	12.2	6.0	1.7	115	欠	片麻岩	88	P 110
110	"	"	E 106	10.2	5.6	1.5	110	完形	片麻岩(優白部)	86	
111	"	"	D 105	11.2	4.9	1.6	85	"	輝石安山岩	83	TH55
112	"	"(?)	D 112	9.2	4.4	1.7	60	欠	"	81	
113	"	"(?)	E 94	9.3	4.0	2.0	75	"	"	78	
114	"	"(?)	D 106	13.4	6.0	1.4	100	"	安山岩質火山礫凝灰岩	91	TH143
115	"	"(?)	D 107	11.0	5.4	1.8	120	"	輝石角閃石安山岩	82	TH36
116	"	"(?)	"	14.0	6.6	1.8	150	"	安山岩	93	TH74
117	"	"(?)	D 104	10.4	4.8	1.3	60	"	綠色凝灰岩	80	TH95
118	"	"	表採	10.1	4.5	1.9	100	完形	流紋岩質凝灰岩	85	中、北東
119	"	"(?)	E 106	9.7	5.0	1.5	60	欠	安山岩	79	
120	"	C-3	表採	15.4	8.4	2.2	320	完形	片麻岩(優白部)	191	中、南東
121	"	B-2	"	13.8	8.0	2.6	325	"	綠色凝灰質砂岩	145	2区
122	"	C-3	D 108	16.2	7.7	2.4	320	"	石・安・火山礫凝灰岩	190	TH46
123	"	A-2	E 106	18.3	7.5	3.0	500	"	片麻岩(優黒部)	133	TH139
124	"	C-1	F 110	16.3	8.1	2.8	360	"	火山礫凝灰岩	180	古路
125	"	A-1	D 107	14.4	7.3	2.6	300	"	片麻岩(優黒部)	97	TH75
126	"	C-1	D 106	13.7	7.9	2.4	270	"	輝石安山岩	175	TH73
127	"	A-1	"	15.0	7.5	2.6	295	"	安山岩質角礫凝灰岩	103	TH67
128	"	A-2	D 111	15.4	8.7	3.6	530	"	綠色凝灰質砂岩	125	TH107
129	"	C-1	E 102	15.0	7.7	3.3	320	"	安山岩質凝灰岩	176	TH1
130	"	A-2	表採	15.0	7.5	3.5	490	"	輝石安山岩	124	中、南東
131	"	C-1	F 110	16.9	7.9	3.4	500	"	珪化凝灰岩	185	
132	"	B-1	表採	15.2	8.7	3.0	445	"	"	149	中
133	"	"	"	15.1	9.5	3.2	565	"	粗粒砂岩	148	中、北西
134	"	A-2	E 104	17.5	7.2	4.4	585	"	輝石安山岩	131	TH121
135	"	"	D 106	12.8	6.1	3.0	350	"	片麻岩	112	TH32
136	"	C-1	E 107	12.1	6.2	3.3	245	"	細粒砂岩	174	TH149
137	"	A-2	D 102	11.9	5.4	3.3	240	"	粗粒砂岩	108	TH5
138	"	"	表採	11.5	5.3	2.5	200	"	輝綠岩	107	中、南西
139	"	"	"	13.8	6.3	3.1	350	"	中粒砂岩	115	中
140	"	"	"	14.5	6.4	2.7	330	"	玢岩	118	中、南西
141	"	"	E 107	12.2	5.1	2.5	200	"	珪化凝灰岩	109	TH147
142	"	"	G 103	13.1	6.4	3.0	3.0	"	火山礫凝灰岩	114	

番号	石器名	分類	出土地点	長	幅	厚	重	遺存状態	石質	挿図番号	備考
143	打製石斧	A-2	E 106	15.4	6.6	3.4	400	完形	石英安山岩	120	P89
144	"	B-1	G 103	12.6	7.7	3.9	290	"	細粗砂岩	142	
145	"	B-2	D 105	12.5	7.2	3.4	310	"	"	151	TH20
146	"	A-2	G 105	13.4	6.9	2.5	290	"	"	113	
147	"	B-1	D 104	13.0	8.2	3.0	380	"	玢岩	146	TH98
148	"	A-2	G 103	15.7	7.0	3.0	445	"	安山岩	129	
149	"	C-3	D 109	16.6	8.2	2.8	390	"	粗粒砂岩	197	P36
150	"	C-2	E 104	18.6	8.6	3.3	520	"	玢岩	186	P138
151	"	A-2	表採	17.7	8.0	3.8	600	"	石英粗面岩質火山礫凝灰岩	132	中、北西
152	"	B-2	G 106	17.8	8.5	3.0	500	"	珪化綠色凝灰岩	162	古路
153	"	C-1	表採	15.2	7.8	2.8	400	"	火山礫凝灰岩	177	中、南西
154	"	B-2	D 106	14.0	9.0	4.4	595	"	輝石安山岩	161	
155	"	"	D 107	21.0	10.8	3.8	860	"	片麻岩	167	TH42
156	"	C-3	D 111	16.2	9.2	3.0	525	"	火山礫凝灰岩	196	P4
157	"	A-2	E 105	16.2	7.3	3.7	460	"	安山岩	123	TH127
158	"	"	表採	16.2	8.2	3.5	520	"	綠色凝灰岩	128	中、南東
159	"	"	E 106	15.8	7.7	3.2	440	"	"	122	TH140
160	"	"	D 106	15.6	7.3	4.1	540	"	粗粒砂岩	121	
161	"	B-1	E 106	14.1	9.5	3.3	440	"	石・安・火山礫凝灰岩	147	
162	"	"	表採	13.4	8.4	3.5	450	"	粗粒砂岩	143	中、北西
163	"	B-2	D 105	14.2	8.2	3.1	380	"	綠色凝灰岩	155	TH57
164	"	A-2	F 108	17.0	7.2	3.8	625	"	輝石角閃石安山岩	134	古路
165	"	B-2	F 104	15.5	8.1	3.2	565	欠	角閃石安山岩質凝灰岩	163	
166	"	"	F 107	19.4	9.6	3.0	690	完形	角閃石輝石安山岩	166	
167	"	"	F 106	15.3	7.4	2.8	360	"	粗粒砂岩	159	
168	"	"(?)	表採	12.7	8.2	2.4	240	欠	安山岩質火山礫凝灰岩	150	中、北東
169	"	B-1	D 105	10.9	7.6	2.7	240	完形	粗粒砂岩	137	TH13
170	"	B-2	D 106	14.4	8.8	3.2	360	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩	157	TH72
171	"	"	F 109	14.1	7.8	3.1	370	"	麥朽安山岩	153	古路
172	"	C-2	E 106	15.5	7.0	2.4	310	"	玢岩	184	
173	"	D(?)	D 106	13.5	10.1	3.8	630	欠	石英安山岩質火山礫凝灰岩	205	P101
174	"	B-2	表採	13.5	13.2	4.0	630	"	石英安山岩質凝灰岩	171	
175	"	C-3	D 109	15.7	10.3	3.1	440	"	粗粒砂岩	193	P35
176	"	C-2	D 107	23.8	12.5	5.4	1230	完形	石英安山岩質火山礫凝灰岩	189	TH77
177	"	D	D 109	15.7	9.0	2.6	320	"	粗粒砂岩	203	TH83
178	"	"	D 106	15.7	8.9	3.0	470	"	"	202	TH69
179	"	"	D 107	15.7	10.7	3.1	560	"	"	204	P97
180	"	"	D 111	14.8	9.0	2.1	370	"	"	201	
181	"	C-3	E 105	12.0	10.8	3.6	550	欠	火山礫凝灰岩	200	TH123
182	"	B-2		18.2	10.8	3.8	740	完形	"	165	2区
183	"	C-3	F 104	13.4	8.7	3.1	430	欠	石英安山岩質凝灰岩	199	
184	"	"		14.1	10.4	2.8	560	完形	安山岩質凝灰岩	198	18トレ
185	"	B-2	D 107	21.2	10.1	3.9	840	"	玢岩	168	P97
186	"	"	E 107	14.3	9.5	2.9	270	"	"	170	P67
187	"	C-2		19.7	9.5	2.4	460	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩	187	18トレ
188	"	B-2		22.9	10.2	3.5	805	"	綠色凝灰岩	169	2区

番号	石器名	分類	出土地点	長	幅	厚	重	遺存状態	石質	挿図番号	備考
189	打製石斧	B-2	D 106	17.7	11.4	3.2	650	完形	"	164	TH19
190	"	C-3	E 84	14.5	9.1		330	"	石英安山岩質凝灰岩	194	
191	"	B-2	D 108	14.9	8.4	4.3	450	"	中粒砂岩	158	TH49
192	"	C-2	表採	14.6	8.5	2.8	340	"	流紋岩質火山礫凝灰岩	183	中、北西
193	"	B-2	G 104	14.5	8.4	3.7	550	"	安山岩質火山礫凝灰岩	154	
194	"	C-3	D 1111	15.0	8.9	2.5	390	欠	石英安山岩質火山礫凝灰岩	195	TH109
195	"	A-2	E 106	15.2	7.6	2.8	480	"	"	130	
196	"	"	F 109	13.8	6.7	2.9	340	完形	"	117	
197	"	B-1	D 106	14.3	7.2	3.4	415	"	石英粗面岩質火山礫凝灰岩	144	TH64
198	"	A-2	F 110	14.7	6.5	2.5	320	"	細粒砂岩	116	古路
199	"	"	D 107	18.2	7.4	3.3	515	"	珪化綠色凝灰岩	136	TH90
200	"	A-1	"	15.2	7.0	2.4	340	"	綠色凝灰岩	102	
201	"	A-1	D 105	16.1	7.2	2.7	260	完形	石英安山岩	104	TH59
202	"	"	F 106	14.5	6.9	2.5	315	"	變朽安山岩	101	
203	"	"	E 106	14.5	7.7	2.5	280	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩	100	
204	"	C-3	E 100	14.6	8.2	3.2	345	"	玢岩	192	
205	"	B-2	表採	12.1	8.0	2.2	220	欠	變朽安山岩	152	中、北西
206	"	A-2	"	15.0	7.7	3.5	490	完形		119	中、南東
207	"	A-1	E 106	15.4	8.0	2.4	450	"	石英安山岩		
208	"	B-1	D 107	14.8	8.6	3.1	540	欠	流紋岩質火山礫凝灰岩		TH39
209	"	A-1	G 105	10.2	6.7	2.6	250	"	角閃石輝石安山岩		溝
210	"	不明	E 107	11.4	6.7	2.6	260	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩		
211	"	C-1	E 106	10.3	7.4	2.3	200	"	石英安山岩		
212	"	A-2	表採	10.9	7.0	2.6	310	"	角閃石輝石安山岩		中、北西
213	"	B-1	"	12.8	7.1	3.4	420	完形	安山岩		"
214	"	不明	E 104	9.0	7.8	3.0	340	欠	石英安山岩		TH128
215	"	A-2	表採	14.0	5.4	2.8	310	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩		中、南東
216	"	"(?)	D 106	11.3	7.0	3.6	390	"	"		TH25
217	"	不明	D 107	8.2	6.5	3.2	250	"	"		TH38
218	"	A-2	F 107	10.1	6.2	2.9	310	"	"		TH155
219	"	"(?)	表採	8.4	6.5	4.0	290	"	角閃石安山岩		
220	"	"(?)	D 106	10.7	5.7	3.4	280	"	玢岩		TH31
221	"	"(?)	E 106	6.6	6.8	3.1	200	"	石英安山岩質凝灰岩		TH141
222	"	"(?)	表採	7.8	6.2	3.5	260	"	變朽戸山岩		中、北西
223	"	"(?)	F 109	9.3	5.9	2.4	210	"	火山礫凝灰岩		
224	"	"(?)	"	9.8	6.7	3.4	320	"	玢岩		
225	"	A-1	F 105	8.2	6.2	2.5	200	"	砂岩		
226	"	"(?)	F 107	8.5	5.8	2.3	160	"	閃綠岩		
227	"	"	G 105	14.4	7.0	2.6	300	"	輝石安山岩		
228	"	"	D 111	14.5	6.5	2.0	250	完形	石英安山岩質火山礫凝灰岩		P4
229	"	B-2	表採	10.7	8.5	3.9	420	欠	"		中、北西
230	"	"(?)		12.4	10.1	2.5	340	"	"		2区
231	"	"(?)	表採	10.5	11.7	2.9	440	"	角閃石輝石安山岩		
232	"	"(?)	F 107	11.7	11.4	2.8	420	"	安山岩		TH153
233	"	"	D 108	12.0	11.2	3.0	370	"	粗粒砂岩		TH48
234	"	"	D 103	17.5	9.1	3.1	580	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩		TH94

番号	石器名	分類	出土地点	長	幅	厚	重	遺存状態	石質	挿図番号	備考
235	打製石斧	B-1	E 105	13.5	7.3	4.4	530	完形	変朽安山岩		TH133
236	"	不明	表採	7.4	6.2	1.7	120	欠	粗粒砂岩		中、北西
237	"	B-2?	"	12.1	8.6	2.6	440	"	"		"
238	"	不明	"	7.4	8.4	2.4	160	"	輝石安山岩		中、北東
239	"	"	"	3.9	7.6	2.1	600	"	"		"
240	"	"	E 106	9.3	2.8	2.3	160	"	粗粒砂岩		
241	"	B-2	E 107	9.7	10.0	4.3	420	欠	珪化凝灰岩		
242	"	"(?)	D 110	8.9	7.5	2.8	180	"	石英安山岩質凝灰岩		P14
243	"	"(?)	D 108	8.9	6.6	3.0	180	"	凝灰質砂岩		TH47
244	"	不明	E 106	6.2	7.2	1.8	100	"	粗粒砂岩		
245	"	"	表採	5.1	8.8	2.1	140	"	石英安山岩質凝灰岩		古路
246	"	"	"	8.8	7.0	2.4	200	"	変朽安山岩		中、南西
247	"	"	"	10.8	9.2	1.9	230	"	粗粒砂岩		中、北西
248	"	"	"	8.1	5.8	1.6	100	"	"		中、北東
249	"	"	G 105	9.6	8.8	3.4	310	"	火山礫凝灰岩		
250	"	"	E 107	5.6	4.9	0.7	30	"	変朽安山岩		P65
251	"	B-2	G 106	7.9	9.9	2.4	260	"	輝石角閃石安山岩		古路
252	"	"	F 106	12.3	7.7	2.7	280	完形	火山礫凝灰岩		P84
253	"	"	D 104	7.7	6.0	2.4	160	欠	"		
254	"	A2	E 105	12.3	5.5	2.4	170	"	輝緑岩		TH134
255	"	B-2	表採	11.7	7.3	1.2	120	"	輝石安山岩		中、北西
256	"	不明	D 107	5.8	4.8	2.7	80	"	"		TH86
257	"	"	D 111	10.7	5.8	1.8	150	"	"		TH108
258	"	B-2	D 106	8.2	6.4	2.3	120	"	火山礫凝灰岩		
259	"	A-1	表採	8.6	5.8	2.1	140	"	輝石安山岩		中、北西
260	"	不明	D 106	7.5	5.8	2.2	100	"	石英安山岩		
261	"	"	"	6.4	7.6	2.2	140	"	中粒砂岩		
262	"	"	D 111	8.5	4.6	1.6	80	"	輝石安山岩		TH116
263	"	"	F 104	6.0	5.7	1.5	70	"	細粒砂岩		
264	"	"	D 106	10.4	6.1	1.9	150	"	緑色凝灰岩		TH24
265	"	"	D 107	8.1	7.4	2.3	200	"	石英安山岩		
266	"	"	E 105	8.2	5.4	1.9	120	"	輝石角閃石安山岩		
267	"	"	D 105	7.5	6.1	2.1	130	"	火山礫凝灰岩		TH53
268	"	"	D 106	4.3	6.9	1.2	50	"	輝石安山岩		TH63
269	"	"	表採	9.4	5.8	2.4	160	"	凝灰岩		中、北西
270	"	"	"	8.1	6.4	2.8	200	"	火山礫凝灰岩		"
271	"	A-1	"	9.3	4.8	1.1	60	"	輝石安山岩		"
272	"	不明	"	9.4	6.6	2.8	210	"	石英安山岩質凝灰岩		"
273	"	B-2	"	8.1	6.5	2.5	160	"	細粒砂岩		中、南東
274	"	A-1	D 105	8.7	5.2	1.0	60	"	"		
275	"	B-2	表採	7.7	5.9	2.5	150	"	片麻岩		中、北西
276	"	不明	"	5.5	5.0	2.2	80	"	火山礫凝灰岩		中、北東
277	"	"	"	5.6	6.4	2.2	90	"	角閃石安山岩		中、北西
278	"	"	"	6.8	4.8	1.5	60	"	細粒砂岩		中
279	"	"	D 106	5.0	7.1	1.5	50	"	"		
280	"	"	G 107	9.2	5.6	1.2	90	"	"		古路

番号	石器名	分類	出土地点	長	幅	厚	重	遺存状態	石質	挿図番号	備考
281	打製石斧	A-2	G 104	10.7	6.0	2.2	210	完形	玢岩		
282	"	B-2	D 107	12.6	6.9	2.2	200	欠	火山礫凝灰岩		
283	"	"(?)	E 108	11.3	8.6	3.0	400	"	石英粗面岩		P46
284	"	A-2	表採	11.1	6.2	2.4	240	完形	安山岩		中、北西
285	"	不明	"	9.1	7.0	2.5	190	欠	細粒砂岩		"
286	"	"	"	10.6	7.4	2.6	210	"	火山礫凝灰岩		"
287	"	B-2	F 104	11.7	8.8	3.3	460	"	細粒砂岩		
288	"	A-1	D 105	13.9	7.2	2.9	320	完形	火山礫凝灰岩		P112
289	"	B-2	D 107	12.1	8.3	3.8	470	欠	粗粒砂岩		TH41
290	"	"(?)	F 106	10.1	8.5	2.7	320	"	珪化凝灰岩		
291	"	"(?)	表採	11.7	8.5	3.4	350	"	玢岩		中、北東
292	"	"(?)	E 106	10.3	8.7	3.2	360	"	中粒砂岩		TH141
293	"	不明	"	10.3	8.6	3.6	380	"	火山礫凝灰岩		P91
294	"	"	E 105	11.6	8.3	3.3	360	"	綠色凝灰岩		TH124
295	"	C-3	D 109	13.8	4.4	3.2	490	"	安山岩質火山礫凝灰岩		TH82
296	"	A-1	F 109	13.7	7.1	2.9	280	完形	安山岩		
297	"	C-3	D 106	12.4	9.2	3.6	470	欠	粗粒砂岩		TH30
298	"	"	F 104	7.7	8.8	2.3	220	"	石英安山岩質凝灰岩		
299	"	"	D 105	9.0	8.9	3.2	350	"	火山礫凝灰岩		TH56
300	"	"	F 106	7.9	6.8	2.0	150	"	角閃研安山岩質凝灰岩		
301	"	"	E 106	9.1	9.9	2.3	270	"	玢岩		TH142
302	"	"	F 104	8.1	6.8	1.9	110	"	輝石安山岩		古路
303	"	"	D 106	10.9	8.1	2.7	310	"	變朽安山岩		
304	"	"	D 108	7.6	7.0	2.3	180	"	"		TH79
305	"	"	E 105	12.2	7.3	2.5	290	"	"		TH79
306	"	"	D 105	5.7	5.8	1.3	50	"	流紋岩質凝灰岩		TH54
307	"	"	"	8.2	7.7	3.2	240	"	玢岩		2区
308	"	"	D 106	11.3	9.8	3.5	400	"	凝灰質砂岩		TH27
309	"	B-2	D 105	9.5	7.6	2.2	170	"	火山礫凝灰岩		TH51
310	"	不明	F 106	8.3	8.1	3.7	310	"	"		
311	"	"	D 106	8.4	6.8	3.6	260	"	粗粒砂岩		TH61
312	"	A-1	D 109	11.2	6.2	2.1	140	"	珪化綠色凝灰岩		TH83
313	"	不明	D 105	8.0	8.5	2.4	210	"	火山礫凝灰岩		TH52
314	"	"	D 109	9.5	8.3	3.2	320	"	角閃石安山岩		TH83
315	"	"	表採	11.6	7.4	3.3	240	"	輝石安山岩		
316	"	"	D 106	10.3	9.1	2.8	310	"	安山岩		TH62
317	"	"	D 105	7.1	6.2	1.3	70	"	中粒砂岩		TH14
318	"	B-2	D 109	10.7	7.5	2.7	350	"	粗粒砂岩		TH114
319	"	不明	D 106	9.7	7.1	3.2	290	"	珪化安山岩質凝灰岩		TH26
320	"	"	D 109	9.2	7.9	3.3	320	"	變朽安山岩質凝灰岩		TH113
321	"	不明	D 105	10.3	7.3	2.7	240	欠	石英粗面岩		TH15
322	"	"	F 108	8.6	7.4	2.1	180	"	中粒砂岩		TH103
323	"	"	D 102	10.7	8.1	1.8	210	"	輝石安山岩		TH91
324	"	A-1	D 105	10.5	6.3	1.5	150	"	粗粒砂岩		TH58
325	"	不明	D 110	6.5	6.9	1.6	100	"	"		TH111
326	"	"	D 105	11.7	9.0	3.3	350	"	玢岩		TH60

番号	石器名	分類	出土地点	長	幅	厚	重	遺存状態	石質	挿図番号	備考
327	打製石斧	不明	D 106	7.6	6.9	2.5	170	欠	片麻岩		P100
328	"	B-2	G 106	8.8	9.0	3.4	380	"	粗粒砂岩		古路
329	"	不明	表採	9.2	9.7	1.7	170	"	変朽安山岩		中、南東
330	"	"	D 109	8.3	8.4	3.0	280	"	珪化緑色凝灰岩		P34
331	"	B-2	E 105	10.7	8.5	3.6	350	"	玢岩		TH131
332	"	A-1	F 106	8.8	5.5	3.1	230	"	砂質凝灰岩		古路
333	"	B-1	E 106	12.2	7.4	3.0	280	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩		
334	"	不明	表採	9.5	6.9	3.2	290	"	石英安山岩質凝灰岩		中、南東
335	"	"	"	11.4	8.0	3.5	400	"	凝灰質砂岩		中、北西
336	"	B-2	"	10.5	8.2	3.4	280	"	粗粒砂岩		"
337	"	不明	"	8.7	7.0	2.5	200	"	変朽安山岩		中、南東
338	"	"	E 103	10.3	8.8	2.4	280	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩		TH3
339	"	"	D 111	8.9	7.9	1.2	110	"	粗粒砂岩		TH10
340	"	"	G 106	9.0	8.6	2.3	220	"	珪化緑色凝灰岩		古路
341	"	A-1	D 111	10.3	7.3	2.1	210	"	変朽安山岩		P4
342	"	不明	E 104	8.1	7.2	3.1	210	"	石英安山岩		TH120
343	"	"	E 110	8.6	6.6	2.5	230	"	玢岩		TH106
344	"	"	G 106	8.9	8.6	2.6	250	"	砂質凝灰岩		古路
345	"	"	表採	11.6	6.5	2.7	280	"	石英粗面岩		中
346	"	"	"	9.2	8.5	2.3	240	"	輝石角閃石安山岩		中、北西
347	"	"	D 102	6.5	7.1	2.1	110	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩		TH92
348	"	"	表採	11.3	6.9	2.4	240	"	火山礫凝灰岩		
349	"	"	E 107	7.3	7.7	1.9	150	"	片麻岩		TH148
350	"	A-1	E 103	10.6	7.2	2.1	230	"	安山岩質凝灰岩		TH4
351	"	不明	E 107	6.3	6.3	2.2	100	"	玢岩		P70
352	"	"	F 107	7.1	6.8	2.0	140	"	凝灰質砂岩		
353	"	"	G 105	10.3	8.0	3.3	400	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩		古路
354	"	"	H 101	11.3	8.3	3.1	430	"	変朽安山岩		"
355	"	"	表採	8.3	9.4	2.9	230	"	火山礫凝灰岩		中、北東
356	"	"	F 107	7.3	7.4	1.5	140	"	変朽安山岩		P77
357	"	B-2	表採	11.9	10.1	3.9	490	"	火山礫凝灰岩		中、北西
358	"	不明	"	10.2	7.5	2.3	250	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩		中、北東
359	"	"	E 106	7.4	6.8	1.5	110	"	粗粒砂岩		中
360	"	"	表採	8.8	7.0	2.9	210	"	玢岩		
361	"	不明	D 111	5.3	5.9	1.6	80	欠	石英安山岩		P4
362	"	B-2	E 107	11.0	8.2	2.5	320	"	粗粒砂岩		TH151
363	"	(?)	D 106	13.6	8.0	2.4	330	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩		TH17
364	"	(?)	D 107	13.2	7.8	2.8	350	"	"		TH40
365	"	C-3	F 106	9.6	8.9	2.6	260	"	粗粒砂岩		
366	"	B-2	E 89	13.3	11.7	4.3	710	"	輝石角閃石安山岩		
367	"	C-3	表採	15.1	7.7	2.0	310	完形	石英安山岩質火山礫凝灰岩		中、南西
368	"	B-2	"	12.6	8.0	2.3	260	欠	細粒砂岩		中、北西
369	"	A-1	"	16.0	7.4	2.3	240	"	石英安山岩		中、南西
370	"	"	"	18.4	7.9	2.3	370	完形	"		中、北西
371	"	不明	E 91	12.4	8.7	2.1	320	欠	輝石安山岩		
372	"	B-2	"	16.3	8.3	4.2	570	完形	安山岩		

番号	石器名	分類	出土地点	長	幅	厚	重	遺存状態	石質	挿図番号	備考
373	打製石斧	B-2(?)	E 104	12.4	7.2	2.2	260	欠	玢岩		TH119
374	"	C-2	G 103	14.2	7.8	1.6	180	"	輝石安山岩		
375	"	不明	E 94	13.4	8.6	2.4	260	"	玢岩		
376	"	A-2	表採	14.8	7.1	3.0	390	"	火山礫凝灰岩		中、北西
377	"	B-2	F 107	11.4	9.4	3.1	420	"	変朽安山岩		TH154
378	"	A-2	D 106	14.7	8.6	3.0	490	"	火山礫凝灰岩		P104
379	"	C-1	E 107	19.0	8.6	3.3	630	完形	火山礫凝灰岩		TH152
380	"	C-3	D 104	15.4	8.2	2.8	350	欠	玢岩		TH11
381	"	B-2	表採	17.6	8.2	3.5	660	"	中粒砂岩		
382	"	"	G103	17.0	8.8	3.2	520	"	火山礫凝灰岩		
383	"	不明	E 106	10.2	6.9	2.5	270	"	細粒砂岩		
384	"	A-1	D 106	9.4	6.9	2.7	210	"	火山礫凝灰岩		TH66
385	"	不明	表採	10.3	7.2	2.2	230	"	細粒砂岩		
386	"	"	D 106	13.4	7.5	2.5	290	"	綠色凝灰岩		
387	"	A-2	D 107	9.2	6.0	3.1	230	"	安山岩		TH89
388	"	B-2	E 106	13.2	7.2	1.5	170	"	変朽安山岩		
389	"	不明	E 105	9.0	5.0	2.6	200	"	綠色凝灰岩		
390	"	"	"	8.8	6.1	1.9	190	"	珪化凝灰岩		TH136
391	"	A-2	D 106	13.1	7.1	2.5	340	完形	玢岩		TH70
392	"	"	E 105	12.9	7.0	3.4	400	欠	珪化凝灰岩		TH132
393	"	B-1		15.2	7.9	4.4	630	"	角閃石安山岩		南端
394	"	A-2	E 106	14.9	6.5	3.7	380	"	輝綠岩		
395	"	"(?)	E 105	13.5	7.6	3.4	490	"	片麻岩		TH125
396	"	"(?)	D 106	9.0	6.6	3.2	290	"	細粒砂岩		TH28
397	"	"(?)	E 106	10.1	6.4	3.3	300	"	火山礫凝灰岩		P89
398	"	"(?)	D 110	7.9	6.1	2.8	200	"	細粒砂岩		P14
399	"	"(?)	I 72	9.0	5.8	2.9	220	"	角閃石安山岩		
400	"	"(?)	表採	8.9	6.0	2.9	210	"	火山礫凝灰岩		中、北西
401	"	不明	D 106	6.1	6.5	2.8	170	欠	火山礫凝灰岩		TH29
402	"	"	E 106	7.3	6.6	3.2	190	"	細粒砂岩		
403	"	A-2	D 107	9.8	5.9	3.0	250	"	細粒砂岩		TH37
404	"	"	E 106	12.2	6.0	2.3	260	"	輝綠岩		
405	"	"	E 107	13.1	6.0	2.6	280	"	細粒砂岩		P69
406	"	"(?)	E 106	8.9	5.4	1.8	100	"	輝石安山岩		
407	"	不明	D 104	10.8	6.1	2.6	210	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩		TH129
408	"	A-2	D 106	10.5	6.6	2.3	250	"	粗粒砂岩		
409	"	"	表採	13.5	6.5	2.6	280	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩		中、南東
410	"	B-1	D 110	9.2	5.4	1.9	130	"	珪化綠色凝灰岩		TH118
411	"	A-2	F 109	13.3	5.1	2.0	210	"	石英安山岩質凝灰岩		古路
412	"	B-1	D 106	12.1	9.2	2.8	350	完形	石英安山岩質火山礫凝灰岩		TH71
413	"	C-1	D 106	15.1	9.8	3.0	420	欠	"		
414	"	不明	E 106	9.7	8.5	2.2	260	"	流紋岩		P86
415	"	A-1	表採	11.8	6.9	2.3	220	"	綠色凝灰岩		中、南東
416	"	"	"	15.3	8.1	1.4	230	"	安山岩		中
417	"	"	E 107	13.2	7.2	2.6	310	完形	角閃石輝石安山岩		TH145
418	"	"	F 106	13.1	7.3	2.6	300	欠	安山岩質角礫凝灰岩		

番号	石器名	分類	出土地点	長	幅	厚	重	遺存状態	石質	挿図番号	備考
419	打製石斧	C-1	D 107	15.2	8.2	2.0	310	欠	輝石安山岩		TH33
420	"	不明	D 111	12.3	8.1	2.7	450	"	変朽安山岩		P4
421	"	A-1	D 107	11.8	7.5	3.2	300	"	"		P95
422	"	A-2	E 107	12.5	6.6	3.2	360	"	凝灰質砂岩		
423	"	C-2	E 106	14.0	7.7	3.7	490	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩		
424	"	不明	D 105	13.2	8.5	3.0	370	"	粗粒砂岩		P112
425	"	B-2	F 90	14.1	9.2	2.9	460	"	石英安山岩質凝灰岩		
426	"	不明	表採	9.1	5.9	2.7	190	"	石英安山岩質火山礫凝灰岩		中、南西
427	"	A-2	"	14.8	7.3	2.8	420	"	変朽安山岩		中、北西
428	"	"	G 105	13.7	7.0	4.4	530	"	凝灰質砂岩		
429	"	不明	E 109	10.6	7.0	3.3	310	"	変朽安山岩		
430	"	A-1	表採	8.9	4.8	1.7	110	"	細粒砂岩		中、北西
431	"	"(?)	D 107	8.3	4.8	2.3	150	"	緑色凝灰岩		
432	"	不明	"	6.5	5.2	1.6	70	"	安山岩		TH87
433	"	"	"	5.4	5.1	1.6	70	"	凝灰岩		P94
434	"	A-1		9.2	5.6	1.8	150	"	角閃石安山岩質凝灰岩		TH157
435	"	"(?)	E 105	10.8	5.1	2.5	190	"	緑色凝灰岩		TH135
436	"	不明	D 105	7.2	5.5	1.9	90	"	中粒砂岩		TH138
437	"	"	D 107	6.5	5.4	2.1	100	"	凝灰岩		TH88
438	"	A-2	G 104	13.1	6.4	2.7	250	完形	輝石安山岩		
439	"	"	D 103	11.8	5.8	3.4	270	"	"		
440	"	B-2	E 104	15.0	8.8	3.2	460	欠	石英粗面岩		TH156
441	"	不明		10.0	8.5	3.8	460	欠	石英安山岩質火山礫凝灰岩		21トレ
442	"	"	G 105	11.3	10.2	3.4	520	"	"		
443	"	B-1	D 108	12.8	8.4	3.4	430	完形	角閃石安山岩		TH115
445	"	B-2	D 107	12.0	7.9	3.3	390	欠	玢岩		TH144
446	"	A-2	F 109	10.5	8.5	2.7	310	"	角閃石安山岩		TH105
447	"	不明	D 105	15.4	7.2	3.0	380	"	凝灰質砂岩		TH23

第2節 中世の遺物

1 土壇出土遺物（第70・71図 図版—40・41）

第4次調査で検出した土壇の中で、第7・16・17・19・40号土壇の5基からは、一括の陶磁器や土師質土器等が出土した。これらに関しては、他の陶磁器類と分けて本項で扱った。なお、これら一括の陶磁器類は、本遺跡の上流に位置する鳥越城二の丸で検出された石室状遺構出土の陶磁器群（1）には及ばないが、集落址からの出土資料としては良好なものと考えられる。以下、土壇順に説明を加えたい。

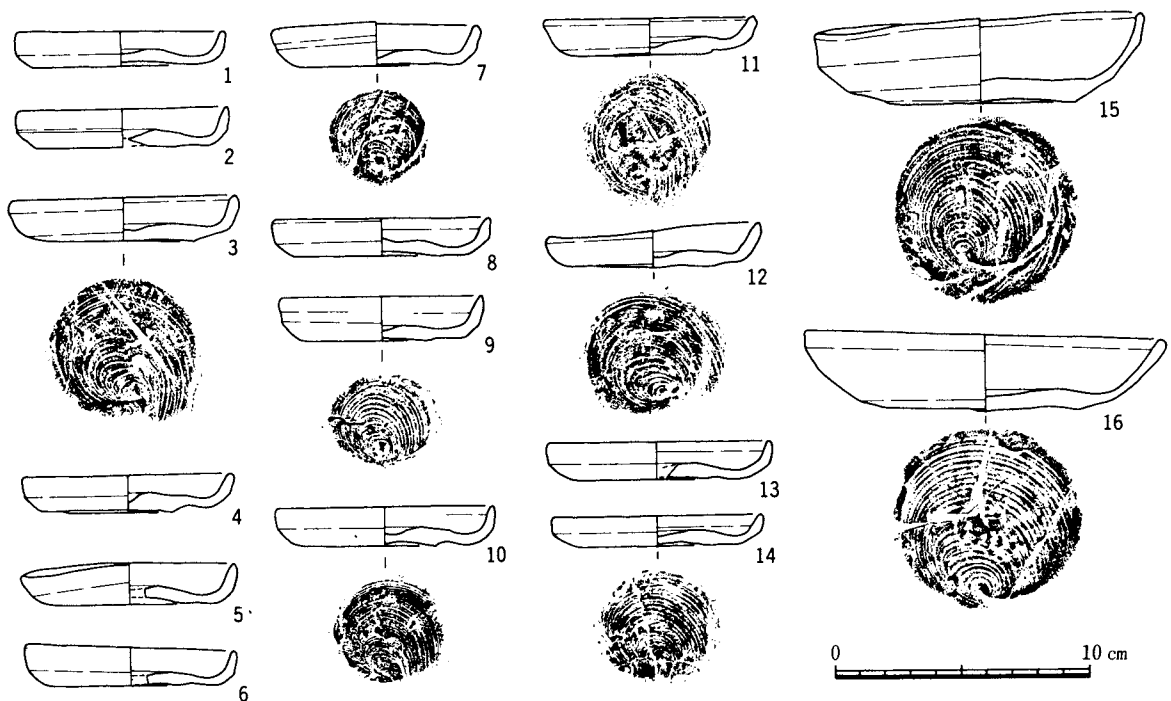
第7号土壇出土土器（70図 図版—40）

土壇の床面近くから土師質土器が数詰められた状態で出土した。土器は土師質土器の皿だけで、全形を知り得るもの16点の他に約1個体分の小片が検出された。全て水挽成形で、外底に回転糸切痕を残している。胎土は共に細かくて、砂粒の含みもない。水簸された土のようである。色調も全て浅黄橙色を呈する。1～14の小皿は口径が7.9～8.8cm、器高は1.2～1.8cm、底径は3.8～5.7cmである。少しバラツキが認められるが、器形の歪みもなくほぼ同一規格の製品である。底は内底中央部が凹んで周辺部が厚い。腰は薄くて外へ大きく開くが、口縁部は直立して端部は面取りされてやや尖るものが多い。調整は回転横ナデであるが、内底中央部の凹みはナデ調整である。15・16は坏である。15は口径12.8cm、器高3.5cm、底径7.2cmである。器形の歪みは他の製品より激しくて、底も厚手で内底中央部の凹みもない。腰の開きは弱くて外面に二本の稜を生じている。16は口径13.9cm、器高3.3cm、底径7.4cmで、器形の歪みも弱い。内底中央部の凹みは、ナデ調整が不充分であるが、その他は回転横ナデにより平滑に仕上げられている。腰はやや開き口縁端部は丸く仕上げられている。

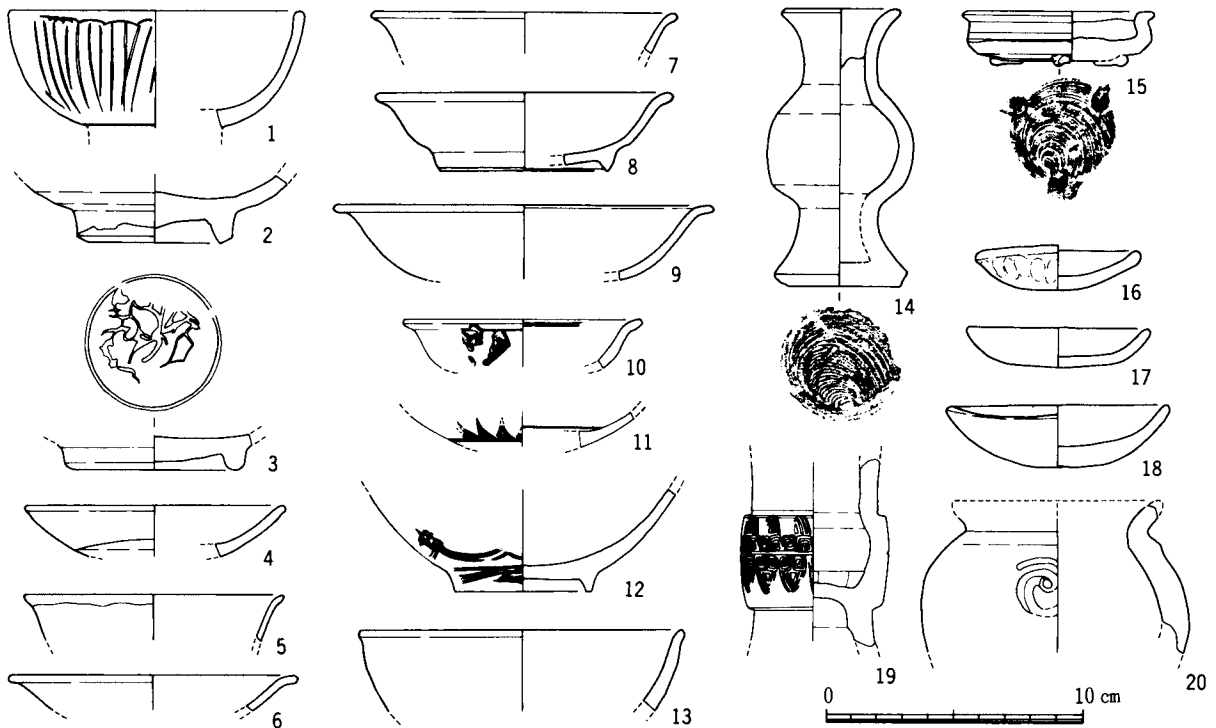
本資料は田島明人氏の編年試案（2）の中で、12世紀末～13世紀初頭に位置付けられる資料として指摘されているが、相伴遺物が無く確定に欠ける。しかし、他の陶磁器類と遺構の検出状況からほぼその年代に位置する資料であろう。

第16土壇出土土器（第71図—2・5・6・20 図版—41）

青磁碗と白磁皿が2点の他に越前焼の小壺が検出された。2つの青磁碗は高台径5.2cmで、透明感のないオリープ灰色の釉が高台外面にまで及んでいる。畳付の釉は削り取られている。素地は灰白色を呈して、気泡の含みが多くて粗い。5の白磁皿は口径約10.2cmで、釉はやや青味を帯びた白色を呈する。6の白磁皿は口径約11.2cm



第70図 第7号土壇出土土器実測図（1/3）



第71図 第16・17・19・40号土坑出土遺物実測図(1/3)

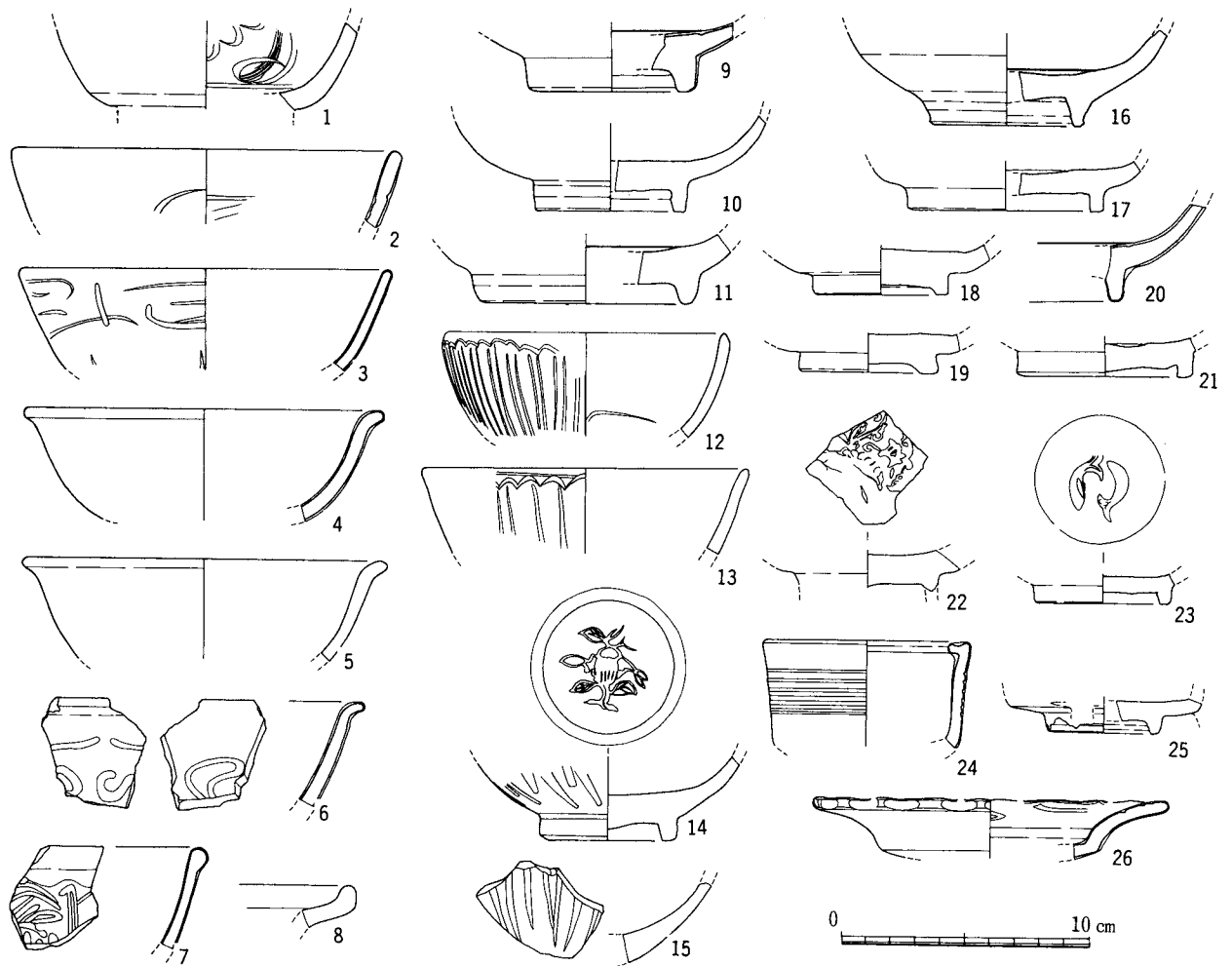
で、器壁が厚くて釉はくすんだ白色を呈する。断面に補修痕がある。20の越前焼の小壺は口縁端部を欠くが、頸部径7.1cm、胴部径10.4cmである。内外共に赤褐色を呈して、内面には黒褐色の付着物がある。いわゆる「お歯黒壺」であろう。

第17号土坑出土土器(第71図—1・3・7~10・12・13・18・19 図版—41)

出土遺物は最も多く青磁碗2点、白磁皿3点、染付の皿と碗、瀬戸・美濃焼の天目茶碗、瓦質の花瓶、土師質皿である。1は線描蓮弁文碗で、口径11.4cmを計る。線描は荒く釉は透明感のあるオリブ黄色を呈して、貫入が内外ともに荒く入る。3は高台径6.4cmで、内底面に印花文が入り円圏が巡る。釉は透明感のあるオリブ灰色を呈して、全面施釉されている。外底には砂が付着し内底には目痕が残る。7の皿は口径11.8cmで、釉は二次加熱により明灰白色を呈する。8は口径11.3cm、高台径6.7cm、器高3cmを計る。釉はやや青味を帯びた白色を呈するが、素地は気泡が少なく堅緻である。畳付の釉は荒く削り取られて高台が一部欠けている。断面には補修痕が残っている。10の染付皿は口径約9.4cmで、外面に牡丹唐草文が入る。断面に補修痕が残る。12の染付碗は高台径5.4cmで、外面胴部にアラベスク文が入るが、内底面の文様は不明である。釉は青味を帯びた白色で、外面はクレター状にふいている。素地は白色であるが、気泡を多く含んでいる。畳付の釉は荒く削り取られている。13は瀬戸・美濃の天目碗で、口径12.7cmを計る。釉は黒褐色を呈して、内外面とも均一に施釉され、素地は浅黄橙色を呈して気泡の含みが目立つ。18は土師質の皿で口径8.4cmであるが、口縁部が歪んでやや波うつ。色調は淡黄色を呈して、器面の調整は横ナデを主体として良好である。19は瓦質の花瓶の胴部である。胴部最大径5.8cmを計り、外面に雷文と三角文を合せたスタンプ文を巡らせている。外面は灰色を呈して全面縦方向を主体としたミガキがされるが、内面は灰白色で横ナデによる調整である。

19号土坑出土土器(第71図—4・11・16・17 図版—41)

出土遺物は白磁皿1点、染付皿1点、土師質土器2点と少ない。4の白磁皿は口径10.3cmで、透明感のあるやや灰色の釉が施こされるが、外面は下半にて止まっている。素地は磁質で灰白色を呈している。11の染付は外面に芭蕉葉文が入るいわゆる菴筍底の皿である。釉は二次加熱により明緑灰色を呈して、呉須の発色は良いが少しにじんでいる。16は土師質土器の中では最も小型の製品である。口径は6cm、器高は1.8cmを呈して、口縁は丸く体部には指押さえによる凹凸が残っていた。色調は淡橙色を呈して、胎土・焼成とも良好である。17は16に比べて器壁が一定で歪みも弱い。色調は浅黄橙色を呈して、胎土・焼成も良好である。



第72図 青磁実測図(1/3)

第40号土坑出土土器(第71図—14・15 図版—41)

図示した瀬戸・美濃の花瓶と香炉の2点だけが出土している。2点とも口縁部を一部欠くがほぼ完形である。14の花瓶は口径4.3cm、胴部最大径5.7cm、底径4.3cm、器高11cmである。釉は透明感のある淡黄緑色を呈して、台脚の下端にて止まっている。器面の調整は不十分で、器面がザラついている。素地は淡黄褐色を呈してやや荒い。15の香炉は口径6.2cm、底径6.2cm、器高2.2cmを計り、外底には小粘土塊を3つ取り付けて足としている。胴は短かくて外面に沈線が1本巡って、茶褐色を呈す鉄釉が薄く口縁内面からその沈線まで施こされている。素地は明灰色であるがやや荒い。

2 舶載陶磁器

舶載品である陶磁器としては、青磁、白磁、染付でその大半が占められるが、2点であるが朝鮮製品である高麗青磁と李朝の陶磁器などが出土した。

青磁(第72図 図版—41)

青磁は舶載製品の中でも最も出土量が多いものであったが、その中でも器種的には9割近くが碗(1~7、9~22)で占められて、その他の器種としては、盤(8)、鉢(23)、香炉(24・25)、皿(26)が数点認められるだけであった。以下、碗から順に説明を加えたい。

1は内面に片切彫の劃花文が巡る碗で、釉は透明のあるオリーブ灰色を呈して貫入は見られない。素地は灰白色で堅緻である。2・3は口縁部が直立するタイプである。2は口径約15.5cmで、外面にはへら描きの蓮花文が入る。釉は淡緑色を呈して厚く施釉され、透明感に欠ける。3は口径14.8cmで口縁外面にへら描きの雷文が巡るが、雷文は荒く簡略化されている。釉は緑がかったオリーブ灰色で、素地は灰白色で気泡が多い。4・5は口縁

外反の無文タイプの碗である。4は口径14.3cmで、釉は灰オリーブ色を呈する。素地は暗灰白色で堅緻である。5は口径14.3cmで4と同一であるが、器壁は厚手である。釉は緑がかったオリーブ灰色を呈して、素地は灰白色で気泡が目立つ。6は内外面に唐草文風のへら描き文様が入る。釉は淡緑色で、素地は灰白色で堅緻である。一応碗として整理したが、大型の鉢である可能性もある。7は口縁部が玉縁で、内面に刻花文を刻むタイプである。文様は浅くて不明瞭な点もあるが、牡丹唐草文の一部と推定される。釉はオリーブ灰色を呈して、素地は灰色味の強い灰白色である。また、内外面とも細かな貫入がある。9は高台径8cmで、釉はオリーブ灰色を呈し細い貫入がある。外底と高台内面の釉が削り取られている。10は高台径6cmとやや小さい。釉は明オリーブ灰色を呈して、素地は明灰色である。外底と高台内面は釉がきれいに削り取られ、内底面には径6.4cmの円圏と印花文が見られる。12～15は口縁直立でへら描き蓮弁文を外面に巡らすタイプの碗である。12は口径11.3cmで、外面の蓮弁文は丸彫である。釉はオリーブ灰色を呈して、素地は灰白色で堅緻である。13は口径13.2cmで12に比べて外面の蓮弁文の縦線が少ない。釉は透明感のあるオリーブ灰色を呈して、素地は灰白でやや粗い。14は高台径4.5cmで外面の蓮弁文と内底の円圏は幅広の片切彫によるもので、内底には印花文が施文されている。釉は透明な明緑灰色を呈する。外底の釉は削り取りが行なわれず、砂が付着している。16は高台径5.8cmで、釉は二次加熱で変色している。17は高台径7.8cmで、断面が四角形である。内底面には径8.5cmの削り出の円圏内に印花文が入るが、施釉した印花文の上を円形に釉を削り取っている。釉はオリーブ灰色を呈して、素地は灰白色で緻密である。鉢になる可能性がある。18は高台径5.4cmで高台が小型の割には底は厚手である。釉はオリーブ灰色を呈して貫入はなく、素地は灰色で堅緻である。高台畳付部だけ釉が削り取られている。19は高台径5.6cmで、高台畳付の釉が削り取られている。20は高台径6.4cmで、釉は明緑灰色を呈して、素地は灰白色でやや粗い。内・外底とも円形に釉が削り取られている。

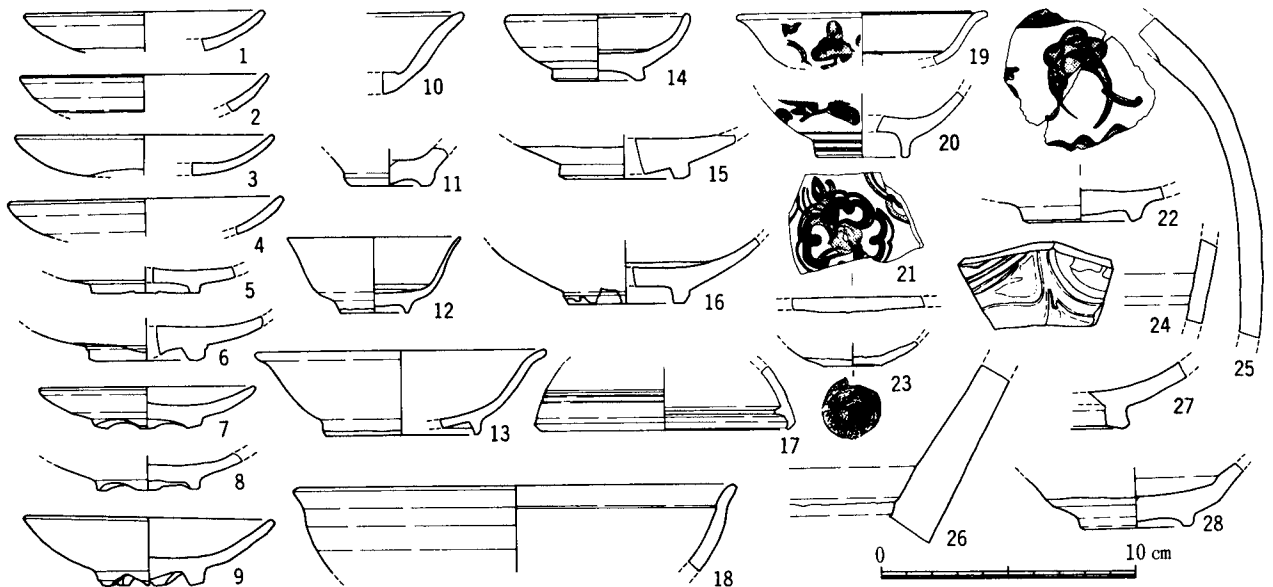
8は盤と認められた唯一の口縁片であった。23は高台径5.4cmの鉢の底部片で、内底面の削り出しの円圏内に双魚文が施こされている。釉は明オリーブ灰色を呈して、貫入がやや荒く入る。素地は白色で堅緻である。24・25は香炉の破片である。24は口径6.6cmで、胴部外面に6条の沈線が巡る。釉はオリーブ灰色を呈して、内面は内底面まで及んでいる。素地は灰白色で、堅緻である。25は高台径4.4cmで、腰に足の跡が認められる。内底は露胎で茶褐色を呈している。釉はオリーブ灰色を呈して、素地は灰白色で堅緻である。26は口径約14cmの輪花皿である。釉は透明感のある暗緑色を呈して、素地は灰色味の強灰白色でやや粗い。内外面とも荒い貫入が入る。

白磁・染付・他（第73図 図版-42）

青磁以外の舶載製品としては、白磁、染付、青白磁、高麗青磁、李朝の陶磁器などが出土した。白磁は青磁に次いで出土点数が多いが、その器種構成は皿（1～10・15・16）を主体として、皿以外の器種としては、坏（12・14）、蓋（17）、碗（18）、四耳壺（26）が検出された。以下、白磁皿から順に説明を加えたい。

1～6の皿は釉が体部下半にて止まるタイプで、高台が輪高台と袂りが入る二者に分かれる。1は口径9.3cmで、釉は透明感のある白色を呈し、素地は白色で堅緻である。2は口径9.7cmで、釉・素地とも1とほぼ同一である。3は口径10.1cmで、釉は透明感のある白色を呈するが、やや灰色味をおびている。素地は灰白色を呈し、堅緻である。4は口径10.9cmで、釉は黄色味をおびた白色を呈し、素地は灰白色である。1～4の中で、3を除いた3点には、貫入が内外面ともに細かくみられる。5は高台径4.2cmで、釉・素地ともに黄色味をおびて、焼成の甘さを感じさせる。高台には浅い袂りが入り、内底面には目痕が残る。6は高台径3.3cmで、高台・器壁とも厚手である。7～9は高台を含め器面全体に施釉するタイプで、3点とも高台に袂りが入る。7は口径8.4cm、高台径3.1cm、器高1.6cmを計る。釉はやや黄色味をおびた白色を呈し、気泡の含みが多く、一部クレーター状にふいている。素地は灰白色で、内底面には目痕が残る。8は高台径3.9cmで、釉はやや緑色をおびた白色で、素地には気泡が少ない。9は口径9.6cm、高台径4.2cm、器高2.7cmを計る。釉は透明感に欠けて、黄色味をおびた白色を呈し、素地は灰白色である。高台の袂りと内底の面痕は、共に5ヶ所である。口縁部内面の割れ口にはススが付着し、貫入にも油状の汚れがあることから灯明皿として使用された可能性が高い。

10の白磁は唯一の口元皿である。小片のために口径復元が不可能である。釉は灰白色を呈し、素地はやや青色



第73図 白磁・染付・他実測図(1/3)

味をおびた灰白色である。13・15・16の皿はやや大ぶりの皿である。13は口径11.3 cm、高台径6.2 cm、器高3.3 cmを計る。釉は透明感に欠けた灰白色を呈し、全体的に薄く施釉されている。素地は白色で、やや堅緻である。釉調から二次加熱を受けていると見られる。第3次調査区の第1号石室中より出土した。15は高台径4.3 cmで、底部・高台とも厚い造りである。釉は黄色味をおびた白色を呈し、体部下半にて止まっている。素地は灰白色で、やや粗い。16は高台径5 cmで、釉はやや緑色をおびた白色を呈し、素地は白色で緻密である。畳付には砂が付着し、内底は釉が輪状に取り付られている。また、釉は高台外面にて止まり、高台内へは及んでいない。

12・14は小型の坏である。12は口径6.8 cm、高台径2.7 cm、器高3 cmを計る。釉はやや灰色味をおびた白色を呈し、所々にクレーター状にふいている。素地は灰白色で、堅緻である。畳付と内底を輪状に削り取っている。14は口径7.1 cm、高台径3.7 cm、器高2.6 cmを計る。釉はやや透明感のある白色を呈して、体部下半にて止まる。素地は灰白色で、比較的堅緻である。内底を荒く輪状に削り取っている。12・14の小型の坏は、共に内底の輪状の露胎部に赤褐色の付着付が見られる。17の蓋は口径9.8 cmで、無釉で素地は白っぽい灰白を呈して、堅緻である。

18は口径17.5 cmの碗で、釉は灰白色を呈し、気泡の含みが多くて、一部クレーター状にふいている。素地は灰白色で、堅緻である。器面はへら削りの調整後に薄く施釉している。26は白磁の四耳壺の体部下半の破片である。釉は明オリープ灰色を呈し、素地は灰白色である。

19～22は染付である。19は口径9.7 cmの皿で、外面には牡丹唐草文が巡る。釉は青味をおびた白色を呈し、呉須の発色は良くにじみも少ない。素地は白色で堅緻である。20は高台径3.7 cmの碗で、外面に唐草文が見られる。釉は透明感の無い白色を呈し、呉須の発色は悪くややにじんでいる。素地は灰白色である。内・外底と高台外面に二重の円圈が巡り、内底に牡丹唐草文の一端が認められる。21は碗の見入部分の破片で、文様は蓮花文と見られる。22は高台径4 cmの皿で、釉は高台外面にて片まる。釉は透明感のある淡黄色を呈し、呉須の発色は悪いがにじみは少ない。素地は灰白色である。貫入は内外面とも細かく入る。見込の文様は魚形文である。

11と24は青白磁である。11は底径3.2 cmの合子の底部である。釉は灰色を味をおびた白色を呈し、外底の折り部分と畳付以外に薄く施釉されている。素地は灰白色で、やや粗い。24は梅瓶の胴部片である。外面の釉は透明感のある淡い青色を呈して、素地は灰白色で堅緻である。外面の文様は牡丹文であろうか。25は壺の胴部片である。不透明な灰色を呈する釉が内外面に薄く施釉されるが、内外面ともむらになっている。素地は灰色と浅黄橙色のサンドイッチ状況を呈して粗い。釉下の器面調整は、外面がへら削りで、内面がナデである。23は鉄釉の茶入れで、底径2.3 cmを測る。釉はにぶい黄褐色を呈し、体部下端まで及んでいる。素地は赤褐色で、非常に堅

緻である。外底には回転糸切痕、内底には水挽き痕がある。また、断面には補修痕が見られる。

27は高麗青磁と考えられる碗である。釉はオリブ灰色を呈して、高台外面まで及ぶ。素地は高台付は橙色、体部は褐灰色を呈して粗い。内底に目痕が見られる。28は高台径4.4 cmで、釉は濁った緑灰色を呈し、素地はにぶい黄橙色で比較的粗い。内底には目痕が4ヶ所残り、朝鮮の李朝陶磁器の可能性が高い。

3 国産陶磁器

国産の陶磁器類としては、瀬戸・美濃、珠洲焼、越前・加賀焼、土師質土器、瓦質土器等が検出された。これら国産の陶磁器類の組成は、加賀地方にて一般に認められるものである。

瀬戸・美濃 (第74図 図版-42)

瀬戸・美濃製品の中では、出土点数が少ないながらも全器種が見られた。その中で注目されたのは、瓶形態の出土点数が極めて少ないのに対して、天目茶碗の点数が多いことであった。

1～4は皿である。1は口径3.9 cmで、内面に透明感のあるオリブ灰色を呈する釉が施釉されている。2は高台径6.9 cmで、灰オリブ色の釉が全面に施釉されている。素地は浅黄色を呈し粗い。外底に輪状の目痕が残る。3は口径10.2 cm、底径5.1 cm、器高2.1 cmを計る。釉はオリブ灰を呈し、口縁部に付け塗りされている。素地は灰白色で、比較的密である。4は口径12.5 cm、高台径6.6 cm、器高2.6 cmを計る。釉は灰オリブ色を呈して、素地はにぶい黄橙色である。内底の釉を円形に削り取り、外底には輪状の目痕が残る。

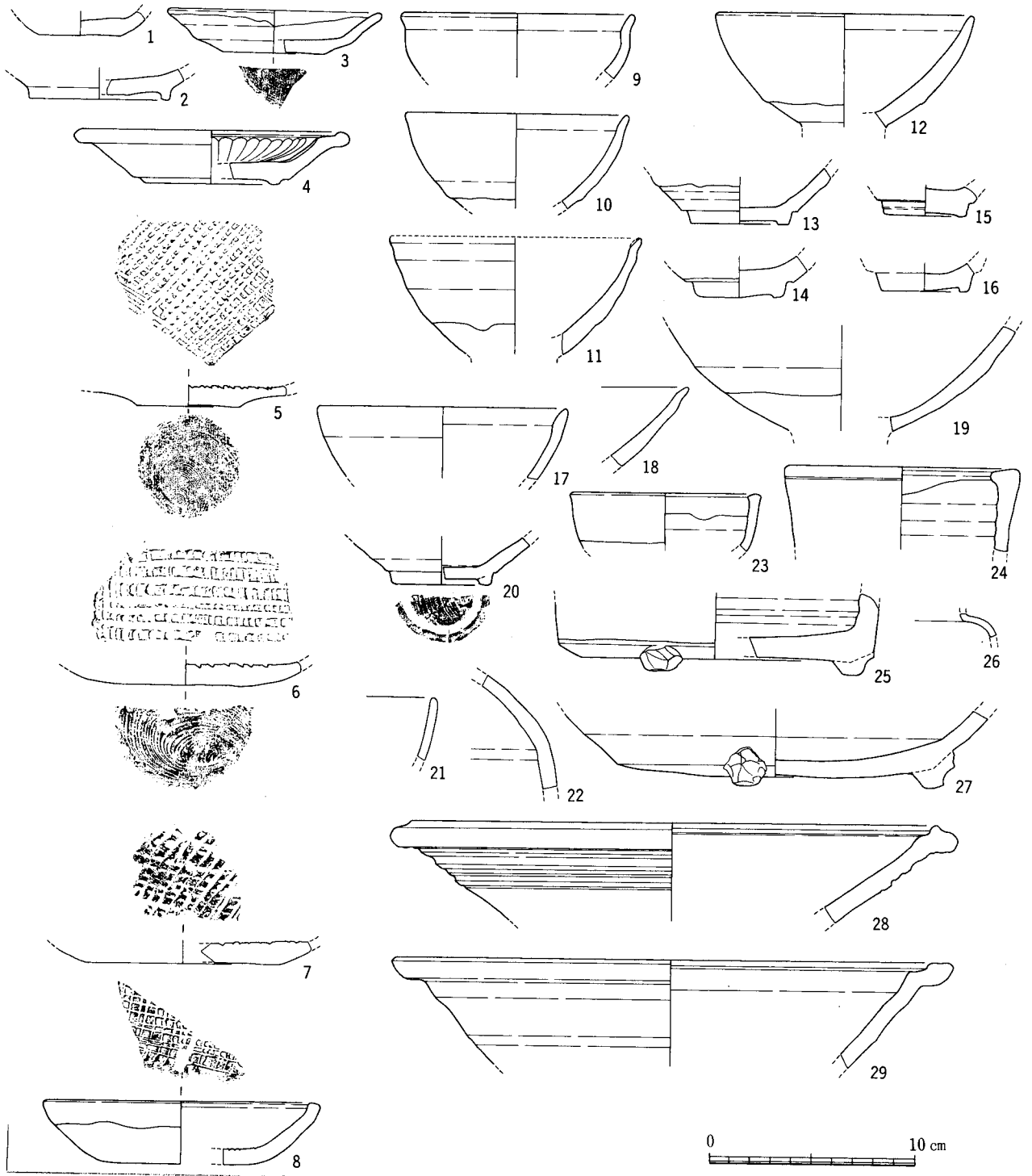
5～8はおろし皿である。5は底径5 cmで、素地は灰白色で密である。おろし目は細く密である。6は底径6.8 cmで、素地は砂粒が目立ち粗い。おろし目は太くてやや荒い。7は底径約10 cmと大ぶりである。素地は灰白色でやや粗い。おろし目は使用により器面が滑らかである。8は口径12.6 cm、底径5.3 cm、器高3 cmを計る。釉はオリブ灰色を呈し、内面から外面中程まで施釉されている。素地は灰色で、比較的密である。

9～16は天目茶碗である。9は口径約11.3 cmで、釉は黒色を呈し、素地は明褐灰色で比較的堅緻である。10は口径10.8 cmで、釉は赤黒色を呈し、素地は灰白色で堅緻である。11は口径約10.6 cmで、釉は赤黒色を呈し、素地は浅黄橙色で砂粒の含みが目立つ。12は口径12.2 cmで、釉は極暗赤褐色を呈し、素地は灰白色でやや粗い。13は高台径4.7 cmで、釉は赤黒色を呈する。素地は浅黄橙色で、比較的粗い。体部下半から外底の露胎部に煤状のものが付着している。第1号石室より出土。14は高台径4.3 cmで、釉は黒色を呈し、素地は浅黄橙色である。15は高台径4 cm、16は高台径4.2 cmで、釉も同一である。

17～20は灰釉の平碗である。17は口径12.1 cmで、釉は透明感のあるオリブ灰色を呈し、内外面とも薄く施釉されている。素地は灰白色で、比較的粗い。18はやや大ぶりの平碗であろう。19は口径が約19 cm程の製品であろう。釉は透明感のあるオリブ黄色を呈し、外面の下半にて止まる。素地は灰白色で、砂粒を多く含む。内底近くには目痕が残る。20は高台径4.9 cmで、高台は張り付けにて外底には回転糸切り痕が残る。釉はオリブ黄色を呈し、素地は白に近い灰白色である。内面下半に目痕が残る。21は碗の口縁片で、釉はオリブ褐色を呈する。

23・24は筒形の香炉で、25は筒形容器である。23は口径8.9 cmで、暗赤褐色を呈する釉が、口縁内面から外面の体部下半まで施されている。素地は灰白色で、比較的密である。24は口径11 cmと筒形香炉でも大型の製品である。内面には水挽き痕を残し、口縁部では断面三角の隆帯を作り出している。口縁外面には沈線が1条巡る。釉は黄緑色を呈し、口縁内面から施されている。素地は灰白色でやや粗い。25は底径13 cmで、器種は筒形容器であろう。粘土を張り付けた三足が付いていた。釉は透明感のあるオリブ灰色を呈し、外面の体部下端まで施されている。素地は灰白色でざっくりとしている。22は壺の肩部片である。内外面に暗褐色の釉が薄く施され、素地は淡黄色である。釉下の調整は内面がナデで、外面はヘラナデによる。26は小壺片である。

27～29は盤である。27は底径15.4 cmで、内外面とも無釉で、粘土張り付けの三足が付いていた。素地は淡黄色で、器面は滑らに仕上げられているが、断面ではざっくりとしている。28は口径25.6 cmで、口縁は隆帯を作り出している。外面には荒い沈線が5条巡る。釉は暗オリブ色を呈し、内面中程から外面にかけて施こされている。素地は灰白色でやや粗い。29は口径27 cmで、口縁を外面に折り端部を水平に仕上げている。釉は透明感



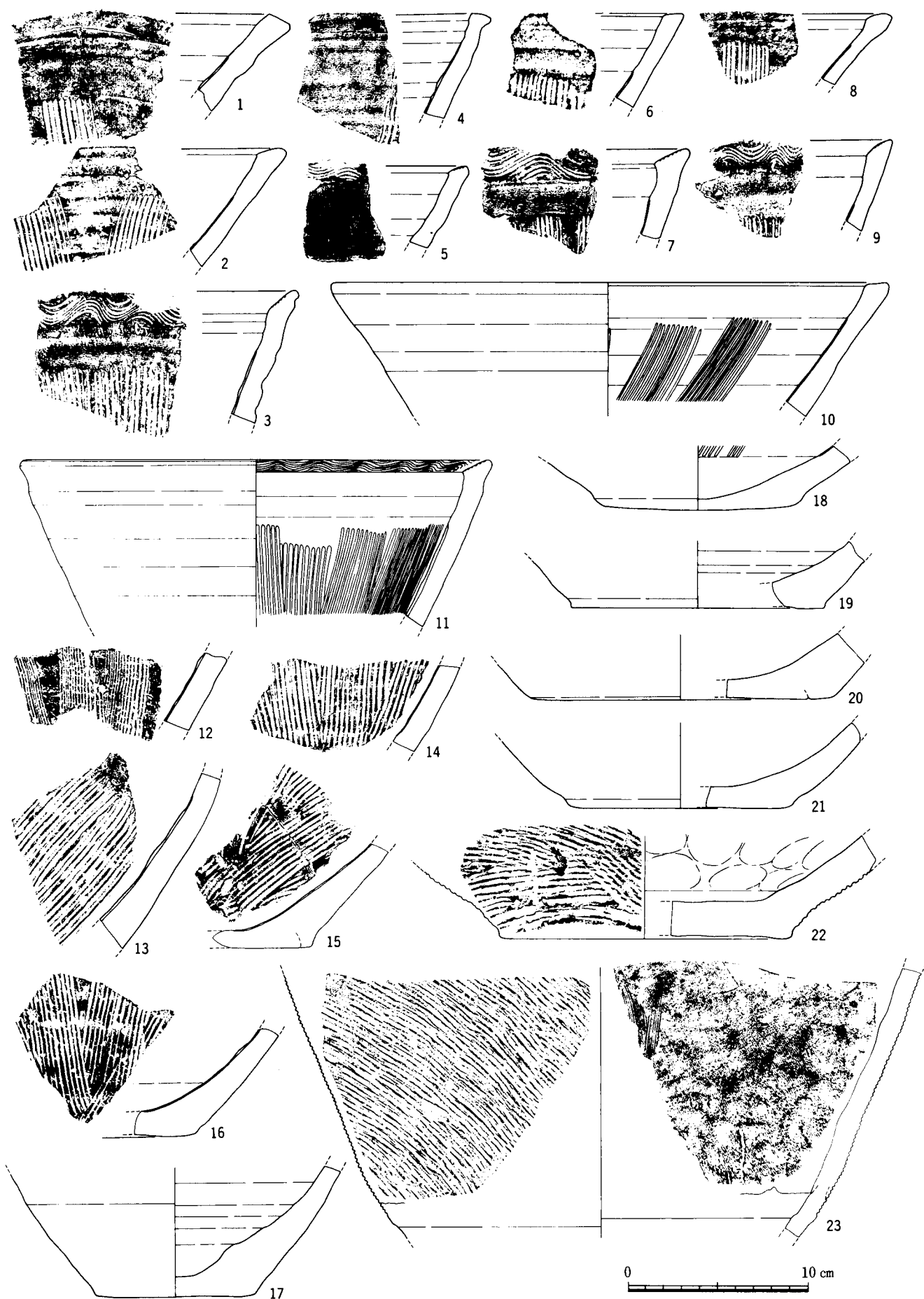
第74図 瀬戸・美濃実測図(1/3)

のあるオリブ黄色を呈し、内外面に施されている。素地は淡黄色で比較的粗い。

珠洲焼(第75図 図版-43)

瀬戸・美濃のように比較的遠距離から本遺跡に搬入された製品は、小型の施釉陶器であったが、日常雑器である鉢・壺・甕は、北陸の加賀地方では在地的な製品である珠洲焼と越前・加賀焼で構成される。その日常雑器の中で、本遺跡に鉢を主体的に供給していたのが珠洲焼であった。

1~18・20・21は擂鉢である。また、小片が多く口径が復元できたものは、10・11の二点であった。1は口縁端部を面取りして、胎土は良いが、焼成不良である。おろし目は幅3cmの11本である。2は胎土に小礫を含んで、灰白色を呈する。おろし目は幅3.1cmの11本である。3は口唇部に波状文が入り、胎土は暗灰色を呈し並で、焼成は良好である。おろし目は幅2.8cmの9本である。4は口縁端を外へ引き出し、内面にはロクロ目を残



第 75 图 珠洲烧夷测图 (1/3)

している。胎土は黒灰色を呈し、砂粒の含みが少なく堅緻である。焼成も良好である。5・7・9は口唇部に波状文が入る。8は口唇部をほぼ水平に仕上げ、胎土は灰白色を呈している。おろし目は幅2.6cmで10本である。10は口径約31cmで、胎土は暗灰色を呈し並である。焼成も並で、おろし目は幅2.7cmで11本であった。おろし目が施されている範囲は、使用により平滑になっている。11は口径26cmで、少し歪んでいる。胎土は並で、外面は暗灰色、内面は黒灰色を呈する。焼成は良好で、よく焼き締まっている。おろし目は幅3.2cmで11本で、左り目に施こされている。内面には降灰釉が付着している。12は胎土が少し粗くて、暗灰色を呈する。おろし目は幅2.6cmで15本と極めて細い。13は暗灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。おろし目は幅2.4cmで9本である。14は胎土が暗灰色を呈し、少し粗い。焼成は並で、おろし目は幅3.8cmで13本であった。断面に補修痕が残る。16は胎土が灰白色を呈し、砂粒の含みが多く少し粗い。焼成は並で、おろし目は幅3.5cmの13本で、右回りに施こされている。内底は平滑である。17は形態的には壺の底部であるが、捏鉢として使用されている。底径9cmで、底には静止糸切痕が残る。胎土は灰白色を呈し、焼成も並である。18は底径10cmで、底は磨滅で薄くなっている。胎土は灰白色を呈し、砂粒を多く含み粗い。焼成は並である。20・21も磨滅によりおろし目が消えている。20は底径約16.8cmで、胎は淡灰色を呈し粗い。焼成は並である。21は底径12.5cmで、胎土が灰白色を呈する以外は同一である。

19・22は甕の底部で、23は壺の胴部片である。19は底径19cmで、胎土は灰色を呈して堅緻である。焼成は良好で、内面には降灰が付着している。22は底径15.9cmで、胎土は灰色を呈し、砂粒を多く含むが堅緻である。焼成は良好で、外面の叩きは3cm当り10本である。内底は平滑で、外底は打撃痕が見られる。23の壺は最大径34cmで、胎土は暗灰色を呈し、焼成も良い。内面にハケ状工具痕が残り、外面の叩きは3cm当り11本である。体部下半の接合部には亀裂が入り、その亀裂内面から外面へにじみ出したように黒漆状のものが付着している。

越前・加賀焼（第76図 図版一44）

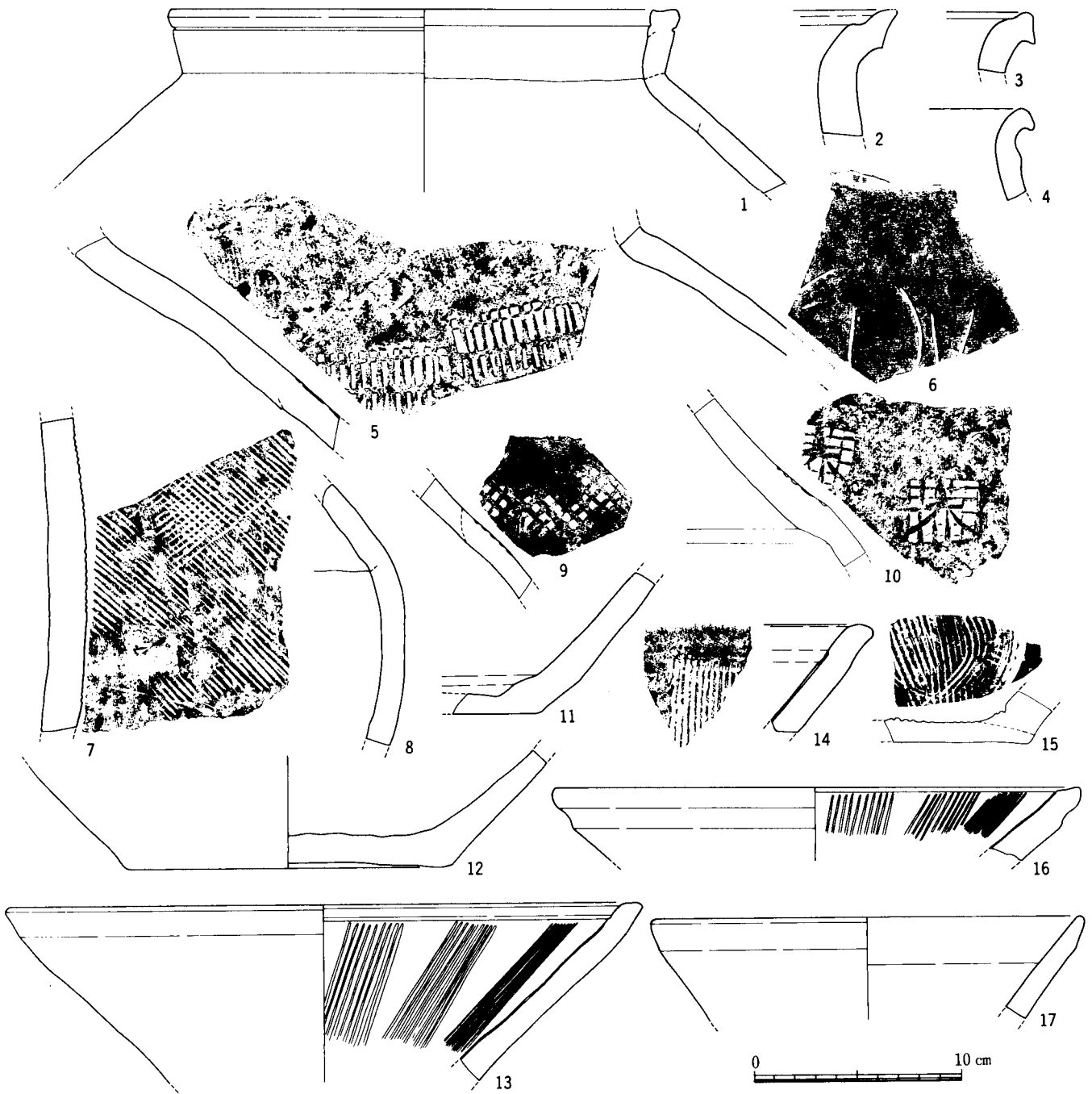
越前焼と加賀焼は、その製品の形態がある程度知り得ることができる資料は、識別は十分に出来るが、遺跡などから出土する破片の場合は、胎土と器面調整等で判断している。そのため、ここでは一括して、越前・加賀焼として整理した。

1～4は甕の口縁片である。口径約12.3cmとやや小型な製品である。口縁外面に沈線が1条巡り、頸部内面には接合痕が残る。胎土は赤褐色を呈しやや粗いが、焼成は並である。2は頸部が大きく外反し、口縁内面は凹む。胎土はにぶい赤褐色を呈し粗い。3は口縁端を面取りし、胎土は灰色を呈して、焼成も良い。4は小型で壺形に近い製品である。口縁内面から外面にかけて、オリーブ灰色を呈する釉が施される。内面の露胎部は赤褐色を呈する。素地は灰白色で、比較的粗い。

5～8は肩・胴部片である。スタンプ文が認められるものを中心に図示した。5は肩部に連子文のスタンプが施文されている。胎土は黄灰色を呈し、砂粒の含みも弱く密である。焼成は良好である。器面の調整は、外面がハケとナデによるが、内面は荒いナデであった。6は肩部にへら描き文様が入る。胎土は灰色で緻密である。7は甕の胴部片である。器壁は厚く1.9cmで、胎土は灰色を呈し、小礫を含み少し粗い。器面調整は外面が叩きで、内面は荒いナデである。外面の叩きは3cm当り11本で細長い。8は壺の肩部片と見られる。胎土はにぶい赤褐色を呈してやや粗いが、焼成は良い。器面調整は外面が荒いへらナデで、内面はナデによる。9は斜格子のスタンプ文が入る。10は格子と大の字を組合わせたスタンプ文が施文されている。胎土は灰色を呈し、比較的粗い。

11・12は壺の底部片である。11は胎土が灰黄色を呈し、焼成も良い。12は底径16cmで、胎土は赤褐色を呈し、砂粒の含みが多くて、比較的粗い。焼成は並である。器面調整は内外面とも荒いナデである。底部はわずかであるがそり上がる。

14～17は鉢で、17以外は播鉢である。14はおろし目の上端に凹線が一条巡る。胎土は砂粒を少し含み、焼成も不良である。おろし目は幅3.4cmで12本認められる。15は胎土が橙色を呈し、焼成はややあまい。おろし目は3.2cm幅で11本である。また、底部と体部の接合部が見られる。16は口径約25.4cmで、口縁外面に凹線が巡る。胎土はにぶい橙色を呈して、比較的密である。焼成はあまい。おろし目は間隔をおいて、幅3cmで11本施



第76図 越前・加賀焼実測図(1/3)

されている。13は口径30.1cmで、胎土は浅黄橙色を呈し、比較的粗い。焼成は他と同じくあまい。おろし目は間隔をおいて、幅2.7cmで9本施されている。17の捏鉢は口径20.4cmで、胎土は赤灰色を呈し砂粒の含みが多い。焼成は良い。内面は平滑である。

以上、甕、壺、鉢について述べてきたが、上記の遺物の中で越前焼と認められるものは1・2・3・6・8・11・14~17である。一方、加賀焼は5・7・9・12の4点である。なお、4・10はいずれの製品であるか明確でない。しかし、胎土は別として灰釉やスタンプ文は越前焼のものであろう。近年、加賀地方でも大規模な開発に伴ない中世集落址等の調査例も増加し、加賀焼の資料もかなり増加してきたが、その実体はまだ十分に把握されていないのが現状である。

土師質土器(第77図 図版-44)

本遺跡出土の土師質土器に関しては、前回の報告(3)で、口径の大小を基準として分類報告されているが、今回はこれとは別に整理報告したい。なお、今回は成形・調整に基づきⅠ～Ⅵ類に分けてみた。

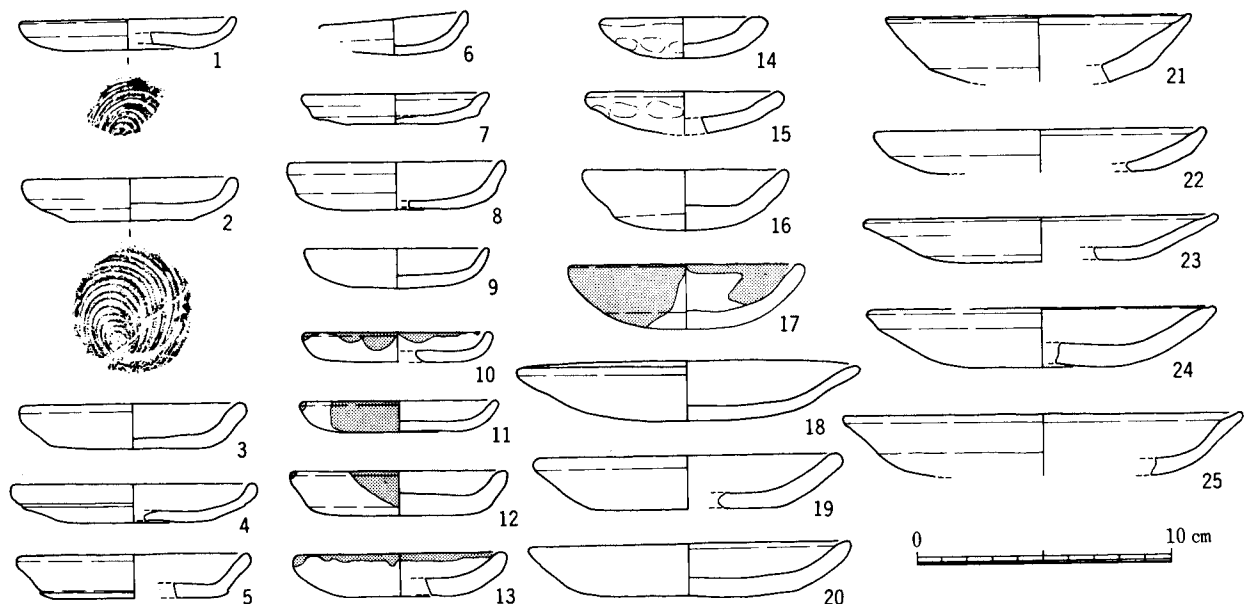
Ⅰ類(1・2)は外底に回転糸切痕を留めているタイプである。1は口径8.6cmで、第7号土坑から出土した一括の土師質土器と同一の製品である。2は口径8.1cm、底径5.1cm、器高1.7cmを測る。胎土は淡黄色を呈し、砂粒の含みも無く、焼成も良好である。1で見られた内底の押えが無く、底はやや厚く平担に仕上げられている。

Ⅱ類(3～8)は平底で、器壁が直線的に立ち上がり、外面下端に横ナデによる稜を持つタイプである。3は口径8.4cmで、胎土はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。4は形態的にはⅠ類に含まれるもので、口径9.4cm、器高1.5cmを測る。5は粘土盤に口縁を張り付たもので、外面下端に横ナデによる稜を持つ。口径約8.9cm、器高1.8cmを測り、器壁は一定である。6は口径5.7cmと本遺跡出土の土師質土器の中では、最も小型の製品である。粘土盤から成形したもので、内面から口縁部は横ナデが入る。第Ⅲ類に含まれる可能性がある。7は口径約7.2cm、器高1.2cmと浅い。6と同様に円形の粘土盤からの成形したものである。8は口径8.4cmで、底はやや丸味をもち底は薄手である。粘土盤に口縁を張り付けて成形した後に、口縁部に強い横ナデを施している。

Ⅲ類(9～13)は円形粘土盤の周辺部を内へ折り曲げて、軽い横ナデを施こし仕上げるタイプである。器壁は一定しており、底は平底であるが、外底の調整は荒い。9は口径約7.1cmで、胎土は浅黄橙色を呈してやや砂っぽい。10は口径7.2cmで、口縁部に灯芯油痕が残る。12・13は9～11に比べ器壁が厚い。12は口径8.2cm、器高1.8cmを測り、底は0.9cmと厚手である。Ⅲ類として分類整理した土師質土器には、灯芯痕が多く認められる。

Ⅳ類(14～17)は丸底で、口縁部に成形時の指押えを強く留めるⅣ-a(14・15)と、丸底で横ナデ調整で仕上げるⅣ-b(16・17)に分かれる。14は口径約6.2cm、器高1.6cmを計る。胎土は浅黄橙色を呈し、焼成も良好である。体部には指頭による圧痕が残り、口縁部は玉縁状を呈する。15は口径7.5cmで、胎土は並で、にぶい黄橙色を呈し、焼成も良好である。体部には指頭による圧痕が巡り、口縁はやや外反する。16は口径約7.9cm、器高2.4cmを計る。胎土は灰白色を呈する。17は口径約9cm、器高2.6cmを計る。内外面とも横ナデ調整にて仕上げられ、灯芯油痕が付着している。

Ⅴ類は口径もⅠ～Ⅲに比べ大きく、平底で器壁が一定しているタイプである。器面調整も良好である。18は口径13.4cm、器高2.4cmを計り、口縁は横ナデでやや外反する。19は口径約11.8cmで、胎土は灰白色を呈し、



第77図 土師質土器実測図(1/3)

焼成も良好である。20は口径12.6 cm、器高2.2 cmを計る。平底で器高は0.7 cmと一定し、口縁内面を軽く面取りしている。

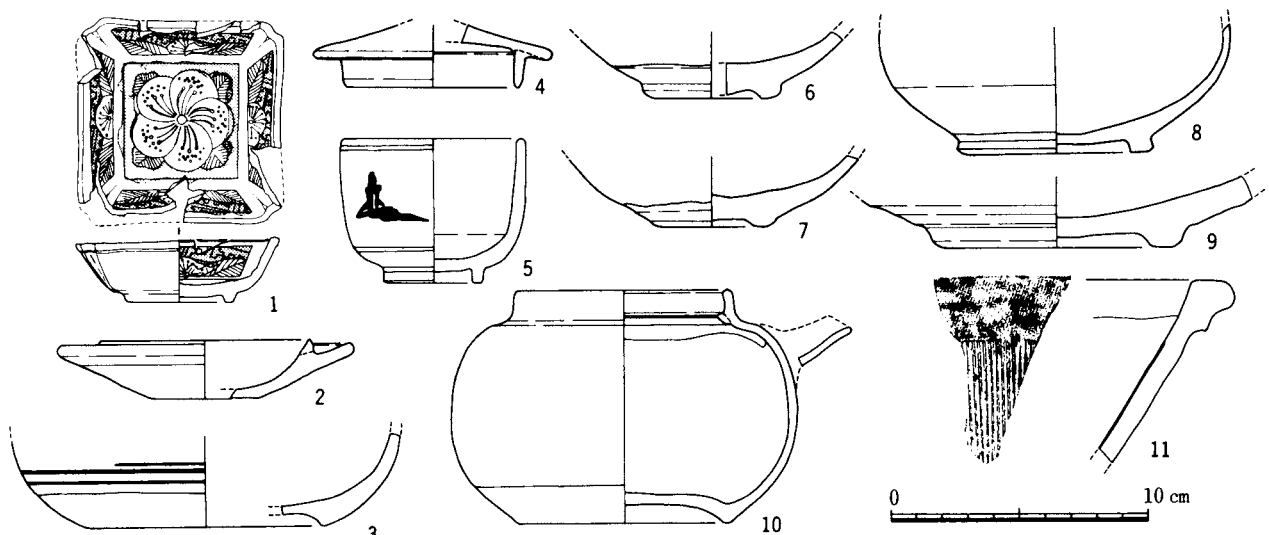
VI類(21~25)は、口縁部内面を横ナデ時に押えて、口唇部を軽く引き出すタイプである。16世紀後半の土師質土器に通有する口唇部の引き出しよりも弱い。21は口径11.9 cmで、体部は直線的な立ち上がりを見せ、外面に稜をもつ。22は口径約12.8 cmで、口縁内面が凹み口唇部は丸味をもつ。23は口径約13.6 cm、器高1.8 cmを計る。胎土は灰白色を呈し、焼成も良好である。24は口径約13.4 cmで、器壁は0.9 cmとほぼ一定である。口縁の内外面は横ナデで、口唇部を軽く引き出している。25は口径約15.6 cmで、口縁は外反する。胎土は浅黄橙色を呈し、焼成も良好である。

石川県内における土師質土器の研究は、能登の穴水地域を中心とした編年試案(4)と、加賀の大聖寺地域を中心とした編年試案(5)の二者が示されている。これらを参考にして本遺跡出土の土師質土器の年代を考えるならば、I類は12世紀末~13世紀、III~V類は14世紀後半~15世紀中頃、VI類は15世紀後半~16世紀前半に位置られよう。また、この年代は、陶磁器類の年代とほぼ同一である。

近世陶磁器(第78図 図版-45)

近世の陶磁器類は、第2次調査区で検出した中世の墳墓址周辺からの出土である。出土点数は約200点であったが、全形が知り得るものを中心に図示した。

1は1辺が8 cmの方形で、器高2.4 cmの皿である。内面の文様は型押しして、梅花と木葉が表現されている。釉はやや緑がかった白色を呈し、畳付を除く全面に施釉されている。呉須は梅花と木葉の文様以外の部分に入る。2は口径11.4 cmの灯明皿の受け皿である。胎土は橙色を呈して硬質である。外面はヘラケズリで、内面はナデである。また、内面全体にタール状のものが付着している。3は碁笥底の鉢で、底径9.4 cmを計る。くすんだ白色の釉が内面から体部下半まで施釉され、呉須で3本線が描かれている。4の蓋は外面に透間感がなくて、青緑色を呈する青磁釉が施こされている。素地はしゅい黄橙色を呈する。5は小型の碗で、口径7 cm、器台径3.1 cm、器高5.7 cmを計る。釉はやや灰色がかった白色を呈して、畳付を除く全面に施こされている。外面の交様は帆立船と見られる。6・7・9は、共に釉が外面下端にて止まり、高台部は露胎である。また、内底には砂目痕が残っている。7は高台径4.9 cmで、釉は不透明な淡黄色を呈し、素地は淡黄橙色で比較的粗い。8・9は鉢である。8は高台径7.6 cm、胴部最大径13.7 cmを計る。釉はにぶい黄橙色を呈し、高台近くまで及んでいる。素地はにぶい橙色で、内底にはトチ目痕が4ヶ所ある。9は高台径9.7 cmで、釉は浅黄色を呈し、素地はにぶい黄橙色で非常に粗い。10は急須形態を呈し、口径8.5 cm、底径8.4 cm、器高9.3 cmを計る。頸部の内面には蓋受けと思われる隆帯が巡る。釉は灰色味の強い灰オリーブ色を呈して、体部内面から体部外面下半まで施こされている。



第78図 近世陶磁器実測図(1/3)

素地は灰色を呈し砂粒の含みが多い。11の播鉢は口縁内面から外面にかけて、黒褐色を呈する釉が施されている。素地は褐灰色を呈しやや粗い。おろし目は幅2.3cmの11本である。

1・3・4・5は伊万里系で、6～10は唐津系の製品である。また、5の帆立船の意匠は地元若杉窯でも見られるものである。

瓦質土器 (第80図—16～19 図版—43)

瓦質土器は8点出土したが、花瓶は第17号土壇より出土した1点だけで、その他は全て火鉢・火炉の破片であった。小片が多く図示できたのは4点であった。

16は底径24.2cmで、火炉の底部片と考えられる。器面は暗灰色を呈し、調整は外面がミガキで、内面は横ナデによる。胎土は灰白色で、砂粒の含みが多い。17は火鉢の体部片であろうか。外面には張り付けによる凸帯があり、その上にスタンプ文が入る。器面は内外面とも黒色を呈し、外面のミガキに対して内面は荒いナデによる。18は底径18.2cmで、張り付けによる三足が付いていたのであろう。足の高さは2.1cmである。器面は外面が黒色、内面が暗茶褐色を呈する。胎土は茶褐色を呈する。胎土は茶褐色を呈し、砂粒を多く含む。焼成も良い。なお、器面調整は体部外面がミガキで、足がナデ、外底はケズリとナデ、内面は荒いナデと部所により異なる。19は口縁内径約18cmで、幅1.6cmで水平な鐙が付く。鐙には径0.3cmの孔が、2.6cmの間隔をおいてあけられ、その脇には粘土の張り付けがある。器面も胎土にもふい橙色を呈し、砂粒を比較的含むが、焼成は良好である。

須恵器 (第79図 図版—45)

須恵器は第2～4次調査区にて約10点の出土があった。その中で図示できたのは半分の5点であった。

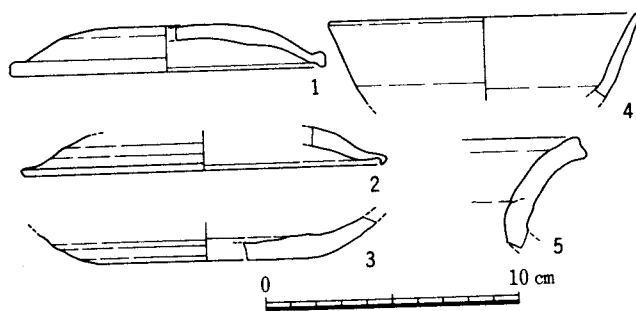
1・2は坏蓋である。1は口径12.2cmで、胎土は灰白色を呈し、比較的堅緻である。2は口径14.4cmで、胎土は灰色を呈する。3・4は坏で、3は底径8.6cmの無高台である。胎土は灰白色を呈する。4は口径12cmで、胎土は灰白色を呈する。5は甕の口縁片である。胎土は暗灰色を呈し、砂粒の含みが多く粗い。焼成は良好である。

4 石製品 (第80図—1～15 図版—46)

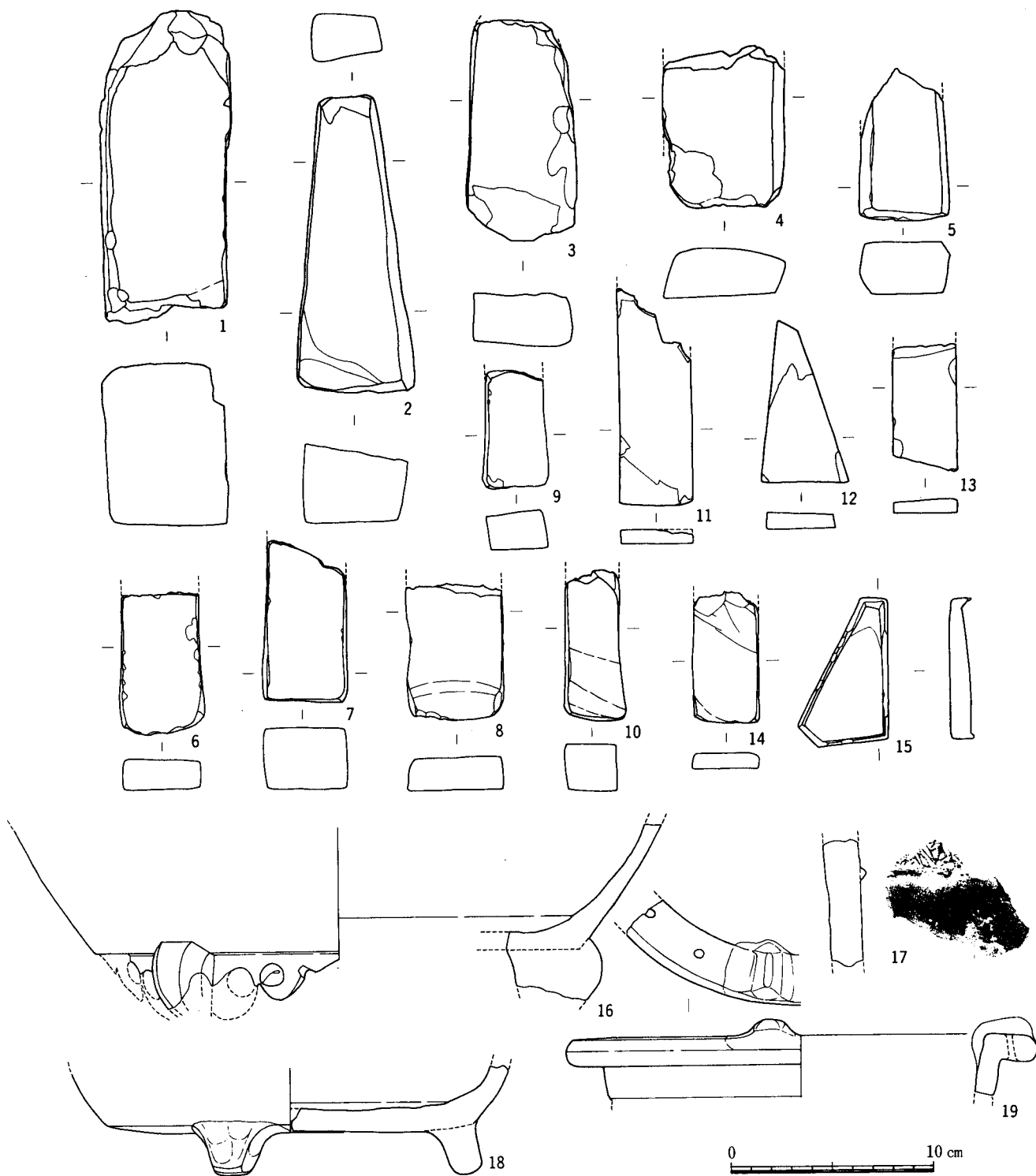
石製品としては、砥石、硯、行火、石製鉢などが上げられるが、今回は石製品を小型の砥石と硯として、他の行火や石製鉢は石造遺物の項目で扱かうこととした。砥石は約20点出土したが、14点を図示した。硯は本遺跡の調査で出土した唯一のものである。

砥石(1～14)は、その石質と形状から荒砥石(1・2)、中砥石(3～10)、仕上げ砥石(11～14)の三種類に分かれる。石質は荒砥石が砂岩、中砥石は凝灰岩、仕上げ砥石は成層状凝灰質泥岩に大別される。1・2は荒砥石である。1は幅6.3cmで、現長15.6cmを計る。細粒砂岩で表裏と左側面の三面が、使用で平滑になっている。2は最大幅5.8cmで、現長14.8cmを計る。粗粒砂岩で四面が、使用で平滑になっている。3～10は中砥石で、形状は長方形の棒状を呈するものが多い。石質は全て凝灰岩である。3・4は共に偏平で、3面が使用により平滑になっている。4は幅4.4cmで、断面は六角形を呈し、全面が平滑である。6～8は幅4～5cmで、断面が長方形を呈し、四面とも使用で平滑となっている。しかし、主に表裏の二面が使用されている。9・10は幅3cm前後で、断面が方形を呈する。四面ともほぼ均等に使用されている。11～14付の仕上げ砥石は全て板状を呈する。石質は成層状凝灰質泥岩で、幅は12以外は幅3.1～3.6cm、厚さ0.8cmとほぼ同一である。表裏両面が使用されている。

15の硯は長さ7.5cm、幅4.5cm、厚さ0.7cmを計る。平面形は不整形な五角形を呈して、堤が全面に巡る完形品である。石質はにふい橙色のシルト岩である。陸部は広く硯の大半を占めて、海部は幅狭く小さい。陸部と海部の境は不明瞭である。堤の脇と海部には墨が残る。第4次調査区西側の第404号ピットより青磁碗(第72図



第79図 須恵器実測図(1/3)



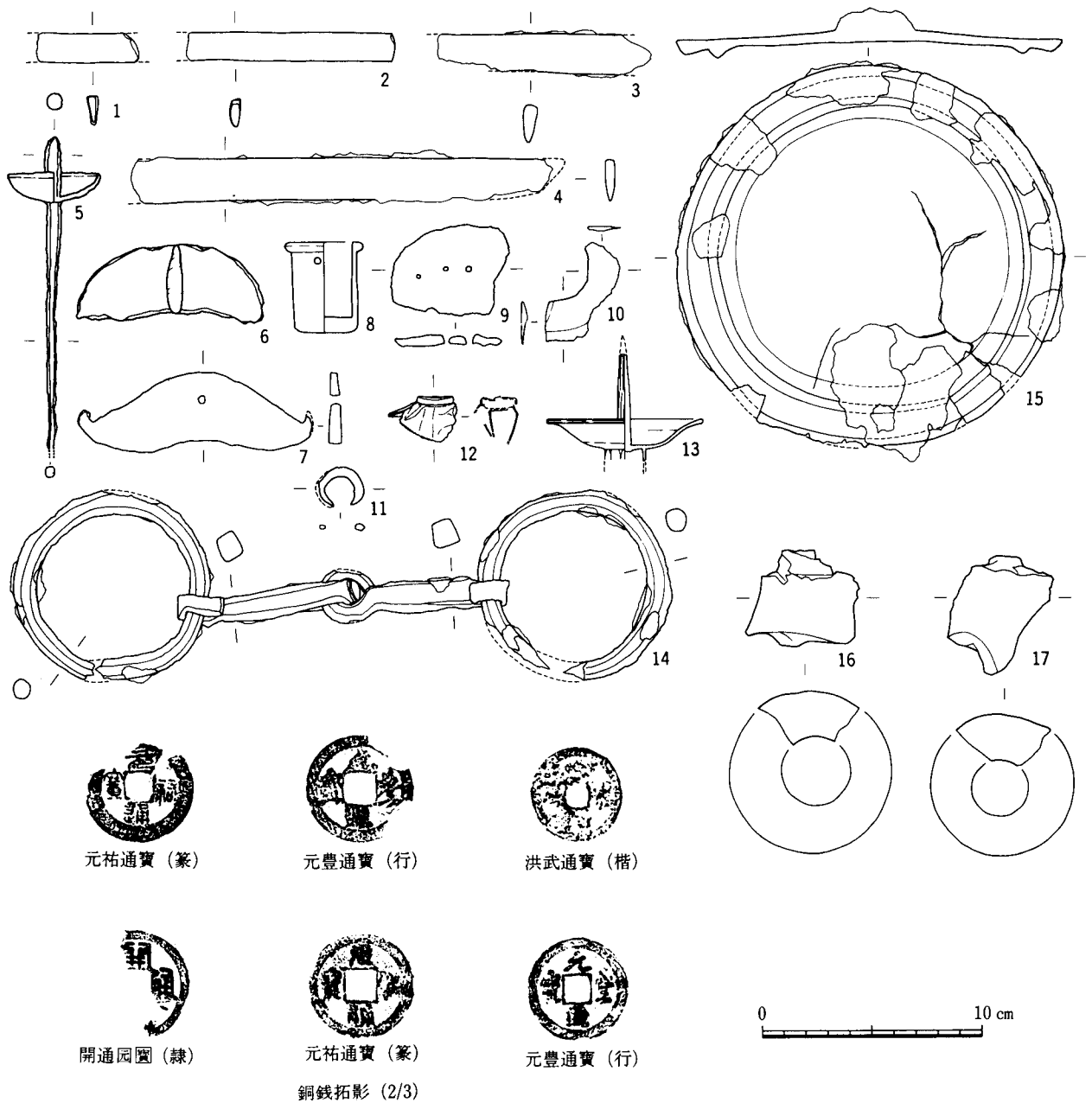
第80図 砥石・硯・瓦質土器実測図(1/3)

— 1) と共に出土した。県内の中世集落等の発掘調査で、石製の硯は出土するが、その全てが平面形が長方形を呈して、本例のように不整形な五角形を呈するものは無い。

5 金属製品 (第81図 図版-45)

金属製品としては、刀子、蓋、クツワ等の鉄製品と鞘、蓋、燭台等の銅製品と銅銭が出土した。銅製品には金銅の製品もあった。また、土製品であるが、韃の羽口が2点出土したので、本頃の付録として扱いたい。

鉄製品(2~9・14・15)は、刀子、短刀、紡錘車、火打鎌、小札、クツワ、蓋、火箸、釘、包丁、石突状鉄製品等の多種に及ぶ。2は刀子であるが、銅製の鞘に入ったまま折れたものである。刀幅1cmである。3は刀区



第81図 金属製品・鑄の羽口実測図(1/3)

(まち)が認められる事からして、短刀と考えられる。刃幅1.7cmである。4は短刀の刃身部である。現在長19.7cm、刃幅1.9cmを計り、切っ先を欠く。5は紡錘車で、現在長14.2cm、車輪径4.1cmである。軸は端部が欠損し、軸径0.2~0.7cmである。軸は車輪を貫いている。第4次調査区の第12号土坑上面より出土した。6・7は火打鎌である。6は半月形を呈し、長さ8.5cm、幅3.2cm、厚さ0.7cmである。形態的には小札に近いが、厚いために火打鎌として整理した。7は全体が弓なり、両端が反り上がらもので、一般的な火打鎌の形態を呈する。長さ10.6cm、幅3.1cm、厚さ0.5cmを計る。中央に径0.4cmの紐穴があげられている。8は石突状鉄製品である。内径2.7cm、深さ3.4cmを計る。厚さは底が0.7cmと厚くて、壁は0.2cmである。口縁周辺には鑄状の凸帯が巡り、その下に径0.3cmの釘穴が1つある。9の小札は、幅4.1cm、厚さ0.5cmで径0.2cmの穿孔が3ヶ所残っている。1・10~13は銅製品である。2は刀子の鞘で幅1.3cmである。10は表面に鍍金した金銅製品の破片で、幅1.8cmで表面は平坦であるが、裏は凹凸がある。仏像の光背の一部であろうか。11はリング状銅製品で、径約2.1cmである。元はリングであったと考えられる。第15号土坑より出土した。12は蓋のつまみ部分である。つまみ部分は少し潰れているが、径1.7cm、高さ0.3cmを計る。中央を鉄でとめている。蓋の体

部は蓮弁状に波うつ。13は燭台で、上下端を欠き現在高4.9cmである。受け皿は口径7.2cm、高さ1.4cmを計り、底には径1.7cmの木軸の受けがつく。受け皿中央には中空の軸が高てられ、根元で径0.6cmを計る。14・15は鉄製品でも大型のものである。14はクツワで、全長30.2cmを計る。左右の環を2本のつなぎで結んでいる。左右の環は、径8.9cmと8.7cmで、ほぼ同一である。断面形は円形を呈する。つなぎで部分は2本で、長さ15.2cmを計り、断面形は長方形を呈する。第24号土壇から出土した。15は径17.5cmの蓋である。器厚は0.4cm前後で、内面に断面が三角形を呈する返しが、径13.9cmで付けられている。外面中央にはつまみが付くが、形態は錆で不明である。第28号土壇より出土した。

銅銭は第2次調査区を中心に9枚出土した。書体(6)は図示した3種類以外に「永楽通寶」がある。書体別枚数は「開通園園」(隸)1枚、「元祐通寶」(篆)2枚、「元豊通寶」(行)2枚、「洪武通寶」(楷)1枚、「永楽通寶」(楷)2枚である。

16・17は輪の羽口の先端部である。内径は約3.2cmと2.6cmである。胎土は共ににぶい橙色を呈して、混入物は見られない。16は第30号土壇、17は第23号土壇から出土した。

6 石造遺物 (第82~87図 図版46~47)

出土した石造遺物は大きく三つに大別される。それは、鉢や行火の石製品、五輪塔や台座の石造塔婆類、石臼などの道具である。石質は火山礫凝灰岩、緑色凝灰岩、軽石凝灰岩で占められ、他には緑色凝灰質砂岩が1点あった。

鉢・行火 (第82図一1~10 図版46)

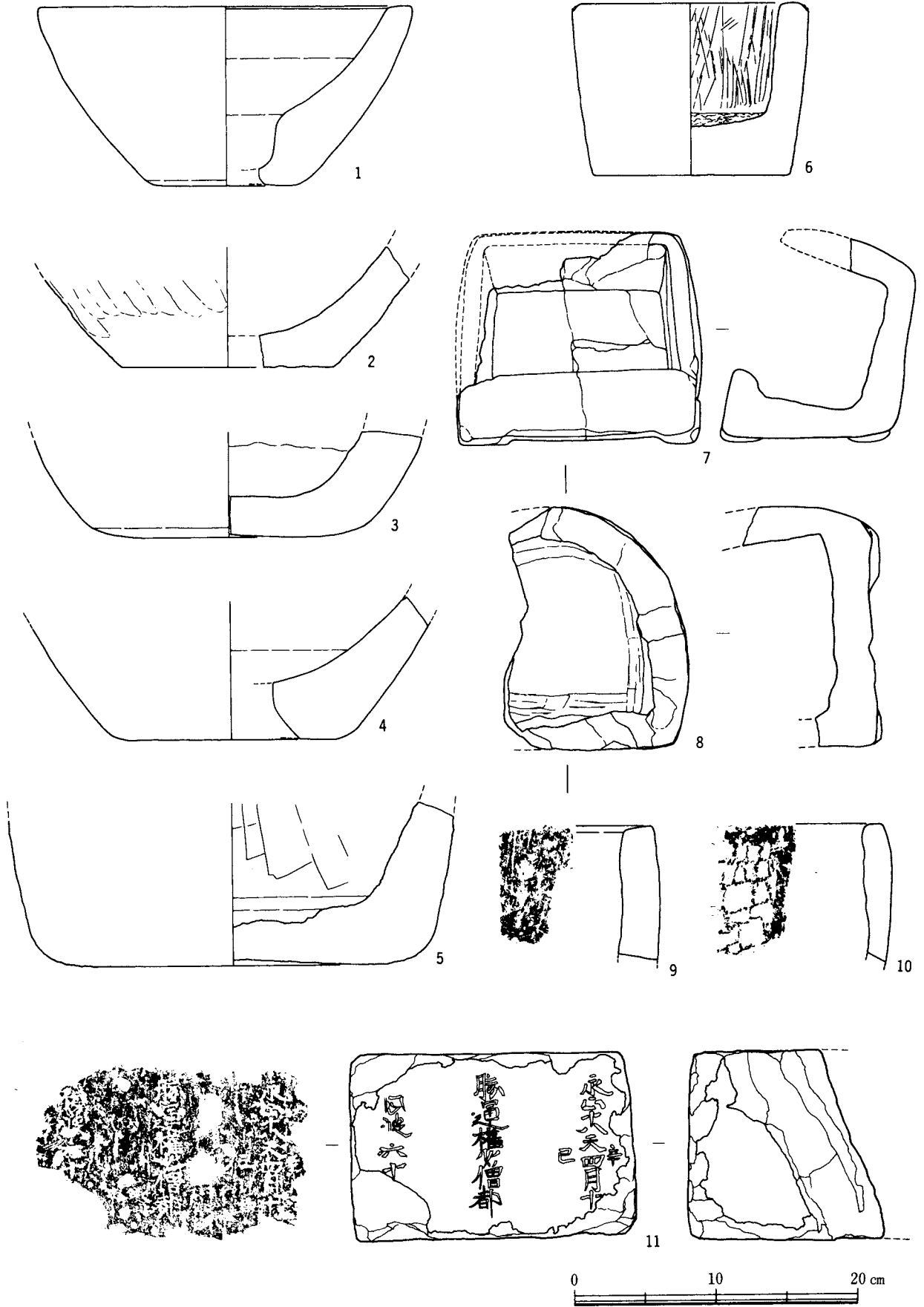
鉢(1~6)は主に第4次調査区北端から出土した。内底が平滑なものと凹凸があるものの二種類があった。1は口径26.2cm、底径約10.2cm、器高12.7cmを計る。内面は平滑で、特に中央が摩滅により凹み、底が約1.1cmと薄い。第3号配石中より出土した。2は底径15cmで、器壁は2.7cmとほぼ同一である。内面は平滑で、外面にはノミ痕が残る。3は底径14.5cmで、器壁は4.2cmとやや厚い。内面は平滑である。4は底径15cmで、底は4cmと厚い。内面は平滑である。1~4は共に緑色凝灰岩である。5は底径27cmと大きい。器壁は直線的な立ち上がりを呈し、内面には幅広のノミ痕が残っている。内底は使用により凹凸が激しい。石質は火山礫凝灰岩である。第1号石室より出土した。6は口径約13cm、底径14cm、器高12.2cmを計る。器壁は2cmと均一であるが、底は3.4cmと厚い。内底は径10.5cmで凹凸があり、内壁にはノミ痕が残る。石質は緑色凝灰岩である。1~4の鉢は陶器の播鉢と同様に使用されたと考えられるが、5・6は内でものを叩き潰すのに使用されたと考えられる。

行火(7~10)は出土品の全点を図示した。7は旧形3/4が残る。一石から削りぬいたもので高さ15.1cm、奥行13.5cmで、底に幅2.5cm、高さ0.5cmの削り出しの足が四隅に付く。前面の窓は高さ9cm、幅14.6cmを計る。外面は平滑に仕上げられているが、内面は粗くノミ痕が残る。8は7よりもやや大型な行火の底部である。底は奥行17.2cmで、底の足も幅4.5cm、高さ0.7cmと大きい。共に石質は軽石凝灰岩である。9・10は共に上方が開いた行火と考えられる。

五輪塔・台座 (第82図一11、第83・84図 第85図一1・2 図版46~48)

五輪塔・台座はそれぞれが単独で出土して、塔の全形を知り得る物は無い。点数的には五輪塔の地輪と台座が多い。

11は第2次調査区の中世墳墓址より出土した紀年銘入りの地輪である。前面に「永正十八天^年四月十」、「勝運権少僧都」、「□□六十」が刻まれている。紀年銘が入る前面は、高さ10.2cm、横幅20cmを計り、紀年銘は浅く刻まれる。後半分を欠き現幅13.5cmである。形状からして小型の組合せ式の五輪塔である。石質は緑色凝灰岩である。紀年銘の永正18年(西暦1521年)は、以前から知られていた文明2年(西暦1470年)の「□運権少僧都」よりも約半世紀新らしく、本遺跡東方約120mに位置する白山町浄養寺の境内にて確認された文明3年(西暦1471年)の「□□釈完尼」、文明5年(西暦1473年)の「良快」、文明16年(西暦1484年)の「澄舜」等(7)よりも新しい資料である。



第 82 図 石鉢・行火・五輪塔実測図 (1/4)

五輪塔の空風輪（第83図一1～3）は、3点出土した。3点共に緑色凝灰岩であった。1・2は火輪への挿入部を欠くが、3は空輪上端以外は全形が知り得る。全長約31.5cm、空輪径16cm、空輪径15.5cm、挿入部径7.2cmを計る。

火輪（第83一4）と水輪（83一5）は各1点出土した。4の火輪は上端と軒先を欠き現在高22.7cmで、軒上幅37.8cmを計る。軒の反りはやや強い。第4号土壇内より出土した。5は小型の水輪である。径18.6cmで、前面に径10.3cmの月輪と梵字のバンが浅い薬研掘りで刻まれている。

5は宝篋印塔の基礎で、他に出土品は無い。全体的に風化と欠損が著しいが、高さ約13cm、横幅19.8cmを計る。石質は五輪塔が全て凝灰岩であるに対して、緑色凝灰質砂岩である。

地輪は9点出土したが、その内5点（第83図一7～10、第84図一1）を図示した。7は上端幅22.9cmと23.6cm、下端幅24.2cmと25.1cmで、高さ19.3cmを計る。8は上部を一部欠損する。上端幅23.7cm、下端幅24.8cmで、高さ18.8cmを計る。第2号土壇より出土した。9は角を欠損する。上端幅30cmと32.2cm、下端幅32cmで、高25.6cmを計る。10は上面の角と下面を欠損している。上端幅28.8cmと29.5cm、下端幅29.2cmと30.5cmで、高さ24.8cmを計る。第5号土壇の上面より出土した。1は下面の角を欠損するが、側面には斜め方向のノミ痕が残る。上端幅25.5cmと26.5cm、下端幅26.2cmで、高さ20.5cmを計る。5点とも石質は緑色凝灰岩である。

台座は8点出土したが、その内7点（第84回2～6 第85図一1・2）を図示した。石造塔婆の中で、五輪塔が大半を占める事から、これら台座の大半も五輪塔下に置かれた物と考えられる。2は上面幅19.5cm、下面幅約25.5cm、高さ6cmを計る。全形を知り得る台座であるが、花卉の彫り出しは弱い。中世の墳墓址より出土し、石質は軽石凝灰岩である。3は約1/4の破片であるが、高さ10.8cmからすると6と同様の大型の台座であったと考えられる。花卉の彫り出しは、明瞭で大きい。石質は緑色凝灰岩である。4は上面にノミ痕が残る。高さ7.5cmで、花卉の彫り出しも丁寧である。5は高さ9.2cmで、花卉の彫り出しは、深い少し簡略化されている。3～5の石質は緑色凝灰岩である。6は上面幅30cm、上面幅36.2cm、高さ11.4cmと大型の台座である。花卉は丸味が強く、彫り出しは弱い。第3号配石間より出土し、石質は火山礫凝灰岩である。1は高さ10.7cmで、中世墳址より出土した。

石臼は出土品の全てを図示した。茶臼が3点（第85図一3～5）と粉挽き臼が6点（第86・87図）である。

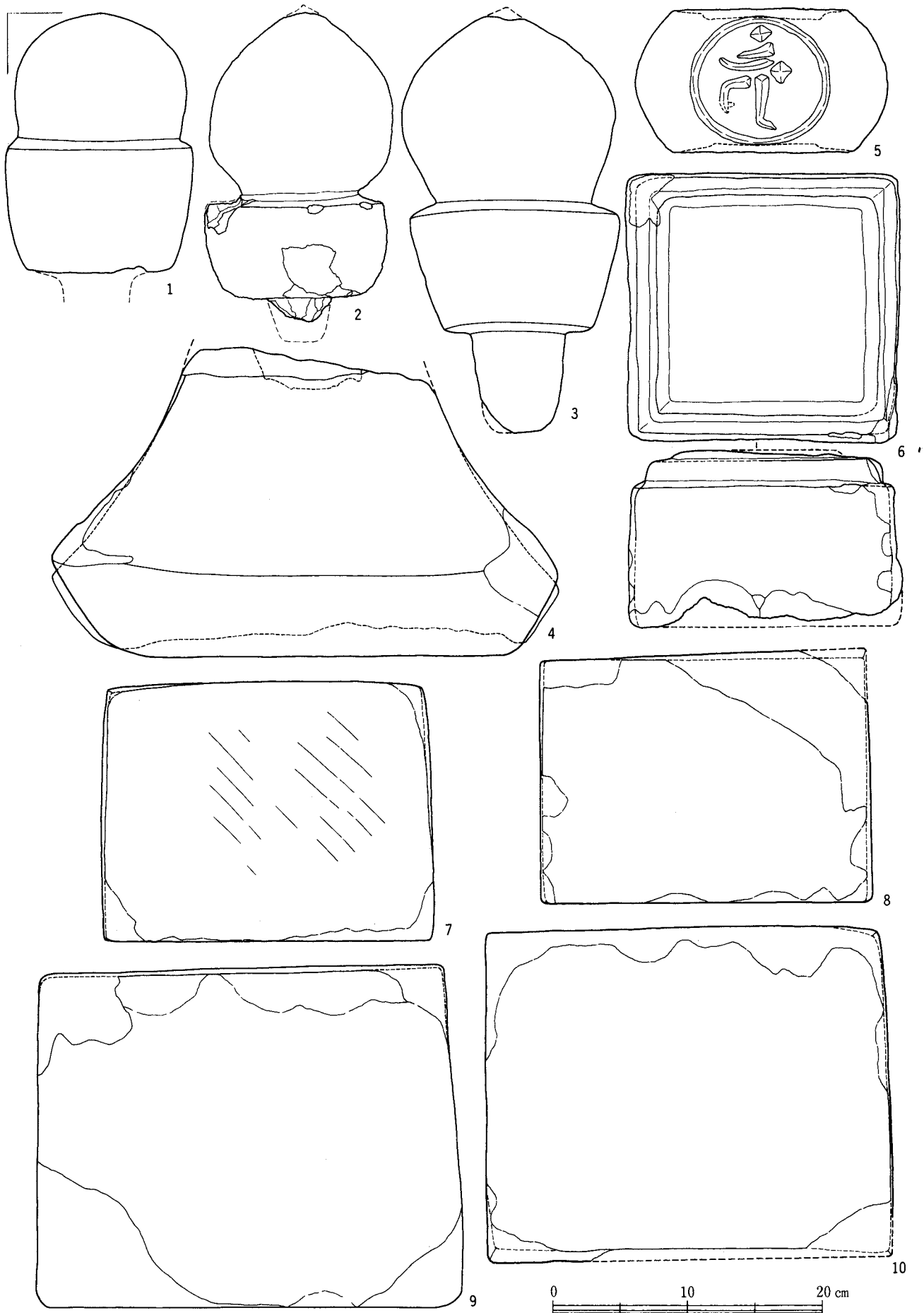
(8)

3は茶臼の上臼である。臼面径19cmで、中央の芯近くが少しふくらむ。厚さ10.9cmで、中央の供給口は径2.5cmを計り、ノミ痕を残している。挽き木の挿入孔は2cm方形で、深さ3.5cmである。臼面の目は細く八分画であるが、目の間に古い目が認められることから、使用中に目の刻み直しが行なわれたと考えられる。石質は軽石凝灰岩である。4・5は茶臼の下臼である。4は受け皿径約36.5cm、台径28.2cm、臼面径18.2cm、臼高4.6cm、高さ10.2cmを計る。臼面のふくらみは強く、芯径は2.3cmで、方形を呈しノミ痕を残す。目は八分画で細い。受け皿と台の外表面には斜め方向のノミ痕が残る。台の内部は削りぬかれている。5は受け皿径約39cm、台径33cm、臼面径20cm、臼高2.5cm、高さ8.7cmを計る。臼面はふくらまず平坦である。芯棒孔約2.1cmで、方形を呈する。目は他と同じく八分画で、比較的深く刻まれているが、芯近くで円形の溝が巡る。台の内部の挟りは浅い。3～5の茶臼は、先に第3次調査区の土壇遺構から出土した。

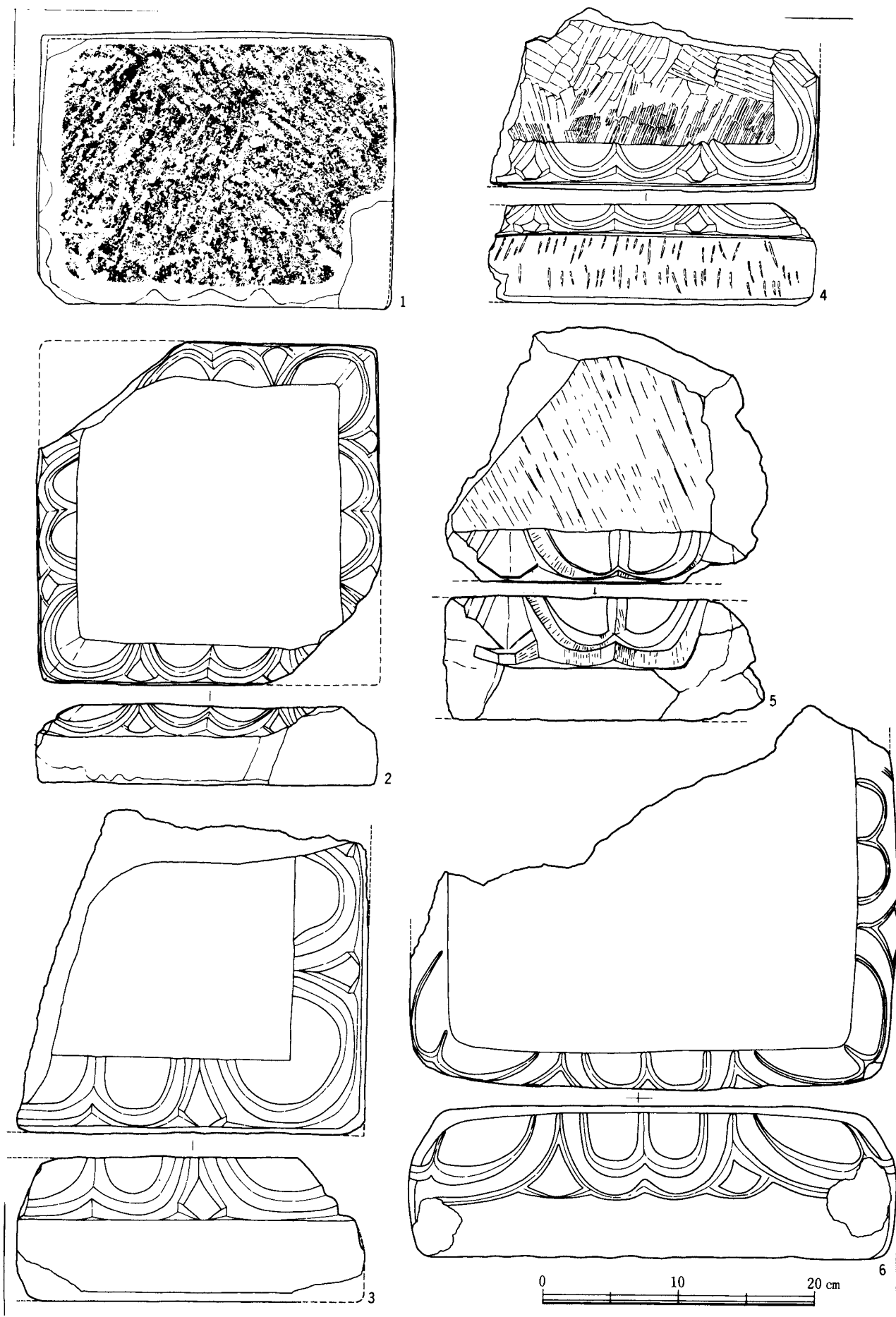
粉挽き臼は上臼2点（第86図一3、第87図一1）と下臼4点（第86図一1・2・4、第87図一2）が出土した。

上臼2点は共に火山礫凝灰岩である。3は上縁径27.6cm、臼面径32cm、高さ9.8cmを計る。臼面は大きく窪んで、目は八分画に刻まれている。芯棒孔は3.2cmで方形を呈しノミ痕が残る。挽き木の挿入孔は、縦2cm、横幅3.1cm、深さ4.8cmを計る。1の上臼は臼面径36.6cm、高さ10.6cmを計る。臼面の窪みは浅く、目は八分画で太く刻まれている。芯棒孔は2.6cm、供給口径2cmである。挽き木の挿入孔は、縦3cm、横幅5cm、深さ4.4cmを計る。

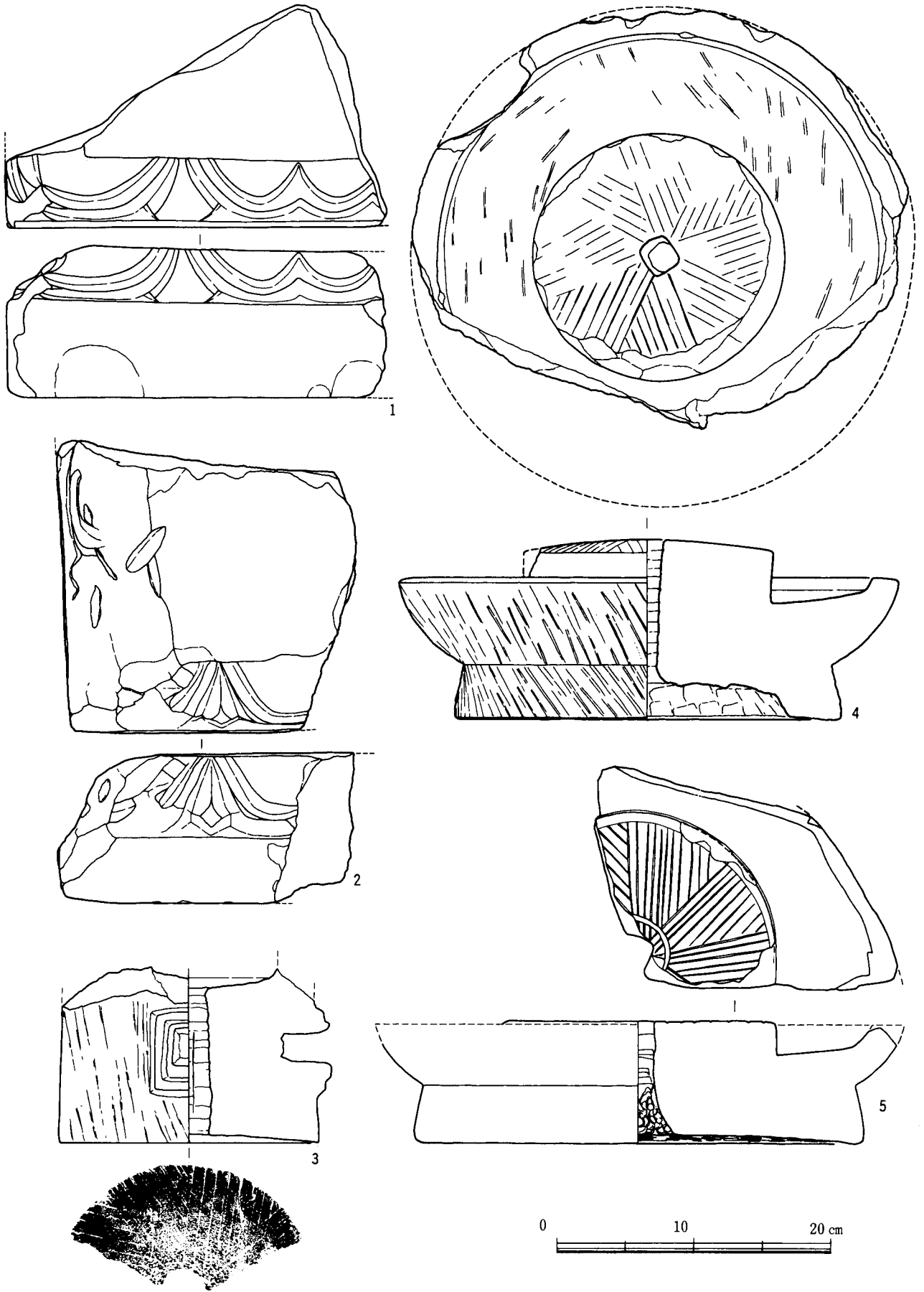
下臼4点のは共に芯棒孔が貫通しているが、1・2・4は臼面が強くふくらみ、底の挟りが深い。1は臼面径



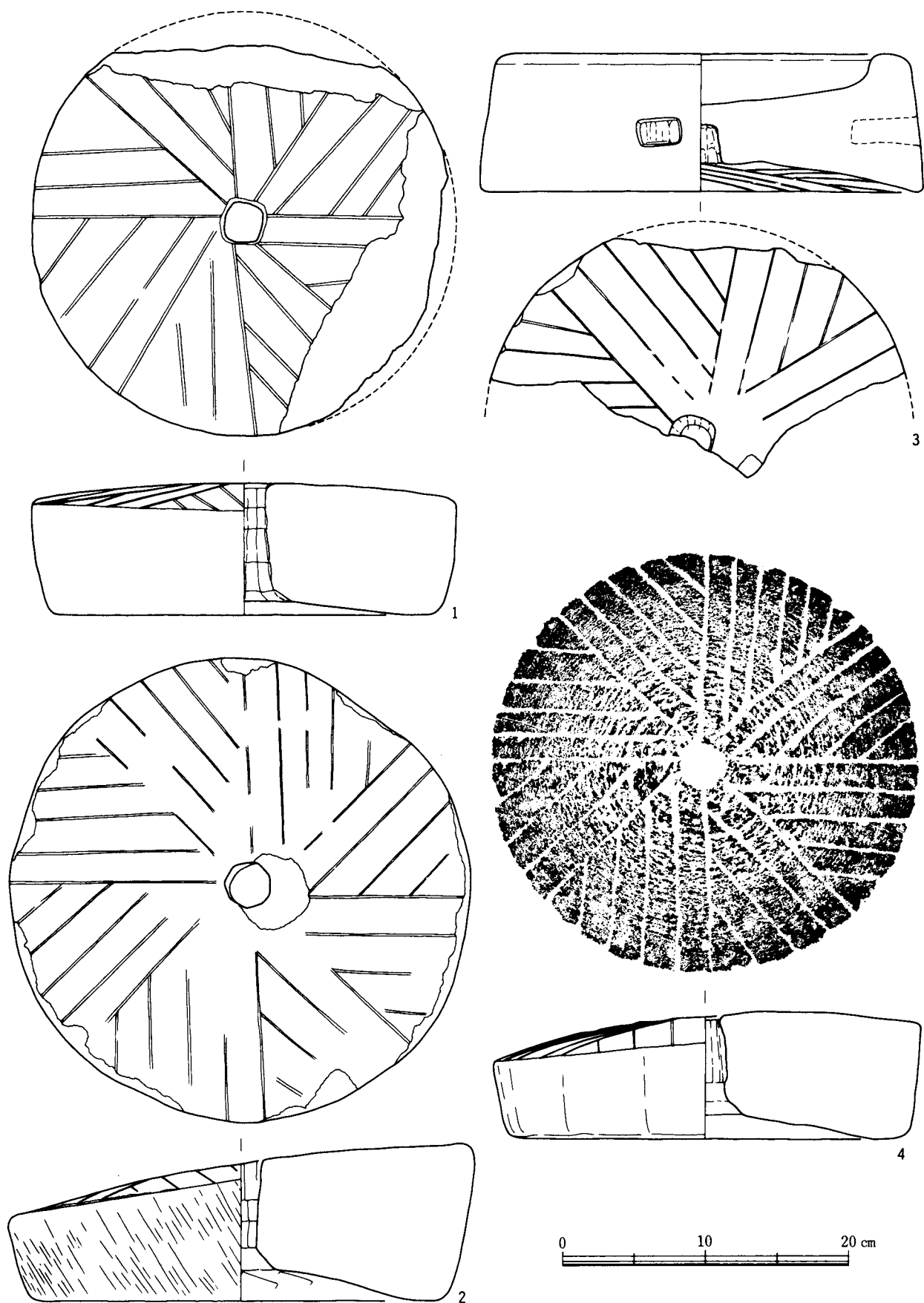
第 83 图 石造遺物実測図 1 (1/4)



第 84 图 石造遺物実測図 2 (1/4)



第 85 図 石造遺物・石臼実測図 (1/4)



第 86 图 石白実測図 1 (1/4)



第 87 図 石臼実測図 2 (1/4)

30 cm、下縁径 26.8 cm、高さ 9.5 cm を計る。芯棒孔は径 3.1 cm で、方形を呈する。白面の目はやや荒く、底の挟りはやや浅い。石質は火山礫凝灰岩である。2 は白面が大きく傾くが、ふくらみは 1 よりも小さい。白面径 33 cm、下縁径 28.5 cm、高さは 6.2 cm~11.1 cm を計る。芯棒孔は径 3.2 cm で、七角形を呈する。白面の目は、磨滅により浅くなっているが、底の挟りが深い。4 は白面径 29.8 cm、下縁径 27 cm、高さは 5.5 cm~9 cm を計る。芯棒孔は径 3.3 cm で、円形を呈する。白面のふくらみは強くて、目は八分画に深く刻まれている。芯棒孔を中心とした同心円形の擦痕が残る。底の挟りは深い。2 (第 87 図) は、白面径 34.2 cm、高さ 10 cm を計る。芯棒孔は径 3 cm で、両面から穿孔されたノミ痕が残る。白面と底は平坦で、目は八分画に太く、密に刻まれている。目はやや曲線型を呈する。石質は 1 の上白と同じく火山礫凝灰岩である。

本遺跡から出された茶臼や粉挽き臼の点数は、他地域に於ける中世集落遺跡と比べてみると多い。これは、遺跡周辺に於ける水田耕作が広まったのが、近代以降の事で、以前は畑作中心の農業が営なまれ、豆やそば等の雑穀を加工するのに石臼が必要であった事によると考えられる。また、茶臼の出土は集落内に喫茶の風習が有った事が窺える資料である。石質も茶臼は軽石凝灰岩を、粉挽き臼は火山礫凝灰岩を利用して有る事から、石材の区別が有った事も知られる。

- 註(1) 石川県鳥越村教育委員会 1979 『鳥越城跡発掘調査概報』
 (2) 田島明人 1984 「石川県の 11・12 世紀土器について」 五県会議情報交換資料
 (3) 石川県立埋蔵文化財センター 1981 『鶴来町白山町遺跡・白山町墳墓遺跡』
 (4) 石川県穴水町教育委員会 1980 『西川島・I』
 (5) 加賀市教育委員会 1981 『勅使館発掘調査報告』
 (6) 芝田 悟氏の教示による。
 (7) 桜井甚一 1971 『石川県銘文集成』 「中世金石文編」 北国出版社
 (8) 三輪茂雄 1978 『臼』 法政大学出版局 石臼の部分名称は三輪氏の分類に基づく。

第2節 縄文土器の概観について

白山遺跡から出土した土器は整理箱にして35ケースならずで、長時間にまたがる遺跡の出土量としては若干少いと考えられるが、伴出した打製石斧が369点をかぞえ、本遺跡の性格を特色づけていると言える。出土した土器は文様の変遷を主眼として19群に大別し、深鉢、鉢、注口土器等に器種分類を行ってみたが、十分に図示できず判別に苦慮する次第となり、本文作製の段階で感じた疑問点をまじえて、若干の訂正と補筆を加え、編年的位置づけを試みてゆく。

第1群土器は県下においては出土例の少い一群である。縄文と沈線文をつけ、口縁部分が内屈傾向を持つ深鉢1類は、加賀市横北遺跡第1群深鉢5類^(註1)、七尾市赤浦遺跡赤浦V期第1群土器2類^(註2)、志賀町火打谷大垣内遺跡第3群土器第5類^(註3)、富山県東中江遺跡、などで類似の出土が知られているが、全形、文様構成、セット構成をとらえるには出土例が限られているために至ってはいない。深鉢1B類11は外反する口縁をつけるもので深鉢1類のなかでの位置づけに不安を感じたものである。施文文様や器形的に類似する土器として、押水町上町うまばち遺跡第1群土器^(註5)、七尾市赤浦遺跡^(註2)、能都町波並・西の上遺跡第3群b^(註6)が知られ、その編年的位置づけには幾度かの^(註3b)変遷があった。それらの研究史的な流れについては、米沢義光氏の論文^(註7)にあらましが紹介されているが、中期末葉から後期初頭に編年研究されていた岩崎野式土器、前田式土器の内容をめぐる問題と分布地域の違いからくる^(註8)誤解が、後期前葉に置かれている気屋式土器との関わりをめぐることで大きく混乱をまねいたものであろう。一面で言えば、昭和25年に山内清男氏によって北陸地域で最初に設定された土器型式である、気屋式土器の内容が、^(註9)特異な器形と三角形列点文に代表される土着性の感覚が強すぎて、型式としての把握にとどまり、気屋式土器様式の研究へと進展しなかった事にも遠因があると言えよう。米沢義光氏によって、うまばち遺跡第1群は、堀之内II式土器に併行するものと位置づけられた。堀之内II式土器の指標となる「8」の字状貼付文を持つ土器は、^(註11)寺家遺跡で出土しているのが県下における希少な例であると言え、地域的な土器型式は気屋式土器を受けつぎ、堀之内II式を加味して存するものとして考えてゆきたい。

高堀勝喜氏は上田うまばち遺跡^(註5)の結語^(註2)のなかで、うまばち遺跡第1群土器を赤浦遺跡結語^(註12)で記述された誤認をふりかえり、京都府桑飼下遺跡との関連で加曾利B I式に併行するものとして仮称赤浦式土器を提唱している。しかし、これに対しては、幾つかの問題点を提起しないわけにはいかない。うまばち遺跡においては、加曾利B II式、B III式に併行するものは若干数認められるが、加曾利B I式に比定できる土器は見られない点であり、桑飼下式土器の特徴的な器形である内湾する器形は少く、かえって外傾する口縁形態で占められている事から密接な関連があると考えするにはさらに検討を要すると思われる。また、仮称赤浦式土器とする点についても、土器型式の名称が混乱をまねき、既に完全に破壊された遺跡名を冠する事に疑問が持たれ、標式遺跡としての後世の検証を仰ぐうえからも、重ねて疑問が持たれる。石川県下において、最初に型式として把握されようとした志賀町火打谷大垣内遺跡を考えるのが至当であるが、農業改善事業によって消滅したとされ、圃場整備事業が実施されたとはいえ、遺跡の遺存が考えられる押水町上田うまばち遺跡を標式遺跡とするのが妥当と愚考する。また、上田うまばち遺跡第1群土器は堀之内II式土器に併行するものとして考えてゆきたい。

ここで、本遺跡の第1群土器深鉢1類土器を理解する上において、上田うまばち遺跡第1群土器の特徴を考えてみたい。近年においては、門前町道下元町遺跡^(註13)での出土が知られてきたが、能登地域においての出土例が目立つ点に注意を払っておかなければならないと言える。深鉢には平縁と波状口縁があり、外傾する口縁端部が角張る傾向にある。全形をうかがう資料は1点だけであるが、頸部でくびれて外へふくらみ胴部最大径がやや底部近くに位置していると言える。波状口縁の波頂部口唇に連続する押圧が加えられるのが見られ、口唇部、口縁端部内面に縄文が施文されるのが目立つ。文様施文は口縁から頸部にかけて行われ、口頸部文様帯と胴部に施文する縄文の原体を変え、胴部には縦縄文が置かれる。文様は沈線による方形、三角形の区画文、S字状文、渦巻文が施文される。沈線は断面が半月状を呈するものが多く、彫りも浅いものが多い。器面の乾燥が一定程度進んだ段階で一気になしたもののよう^(註13)に想定される。以上の特色と本遺跡第1群深鉢1類を比較したならば、11の外反す

る1点を除いて、関西地域の桑飼下遺跡^(註12)との関連が濃厚であると言える。口縁が内湾傾向になるものが大部分であり、沈線文のみを施文する深鉢2類、沈線文と刺突文からなる深鉢4類は、桑飼下遺跡の第4群沈線文系深鉢A、D、Eに近いものを感じる。また、深鉢5類の47は、第4群沈線文系注口土器に類例が知られる。

第1群土器は関西地域との関連が考えられる桑飼下式土器に併行するものと考えられる。

第2群土器は条線文土器で、沈線で区画するものとそうではないものの2つに分けられる。口縁形状には波状と平縁があり、器形的には注口土器が目立つようだ。条線文土器は北陸においても各地で発見されており、加賀市横北遺跡、七尾市赤浦遺跡、能都町宇出津崎山遺跡^(註14)等で1類土器が見られる。県外では、滑川市本江遺跡^(註15)の加曾利B₁様式鉢第9型、新潟県朝日村能登遺跡^(註16)、岐阜県坂下町門垣戸遺跡^(註17)、京都府桑飼下遺跡等が上げられる。小島俊彰氏^(註15)が指摘するように加曾利B₁様式に特徴的な土器で、押水町上田うまばち遺跡、志賀町火打谷大垣内遺跡では見られず、また、加曾利B₂様式に併行する富来町酒見新堂遺跡^(註18)、内浦町松波農場遺跡^(註19)や、酒見式期から集落が形成されはじめた野々市町御経塚遺跡^(註20)でも出土していないようである。ただ、酒見式期に併行する富山県井口村井口遺跡^{(註21)、(註22)}の井口I式に含まれているのが見られ、地域性をさらに検討する必要はこのころのもの、小島俊彰氏の限定の指摘はうなずかれるものである。

第3群土器は加曾利B₁様式に類似する資料であるが、県下においての出土量はごく限られた形でしか検出され^(註23)ていなかったものである。津幡町竹橋ジョウヤマ遺跡^(註24)、珠洲市折戸遺跡、加賀市横北遺跡で少数例が知られているだけである。富山県ではまとまりをもった遺跡として、滑川市本江遺跡、宇奈月町愛本新遺跡、平村東中江遺跡、氷見市四十塚遺跡、同市朝日貝塚^(註25)等の多数の遺跡が知られていて、深鉢、鉢、注口土器にその特徴が良くあらわれている。本遺跡の出土土器は、東日本からの伝播経路から見ると西に位置している為か、器形や文様施文に鋭さを欠くもののように感じられる。

第4群土器は関西地域の一乗寺K I式土器に併行すると見なされる土器群である。北陸地域では貝殻擬縄文を施文する注口土器に注意が払われてきて、一乗寺K I式土器、元住吉山 I 式土器として併記され、酒見式期における地域性の転換を示すものとして重要な位置づけがされてきたが、2型式の併記から脱却すべきものと考えられる。溝底刺突文と結節縄文が特徴的な本群と刺突文を起点として引く弧線文、擬縄文を持つ元住吉山 I 式との分離は、小島俊彰氏が羽状縄文様式の2分という別の視点で提示^(註15)されておられるが、酒見 I 式土器は元住吉山 I 式に併行するものと考えておきたい。第5群土器に含めた深鉢2 B類(150)は本群に含むべきもので訂正しておきたい。

第5・6群土器は酒見式期に併行するものまとめたが、小片となるものが多いために、すっきりとした形にはなっていない。直接的に酒見遺跡と比較できるのは、少数例である第5群土器である。第6群土器の198、199は後期初頭に考えるべきであろう。注口土器は弧線文を持つものが目立ち、関西地域との関連が強く反映していて、判然とはしないが深鉢器形においても西日本との結びつきが強いように感じられる。

第7群土器は無文化の傾向をつよめた井口II式土器に含まれるものである。高堀勝喜氏の御経塚遺跡の編年では、元住吉山 I 式土器に併行する御経塚 I 式土器、宮滝式土器に併行する御経塚II式土器として井口II式土器を新旧に分類されているが、井口II式土器の提示から今日までの研究史に鑑み、井口II式土器を、新・旧あるいはA・Bを付した名称として分離すべきものとする。将来的にはさらに細分化される事は想像に難くないと思われる。井口II式土器は小島俊彰氏によって提示された段階^(註21)から、近畿地方の元住吉山II式土器と宮滝式土器との関連が指摘されてきたが、その分離は近年の井口遺跡、野々市町御経塚遺跡の組織的な調査によって得られた資料から進展を見せている。井口遺跡の発掘から得られた出土遺物を、井口I～IV期に区分し、器形と文様の組合せ^(註22)を重視し、器種別の系統を提示した上に、東海型・北陸型・東北型等の地域別の系統性をも含み込んだ編年案は、北陸地域ではこれまでに例を見ない研究手法として注目を集めた。橋本 正氏・久々忠義氏・酒井重洋氏等の提起に、御経塚遺跡の完形資料を比較し検討した小島俊彰氏^(註26)は、北陸を西部・東部地区に大きく分けて、それぞれの地域での編年案を提起し、晩期に至るまでの地域的交流の流れから土器編年を展開されている。これらの中では、関東地方の曾谷式期に併行するものに井口II様式の波状口縁深鉢や幅広沈線の初源とする考え方が示さ

れているのが注目される。細別の指標として、巻貝の刺突から扇状圧痕文、三角形区切文、棒状短線の区切り文が平行沈線文に加えられて、波状、平口縁を通じてなされる単位文となり、平行沈線文が沈線から幅広沈線、そして沈線文に変化するという事が上げられている。深鉢器形では、内屈する口縁部が立ち上がり、外傾する形態への変化を見せる。文様帯の割り付けでは、口縁部、胴部の平行するふたつの文様帯が基本的なものであるが、頸部に文様帯が1条加えられるものの器型が微妙に屈折する在り方に注意を払いたい。家根祥多氏の教示であるが、西日本地域との連動を考慮しなければならないであろう。

井口Ⅱ式土器の様式としてのとらえ方や型式への細別は、北陸地域での文化圏の基盤を考えるうえで重要な位置を占めているだけに、打製石斧の爆発的增加とともにさらに検討されなければならないだろう。県下においては、野々市町御経塚遺跡を除いて少数例が報告されているだけであるが、門前町道下元町遺跡、能都町波並・西の上遺跡、七尾市新保町B遺跡^(註27)、押水町上田うまばち遺跡、加賀市横北遺跡と加賀・能登全域に広がる傾向を見せている。

第8群土器は高堀勝喜氏の細分した八日市新保Ⅰ・Ⅱ式土器に比定されるものである。平行沈線文を縦位三角形区切文や縦位短線、「x」の字状に区切る手法を前段階に置き、三叉状のえぐりを加えるものを従来からの八日市新保式、すなわちⅡ式に改めておられる^(註20)。八日市新保式土器は金沢市八日市新保遺跡^(註28)の調査から高堀勝喜氏が設定されたもので、連結三叉状文を指標として、深鉢、鉢、皿等の器種構成をとらえ、中屋式、御経塚式土器との比較を通して晩期初頭の型式に位置づけられている。高堀勝喜氏は御経塚遺跡の第5次調査概報において、志賀里風として平行沈線文を区切る棒状短線文をぬき出す方向性を示しておられる。同じ第6次調査概報^(註31)においては井口Ⅱ式土器は元住吉山Ⅱ式と宮滝式、滋賀里式土器に併行するものとされる一方で、八日市新保式土器には滋賀里風のもものが混在するという表現が見られる。滑川市本江遺跡の資料で小島俊彰氏は八日市新保式の前身という形で、棒状短線で平行沈線を区切る手法を説明しておられ、連結三叉状文を持つものと八日市新保式のそれとの違いをいかにとらえるかの自問をなしている。井口遺跡の報告では、八日市新保式土器の前段階として井口Ⅳ期に、いわゆる滋賀里風の土器を位置づけていて、さきの八日市新保Ⅰ式土器は後期末の編年に落ちつきそうであった。そして、『井口式土器』の論文の中で小島俊彰氏は、三角状の彫りこみをもつもの(朝日水源池遺跡)、「x」の字状の文様をもつもの(黒部市田家遺跡)、そして八日市新保遺跡第1類Eの棒状短線で区切るもの三者の交流のなかから、北陸の東部と西部で八日市新保Ⅱ式や岩瀬天神型が生まれたと推定されている。米沢義光氏は金沢市犀川鉄橋遺跡^(註32)のまとめで、小島俊彰氏の地域的編年論に賛意を表していると考えられる。

八日市新保Ⅱ式は以上の成果から、井口Ⅱ式土器系列のなかで変化していったものと想定されるが、東北地方の晩期とどのような関わりを持つのであろうか。小島俊彰氏は先の地域的編年や出崎政子氏^(註33)が明らかにした後期末の北陸の東西の地域的な土器様式の違いから、八日市新保Ⅱ式(北陸西部)と勝木原式(北陸東部)を併行するものとしているが、東北地方との関わりが土器に反映するのは勝木原式土器と見るのが、器型や文様の大きな変質から妥当と考えられ、八日市新保Ⅱ式は後期末に位置づけられるのではないかと想定される。

東北地域の晩期の編年は、山内清男氏の5型式編年を細分化、地域的細分化の研究の中に在ると思われる。後期末の土器型式の位置づけについては結論がでていないようだが、幾つかの問題提起がある。山内清男氏は晩期初頭、安行3a式土器に併行するものとして、三叉線を持つものを提示しているが、北陸地域の勝木原式、御経塚式に類似するものが感じられる。東北地域では、青森県弘前市十腰内遺跡^(註36)の第Ⅵ群土器を大洞B式土器の旧の方として、今井富士雄氏・磯崎正彦氏が提示しているものは、富山県岩瀬天神遺跡、勝木原遺跡に類似したものを感じさせる。勝木原遺跡の第1類波状深鉢E-3は「波頂部を単独の三叉文で飾るものである。この種のもは、口辺に引かれる2条の沈線を文様の一特徴ともし、波頂部ではこの沈線によりハの字状に画された内に、三叉文を刻み込む。裏面にも同様の文様を持つものがある。」と小島俊彰氏は説明されているもので、内面に三叉線だけではなく幅広の凹線を引くものが目立つのもつけ加えておきたい。勝木原1類E-3に類似するものは、入組文系の土器として日本海側に広く分布している。秋田県鹿角市柏木森遺跡^(註37)、(註38) 岩手県一戸町小井田Ⅳ遺跡^(註39)、山形県村山市作野遺跡^(註40)、山形県上山市泥部遺跡^(註41)、新潟県大潟町蜘蛛ヶ池遺跡^(註42)、滋賀県今津町北仰西海道遺跡^(註43)、新潟県朝日村

熊登遺跡^(註16)、加賀市横北遺跡、野々市町御経塚遺跡で散見される。勝木原遺跡の報告のなかで、小島俊彰氏は八日市新保式との三叉文の違いのなかで、線の表現がやわらかくなる変化にすぎないとしているが、それぞれの祖型と見られるものが異なるのであるから、その違いは大きいと判断するべきであろう。富山県の庄川流域で東西に分かたれる分布圏の設定は、出崎政子氏、小島俊彰氏の大きな成果であるが、土器様式の根底的な変化としてとらえるならば、御経塚Ⅲ式土器としているものの中に画期を見出すべきであろう。八日市新保様式の波状口縁深鉢の施文位置は波頂部、口縁帯、胴部の三段構成の平行文様が基本的パターンで、勝木原式、後続する御経塚式では波頂部から胴部にかけての文様帯の錯綜化、波頂部文様の複雑化に大きく変化しているのが見られる。波頂部の台形化と共に、三叉文の施文が横方向パターンから、玉を抱く斜め方向の割つけとなり、規範となるべき文様を十分に消化しきれていない混乱を見る事ができる^(註44)。波状深鉢が後期から晩期にかけて平縁化してゆく事も台形波状の矮小化を考える事によって、より自然な変遷を想定する事ができる。勝木原遺跡では深鉢・鉢器形の様式の変化を見る事ができるだけと限定されているが、注口土器の器形についても御経塚遺跡のものであるが算盤球状を呈するずんぐりした注口があり、八日市新保式との間には大きな変化を見る事ができる。

さて、本遺跡での第8群土器と第9群土器との差は以上の考え方で分離したもので、玉抱き三叉文の導入と縄文の施文が加わる点に、八日市新保Ⅱ式土器器形の流れの画期を置くものである。湊 晨氏が『富山県史』^(註45)の概説のなかで説かれたように、岩瀬天神型を晩期初頭とする位置づけには高い評価を考えてゆくべきであろう。

なお、八日市新保Ⅱ式土器の指標のひとつともなる浅鉢器形(鉢4B類)は、内湾する口縁に数条の沈線文と楔形風を削り取る手法を組み合わせた文様をつけるのが一般的で、三角形の削り取りが向き合う場合と連結してしまう場合、また等間隔に置かれる場合などが知られている。

注口土器や深鉢の連結三叉状文にも容易に転化するものと想像でき、また、されてきた。しかし、連結三叉状文は成立せしめた系統については、十分に研究が進められたとは考えられない。三角形の削り取り手法を、近畿地方の檀原式土器の浅鉢、木の葉文と呼ばれる檀原式文様との類似性を考えてみたい。家根祥多氏の御教示によれば、前段階の連弧文、ジグザグ文、相対ジグザグ文からの変化として、檀原式文様が成立したとの事であるが、八日市新保Ⅱ式土器の三角形削り取り手法は、連結三叉状文の成立を含めて、東日本地域からの三叉文(三叉線)の影響ではない事が逆の視点で指しているものとする。八日市新保Ⅱ式の連結三叉状文は、浅鉢器形の三角形割込(末永雅雄 1961)から展開したものと考えられ、深鉢波頂部の「山」の字形三叉状文の施文も容易に納得できると思われる。縦方向の三叉文(檀原式文様)は平行沈線内に閉じ込められた三叉文と見なされ、御経塚式土器の平行沈線文に一辺をとり込まれた玉を抱かない三叉文に変化してゆくものと考えている。

第10群土器は従来からの御経塚土器を考えて分類したのであるが、勝木原式土器との分離が想定されるべきで、今後の課題である。深鉢器型のなかで、360、363、375~377は後期段階へさかのぼる可能性が考えられる。御経塚遺跡での第1次調査^(註29)によって設定された御経塚式土器は、高堀勝喜氏が八日市新保遺跡出土資料との緻密な検討の上に引き出されたもので、入組んだり、連結したりしない通常の三叉状文を指標とし、注口土器、鉢型土器、蓋等に独特の施文、器型が見られ、北陸地域色の強い土器型式として提示されている。

主要な文様として上げられている「T」の字形三叉文が、器形によって縦位置や横位置に施文を変化させているが、直線的で区画をなす傾向に在るところから、単独に施文される三叉線とは別系統の文様ではないかと想像される。

第11群土器は羊歯状文およびそれに類した文様を施文するものをまとめた。大洞B-C式土器に併行するものである。沈線文と列点文が、北陸地域の中屋式土器の文様施文に強く働いているものと見なされる。大洞B₁式土器の波及を示した勝木原式土器の西方への分布は、滋賀県までを知り得ただけであったが、大洞B-C式土器の西方への分布は範囲をひろげ、量的にも多いものが知られている。^(註46) 奈良県檀原市檀原遺跡、^(註47) 滋賀県滋賀里遺跡、^(註48) 大阪市森の宮遺跡まで広がり、石川県では上田うまばち遺跡、御経塚遺跡が上げられる。

第12群土器は大洞B-C式に併行する中屋式土器である。金沢市中屋遺跡を標準遺跡として、沼田啓太郎氏^(註49)が、北陸の晩期の最初の型式として設定したものである。昭和56年には中屋遺跡の分布範囲確認調査が行われ、東西^(註50)

約 80 m、南北約 100 m に及ぶ広大な遺跡である事が明らかとなり、約 2 km の距離で御経塚遺跡、八日市新保遺跡等の大集落址が展開する事となった。その時期幅から立地状況を含めた経済的基盤の問題がうかび上がってきたようだ。中屋式土器は B 字状突起および口唇部押圧文をつける「く」の字状に外反する平口縁深鉢が基本型で、胴部および口縁部に施文される入組三叉文が指標となる。施文される縄文は一般的によりが小さい、また、結節回転縄文が第 11 群土器を含めて施文されるのが目立ち、大洞 B—C 式土器に併行する事を証明していると言える。^(註 51) 胴部の文様帯を浮かび上がらせるように、口頸部、胴部下半に段をつけて無文帯を磨いているのも大きな特色である。鉢器形の内面には珊瑚状加飾をなすものが目立ち (514)、深鉢と同じ入組三叉文、縄文が施文される。蓋器形もほぼ同様の施文をなし赤塗りされたものが多い。中屋式土器は御経塚式土器の土着性が一掃され、東北地方の影響をより強く受け、斉一的標準化をなした型式と見なす事ができる。県下では御経塚遺跡、中屋遺跡、尾口村御所の館縄文遺跡、^(註 52) 金沢市松村遺跡、^(註 53) 上田うまばち遺跡などでの出土が知られている。中屋式土器は深鉢器形や口唇部のみに加飾する鉢器形で類似する出土が知られる長野県山ノ内町佐野遺跡との検討を通して、北陸独特とする内容を考えてみる必要性を感じる。

第 13 群土器は鍵の手文、工字文風の文様を施文するものでまとめた。531～535 は後期酒見式期のものであり、重ねて訂正しておきたい。口縁部を把握できるものはなく、523～528 のように口頸部と考えるものをつかむにとどまっている。中屋式期の「く」の字状に外折する口頸部ではなく、ゆるいカーブを持って外展する口縁部をつけるものを考え、主要文様として先のふたつの文様を想定している。

第 14 群土器は中屋式以降に所産するものと考えているが、いまだ判然とはしない。

第 15 群土器は下野式土器^(註 56・57)に大きくは含まれるが、鉢 6 A 類、壺 1 B 類はやや後出的な位置づけが可能かと考えている。松任市長竹遺跡の調査から、中島俊一氏は下野式土器の細分を考える資料の提示をなしている。^(註 58) 下野式土器は鳥越村下野遺跡出土資料から吉岡康暢氏が提唱されたもので、大洞 C₂ 式後半から A 式への傾斜をはじめた時期にあてている。603～608 の眼鏡状突帯をつける鉢器形と鉢 12 B 類の平行沈線文をつけるものと若干の壺器形が加わり、粗製土器は条痕調整に平行沈線文にはさまれた列点を持つものに統一されているようだ。富山県上市町眼目新丸山 A 遺跡の資料で酒井重洋氏は精製土器の施文法の変化から、下野式を大洞 C₂ 式併行とそれ以降とに細分する案を提示された。中島俊一氏は長竹遺跡の資料から、下野式から大洞 A 式併行期にあたるものを分離し、長竹式土器として成立する可能性を提示している。下野式土器に特徴的な眼鏡状突帯が器面の削り取りに変化し (609)、体部文様が浮線化していくとされ、変形工字文が新しい文様として加えられる。また、突帯文系の深鉢、壺が加わる (619～622)。浮線文に類するものとして 614～618 が上げられるが、小片のために判然とはしない。本遺跡の第 15 群土器の大半は長竹式土器に対応するものと見なされ、壺型土器 (645・644) がともなうのであろうか。

粗製土器の縄文土器 (第 16 群)、条痕文土器 (第 17 群)、無文土器 (第 18 群)、底部、土製品、土偶、弥生式土器については、検討を行い得なかった。お詫びを申し上げ、後考に期したい。

なお、各群のなかに移入土器の可能性のあるものがあるが、無文土器 (第 18 群) の 891 は関西地域からの搬入が確実視されるものであり、中空土偶の 944 は県下では初例の出土で、東日本地域からの移入が想定されるものである。第 13 群土器の鉢 4 C 類 (568・569) を大洞 C 式に系統がたどれるものと考え、これらの移入土器が北陸のどの型式と併行するかの検討も、残された大きな課題である。

各群をまとめると、第 1～3 群土器は加曾利 B₁ 式に併行するもので、第 1 群土器は桑飼下式に類似するもの。第 4 群土器は一乗寺 K 1 式土器、第 5・6 群土器は酒見式土器にあてる。第 7 群土器は井口 II 式、第 8 群土器は八日市新保 I・II 式にあて、第 9 群以下を晩期とした。晩期初頭は勝木原式土器で大洞 B₁ 式土器に併行するもので、第 10 群の御経塚式土器は大洞 B₂ 式にあてる。第 11・12 群は中屋 I 式、第 13・14 群は中屋 II 式に位置づけ、第 15 群は下野式・長竹式土器と考えた。

本報告書にかかる整理作業、資料検討にあたっては、多くの方々の御教示をいただいた。文末ながら、石器・石造遺物の石質鑑定および石器圏の執筆をお願いした藤 則雄教授、中世白山麓の歴史を執筆いただいた中西国

男氏、遺物の検討に助言してくれた米沢義光氏をはじめセンター職員に、縄文時代石器に検討を加えてくれた本田秀生氏に厚く感謝申し上げます。

- 註1 湯尻修平・吉田裕雪 1977 「加賀市横北遺跡発掘調査報告書」 石川県教育委員会 26頁
- 2 杉島孝博・他 1977 「赤浦遺跡」 七尾市教育委員会 94頁
- 3 市堀藤夫 1974 「火打谷大垣内遺跡」『志賀町史』 志賀町役場 406頁
- 3 b 米沢義光 1983 「羽咋郡志賀町火打谷大垣内遺跡出土土器再見」『北陸の考古学』 石川考古学研究会 181頁
- 4 久々忠義 1982 「東中江遺跡」 平村教育委員会 26頁
- 5 高堀勝喜・編 1983 「上田うまばち遺跡」 押水町教育委員会 14・15頁
- 6 平田天秋 1976 「能都町波並・西の上遺跡発掘調査報告書」 石川県教育委員会
- 7 柳井 陸 1976 「富山県立山町岩峯野遺跡緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 8 富山県立氷見高校歴史クラブ 1964 「富山県氷見地方考古学遺跡と遺物」
- 9 久保 清・高堀勝喜 1951 「河北郡宇ノ気町気屋遺跡」『石川考古学研究会々誌第3号』
- 10 米沢義光・市堀元一 1980 「曾福遺跡」 穴水町教育委員会
*曾福遺跡出土の気屋式土器の成果を受け継いで、註3 bの論文において米沢義光氏は気屋式土器の深鉢器種の編年を位置づけておられ、今後の編年の枠組みが出来たものと理解される。
- 11 小嶋芳孝 1981 「寺家」1980年度調査概報 石川県立埋蔵文化センター
- 12 渡辺 誠・編 1975 「京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書」 平安博物館
- 13 1980年に本センターにて発掘調査を実施している。市堀元一氏によってその報告がまとめられ、1985年に報告書が刊行されている。
- 14 高堀勝喜 1982 「宇出津崎山遺跡」『能都町史、第3巻』 68頁
- 15 小島俊彰 1979 「本江遺跡」『滑川市史、考古資料編』 25頁
- 16 田中真吾・横山勝栄 1976 「熊登遺跡」 新潟県岩船郡朝日村教育委員会 30頁
- 17 紅村 弘 1976 「門垣戸遺跡」 岐阜県恵那郡坂下町教育委員会 69頁
- 18 市堀藤夫 1974 「酒見新堂遺跡」『富来町史 資料編』 富来町役場
- 19 高堀勝喜 1981 「松波農場遺跡」『内浦町史 第一巻』 内浦町役場
- 20 高堀勝喜・編 1983 「野々市町御経塚遺跡」 野々市町教育委員会
- 21 小島俊彰 1966 「東砺波郡井口遺跡出土遺物の紹介」『大境』第2号 富山考古学会
- 22 橋本 正・酒井重洋・久々忠義 1980 「井口遺跡発掘調査概要」 富山県井口村教育委員会
- 23 石川県津幡町役場 1962 「津幡町小史」 36頁
- 24 杉島孝博 1976 「折戸遺跡」『珠洲市史』 539頁
- 25 1972 「富山県史」考古編
- 26 小島俊彰 1981 「井口式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣
- 27 高堀勝喜 1976 「新保町B遺跡」『七尾市史 第4巻』 七尾市役所
- 28 南 久和 1983 「金沢市新保本町チカモリ遺跡」 金沢市教育委員会
- 29 高堀勝喜 1964 「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」『押野村史』
- 30 高堀勝喜 1974 「石川県御経塚遺跡」第5次調査概報 野々市町教育委員会
- 31 高堀勝喜 1975 「石川県御経塚遺跡」第6次調査概報 野々市町教育委員会
- 32 平田天秋・芝田 悟・米沢義光 1982 「金沢市犀川鉄橋遺跡第1・2次発掘調査報告書」 石川県立埋蔵文化財センター
- 33 出崎政子 1969 「北陸地方の縄文時代晩期について（I）」『大境』第3号 富山考古学会
- 34 小島俊彰・出崎政子 1967 「勝木原遺跡I」 富山県立高岡工芸高校地歴クラブ
- 35 山内清男 1969 「先史考古学論文集・旧第十一集」 先史考古学会 280頁
- 36 今井富士雄・磯崎正彦 1968 「十腰内遺跡」『岩木山』 岩木山刊行会
- 37 岩見誠夫・他 1984 「柏木森遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VII』 秋田県教育委員会
- 38 奥山 潤・田村 栄・大里勝蔵 1975 「鹿角大規模農道発掘調査略報」 秋田県教育委員会
- 39 嶋 千秋・折沢満郎・小平忠孝 1983 「小井田IV遺跡発掘調査報告書」 (財) 岩手県埋蔵文化財センター
- 40 長橋 至・阿部明彦 1984 「作野遺跡」 山形県教育委員会
- 41 佐藤正俊・長橋 至 1983 「泥部遺跡」 山形県教育委員会
- 42 戸根与八郎・坂井秀弥・斉藤基生・田辺早苗 1981 「蜘蛛池遺跡」 新潟県教育委員会
- 43 吉谷芳幸・神谷友和・堀内宏司 1984 「北仰西海道遺跡の調査」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XI-2』 滋賀県教育委員会
- 44 金山弘明氏の御教示で、松任市旭遺跡群出土の資料を見せていただいた。従来からの八日市新保式としてはとらえきれない文様が波頂部に見られた。
- 45 湊 農 1972 「概説 縄文後晩期」『富山県史』考古編
- 46 末永雅雄 1961 「檀原」 奈良県教育委員会

- 47 田辺昭三編 1973 「湖西線関係遺跡調査報告書」 湖西線関係遺跡発掘調査団
- 48 松尾信裕 他 1978 「森の宮遺跡」第3・4次発掘調査報告書 難波宮址顕彰会
- 49 沼田啓太郎 1956 「旧石川郡安原村中屋遺跡調査報告」『石川考古学研究会々誌』第8号
- 50 出越茂和 1981 「金沢市中屋遺跡」 金沢市教育委員会
- 51 山内清男 1979 「日本先史土器の縄紋」 先史考古学会 21頁
- 52 平田天秋 1975 「尾口村御所の館縄文遺跡」 石川県教育委員会
- 53 米沢義直 1969 「金沢市松村縄文遺跡概報」『石川考古学研究会々誌』第12号
- 54 永峯光一 1967 「佐野」 山ノ内町教育委員会
- 55 大原正義 1982 「佐野遺跡」『長野県史』考古資料編 全一卷(二)
大原正義 1981 「北信濃山ノ神遺跡出土の土器について」『信濃』 第33巻第4号
- 56 石川県立鶴来高等学校地歴クラブ 1960 「手取川流域の縄文遺跡予報」
- 57 吉岡康暢 1971 「石川県下野遺跡の研究」『考古学雑誌』第56巻4号
- 58 中島俊一 1977 「松任市長竹遺跡発掘調査報告」 石川県教育委員会
- 59 酒井重洋 1976 「上市町眼目新丸山A遺跡」『大境』第6号

III 白山本宮と一向一揆

1. 五輪塔と文明一揆

鶴来町白山町の裏向と呼称される地に、真宗大谷派寺院の浄養寺がある。貞享2年(1685)の由緒書上によれば、寺号公称は元和4年(1618)、開基は宗順である。かつて、一向一揆のさ中に展開された幾度かの戦いのなかで、山内をおさえたものが勝利を得た、その「山内」に現在は壇家が多いという。

この浄養寺の境内北側に五輪塔を納めた一画がある。周辺の遺跡から出土したものを集めたものという。これらの五輪塔の中で、地輪に銘文を有するものが4点ある。それぞれ「文明二年(1470)庚寅・□運権少僧都・六月二十八日」、「文明三年(1471)辛卯・□□釈完尼・十月十四日辰尅」、「文明十六年(1484)・澄舜・五月五日」、「延徳三年(1491)辛亥・俊清・□□^(月)十一日」とある。

桜井甚一氏の『石川県銘文集』によれば、いま一基「文明五年□・良快・三月二十二日」の在銘地輪があるはずだが確認できなかった。

4基のうち、澄舜五輪塔は、桜井氏がその著書に「この地輪は、もともと三宮墓地に在ったもので、附近には白山宮の寺務を総理する長吏の墓が多いことから、澄舜は長吏であった澄栄の先代か、その一族であろう。」と註記されている。

□運権少僧都五輪塔・□□釈完尼五輪塔と未確認の良快五輪塔は、いずれも「カツサカ」の白山町墳墓遺跡から移築されたものと伝えている。なお、同遺跡からは、「永正十八^年 (1521) 四月十日・勝運権少僧都・□□六十□」と刻む地輪が出土している。のこる俊清五輪塔は、三ノ宮地内から移築したものと推定されるが、断言できない。(普通、真宗では寺族の女性の法名は、釈□□尼とする。)

さて、この在銘五輪塔が登場するころ、白山本宮は、新たな時の流れに身を投じつつあった。安貞2年(1228)4月に始まった、本宮・金剣宮・岩本宮の三社による臨時祭礼などを紐帯として、時には本宮・金剣宮の確執を生じながらも、白山本宮四社の結束が観応(14世紀半ば)ごろまでは保たれていた。だが、その後、本宮・金剣宮の確執は、両社の関係を復旧不可能なものとし、臨時祭礼の記録も、貞治2年(1363)を最後に姿を消す。この頃から、『講中記録』は、それまでの本宮内部、または金剣宮との関係など白山関係の記事を圧倒的な比重で記録してきたのとは対照的に、守護・一向一揆などの政治的記録で占める比率を高めている。それは、室町期に白山本宮のおかれた立場の厳しさを物語っているといえよう。

応仁の大乱以来、東西両陣営に分れて対立抗争を続けてきた北陸の守護大名も、越前の朝倉孝景が、加賀の富樫政親の属する東軍へ、文明3年(1471)5月に転じ、能登の畠山義統もまた西軍から東軍へと帰属した。この変化を機敏にみてとった本願寺八世法主蓮如は、叡山の圧迫をのがれ、越前国坂井郡河口庄細呂宜郷の吉崎に拠点を構えた。同じ文明3年6月のことである。

やがて、同じ真宗の高田門徒や越前三門徒を教化し、世俗権力への妥協で、本願寺は急速に強大化していった。この本願寺に富樫政親を援助せよとの足利將軍家の命が下った。このころ、政親は、高田門徒と組む弟の幸千代方に押されぎみで、手取谷の山内にひき籠っていたのである。

『講中記録』は文明6年(1474)7月26日、政親方・本願寺門徒と幸千代方・高田門徒の決戦がはじまったことを記す。10月14日には、幸千代方の拠点である蓮台寺城(小松市蓮代寺町付近)を陥落させ、富樫家の内紛はおさまった。この戦いに、政親方の山川・本折らが白山本宮へ働きかけ、長吏の澄栄らは「御味方」に加わった。この文明6年の戦いは、白山本宮の長吏・衆徒や富樫政親たちの思惑とは全く異なる結果をもたらした。

それは、大乘院の尋尊がみたとおり、真宗の「土民」と「侍分」の戦いであったからである。翌文明7年、本願寺門徒を抑えきれなくなった蓮如は吉崎を去る。その状況を『講中記録』は「国民等本願寺威勢ニホコリ」とのべ、「免田年貢無沙汰」となった白山本宮は「神事并勤行等及退伝^(転)」び、「先代未聞言語道断」と歎かねばならなかった。文明3年の□□釈完尼地輪の存在は、もし真宗関係のものとするれば、文明6年の一揆以前に、すでに、

白山本宮の膝下でかなりの真宗門徒の広がりがあったことの証左となろう。そして、文明16年、この世を去った澄舜も、歎きの声をあげたひとりであったであろう。

このとき、「武家」威勢ゑいせい如無」と書き留められた富樫政親は、守護代の槻橋らに促されて、一向一揆との衝突が、3月、6月とくり返された。こうして、文明7年の一揆は守護の手によって圧伏されていった。だが、これも一時的なもので、やがて、世にいう加賀一向一揆・長享2年(1488)の一揆となる。富樫政親らは高尾城で自害し、守護の座を獲得し、維持するために、戦いに明け暮れた一生を閉じねばならなかった。かつて、文明6年の一揆において、政親方に加担した白山本宮も、三宮への遷座記事を留めるだけであった。

2. 白山本宮の孤立

加賀国は「百姓ノ持タル国」となり、浅香山木氏のいう、若松本泉寺・波佐谷松岡寺の「両御山」体制によって運営されていった。これもやがて、戦国乱世の例にもれず、血で血を洗う骨肉の争いとなり、加賀一向一揆の頂点にあった一家衆や大坊主たちの権力抗争をまねく。この内紛を「享禄の錯乱」または、「大小一揆」とよぶ。『講中記録』の享禄4年(1531)閏5月9日条には、「超勝寺すゑしょうじ若松・蓮谷・山田・清沢一國同心いっくんしん論ろん」とあり、藤島超勝寺と和田本覚寺は山内に籠り、やがて、本泉寺・松岡寺・光教寺・願得寺の勢力を討った。7月23日には、長吏澄祝らが超勝寺・本覚寺方につく。そして、北の平野部への出口をおさえる願得寺や金剣宮を焼き払った。

こうして、かつて白山加賀馬場の七社体制のもとに、中宮三社・本宮四社として、それぞれに結束していたものが、七社体制も観念的なものであり、本宮四社も、鎌倉中期以来、本宮・金剣宮の主導権争いによって対立抗争を続け、いままた「享禄の錯乱」において、本宮は自らの手で金剣宮焼打ちをしなければならない事態となった。

この「享禄の錯乱」後の加賀は、本泉寺・松岡寺の「両御山」体制から、超勝寺・本覚寺を頂点とする「超本両寺」体制へと移行し、天文15年(1546)10月、本願寺支坊の金沢坊が設置されるに及んで本願寺体制が成立した。この間の「享禄の錯乱」から「天文の乱」まで、一揆指導者の内部分裂が尾を引いた。したがって、白山本宮は、本願寺の一挙手・一投足に注目し、耳をそばだてねばならなかった。

だがついに、天文6年(1537)7月、「当山既可為滅亡分也」(『講中記録』)と肝をつぶす事件がおこる。それは、錯乱後、没落した若松本泉寺方の失地回復運動が展開され、その中に、白山本宮長吏澄祝の弟・平等坊澄甚が参加していた。そして本願寺証如から厳しい処分指令が届いた。

平等坊は白山山頂を越えて越前に亡命していたので、長吏配下で平等坊とともにその画策に加わった小浜左京亮を長吏が処刑し、長吏一族の理性坊澄範を本覚寺へ人質として送り、無事ことなきをえた。「御祈禱共在之」さらに「是併神慮仏力故也」と記さねばならぬほどの狼狽ぶりであった。この必死の懇願ぶりは、証如にも余程のことに思えたのであろう。『証如上人日記』の天文6年8月28日条に、「長吏事無別儀由、國中へ申下候て、と被申候。おかしく候。」とある。事ここに至って、白山本宮は、かつての「馬の鼻もむかぬ」といわれた威勢もなく、巨大な本願寺勢力の海の中に浮ぶ小島のような存在となっていた。

この一向一揆への対応に腐心していた白山本宮を悩ませたのは、金剣宮ばかりでなく、中宮勢力であった。それは、『講中記録』の延徳3年(1491)10月11日条の事件である。河内庄の地頭・結城修理亮宗弘が、白山本宮の澄賢のもっていた惣長吏職を篡奪しようと、本宮へ乱入したのである。この合戦で、結城側は祇陀寺の清侍者など結城宗弘の兄弟三人が戦死した。本宮側では、長吏一族の澄善や延命院乗俊父子などが戦死し、地藏院・理観坊などを焼失している。

この事件をはさんで前後11年も続いた抗争は、浅香山木氏が指摘しているように、結城一族の背後に、勢力挽回をねらう中宮三社の動きがあった。それは正しく、一向一揆の嵐の中での「山内やまうち、当山取合」であった。ここにはもうかつての白山七社の連帯感を、観念的にすら持ちえない状況が成立していた。

ここで、さきの浄養寺境内の俊清五輪塔が思いおこされる。この地輪の紀銘は「延徳三年辛亥・俊清・□□^(月)十

一日」であった。残念ながら地輪の左上部が欠損していて、月名が不明である。「月」の一部は訓みとれるので、地輪の字配りからすれば、一字の数字になると思われる。だが、一から十まで考えられるのと、「俊清」なる人物を管見の限りでは、文献史料では確認できない。それで全くの推測でしかないが、もし、俊清の死亡月が「十月」であったと仮定すると、『講中記録』の結城乱入事件に関わった可能性もある。俊清がもし本宮側の一員として、この合戦に参加し、討たれた者ならば、欠損部の月名は「十月」でなければならないだろう。

むすびにかえて、

白山町墳墓遺跡出土の永正 18 年 (1521) の紀年銘をもつ地輪の「勝運」なる人物は、管見のかぎりでは、文献史料に確認できなかった。また、文明 2 年 (1470) の紀年銘をもつ地輪の「□運」なる人物も推定できなかった。中世墳墓も同様である。だが、一応以下のように考えている。

この白山町墳墓遺跡は、西野氏の調査報告によれば、「径 60～80 cm 大の河原石で、3×5 m の長方形プランの区画をつくり 50 cm 程度まで積み上げられ」たもので、「火葬骨をおさめた珠洲焼壺底部」も発見された。これと同じ中世墳墓として、八幡町墳墓遺跡がある。『鶴来町の古代・中世遺跡』によれば、「舟岡山の南裾、舟岡城跡より白山比咩神社へ通ずる小道の東傍で発見され」たもので、2 個の珠洲焼甕とそれらを取りまく礫積施設、矢垣状の刀列を確認している。

これらの中世墳墓は、ともに礫積施設という共通点を持ち、前者は別所檜坂地区の北西端、後者は八幡地区の南西端にそれぞれ位置している。両地区は、すでにのべてきたように、大念仏会や修正会の油弁進(史料 I)、臨時祭礼の埒打ちを負擔し(史料 II)、執当得分の講田や在庁に宛行われる畠を有した(史料 III) ののである。

したがって、両地区は本宮に隣接して、宗教活動を支える生産地区であったと思われる。その生産活動に従事する、在家人(百姓)や百姓身分の下級神官・聖たちを束ねる有力者が、やはり存在したものである。両地区において発見された中世墳墓を、そうした有力者の墳墓と、いまのところ理解しておきたい。

なお、使用した図は、『加賀一ノ宮郷土誌』の「一ノ宮郷土誌遺跡地名見取図」に手を加えたものである。

参 考 文 献

- 『白峰村史』上巻
- 『尾口村史』第三巻
- 『鳥越村史』
- 『治承・寿永の内乱論序説』浅香年木著
- 『中世白山宮の成立と支配構造』竹森靖(『北陸史学』31)
- 『中世前期の寺院と民衆』田中文英(『日本史研究』266)
- 『石川縣銘文集成』(中世金石文編)桜井甚一編著
- 『小松本覚寺史』浅香年木著
- 『一向一揆の研究』井上鋭夫著
- 『加賀一ノ宮郷土誌』
- 『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡』石川県埋文センター
- 『鶴来町の古代・中世遺跡』鶴来高等学校歴史部
- 『白山臨時祭礼と棧敷相論』中西国男(『北陸史学』30)

第4節 中世 北加賀の陶磁器流通について

北陸地方に於いても、近年の発掘調査件数・面積の増加に伴ない中世陶磁器の資料も増加し、蓄積されつつある。その北陸・東北地方の日本海沿岸地域に関しては、貿易品としての陶磁器と交易の時代的変遷⁽¹⁾、須恵器系陶器の珠洲焼に関する一連の研究⁽²⁾がある。特に珠洲焼の研究は、その生産・流通構造と海上運輸形態に基づき、北東日本海域の珠洲系陶器に見られる社会的分業形態を問題としたものである。

本遺跡は手取川中・上流の山間部と手取扇状地を中心とした加賀平野を結ぶ流通路の接点で、加賀地方最大の荘園領主であった白山宮の門前町的性格が考えられている。今回の調査で出土した各種の中世陶磁器は、その器形や器種等からして、13～16世紀前半にかけて搬入・消費された物と推定される。中世陶磁器はその生産地から中国製品を中心とした舶載製品、瀬戸系陶器等の国産品に大別されるが、その用途から碗・皿等の供膳用器、甕・壺・片口鉢の三器種を基本とした日常用器、香炉・花瓶等の宗教用器に分けられる。その供膳用器と宗教用器では、青磁・白磁を中心とした中国製品と瀬戸系陶器が器種的に補ない合い。日常用器の甕・壺・片口鉢の基本三種が、瓷器系陶器である越前・加賀と須恵器系陶器である珠洲が混在して消費されている。これは加賀地方の日常用器の消費遺跡には広く認められ、各製品の生産地の変化と併せて、流通構造を含め当時の地域経済の変化が窺い知られる。

これら陶磁器の種類や数量・品質・形態を分析することは、本遺跡とその周辺地域の製品の生産・流通形態を解明する資料なる。ここでは、本遺跡に於ける陶磁器の消費状況を加賀地方の他の消費遺跡である集落址・墳墓址出土の資料を集成し、北加賀地方に於ける陶磁器の製品流通機構に関して、分布論的な面から考えてみたい。

加賀地方の遺跡出土の陶磁器

石川県下に於ける11世紀以前のいわゆる初期貿易陶磁の出土は、現在までの調査で能登の寺家遺跡⁽³⁾、加賀の安養寺遺跡群⁽⁴⁾・浄水寺遺跡⁽⁵⁾の3遺跡から発見されている。それは、初期貿易陶磁を構成する越州窯青磁・白磁・長沙銅官窯陶磁器である。これらに関しては、後日の報告に期し。本項では、加賀地方に於ける中世陶磁器の消費遺跡である集落・墳墓・城館址等から出土した12～16世紀の陶磁器の種類・数量・品質・形態について、南加賀の江沼地域・梯川流域、北加賀の手取川流域、犀川以北と四地域に区分して概観したい。

〔江沼地域〕

江沼地域は加賀地方の南西部に広がる江沼盆地とその周辺丘陵から成る。江沼盆地の南側で、館跡等の調査例がある。

永町ガマノマカリ遺跡⁽⁶⁾は館跡で、中国製品は12～16世紀と幅広い。白磁は12世紀の玉縁碗3点、14世紀の口元皿1点と数少ない。青磁は13世紀の劃花文碗1点、14～16世紀の鎬蓮弁文碗・雷文碗・無文碗等がある。しかし、16世紀の白磁・染付皿等は含まれない。国産品では瀬戸系陶器が、15世紀末～16世紀の灰釉香炉・丸碗・茶入、鉄釉花瓶・天目茶碗がある。点数的には中国製品よりも少なく、香炉・花瓶の宗教用器以外は小片である。日常用器は越前・加賀・珠洲の三者が認められるが、点数・器種的にも越前が主体となり、14世紀後半～16世紀の甕と片口鉢で占められる。

敷地天神山遺跡群⁽⁷⁾の中国製品は、13～16世紀の製品で、組成は永町ガマノマカリ遺跡と似通うが、16世紀の白磁・染付皿等は含まれる。国産品の瀬戸系陶器は、14～16世紀後半の灰釉盤・小皿・平碗・香炉・瓶等と天目茶碗がある。特に天目茶碗の出土点数が目立つ。日常用器の三器種の中で、壺の点数が少ない。越前は甕・片口鉢の主体となり、珠洲は壺と片口鉢が少量認められる。

勅使館跡⁽⁸⁾でも中国製品・国産品の組成は、永町ガマノマカリ遺跡とほぼ同一である。白磁は12世紀の碗3点、合子(坏身)・皿・瓶片各1点と14世紀の口元皿が1点ある。青磁は13～15世紀と幅広いが、碗10点、盤・小壺蓋1点ある。国産品は13～16世紀で、瀬戸系陶器は灰釉瓶子・片口・小皿・おろし皿・花瓶等に、鉄釉小皿・坏・天目茶碗がある。多器種に及ぶが、出土点数は少ない。特に15世紀中～16世紀前半を中心とする。越前は甕・

壺・片口鉢の三器種とも主体である。加賀は三器種とも揃うが、点数的には越前の約半数である。珠洲は壺・片口鉢が少量出土している。篠原シンゴウ遺跡⁽⁹⁾では、中国製品は14～15世紀の青磁の鎬蓮弁文碗2点、雷文碗1点がある。国産品では16世紀後半の美濃灰釉皿2点、越前の大甕がある。柴山町の通称今城寺^{コンジヨウジ}より、13世紀中頃の越前片口鉢と珠洲壺の蔵骨器が各1点採集されている。

田尻シンペイダン遺跡⁽¹⁰⁾は、古代末期の製鉄集落と推定され、出土土器は編年上⁽¹¹⁾11世紀末～12世紀初頭に位置する標準的な遺跡である。中国製品は全て白磁で、碗27点、皿5点である。碗の内訳は、玉縁碗22点、口縁を軽く外反あるいは口唇部を水平に仕上げる碗5点である。

上記の遺跡で、日本海沿岸の丘陵に位置する田尻シンペイダン遺跡を除き、江沼盆地南側に位置する二遺跡は、陶磁器の組成に共通点が見い出される。それは、供膳用器の器種組成の類似性、日常用器における越前の優位性である。また、点数的には少ないが、中世前期（Ⅰ～Ⅲ期）の珠洲製品の壺・片口鉢が搬入・消費されている点である。これは、両遺跡が江沼盆地の幹線水路である大聖寺川沿辺に位置し、河口の塩屋（旧竹の泊）を中継地として、各製品が搬入されたことに起因すると推察される。

〔梯川流域〕

小松市の梯川下流域は、加賀国府推定地を含め遺跡の密集地である。近年発掘調査件数・面積とも増大している地域で、中世陶磁器の消費遺跡である集落・墳墓・寺院址等が調査されている。

軽海中世墳墓群⁽¹²⁾は、火葬配石墳墓で蔵骨器の大半は加賀で占められ、13～14世紀の甕3点、壺3点、片口鉢3点がある。珠洲は壺2点、片口鉢2点があり、瀬戸系陶器などは検出されていない。中国製品は14世紀頃の青磁瓶の頸部片が1点ある。中でも、加賀の壺に珠洲の片口鉢が蓋として利用される組み合わせは注目される。中海遺跡⁽¹³⁾の中で、地元に加賀中宮八院の一寺院である長寛寺跡^{ナヨカノジ}と伝承されている地点から、田尻シンペイダン遺跡とはほぼ同時期の資料が出土している。中国製品は、12世紀前半の白磁玉縁碗等24点、皿21点、小坏1点がある。他に15世紀の青磁碗・白碗皿が数点出土している。

漆町遺跡群⁽¹⁴⁾、佐々木A・B遺跡⁽¹⁵⁾、白江梯川遺跡⁽¹⁶⁾は、梯川下流の左岸に連なる集落遺跡である。各遺跡とも多数の掘立柱建物・井戸・土壇を検出し、各種陶磁器類が出土した。

漆町遺跡群は約20万m²の集落群で、その内約20%が調査されている。中国製品は12世紀前半～16世紀後半までの製品が出土したが、特に白磁では12世紀前半の碗、青磁では13世紀前半の劃花文碗などが井戸からの出土資料としてある。他に13～14世紀の鎬蓮文碗、15世紀の雷文碗・無文碗と続くが、点数的には少なくなる。16世紀では数点の白磁・染付皿と朝鮮製品が、数点認められただけである。国産品の瀬戸系陶器は供膳用器を中心とするが、点数的には少ない。日常用器では加賀・越前が主体となるが、珠洲は少ないながらも三器種とも揃う。

佐々木A・B遺跡の陶磁器も井戸・土壇から良好な資料が出土している。陶磁器の組成は漆町遺跡群のそれとはほぼ同一であるが、14～16世紀の資料は豊富である。これは下流に位置する白江梯川遺跡でも同様で、12世紀の白磁類は少なく、中国製品の中心は14～16世紀に求められる。特に15・16世紀の青磁は供膳容器を中心としながらも宗教容器も含み、国産品の瀬戸系陶器でも15～16世紀の灰釉平碗・小皿・おろし皿・香炉等や鉄釉香炉・燭台・天目茶碗等がある。香炉・燭台などの宗教用器の存在が目立つ。これは、昨年調査で懸仏3体と石造遺物を検出した祠跡推定遺構に認められる様に、中世集落内での宗教活動の産物と推定される。

また、梯川中流域に位置する波佐谷⁽¹⁷⁾からは、越前大甕の中から一括の中国製品が出土した。遺物は白磁皿4点、青磁碗1点・鉢1点・香炉2点、瀬戸天目茶碗1点で、その年代は16世紀前半に求められる。

〔手取川流域〕

北加賀の手取川流域は、大きく山間の溪谷部、手取扇状地、手取川以南の能美丘陵地域に三分される。特に手取扇状地は、半径12km、扇状角度110度の標式的な扇状地で、現在は石川県下最大の穀倉地帯である。中世北加賀の主要流通路は、のちに北国街道に発展する扇状地横断ルートと、山間の溪谷部・溪谷入口に位置する加賀最大の荘園領主白山宮の門前町と日本海沿の大野荘湊を結ぶ縦断ルートで、この幹線流通路は守護所が位置した野々市で、十字に交差していた。

溪谷部では16世紀後半に加賀一向一揆の拠点となった城館址等が調査されている。鳥越城⁽¹⁸⁾はその中でも一向一揆最後の砦となった歴史をもち、二の丸の石室状遺構からは、天正8年(西暦1580年)の落城に比定できる一括資料が出土している。中国製品は染付を主体として白磁・青磁があった。染付は約40点で、見込に十字花文・玉取獅子・花樹等の文様を描いた皿と数点の碗で構成され、白磁は約30点の全てが皿であった。青磁3点は、算木文香炉などの香炉である。国産品の瀬戸・美濃は、灰釉小皿・茶入・坏等と天目茶碗などがあつた。日常用器は越前で占められ、甕・小壺・片口鉢等があつた。鳥越城上流では、瀬戸城や桑島館跡などが調査されている。桑島館⁽¹⁹⁾は、江戸時代初頭の福井藩番所跡で、16～17世紀の遺物が出土した。中国陶磁は16世紀の染付で、外面に牡丹唐草文を巡らす皿3点、青磁の輪花皿1点がある。国産品は16世紀後半の美濃天目茶碗3点と16～17世紀の唐津・伊万里・志野などがある。

溪谷入口部の白山町遺跡周辺でも散発的ではあるが、瀬戸系陶器の供膳用器や加賀の甕等が、白山上野遺跡・船岡山遺跡で見られる。鶴来町市街地の日吉町遺跡・八幡町遺跡⁽²⁰⁾では、14世紀の加賀の大甕が、各墳墓状の遺構から出土している。本町(現鶴来町信用金庫)で、14世紀中葉の瀬戸の灰釉劃花文瓶子と16世紀頃の鉄釉丸碗が各1点⁽²¹⁾出土している。

手取川の南には、手取扇状地の南辺を画する能美丘陵が広がる。丘陵は開析谷が発達し、古代～中世の各遺跡が、調査されている。長滝経塚⁽²²⁾では、13世紀前半の珠洲四耳壺と加賀片口鉢が各1点ある。経外容器の壺からは、和鏡が8面出土し、内5面が現存する。金剛寺坂中世墳墓⁽²³⁾からは、13世紀の瀬戸灰釉瓶子の蔵骨器と13世紀前半の珠洲片口鉢が各1点ある。瓶子は締腰型瓶子で、外面の3ヶ所に3本の櫛目を施す。徳山寺跡⁽²⁴⁾からは、金銅製小仏像1体と3点の陶磁器が採集されている。中国製品は13～14世紀の青磁鎬蓮弁文鉢1点と14世紀頃の黒褐釉を施した無頸壺1点がある。無頸壺は口縁部の釉を削り取り、平坦に仕上げている。国産品の瀬戸系陶器は、15世紀の天目茶碗1点である。虚空蔵城⁽²⁵⁾は鳥越城と同様に一向一揆に関連した城で、16世紀後半の染付皿・碗が4点と美濃の天目茶碗1点がある。いずれも鳥越城で、出土が認められる製品である。湯屋チョウヅカ墳墓群⁽²⁵⁾では、中世の火葬配石墓を検出し、内1基から蔵骨器として使用された、13世紀前半の加賀の甕が1点出土している。他に16世紀の染付・白磁皿がある。茶白山古墳群⁽²⁶⁾の一角で、中世の土壇墓2基を検出し、13～14世紀の青磁蓮弁文碗底部片と口縁内面に雷文スタンプ文を施した白磁口兀皿が各1点ある。

能美丘陵地域での陶磁器の搬入・消費状況は、集落遺跡である辰口西部遺跡群⁽²⁷⁾に於ける様相と一致する点が多い。中国製品の搬入は、12世紀の玉縁碗を代表とする白磁碗に初まり、16世紀の染付・白磁皿の時期まで断続的に認められるが、その出土量から前・後に大別される。前期は13～14世紀で、白磁は口兀碗・皿、青磁は劃花文碗・鎬蓮弁文碗・鉢がある。後期は15世紀を中心として、各種青磁碗・鉢・盤・双耳瓶等と白磁小皿・坏から構成される。国産品の瀬戸系陶器は、13世紀頃から認められるが、15世紀に入り器種・点数共に増大する。日常用器は越前・加賀・珠洲は基本三種が揃うが、前期では珠洲は少ない、反対に加賀の点数が多い。

手取扇状地域に於ける中世陶磁器の出土は、幹線流通路が通る扇中央よりも扇端部である日本海沿岸地域に目立つ。三浦遺跡⁽²⁹⁾は、土器編年での10世紀前半の標準的な遺跡である。中国製品は白磁・青磁の出土がある。白磁は10点で、内12世紀頃の底部片4点ある。青磁は3点で、内1点は輪花皿の口縁片である。安養寺遺跡群からは、溝状遺構から近世陶磁器と共に15世紀の青磁輪花皿が出土した。長竹遺跡⁽³⁰⁾では、中国製品は2点で、12世紀の白磁小壺の蓋1点、15世紀の青磁碗の底部片1点ある。国産品は日常用器の珠洲・加賀で、珠洲は14～15世紀の甕1点、片口鉢5点で、加賀は14世紀の甕1点、片口鉢3点ある。倉光ゴキヤマ遺跡⁽³¹⁾では蔵骨器が3点、五輪塔や宝篋印塔と共に出土した。瀬戸系陶器は14世紀の灰釉三耳壺(口縁端欠)1点、珠洲は14世紀頃の壺(口縁部欠)1点、越前は16世紀後半の甕1点である。

徳光ヨノキヤマ遺跡⁽³²⁾は、扇状地の西端部に位置する臨海的な集落址で、付近には「聖興寺跡」「アベノ願証寺跡」「徳光館跡」等の遺跡が広がる。中国製品は、白磁と青磁がある。白磁は12世紀の玉縁碗4点、15世紀の小皿6点(高台を挟るタイプで、外底に墨書をするものを含む)がある。青磁は13世紀の竜泉窯劃花文碗2点、14～15世紀の碗4点・鉢3点がある。天目茶碗も1点ある。国産品の瀬戸系陶器は、15世紀の灰釉平碗2点・おろし皿

1点・瓶子1点・入子1点と鉄釉小壺1点・天目茶碗4点があり、珠洲は14～15世紀で、甕4点・壺7点・鉢10点ある。加賀は甕・壺12点で、越前は15世紀で甕・壺14点、片口鉢5点がある。また、工事中に12世紀初頭の白磁玉縁碗が1点採集されている。徳光は室町時代から見える地名で、在地領主である徳満(徳光)氏の本領であった。また、南方1kmの小川は、白山宮が支配した白山神領の1つであり、別山の神霊を祀る小白山神社の鎮座地であった。

扇状地北端部や東側では、遺跡からの陶磁器の出土は少なく、額谷ドウシダ遺跡⁽³²⁾から青磁碗の底部片が1点出土している。

〔犀川以北〕

手取扇状地以北の北加賀の地勢は、金沢市街地を貫き西流する犀川・浅野川周辺の沖積地、北に広がる河北潟を取り囲む砂丘と沖積地から成る。中世陶磁器が出土する遺跡は、犀川・浅野川周辺の沖積地に集中し、北の河北潟周辺部では、調査例が少なく珠洲等の日常用器が、散発的に出土しているだけである。

普正寺遺跡は、その立地と出土遺物から中世大野荘の港湾集落と推定されているが、二次の調査で14世紀後半～15世紀中頃の良好な中世陶磁器が報告されている。1965年の第一次調査⁽³⁴⁾では、中国製品約100点、国産品約400点であった。中国製品は青磁約90点、白磁19点で、その中で口縁部片35点、底部片22点である。青磁は碗38点、鉢4点、盤4点、壺1点で、香炉の蓋と推定される破片が1点ある。白磁は口元皿3点、皿4点、無頸壺2点、瓶1点である。国産品は瀬戸系陶器約80点で、灰釉小皿3点、おろし皿6点、平碗9点、盤3点、筒形容器1点、小壺1点、瓶子1点ある。鉄釉は小皿2点、蓋2点、花瓶4点、香炉2点、天目茶碗5点ある。出土点数が少ないが、器種は9種に及び豊富である。日常用器は越前が最も多くて、甕134点、壺4点、片は鉢14点である。加賀は甕23点、壺3点で片口鉢は無い。珠洲は甕56点、壺7点、片口鉢59点である。産地別に見ると越前：加賀：珠洲は5：1：4の比率が得られ、さらに器種別の比率は甕では、約6：1：3と産地別比率が反映しているが、片口鉢では2：0：8と珠洲中心の消費形態が窺える。これは二次調査でも同一様相を呈している。

1982年の第二次調査⁽³⁵⁾では、中国製品は青磁・白磁・染付・天目の四種が検出された。青磁は碗73点、皿8点、盤9点、鉢2点で、壺3点で、白磁は小皿26点(口元皿4点含む)、坏8点、碗2点、壺3点である。染付は瓶の胴部片1点だけで、天目茶碗は5点である。中国製品は青磁碗と白磁小皿の高級供膳用器を中心として、他に瓶・水注などの高級調度品が少量搬入・消費されていた。一方、国産製品の供膳用器の中心である瀬戸系陶器は、灰釉小皿22点、おろし皿21点、平碗13点、盤14点、花瓶8点、香炉11点、瓶6点、筒形容器1点、水注2点で、鉄釉は小皿2点、小坏1点、天目茶碗30点、茶入1点、瓶1点があった。瀬戸系陶器には中国製品で見られなかった花瓶・香炉等の宗教用器が含まれ、碗・皿等の供膳用器を含め、中国製品の器種構成を補足する消費形態が知られる。日常用器における産地別比率や器種別比率は、第一次調査とほぼ同一である。

畝田・寺中遺跡と寺中遺跡は、犀川左岸の微高地に位置し、弥生～古墳時代の集落址との複合遺跡である。畝田・寺中遺跡⁽³⁶⁾からは、13世紀の瀬戸輪花合子(坏身)が1点、加賀の甕7点、片口鉢1点が出土した。瀬戸の輪花合子の出土は、県内ではこれが初例である。寺中遺跡⁽³⁷⁾では、III・IV次調査で青磁等が出土した。中国製品は青磁碗3点、皿2点の他に、白磁小皿2点がある。国産品では珠洲の片口鉢3点と甕等の日常用器が確認されている。また、河北潟から流下する大野川の左岸には、桂遺跡、無量寺遺跡、戸水C遺跡等の集落遺跡が連なる。

桂遺跡⁽³⁸⁾は低湿地に位置し、遺物の大半は周辺部の微高地に位置した遺跡から、流れ込んだものであった。中国製品は、青磁碗4点、白磁皿・白磁碗・染付皿・黄釉鉄絵盤が各々1点ある。黄釉鉄絵盤は、見込み部分の破片で、県内初の出土例である。朝鮮製品では李朝の小碗が1点含まれる。国産品は瀬戸系陶器の天目茶碗・鉄釉花瓶・灰釉おろし皿が各々1点ある。日常用器は珠洲の甕3点、片口鉢7点、越前・加賀の甕7点、片口鉢7点がある。黄釉鉄絵盤以外の遺物は、14世紀後半～16世紀前半代の所産である。

無量寺遺跡⁽³⁹⁾は桂遺跡の東方約500mに位置する。桂遺跡では少量であった唐津系陶器の出土点数が多い。中国製品は青磁碗3点・皿1点、白磁玉縁碗・口元皿・小壺(?)底部片を各々1点、染付皿2点・碗1点である。国産品の瀬戸系陶器は、天目茶碗4点、灰釉おろし皿3点である。日常用器は三器種とも揃い、珠洲の甕3点、

壺4点、片口鉢7点で、越前・加賀は甕4点、片口鉢17点である。他に瓦質の花瓶2点(菊花文スタンプ、雷文・巴文スタンプ)と、唐津系陶器の碗・皿16点がある。これらの陶磁器から、無量寺遺跡への陶磁器の搬入は、12世紀に初まり、15世紀前半頃まではその消費活動は弱いが、16世紀後半から17世紀には、多くの唐津系陶器を消費している。また、その消費活動は、伊万里系の製品が搬入される以前に衰退していることが窺い知れる。

戸水C遺跡⁽⁴⁰⁾は、金沢港開削に伴ない、六次に及ぶ調査が実施された弥生時代～室町時代の複合遺跡で、特に奈良・平安時代の大型掘立柱建物・井戸・道等の遺構、灰釉・縁釉等の陶器類と多量の墨書土器が注目される。中世では、富積保として鎌倉時代から記録に見られる。中世陶磁器は現在整理中で、今回はその概要を述べる。戸水C遺跡への中国製品は、12世紀の白磁碗の一群に始まるが、その量は極めて少なく、本格的に中国製品の搬入・消費されるのは、13世紀の青磁碗類からで、以後16世紀まで続いている。国産品である瀬戸系陶器の消費は、少ない。日常用器は珠洲で占められ、越前の消費量は極めて少ない。

浅野川左岸の北安江遺跡⁽⁴¹⁾では、13世紀の青磁碗、珠洲壺・片口鉢と15～16世紀の美濃天目茶碗、越前・珠洲の甕が出土している。他に唐津系陶器が数点出土している。

小坂1号墳⁽⁴²⁾の墳頂からは、経塚と中世墓が各々1基検出されている。経塚から出土した経外用器の珠洲壺・片口鉢には、銅製経筒2本と白磁の合子(坏身)1点が内蔵されていた。経外用器の珠洲壺・片口鉢は、珠洲I期の資料で12世紀後半～13世紀初頭の所産であろう。また、中世墓からは14世紀の珠洲と土師質土器が出土した。

河北潟周辺部では、調査例・出土資料とも少ない。今町A遺跡⁽⁴³⁾からは、13世紀の青磁碗2点と珠洲片口鉢11点が出土している。他には丘陵地帯に位置する北横根遺跡⁽⁴⁴⁾・刈安野々宮遺跡⁽⁴⁵⁾等から日常用器の珠洲が出土しているが、他の陶磁器の出土は乏しい。

犀川以北から河北潟周辺部では、中世陶磁器に関する資料は少ない。犀川河口に位置する普正寺遺跡、大野川下流左岸に連なる戸水C遺跡・無量寺遺跡・桂遺跡以外は断片的な資料が大半である。これは、各遺跡の性格に起因する点も大きい。中世集落址等の消費遺跡の調査例が、南加賀の梯川流域などに比べると少ないことによるものである。現在までの出土資料を見ると、犀川や大野川の河口近くでは、各種陶磁器の搬入・消費状況は良好で、この日本海沿岸地区が内陸の丘陵地や平野部に比べて、陶磁器の搬入が容易であったことが知られる。また、日常用器の生産地別組成を普正寺遺跡と戸水C遺跡の14～15世紀の資料で見比べると、普正寺遺跡で約5割近くを占めていた越前が、戸水C遺跡では1割程へと減少する。反面、珠洲が増大する斜向が見られる。これは、戸水C遺跡が位置する大野川以北では、日常用器の搬入・消費形態が、珠洲中心であったことを示している。

加賀地方出土陶磁器の特質と変遷

加賀地方を南加賀の江沼地域と梯川流域、北加賀の手取川流域と犀川以北の四地域に分けて、各遺跡から出土した中世陶磁器に関して概観してきたが、ここでは陶磁器の消費形態の時代的変遷や、その特質について整理してみる。また、陶磁器の中でも生活の必需品である日常用器の問題も考えたい。

加賀地方へ中国製陶磁器が本格的に搬入・消費されるのは、12世紀の白磁碗・皿に始まる。高級供膳用器の白磁碗・皿以外には、宗教用器の合子や小壺等の小型製品が少量認められるが、調度用具である瓶や水注等の大型製品は無い。その出土は、能登半島を含め全県に及ぶが、特に南加賀の梯川下流域に連なる集落址で、多く認められる。その中でも11世紀末～12世紀初頭の時期(田尻シンペイダン併行期)の消費遺跡からは、一括性の強い資料が見られ、この時期に大量に搬入・消費されていることが知られる。その後、白磁の搬入・消費は続くが、資料に欠ける。

12世紀中葉～13世紀初頭にかけては、須恵器系の珠洲と瓷器系の加賀が、日常用器の三器種(甕・壺・片口鉢)を基本として生産を開始し、製品が加賀地方の各消費遺跡へ供給される。能登半島先端に操業を開始した珠洲は、北加賀から越後南部までの商圏を確立するが、在地窯の加賀は越前北部から北加賀の手取川流域までを商圏とした。この創生期には、瓷器系の中心となる越前は少量しか加賀地方に流通していない。この段階で、北加

賀の手取川流域から南加賀の梯川流域にかけては、珠洲・越前の商圈が重複し、日常用器の分業化が認められる。また、13世紀に入ると国産施釉陶器である瀬戸系陶器の瓶子や輪花合子などの宗教的奢侈品が北加賀に搬入・流通し、蔵骨器などに消費されている。これは、瀬戸系陶器の消費形態の特質に起因する点もあるが、南加賀の軽海中世墳墓群では、蔵骨器に利用される壺類も安定供給しているが、北加賀の手取川流域では、珠洲・加賀とも需要に応じるだけの製品が、量的に流通していなかったことによる。また、高級供膳用器の中国製品は白磁から青磁への推移し、青磁の劃花文碗や鎬蓮弁文碗・鉢等を中心とし、他に白磁の口兀碗・皿の一群が新たに加わり搬入される。日常用器では、珠洲の片口鉢が南加賀まで搬入・消費されるようになる。14世紀も同様な状況が続くが、14世紀中葉以降の陶磁器の流通に変化が見られる。それは、中国製品では供膳用器以外に染付の瓶や青磁の双耳瓶・壺等の調度用具的な大型製品が、少量であるが基幹集落址などへ搬入・消費される。一方、国産品の瀬戸系陶器は、灰釉瓶子以外にも灰釉花瓶・香炉等を供給し始める。日常用器では、南加賀を主な商圈としていた加賀が、生産を拡大した越前の製品の大量流通に伴ない衰退し、越前化となって表われてくる。

14世紀後半から15世紀には、供膳用器の中で中国製品の青磁碗が比率的に高まる。青磁は碗を中心に皿・盤・鉢・瓶で、白磁は小皿を中心に少量の坏で構成され、搬入・消費されている。また、点数的には少ないが、中国製品の天目茶碗も同時に消費されている。この中国製品を器種的に補足するものとして、瀬戸系陶器がおろし皿・平碗・盤と豊富な器種構成で、搬入・消費され、香炉・花瓶等の消費が限定された宗教用器の製品でも中心を占めてくる。消費形態も陶磁器以外にも各種製品の分業化が進む中で、それまでの基幹集落中心の形態から新たに普正寺遺跡に代表される港湾集落を中心とした都市的集落の消費形態が生まれる。その普正寺遺跡での供膳形態の中で、碗に関しては、青磁碗63.4%、天目茶碗22.8%、灰釉平碗12.6%と青磁碗中心で、皿では(土師質土器を除く)白磁小皿34%、灰釉小皿25.7%で構成される。そして、青磁碗の中でも中心は無文碗で、他に丸彫りの蓮弁文・雷文を外面に巡らすタイプと内面に刻花文を刻んだタイプが含まれる。白磁の小皿は、素地がやや荒くて、釉は黄色味を帯びて外面下半にて止まる。輪高台と高台を挟む二者が混在するが、無釉の外底面に墨書等が多く認められる。日常用器では珠洲は片口鉢の増産と甕・壺類の減産⁽⁴⁶⁾を行ない、量的拡大生産体制で、商圈を北海道南部にまで拡大するが、南限は北加賀と変らない。その北加賀でも手取川流域では甕などの大型重量品は、生産地が近い越前・加賀で、片口鉢などの小形品は珠洲とした使い分けとして消費形態に表われてくる。それは、普正寺・白山町遺跡で明確に認められる。甕の産地別比率は越前：加賀：珠洲では7：1：2であるが、片口鉢では越前と珠洲で2：8となる。これは流通機構の問題よりも、消費遺跡における片口鉢の需要増大と生産地の動向を反映したものである。したがって新潟県名立沖のタラバから揚った珠洲の中甕1・中壺1・小壺2・片口鉢2のセット⁽⁴⁷⁾を商品の単位として捉えても、普正寺遺跡や白山町遺跡に代表される北加賀での日常用器の様相とは異なり、海運時の船積段階で、各消費地の状況に基づいた荷積が行なわれていたと推定される。また、この時期から各集落遺跡を中心に瓦質の暖房用具や宗教用器が一定量搬入・消費されるようになる。

15世紀後半～16世紀にかけては、中国製品の器組構成が変わり、染付碗・皿と白磁皿が大量に輸入され、加賀地方の各消費遺へも搬入される。高級供膳用器の中国製品が青磁碗中心から染付・白磁皿への変化は、国産品の瀬戸系陶器の供膳用器にも影響を及ぼす。それは、灰釉小皿の減少と天目茶碗の増加として表われ、白山町遺跡で認められる。中国製品は青磁碗が小型化し、無文碗が減り簡単な線刻の蓮弁文が主になり、青磁皿には輪花形で内面に劃花文が彫られるものに変化する。白磁小皿も軟質で高台を挟み全面施釉する種類と口縁外反し畳付以外全面施釉する種類となるが、前者は15世紀後半にて搬入が止るようである。染付は皿を主体として、各種文様に富み16世紀後半の鳥越城等で認められるように白磁皿を上回る製品が消費されている。また、宗教用器である香炉・花瓶の個体数が減少し、瀬戸系陶器以外にも青磁の香炉が搬入・消費され、16世紀後半では瀬戸系陶磁の香炉は見られない。これは、天目茶碗の増加と併せて、瀬戸系陶器の生産の中心が美濃地方へ移り、窯構造の改良を含めた生産形態の変化の反映であろう。そして、出土点数は少ないが朝鮮製陶品も日本海沿岸地域に搬入され、中国製品と共に消費されている。

また、日常用器では小型の片口鉢を北加賀に主体的に供給していた珠洲は、品質の低下により15世紀後半は消

費量が減少し、代りに流通機構を整備したと考えられる越前が、片口鉢等の小型製品をも供給し、16世紀前半には北加賀を含め加賀地方全域が、越前の商圈に組み込まれる。これは、長年続いた日常用器の分業体制の壊解であり、製品の流通・消費形態の変革でもあった。この時期の中国製品の消費状況は、鳥越城や波佐谷遺跡等の城館址や白山町遺跡のような門前町的な基幹集落では、比較的その消費が認められるが、佐々木A遺跡、漆町遺跡群、白江梯川遺跡、戸水C遺跡等の農村的な一般集落では、その出土例は乏しくなる。これは、生活の必需品である日常用器を除き、中国製品などの高級供膳用器は、農民層まで十分に普及しなかった事を示している。

白山町遺跡出土陶磁器について

白山町遺跡出土の中世陶磁器は、13～16世紀の各種製品が含まれ、門前町的な基幹集落の調査例として、中世の北加賀における陶磁器流通を解明する資料となる。ここでは第1次から第4次に及ぶ中世陶磁器を整理し、その器種組成と製品の機能分担を踏えて、陶磁器の搬入・消費形態について考えてみたい。

本遺跡出土の陶磁器の製品別組成⁽⁴⁸⁾を見ると、在地的製品である土師質土器が最も多く77.5%で、以下中国製品4.6%、瀬戸系陶器5.8%、珠洲5.1%、越前5.4%、加賀1%、瓦質土器0.4%である。点数的には少ないが、朝鮮製の陶磁器、国産の信楽なども搬入されている。これを一乗谷朝倉氏遺跡⁽⁴⁹⁾と対比してみると、土師質土器が約20%も高く、中国製品は2～4%低い。瀬戸系陶器は、2%程高く、日常用器も珠洲・越前・加賀を合わせても3分1程である。この消費形態の違いは、遺跡の性格⁽⁵⁰⁾と製品の流通機構に起因するものと考えられる。また、中国製品の青磁64.8%、白磁24.2%、染付6.8%の比率は、一乗谷朝倉遺跡の4:4:2の比よりも白磁・染付が極めて底率である。この比率の差は、白磁・染付が中国製陶磁器の中心となって大量に搬入された16世紀前半には、本遺跡に於ける陶磁器の消費活動が衰退したことを物語っている。

陶磁器の構成を主要な器種別にみると、日常用器の中で貯蔵用の甕は、珠洲18.8%、越前68%、加賀13.1%で、越前が大半を占める。壺は珠洲89.2%、越前・加賀11%と珠洲が中心で、調理用の片口鉢も珠洲86.4%、越前11.8%、加賀1.6%で、小型の日常用器は珠洲の製品が消費される分業形態が確立していたことが知られる。供膳用器の中で、碗の組成をみると青磁碗58.2%、白磁碗1%、染付碗2%、瀬戸系陶器の灰釉碗14.2%、同天目茶碗23%で、青磁碗、瀬戸系陶器の天目茶碗、同灰釉碗の順で消費されている。これに少量の漆碗が認められるが、青磁碗の優位は変わらない。これら碗⁽⁵¹⁾の用途を考えると茶臼の出土から茶の湯⁽⁵²⁾も想定されるが、主用途は食事用であろう。また、皿の組成は、土師質土器皿が97.7%と大半を占め、中国製品1.6%、瀬戸系灰釉皿0.6%である。皿の用途としては、灯明皿、盃、皿が考えられるが、土師質皿以外は高級供膳用器の皿として使用されたと考えられる。したがって、第16号土壇出土の青磁碗2点、染付碗1点、美濃の天目茶碗1点、白磁皿3点、土師質土器皿1点、瓦質土器花瓶1点の組成は、他の第17・19土壇の組成と共に高級供膳用器を中心とした特異な例である事が知られる。これは、鳥越城二の丸出土の一括資料も同様であろう。しかし、これら組成や青磁の双耳瓶や瀬戸系灰釉花瓶・鉄釉香炉の一括出土は、本遺跡が一搬集落と異なることを物語っている。

最後に本遺跡で消費された陶磁器の流通路について考えてみたい。地元北加賀には陶磁器の産地は無く、最も近い加賀の生産地でも約30kmの位置にあり、中国製品を始めとして瀬戸系陶器や珠洲・越前の生産地は、いずれも遠隔地である。これら各地で生産された陶磁器は、海路により北加賀の日本海沿岸地域に点在する港に陸揚げされ、水路と陸路から構成された流通路を経て各消費遺跡へ搬入されたと推定される。北加賀で文献等からの存在が知られるのは、手取川河口の今湊、犀川河口の宮腰津、大野川河の大野湊の三ヶ所の河口港である。これら河口港を河川の水系で把えれば、犀川は手取扇状地の東半部を占め、大野川は河北湊を過ぎて北加賀の北半部と結ばれる。残る手取扇状地の西半分は、扇状地から派生した小河川⁽⁵⁴⁾が直接日本海に注いでいる。これら河川や用水を水路として、河口の港湾と流域の各消費遺跡は結ばれる。近代以前までは米・木材等が運ばれ、中世での利用が考えられる。特に大甕や壺・片口鉢の日常用器は、陶磁器の中でも重量的に重く、その運搬手段は小船を利用した水運に求められる。そして、本遺跡へ搬入された日常用器の大半は、犀川河口の普正寺遺跡にその組成が類似する点や出土品から、これらの港で陸揚げされ犀川支流の水路を経て搬入されたものであろう。しかし、

高級供膳用の舶載製品や瀬戸系陶器が同時に搬入されたかどうかは明らかでないが、北加賀の各遺跡出土の陶磁器組成を見るならば、本遺跡の陶磁器組成の様相は近接する能美丘陵地域よりも犀川河口の普正寺遺跡の様相に近い。これは扇状地の水路を中心とした広域な流通圏が形成され、中核的な港湾を中心とした流通機構が整備され、集約化が計られていたと考えられる。

本稿を記すにあたり、当センター職員各位から教示と協力を得た。記して感謝の意を表しておきたい。

註

- (1) 佐々木達夫 「日本海の陶磁貿易」 1981 『日本海文化』 No. 8
- (2) 吉岡 康暢 「地方窯の展開—能美・珠洲窯の場合」 1977 『地方史と考古学』
「中世陶器の生産と流通(一)・(二)—北東日本海域の珠洲系陶器を中心に—」 1981 『考古学研究』
108・110
「北東日本海域における中世陶磁の流通」 1981 『月刊文化財』 215
「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」 1982 『庄内考古』
「珠洲系陶器における加飾法の展開と特質」 1982 『東洋陶磁』 第8号
- (3) 石川県立埋蔵文化財センター 1981 『寺家』
- (4) 松任市教育委員会・石川考古学研究会 「施釉陶器」 1983 『東大寺領横江庄遺跡』
- (5) 石川県立埋蔵文化財センター 「小松市浄水寺遺跡発掘調査の概要」 1985 『拓影』 第17号
- (6) 石川県立埋蔵文化財センター 1984 『永町ガマノマカリ遺跡』
- (7) 加賀市教育委員会 1982 『敷地町後方遺跡発掘調査報告』
石川県立埋蔵文化財センター 1983 『敷地天神山遺跡群』
- (8) 加賀市教育委員会 1981 『勅使館跡発掘調査報告』
- (9) 加賀市教育委員会 1983 『篠原シンゴウ遺跡』
- (10) 石川県教育委員会 1979 『加賀市田尻シンペイダシ遺跡発掘調査報告書』
- (11) 田島 明人 「石川県の11・12世紀土器について」 1984 五県会議情報交換資料
- (12) 小松市教育委員会 1973 『軽海中世墳墓群—発掘調査概報—』
- (13) 米沢 義光氏の教示による。
- (14) 石川県立埋蔵文化財センター 1982 『漆町遺跡』
- (15) 石川県立埋蔵文化財センター 1985 『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』
- (16) 同 上 及び湯尻修平氏の教示による。
- (17) 長谷部楽爾 「石川県小松市波佐谷出の古陶磁」 1972 『ミュージアム』 255 東京国立博物館
- (18) 石川県鳥越村教育委員会 1979 『鳥越城址発掘調査概報』
- (19) 石川県教育委員会 1977 『桑島館跡』(資料編)
- (20) 石川県立鶴来高等学校歴史部 1963 『鶴来町の古代中世遺跡』
- (21) 同 上 なお、藤澤良祐氏はこの瓶子をその特徴から古瀬戸中期のIII期(14世紀中葉)と指摘している。藤澤良祐「古瀬戸中期様式の成立過程」 1982 『東洋陶磁』 第8号
- (22) 同 上
- (23) 北陸大谷高等学校歴史クラブ 「辰口町金剛寺坂中世墳墓群報告」 1966 『紀要』第1号
- (24) 辰口町立博物館の展示品を実見し、滝上 秀明氏の教示による。
- (25) 滝上 秀明氏の教示による。
- (26) 辰口町教育委員会 1983 「湯屋チョウヅカ遺跡発掘調査」ニュース
- (27) 辰口町教育委員会 1982 『下開発茶白山古墳群』
- (28) (15)に同じ 滝上 秀明・北野 博司氏の教示による。
- (29) 石川考古学研究会 1967 『加賀三浦遺跡の研究』
- (30) 石川県教育委員会 1977 『松任市長竹遺跡発掘調査報告』
- (31) (29)に同じ
- (32) 石川県教育委員会 1976 『徳光ヨノキマヤ遺跡』
- (33) 金沢市教育委員会 「金沢市額谷ドウシダ遺跡」 1984 『金沢市額谷ドウシダ遺跡、金沢市無量寺B遺跡・II』
- (34) 石川考古学研究会 1970 『普正寺』

- (35) 石川県立埋蔵文化財センター 1984 『普正寺遺跡』
- (36) 金沢市教育委員会 1984 『金沢市畝田・寺中遺跡』
- (37) 金沢市教育委員会 1977 『金沢市寺中遺跡 第II・III・IV次調査報告書』
- (38) 石川県立埋蔵文化財センター 「金沢市桂遺跡」 1985 『石川県立埋蔵文化財センター年報』 第5号
- (39) 金沢市教育委員会 1983 『金沢市無量寺遺跡』
- (40) 石川県教育委員会 1972 『金沢市戸水遺跡』
石川県教育委員会 1976 1979～1983 『金沢市戸水C遺跡発掘調査概報』 (1)～(6)
- (41) 石川県立埋蔵文化財センター 1985 『金沢市北安江遺跡』
- (42) 吉岡 康暢 「金沢市小坂第1号墳の調査」 1970 『石川考古学研究会々誌』 第13号
- (43) 石川県立埋蔵文化財センター 1982 『石川県金沢市今町A遺跡』
- (44) 津幡町教育委員会 「北横根遺跡出土遺物」 1980 『津幡町谷内石山遺跡』
- (45) 西野 秀和氏の教示による。
- (46) (2)に同じ
- (47) 伊藤信太郎・室岡 博・金子 拓男 「名立タラバ発見の六個一組の珠洲焼」 1975 『越佐研究』 35
- (48)
- (49) 小野 正敏 「福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分担」 1984 『貿易陶磁研究』 No. 4
- (50) 本稿では加賀地方の中世集落をその陶磁器の消費状況から、都市型集落（中核港湾集落など）、基幹集落（門前町・各市など）、一般集落（農村・漁村など）とに分類し考えた。
- (51) 碗には各種陶磁器の製品と漆器碗が一般的な出土品として上げられるが、他にも木地碗の存在が考えられるが資料に欠ける。
- (52) (49)で小野 正敏氏は、信楽焼の甕を茶の運搬容器と指摘しているが、本遺跡出土の信楽焼の甕も同様であろう。
- (53) (18)に同じ
- (54) 手取川七ヶ用水土地改良区 1982 『手取川七ヶ用水誌 上巻』

参 考 文 献

- 浅香年木 「中世の技術と手工業者の組織」 1975 『新岩波講座日本歴史』 No. 6
- 浅香年木 1971 『日本古代手工業史の研究』
- 豊田 武・児玉幸多編 1969 『体系日本史叢書 No.13 流通史 I』
- 日本貿易陶磁研究会 1981・1982 『貿易陶磁研究』 No. 1・2
- 小学館 1977 『世界陶磁全集 3 日本中世』



遺跡周辺の航空写真 (セントラル航業撮影)



第2次調査区全景（南から）



第2次調査区道全景（南から）



第2次調査区ピット群近景 (南から)



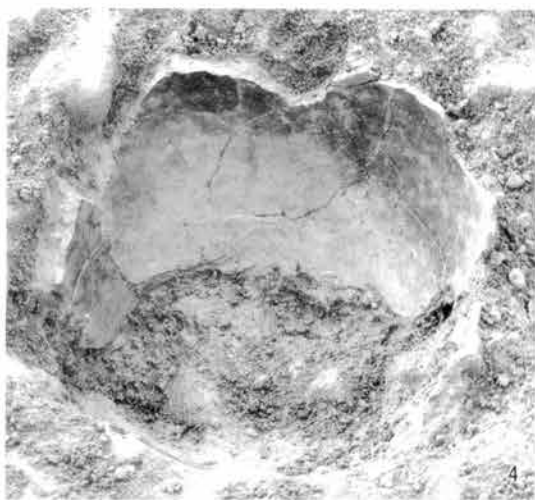
第2次調査区ピット群近景 (西南から)



第2次調査区ピット群（北西から）



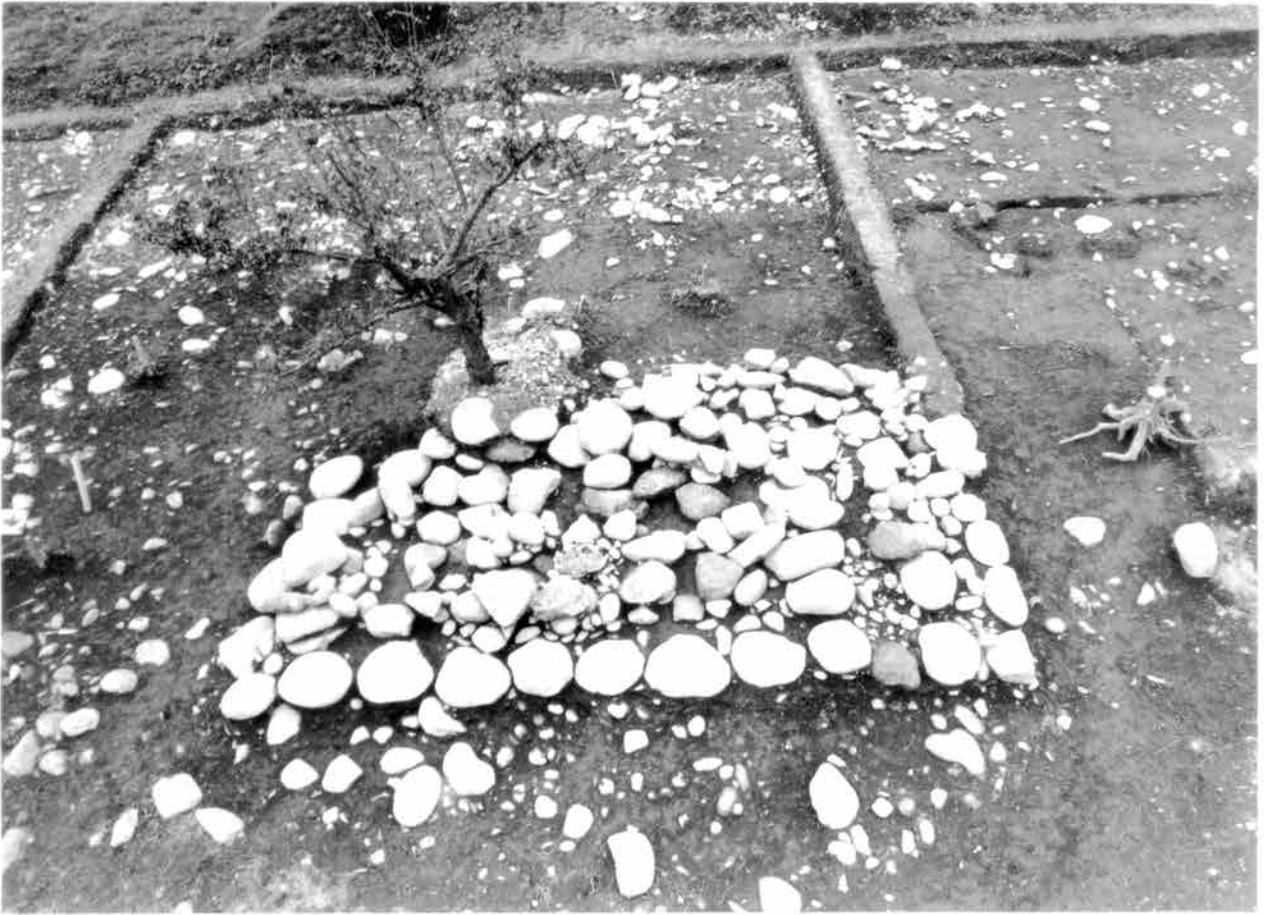
第2次調査区ピット群近景（北から）



1. 石罏の検出状況 2. 石罏 3. 壺出土状況 4～6 埋甕



遺物出土狀況 1 打製石斧 2 石鏃 3 石錘 4 鑿節型石器
5 石刀 6 球形土製品



中世墳墓 (西から)



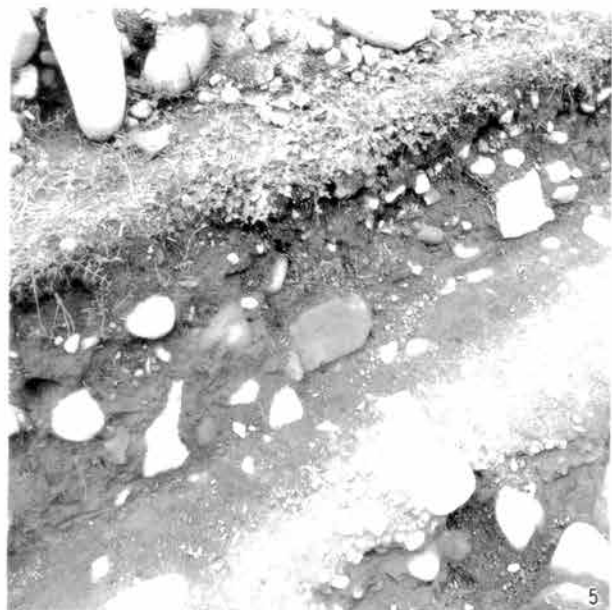
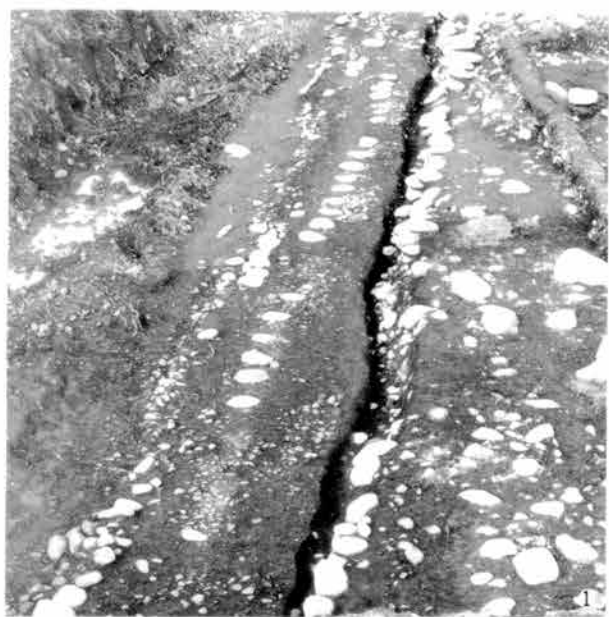
中世墳墓 (西から)



中世墳墓の調査前の状況と調査風景



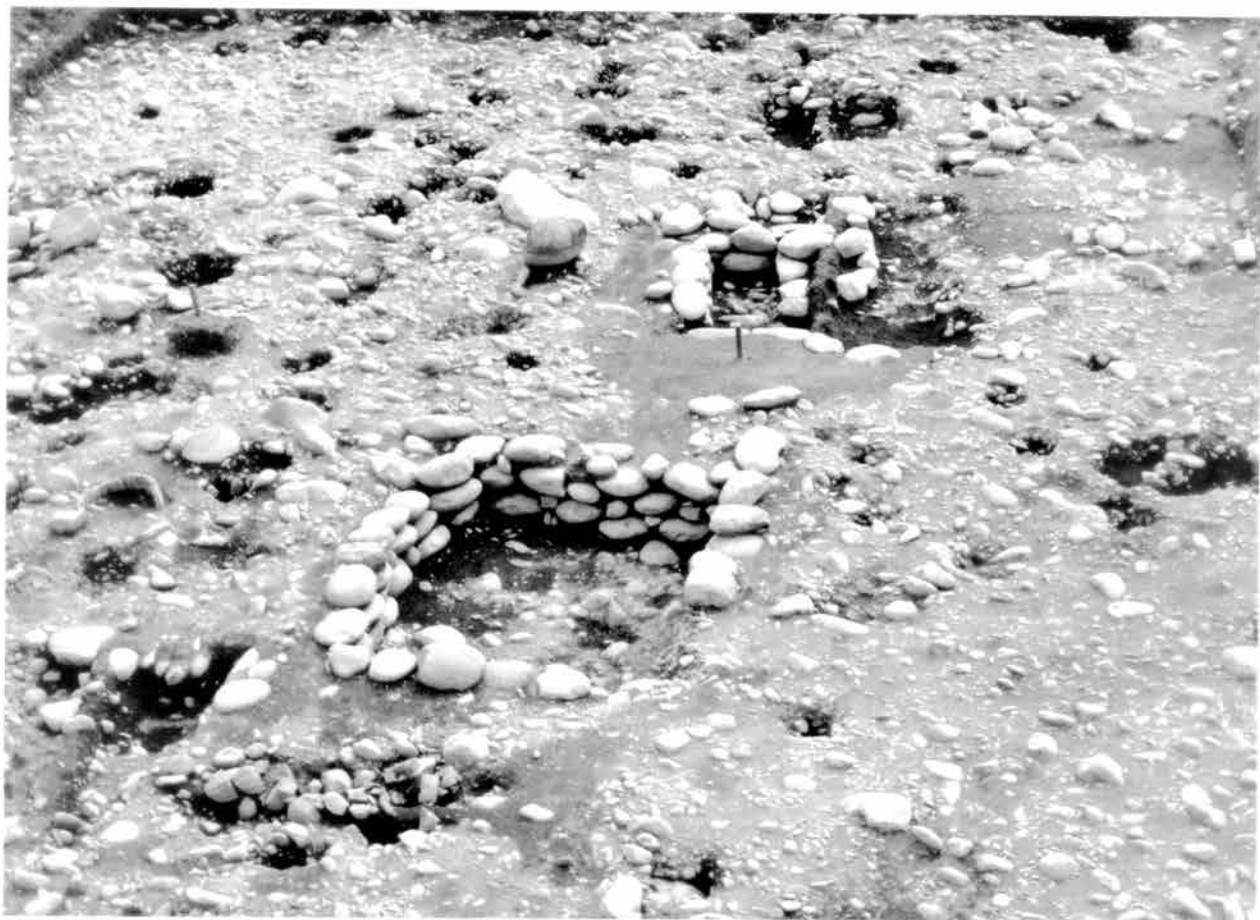
遺物の出土状況 1 水輪 2・3 空風輪 4 地輪 5 遺骨の出土状況
6 遺骨を取り上げた後



1～4 道の検出状況 5 紀年銘地輪の出土状況 6 北部試掘坑



第3次調査区全景 (上-北から・下-南から)



石室全景 (北から)



カマド状遺構



瓦質土器出土状況



茶臼出土状況



砥石出土状況



第4次調査区全景 (西側、上-北から・下-南から)



第4次調査区全景 (東側、上—北から・下—南から)



第4次調査区遺構全景（東から）



縄文土器出土状況（北から）



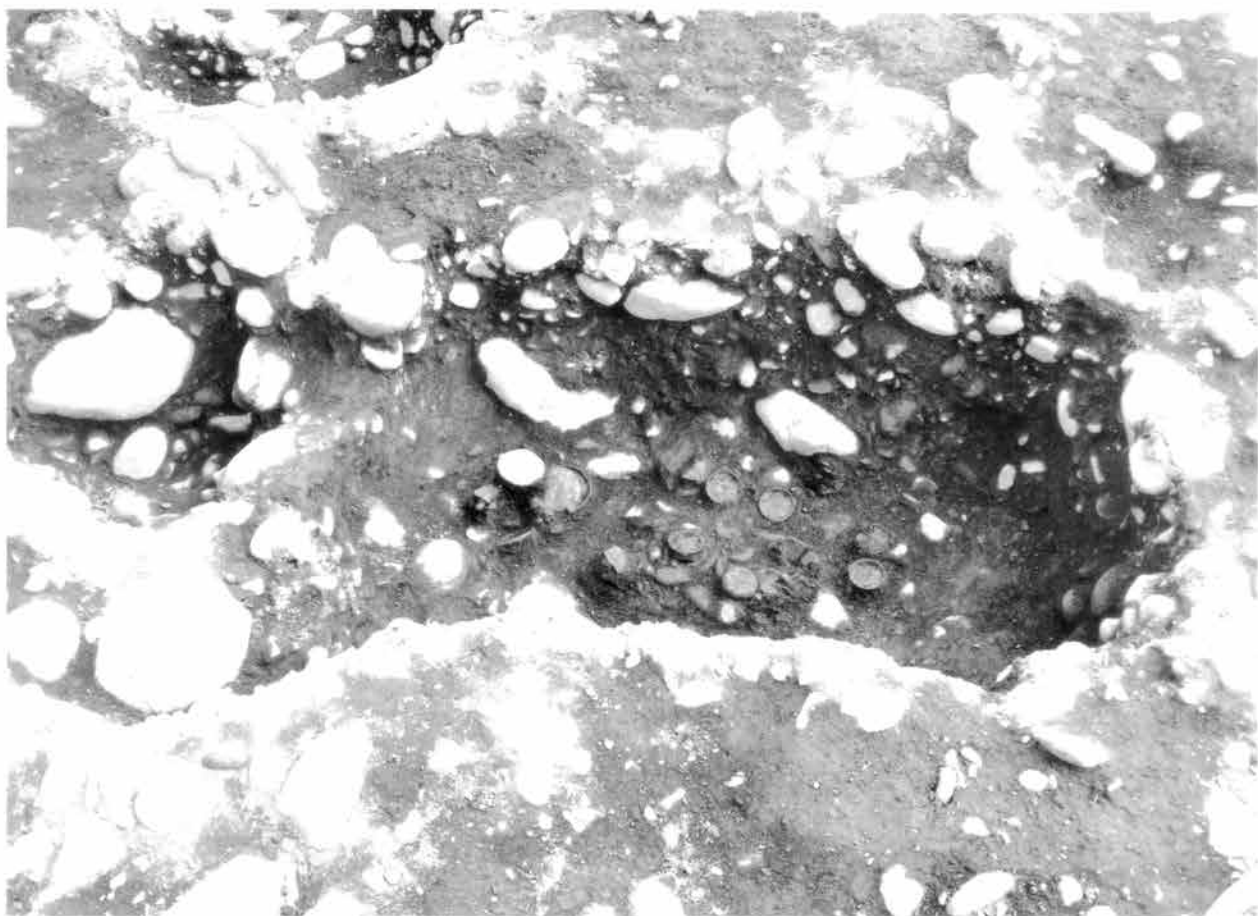
第2・3号配石遺構全景



第1号配石遺構全景



第 5 号土坑全景



第 7 号土坑遺物出土狀況



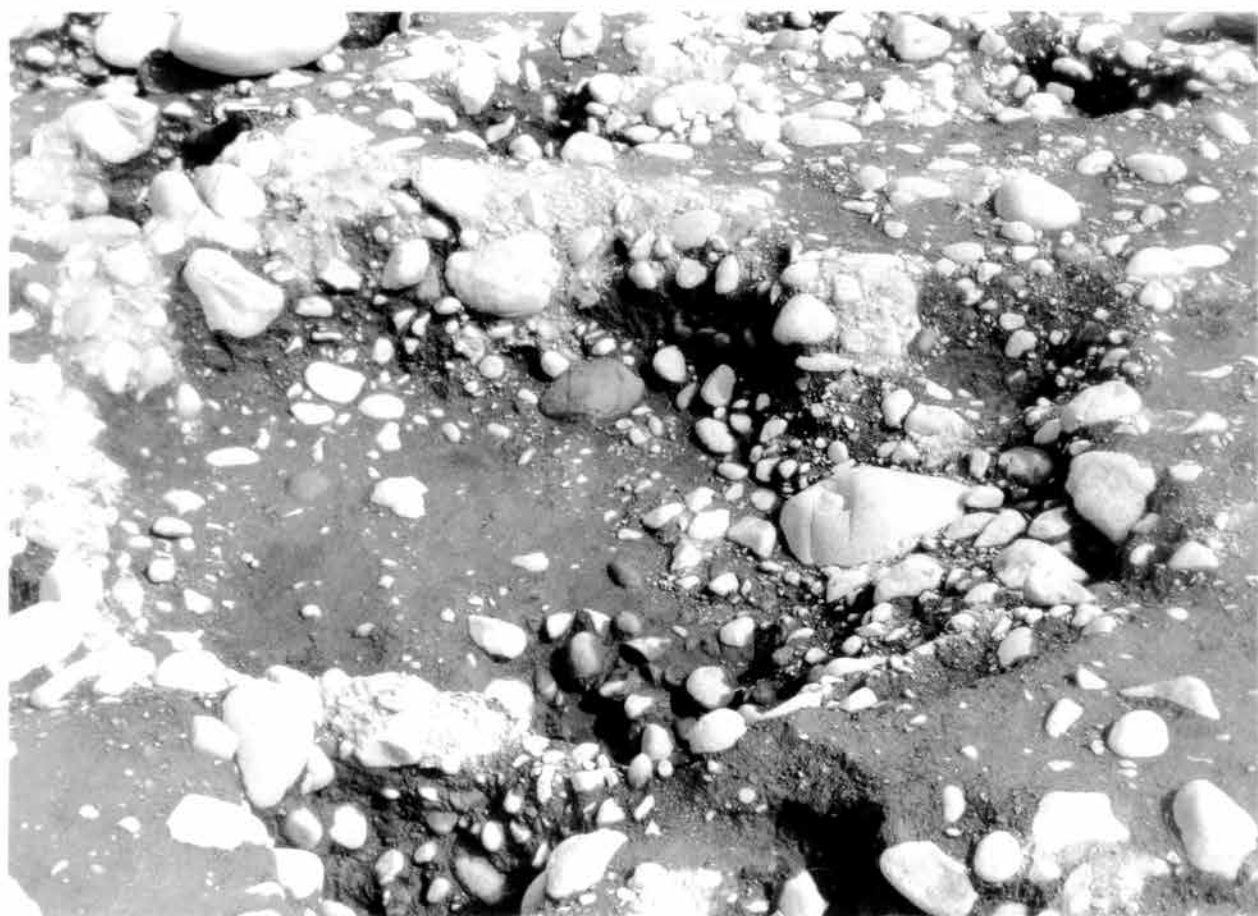
第4・6号土坑全景



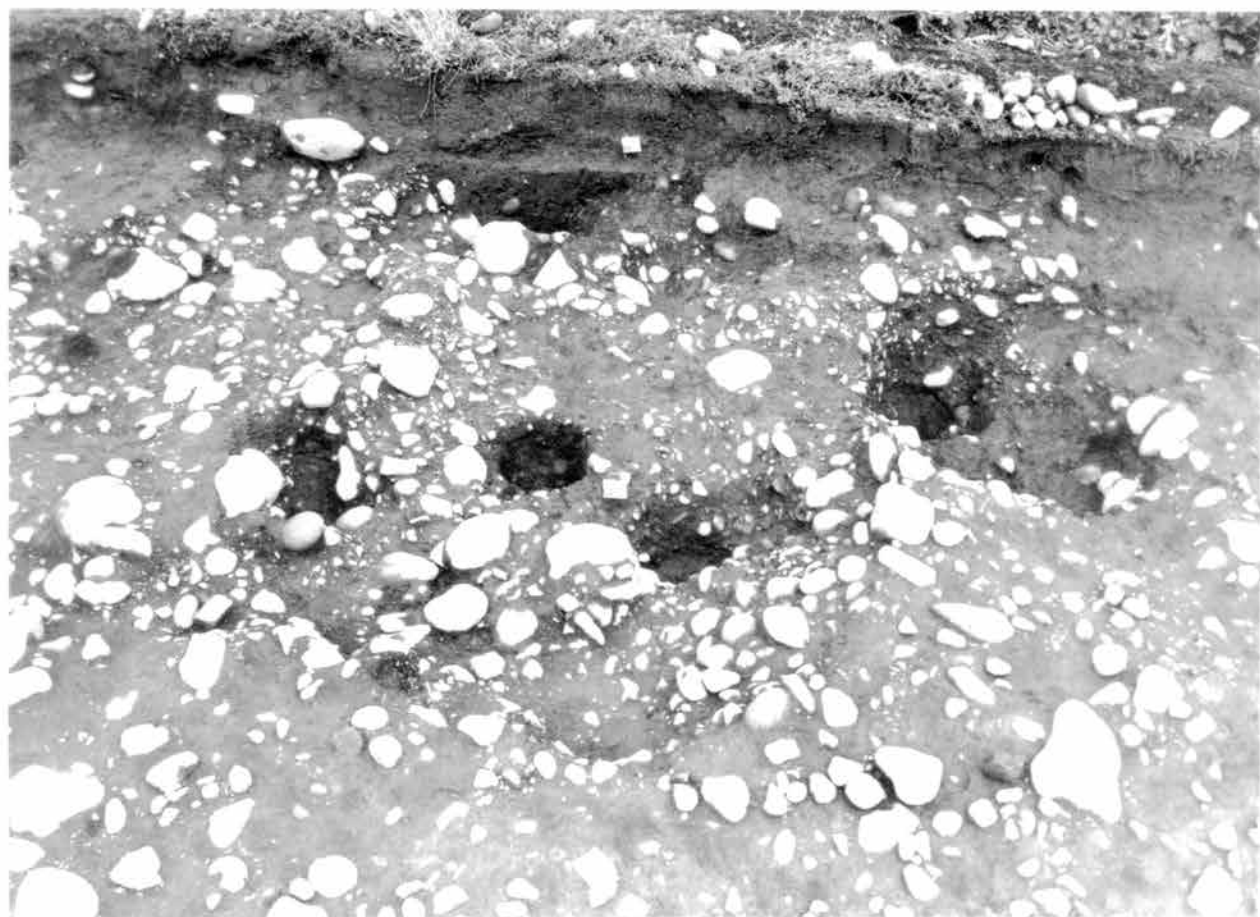
石臼出土状況



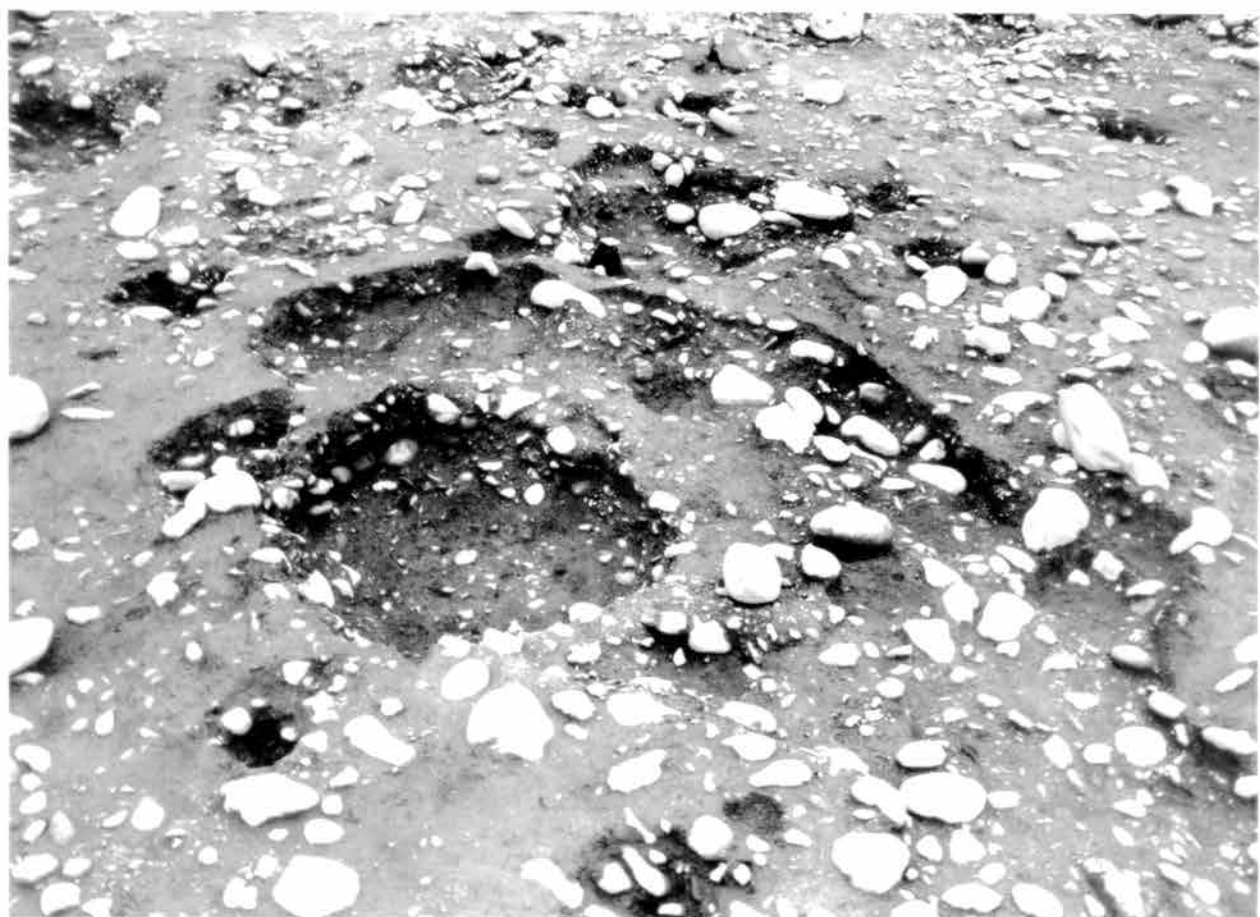
第 8 号土坑全景



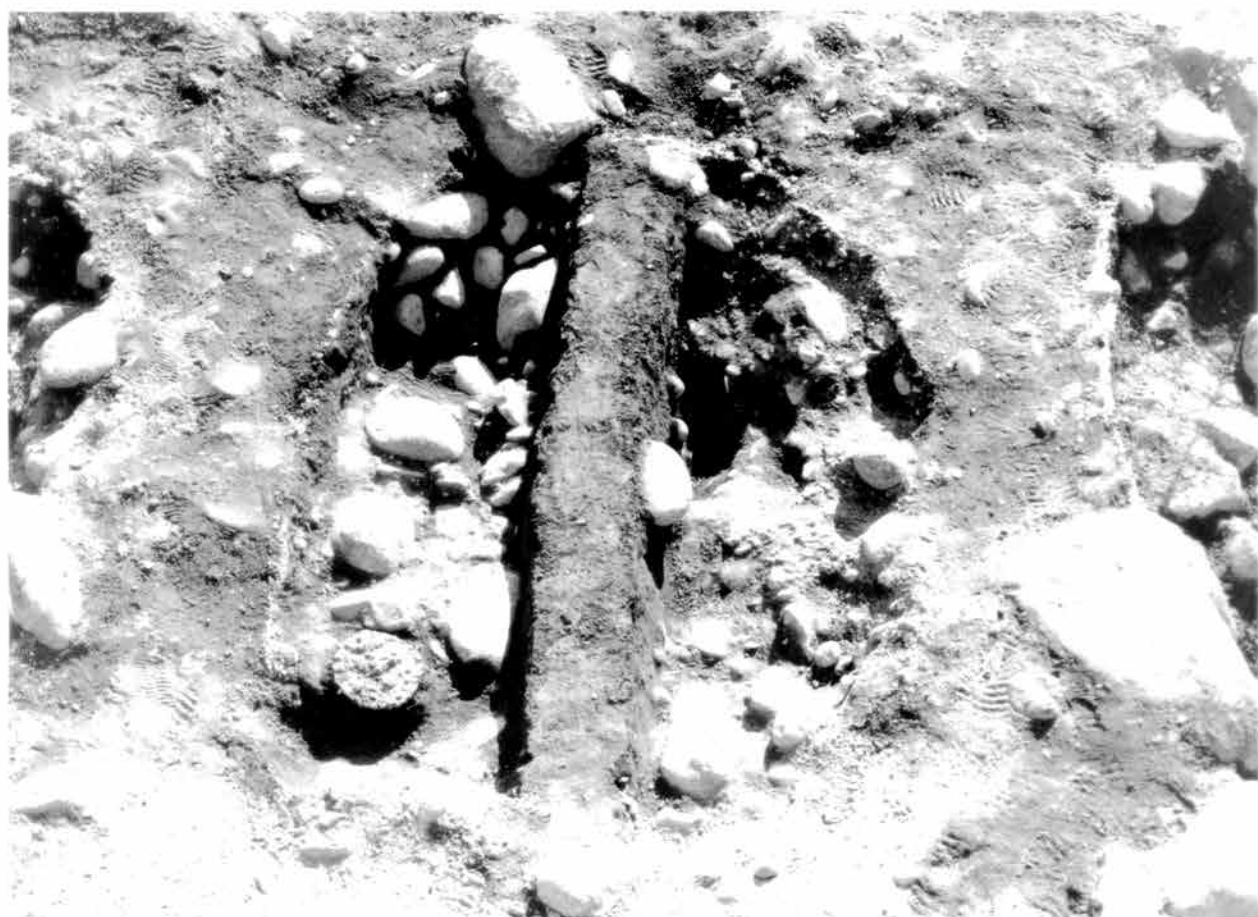
第 12 号土坑全景



第19号土坑全景



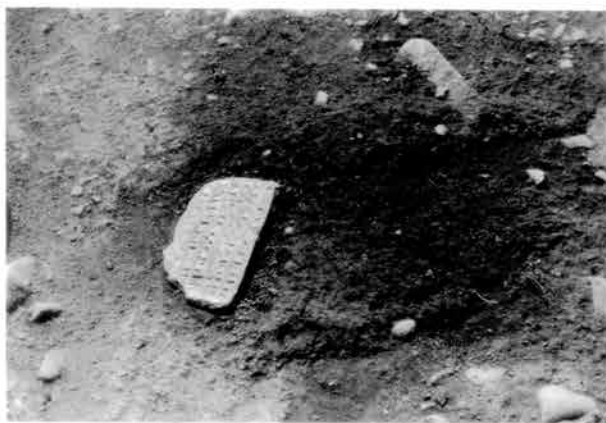
第23号土坑全景



第 28 号土坑遺物出土状況



第 40 号土坑遺物出土状況



瀬戸・美濃出土状況



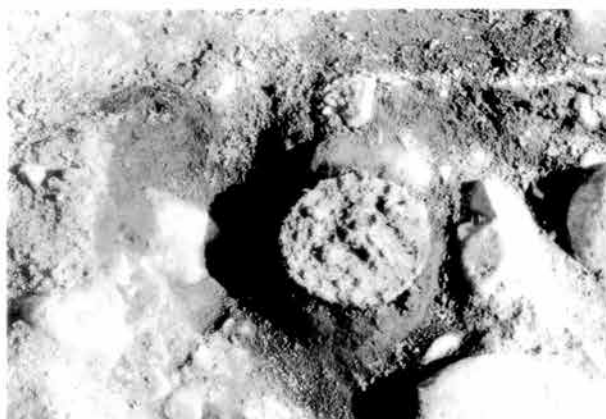
同 左



石 硯 出 土 状 況



染 付 出 土 状 況



鉄 蓋 出 土 状 況



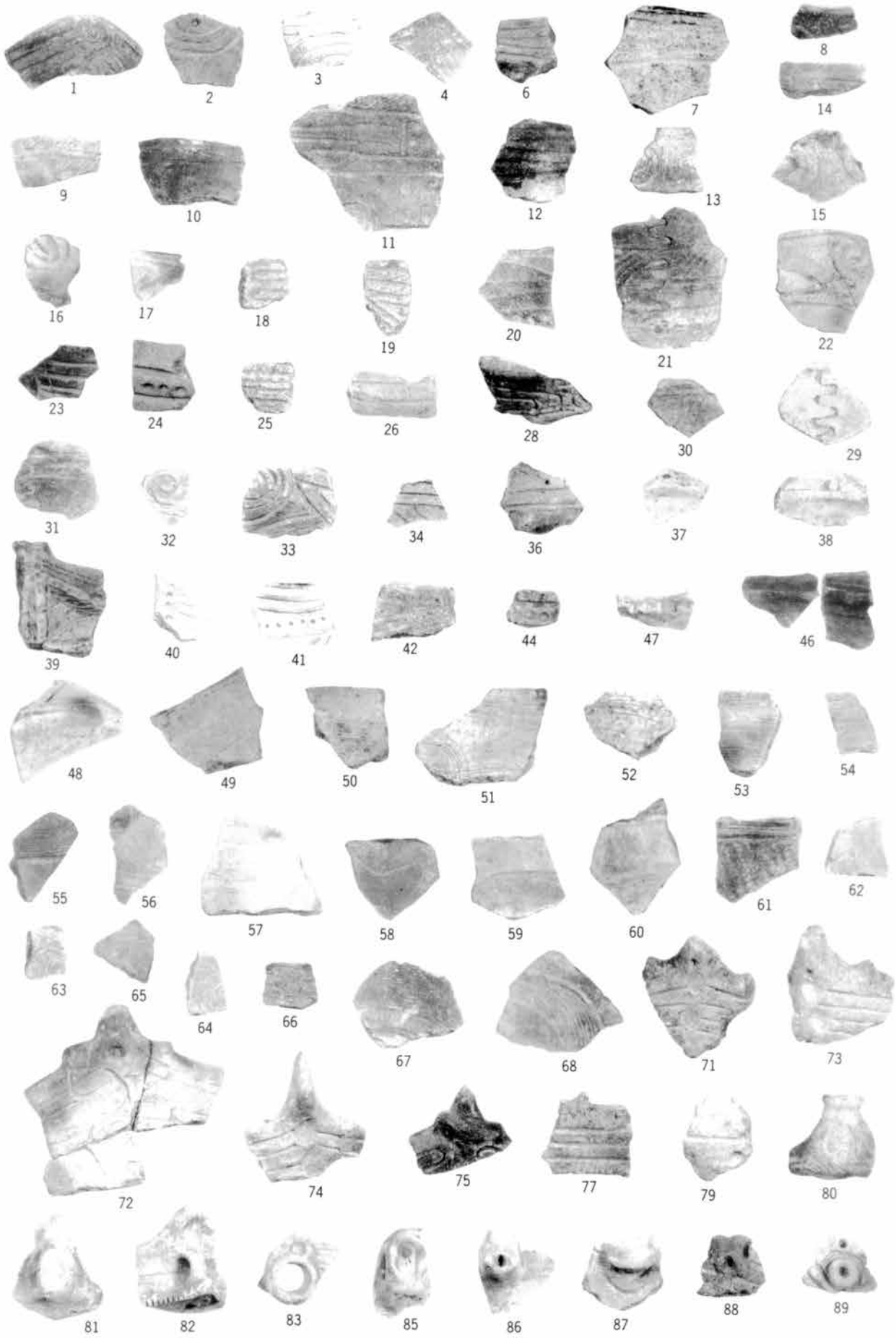
火 箸 出 土 状 況



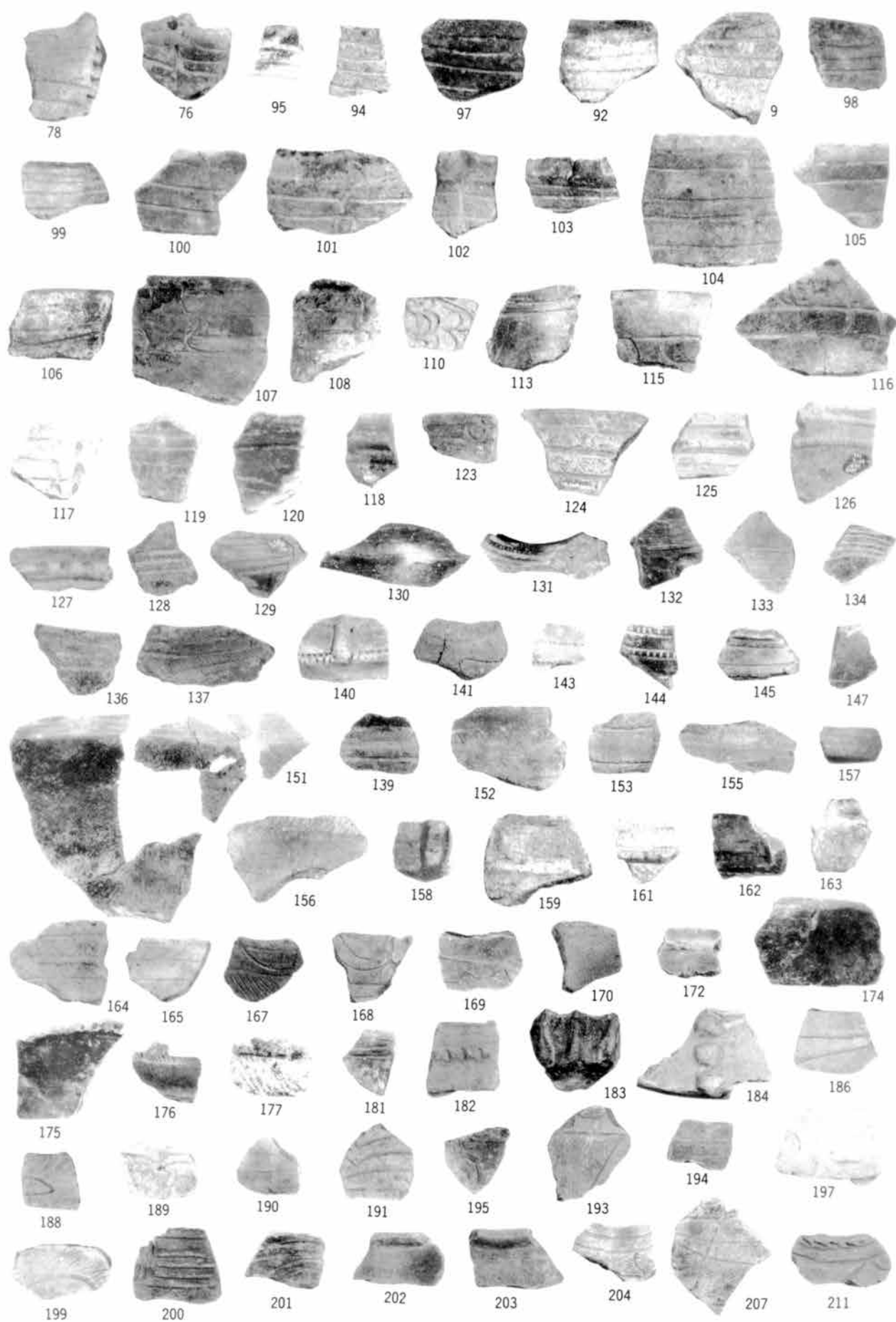
クツワ 出 土 状 況



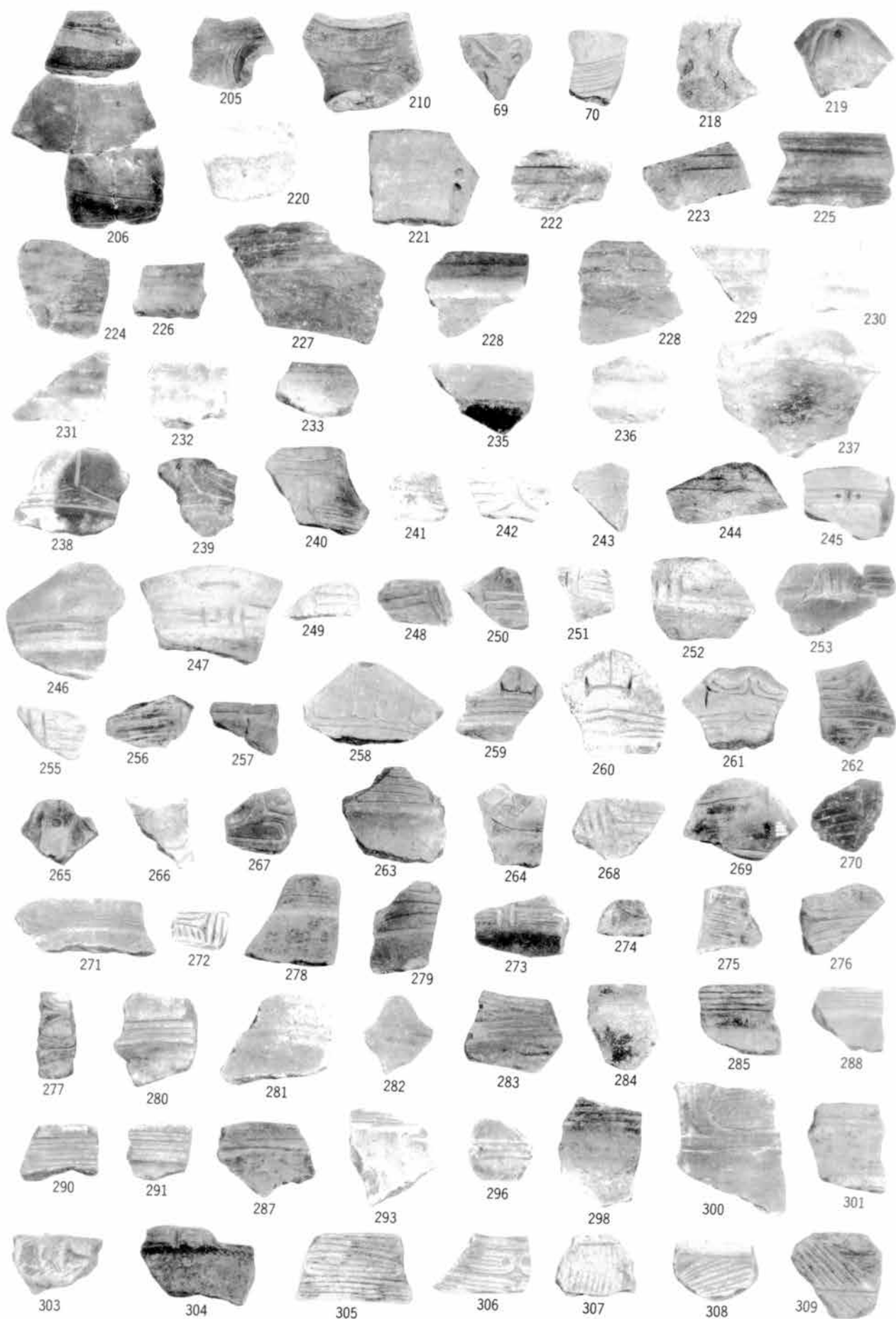
牛 歯 出 土 状 況



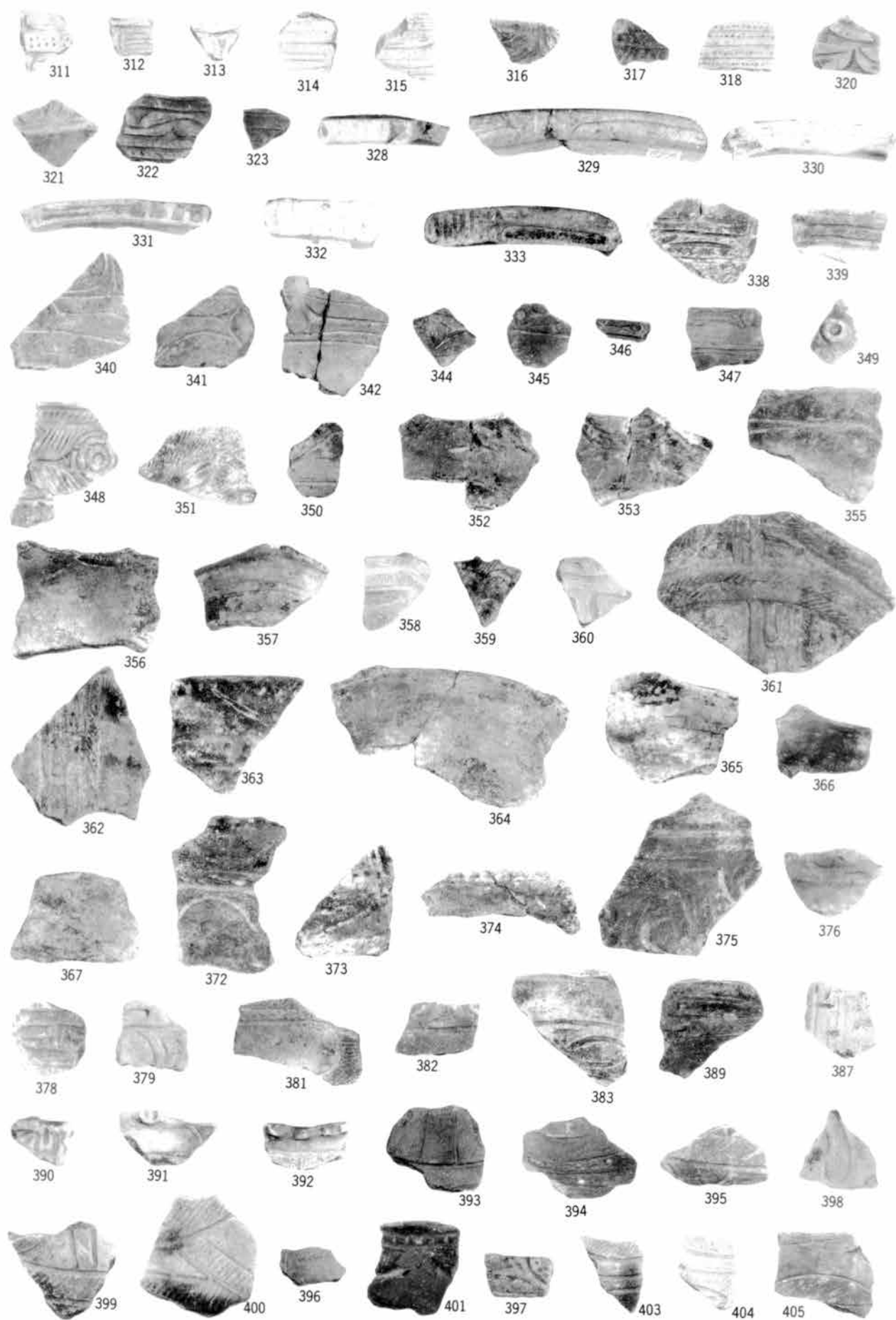
繩文土器(1~89) (1/3)



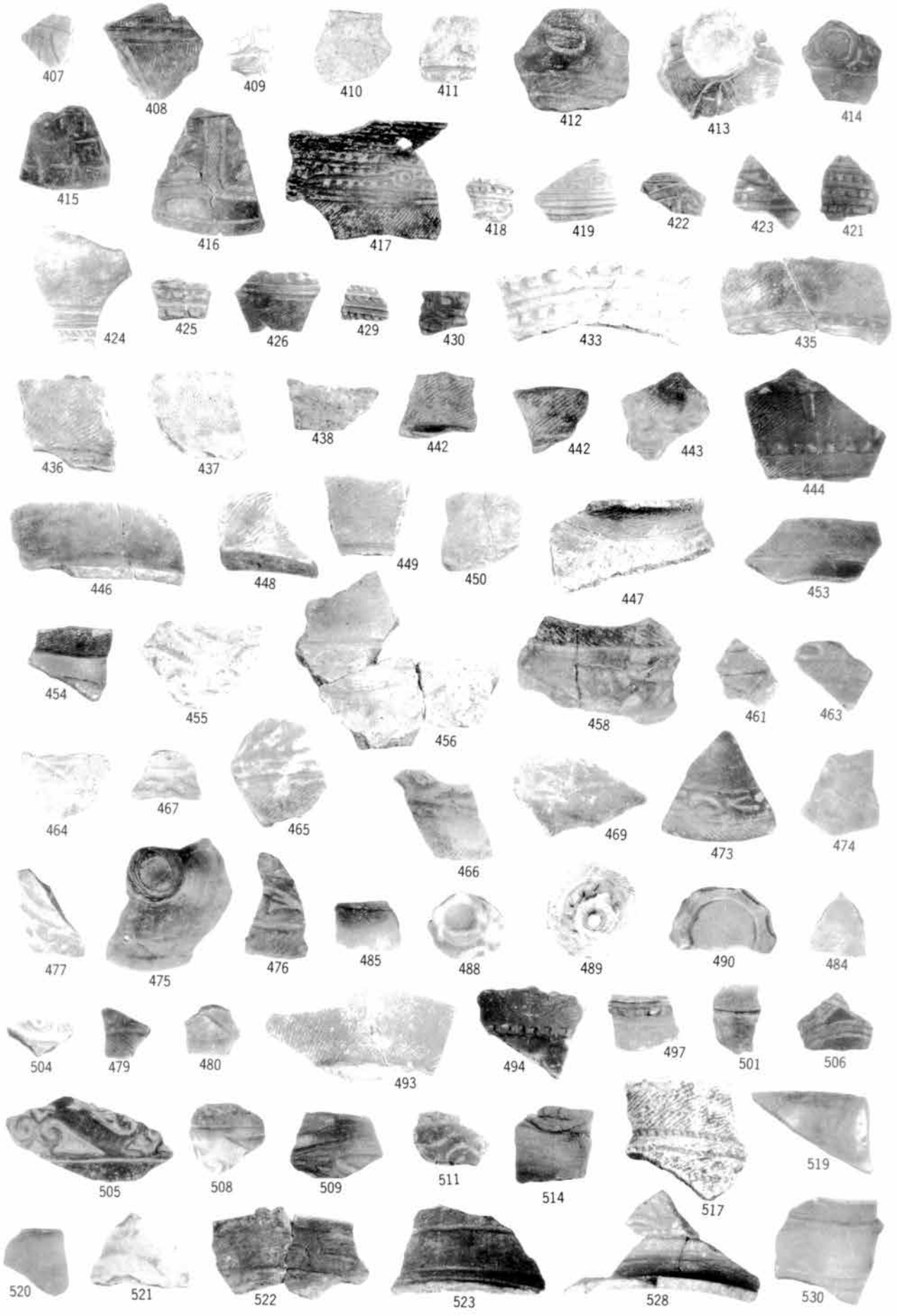
繩文土器(76-211)(1/3)



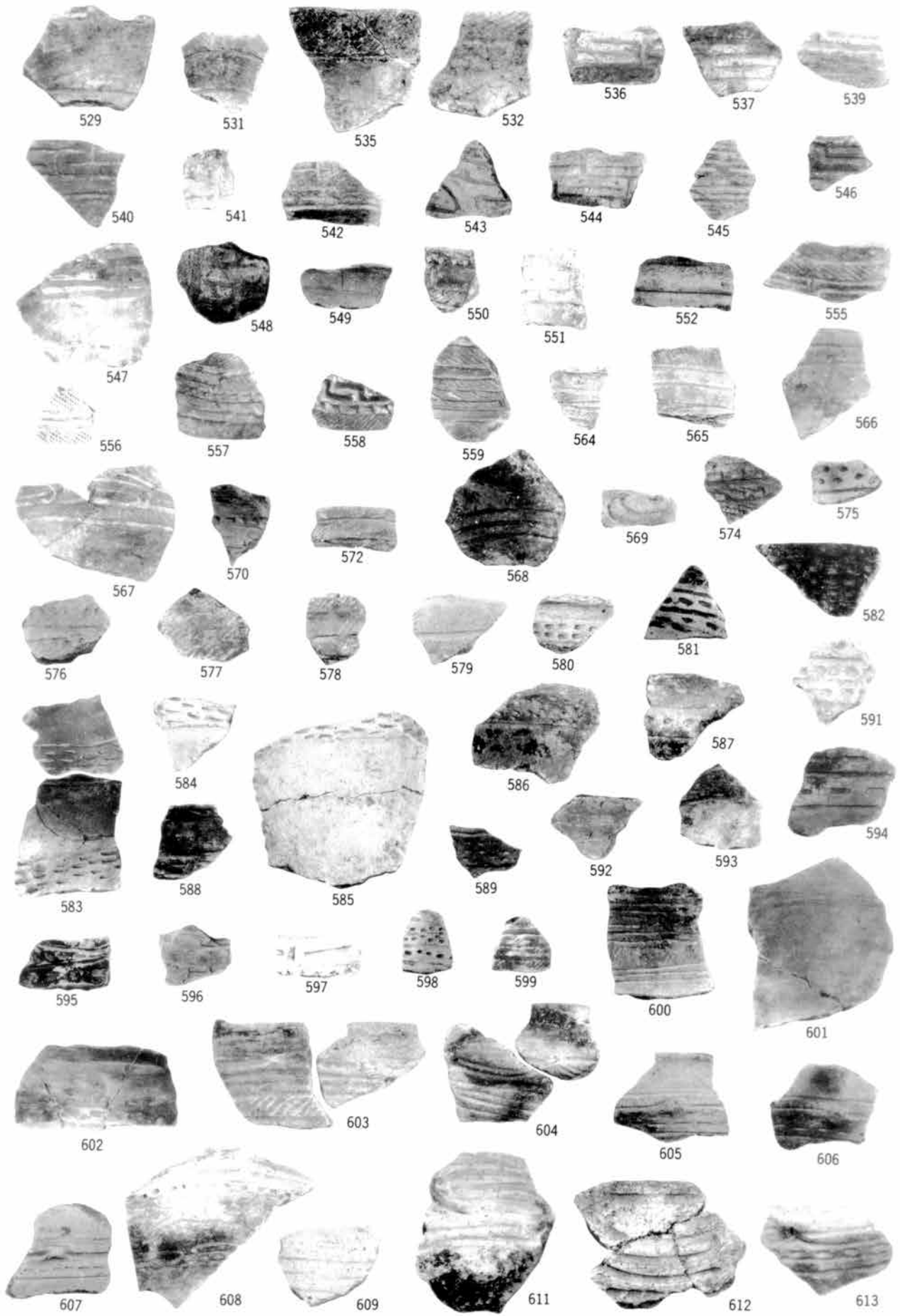
縄文土器(69・70・205~309) (1/3)



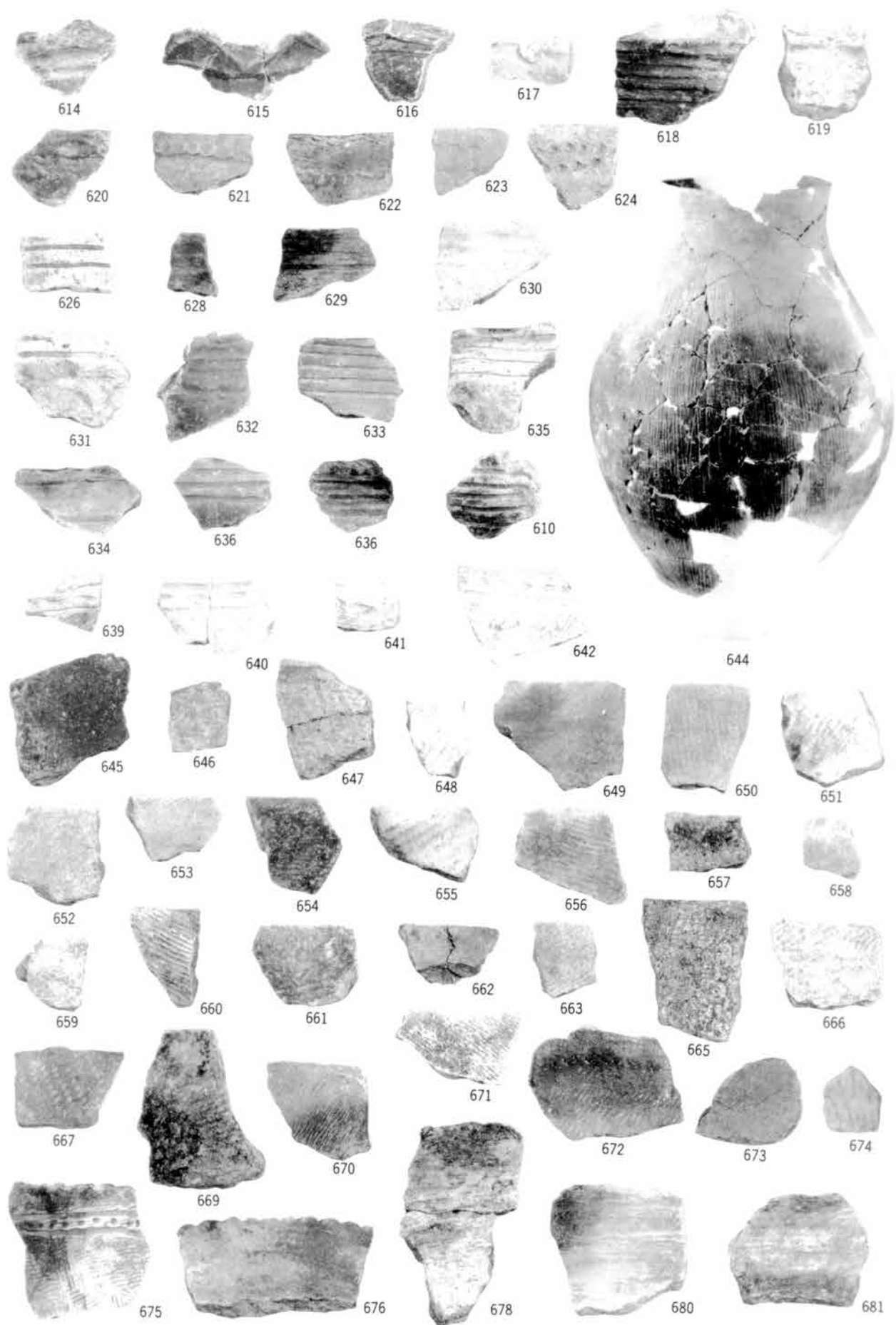
繩文土器(311-405) (328-333-1/2、他1/3)



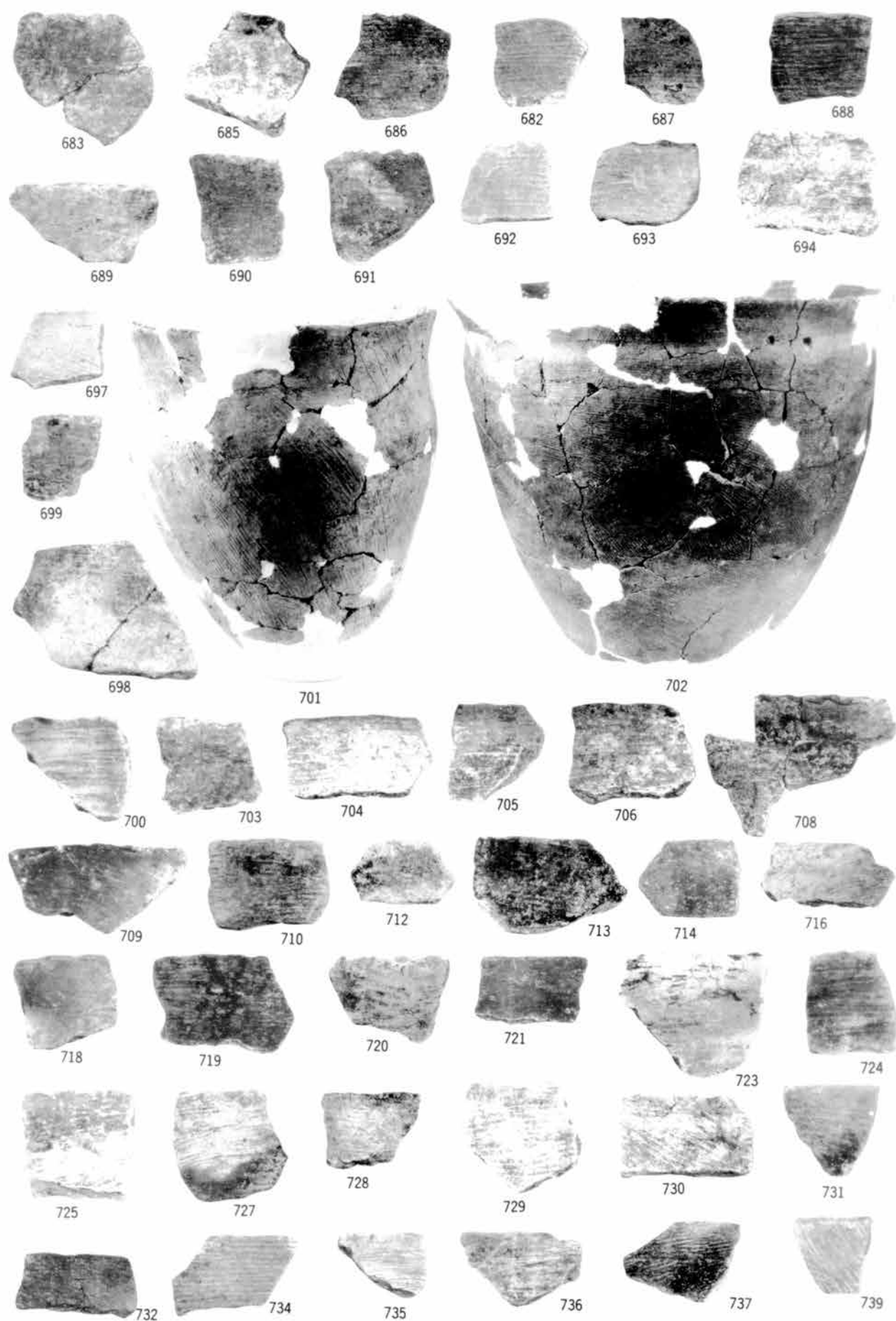
縄文土器 (407~530) (418~430-1/2、他 1/3)



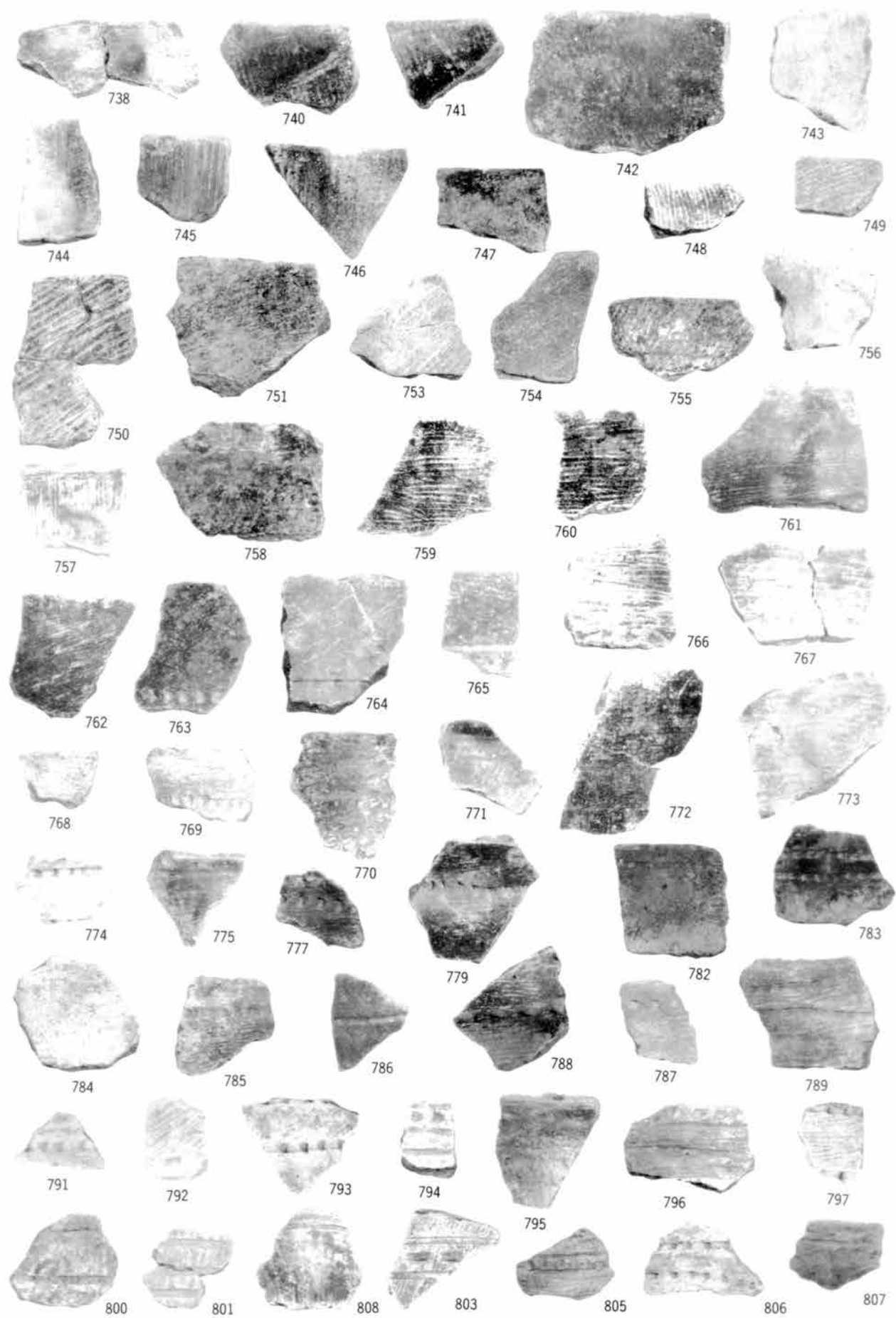
繩文土器(529~613) (1/3)



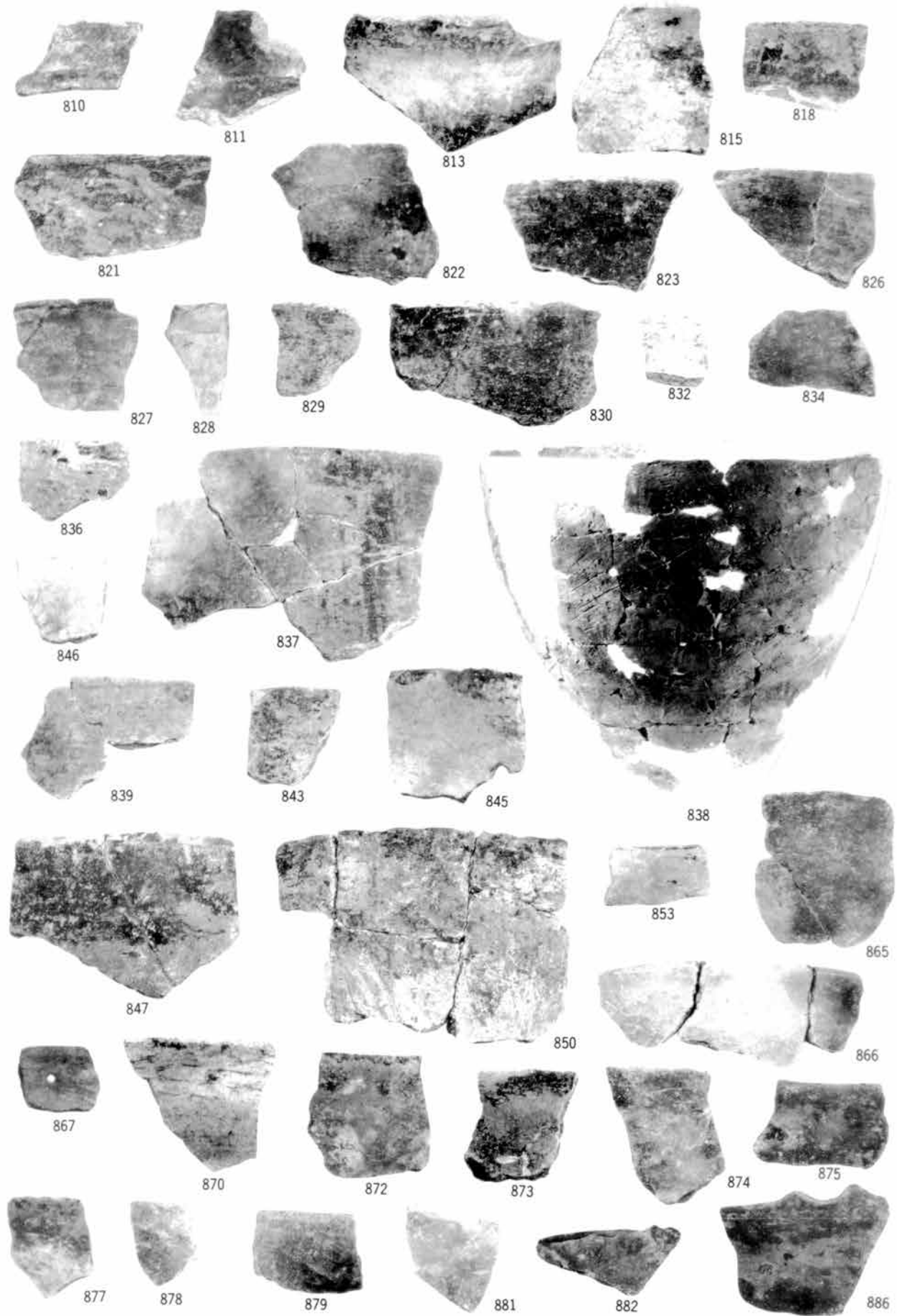
繩文土器(614-681) (1/3)



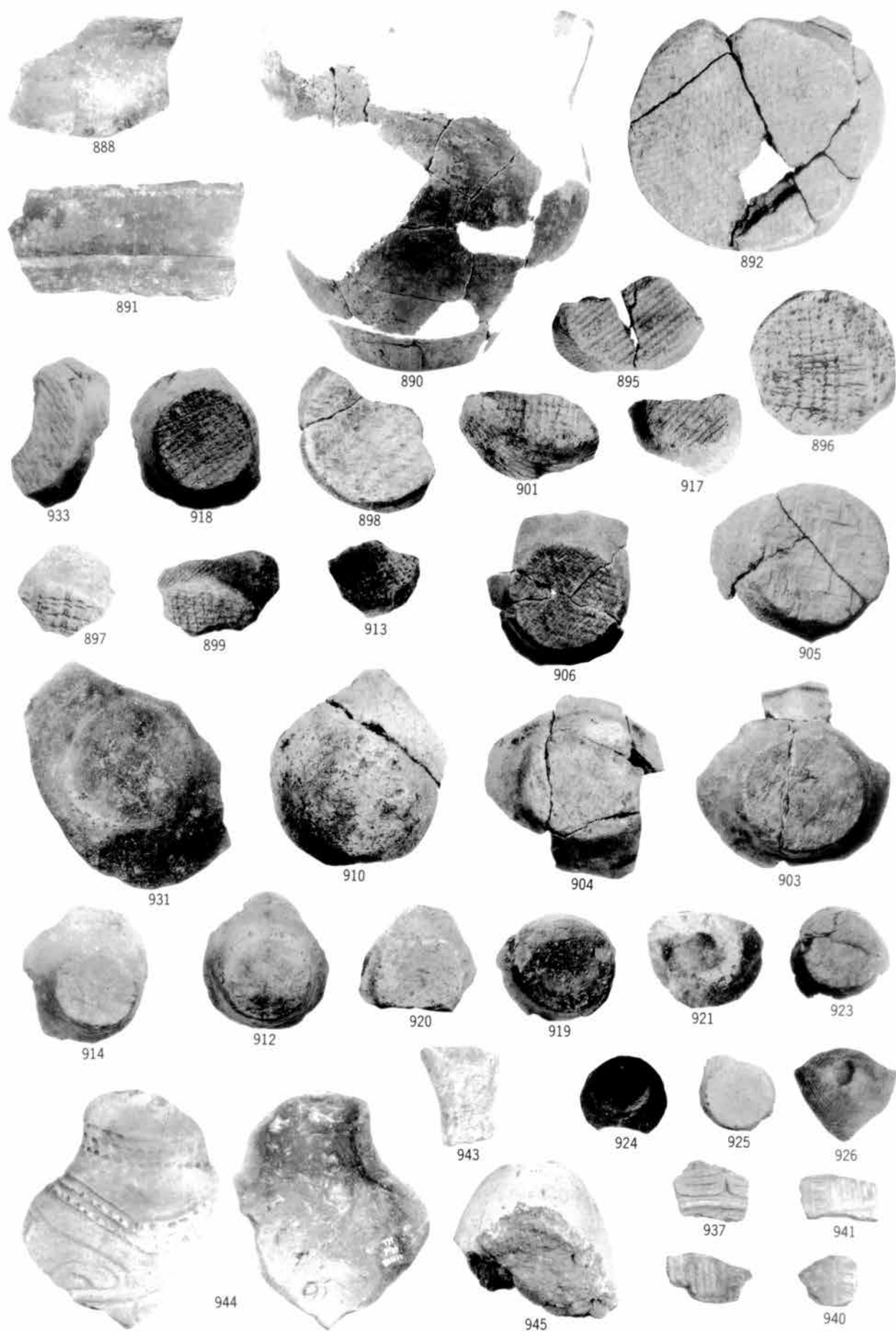
縄文土器(682~739)(701、702は任意、他1/3)



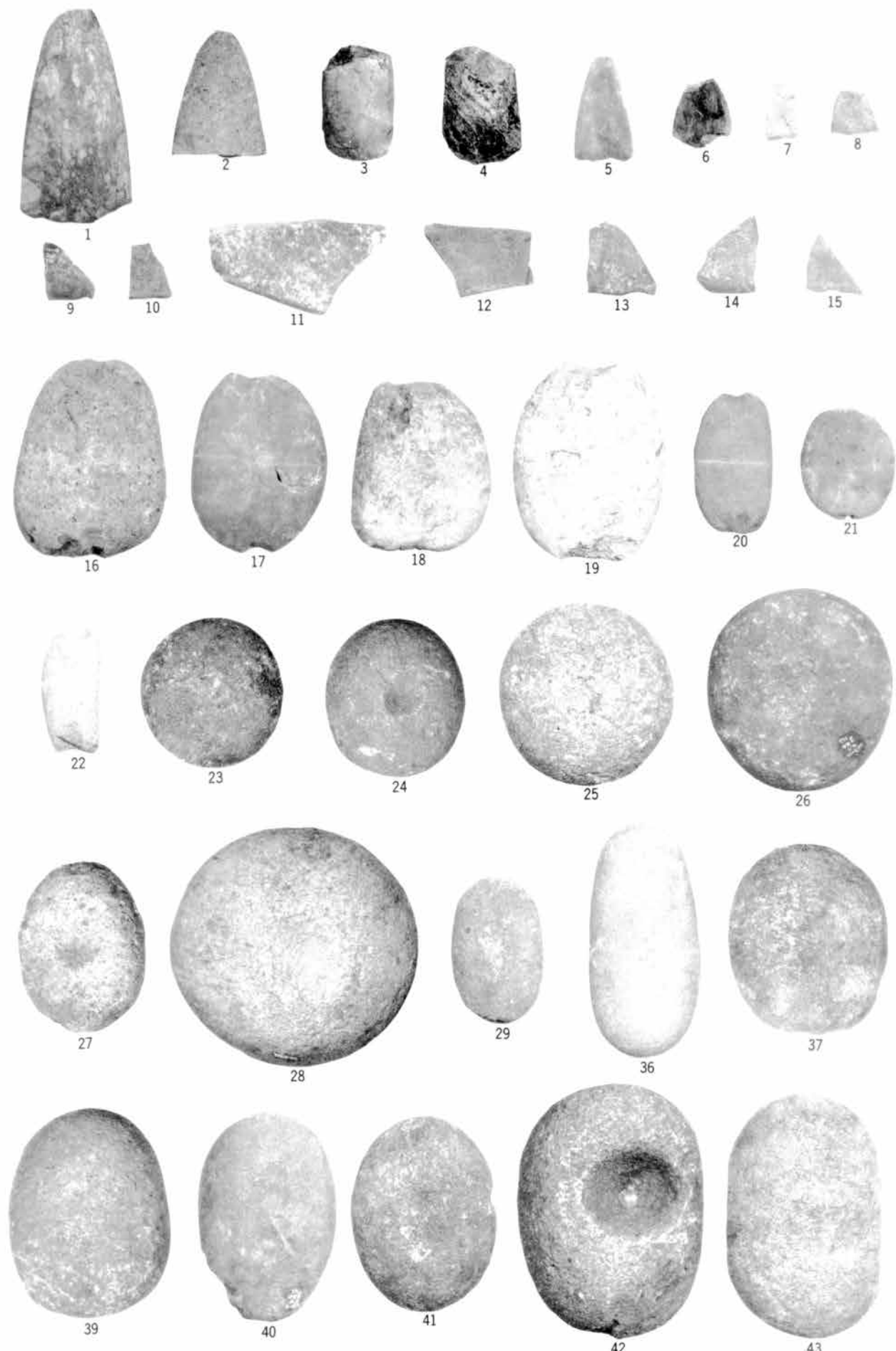
縄文土器(638~807) (1/3)



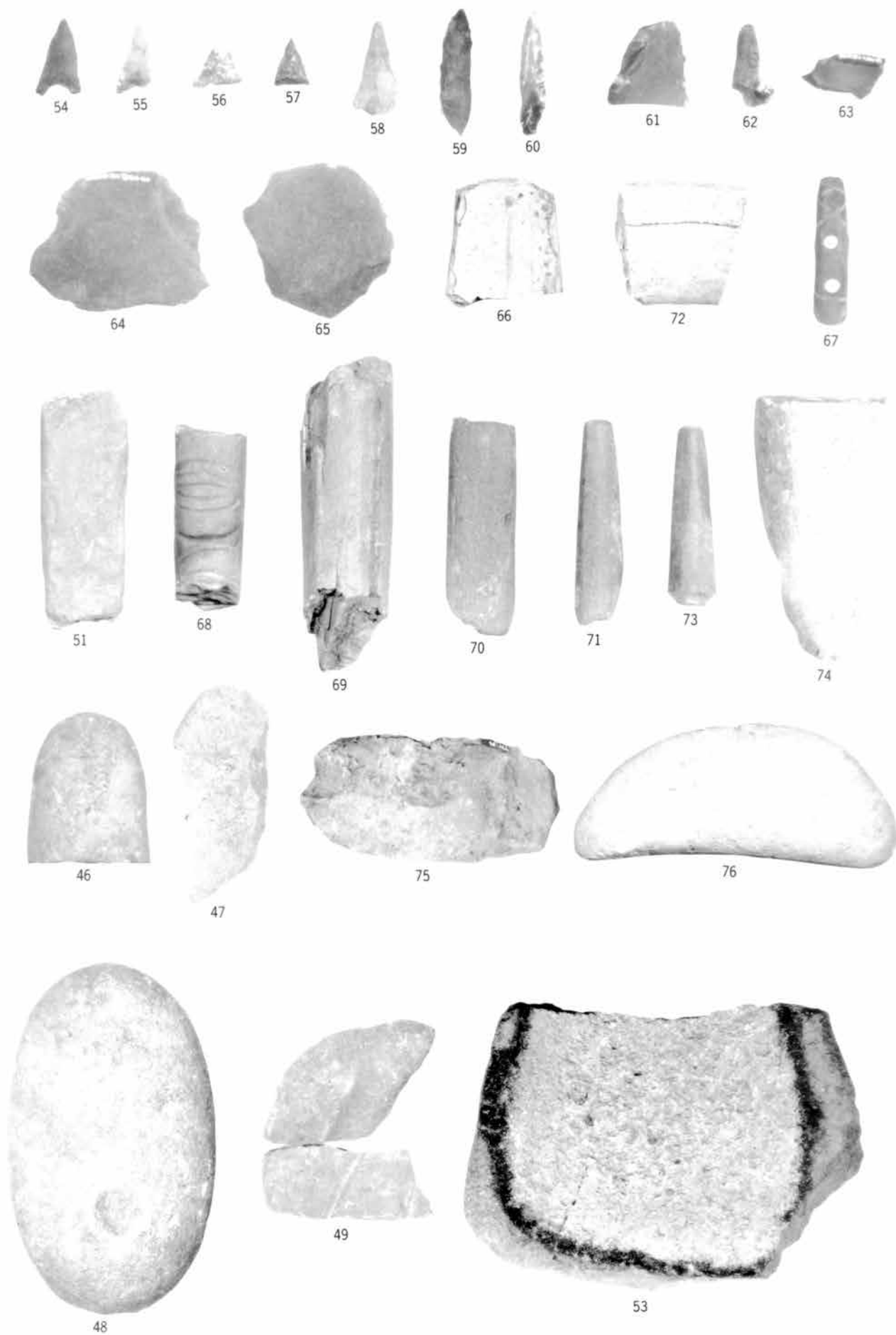
縄文土器(810~886) (838は任意…、他は1/3)



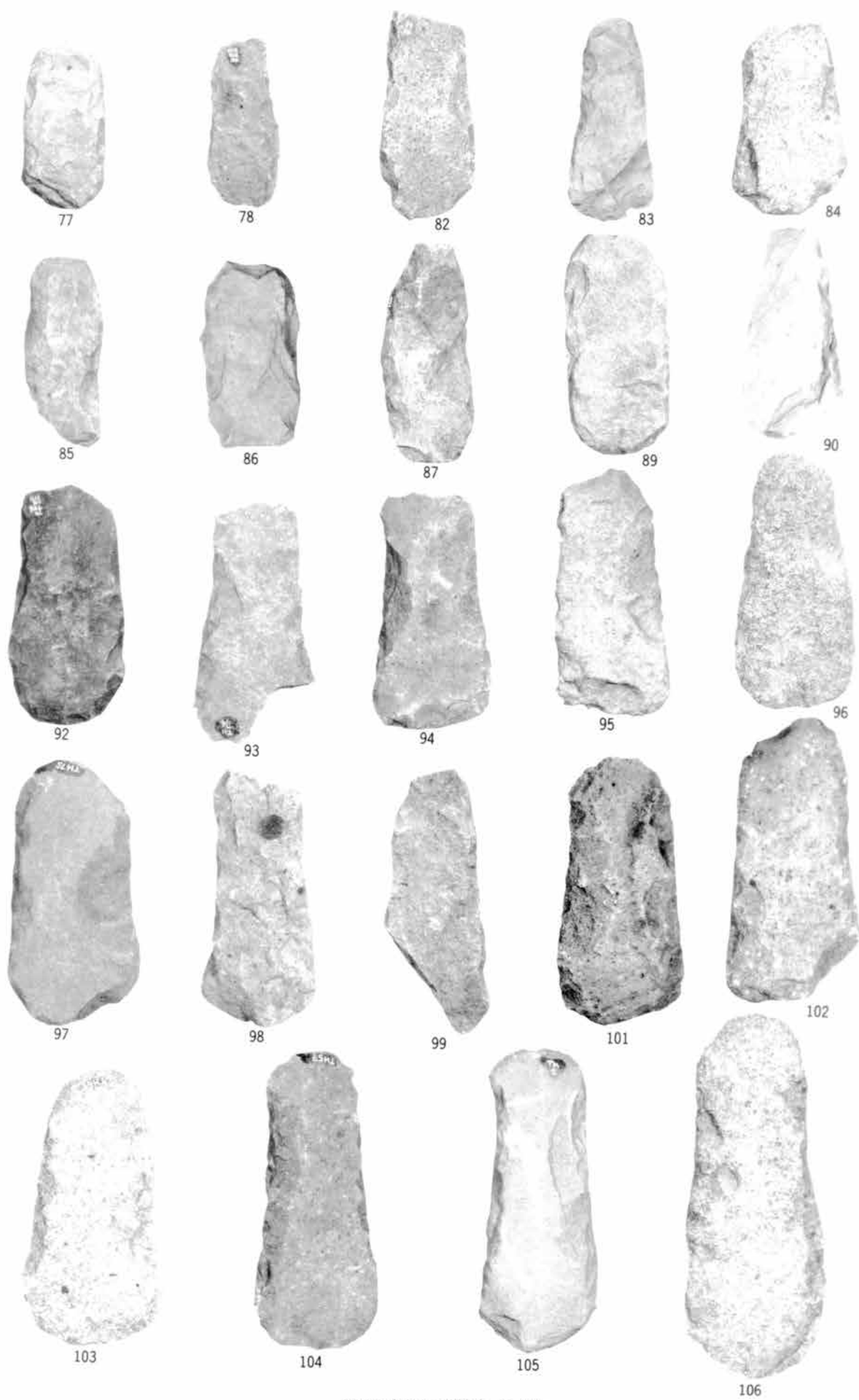
縄文土器・土偶・弥生土器 (888~945) (890は任意、943は1/2、他は約1/3)



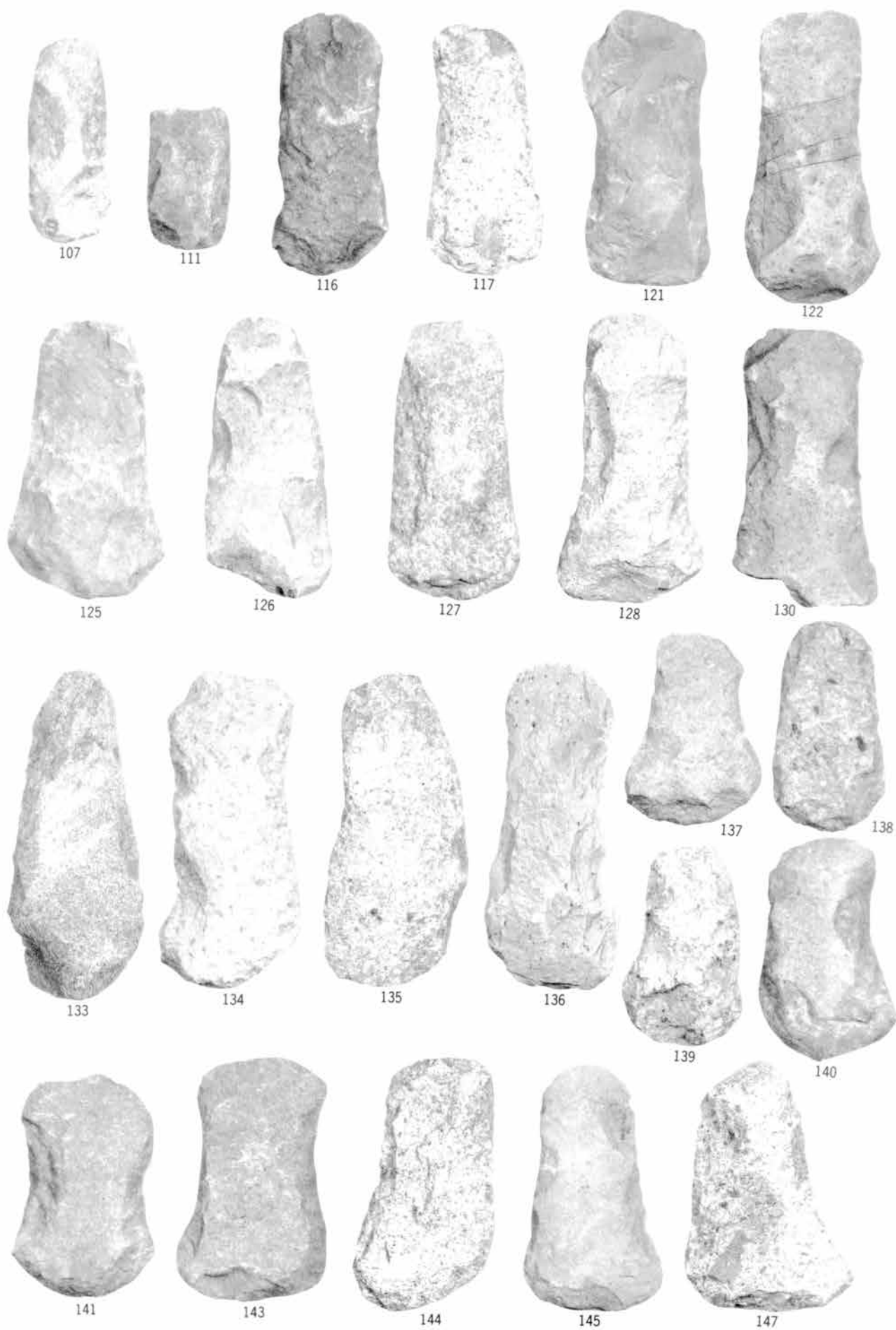
縄文時代石器(1) (1/3)



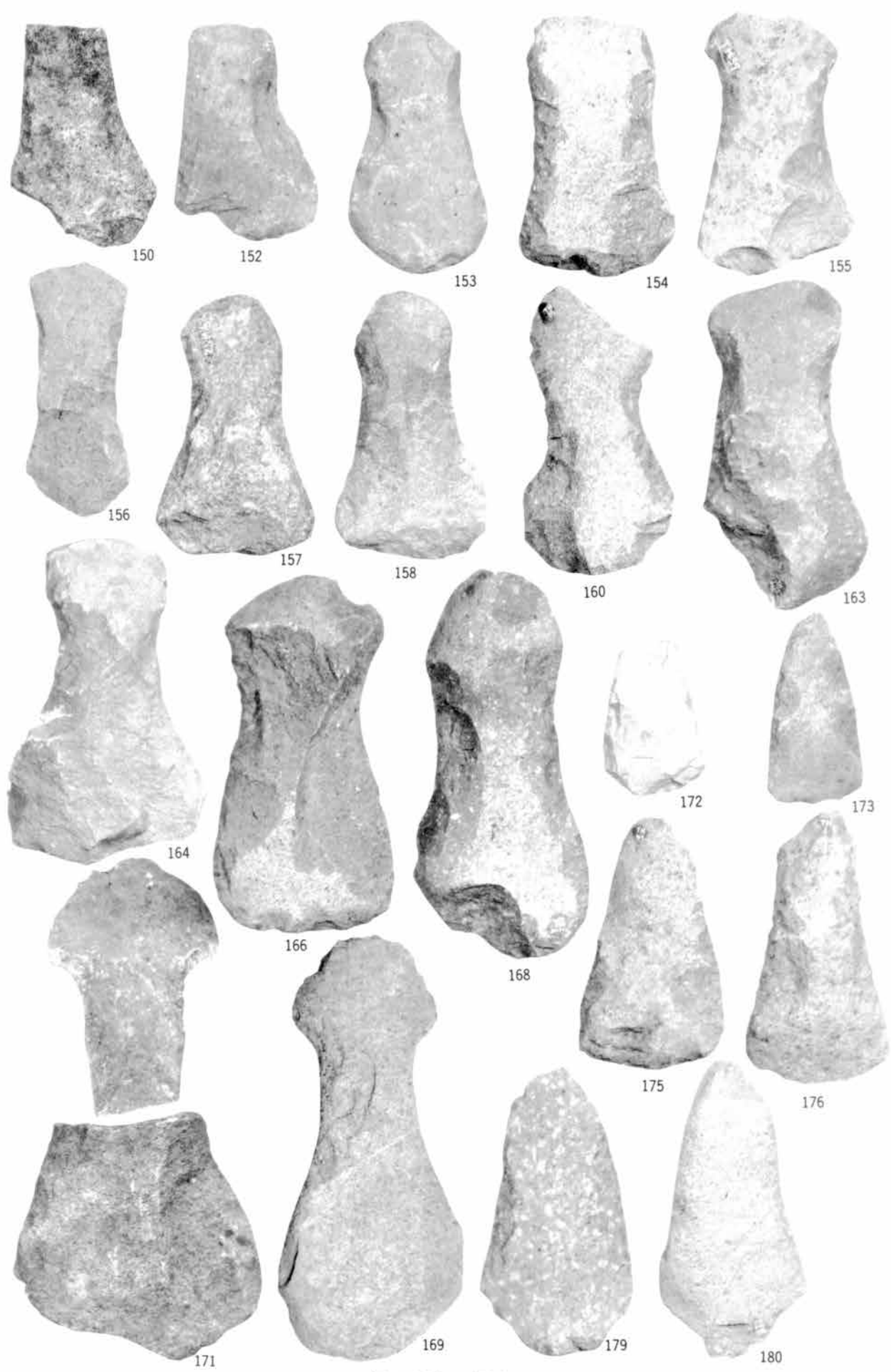
縄文時代石器(2) (1/2、46~53は1/3)



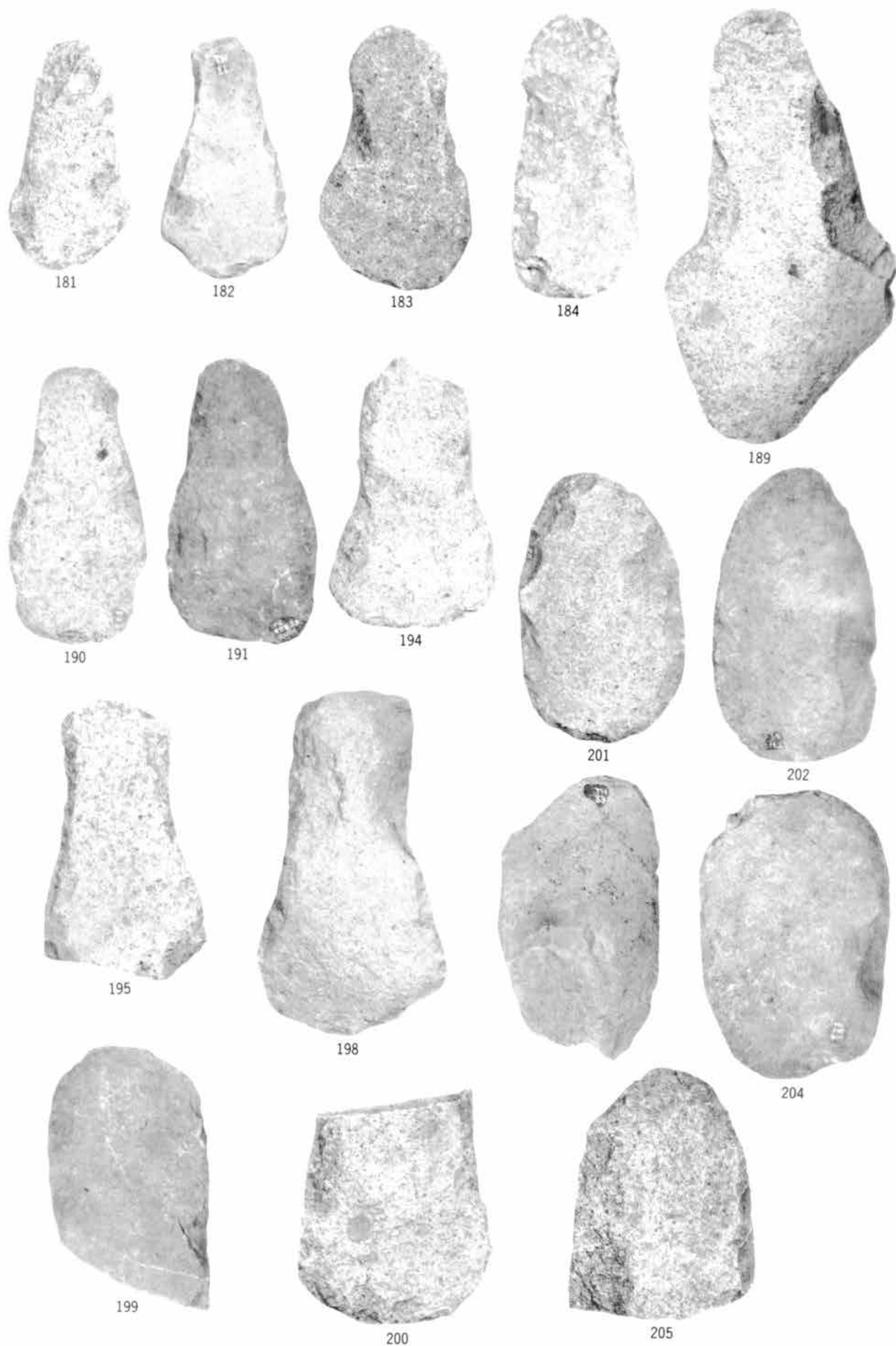
縄文時代石器(3) (1/3)



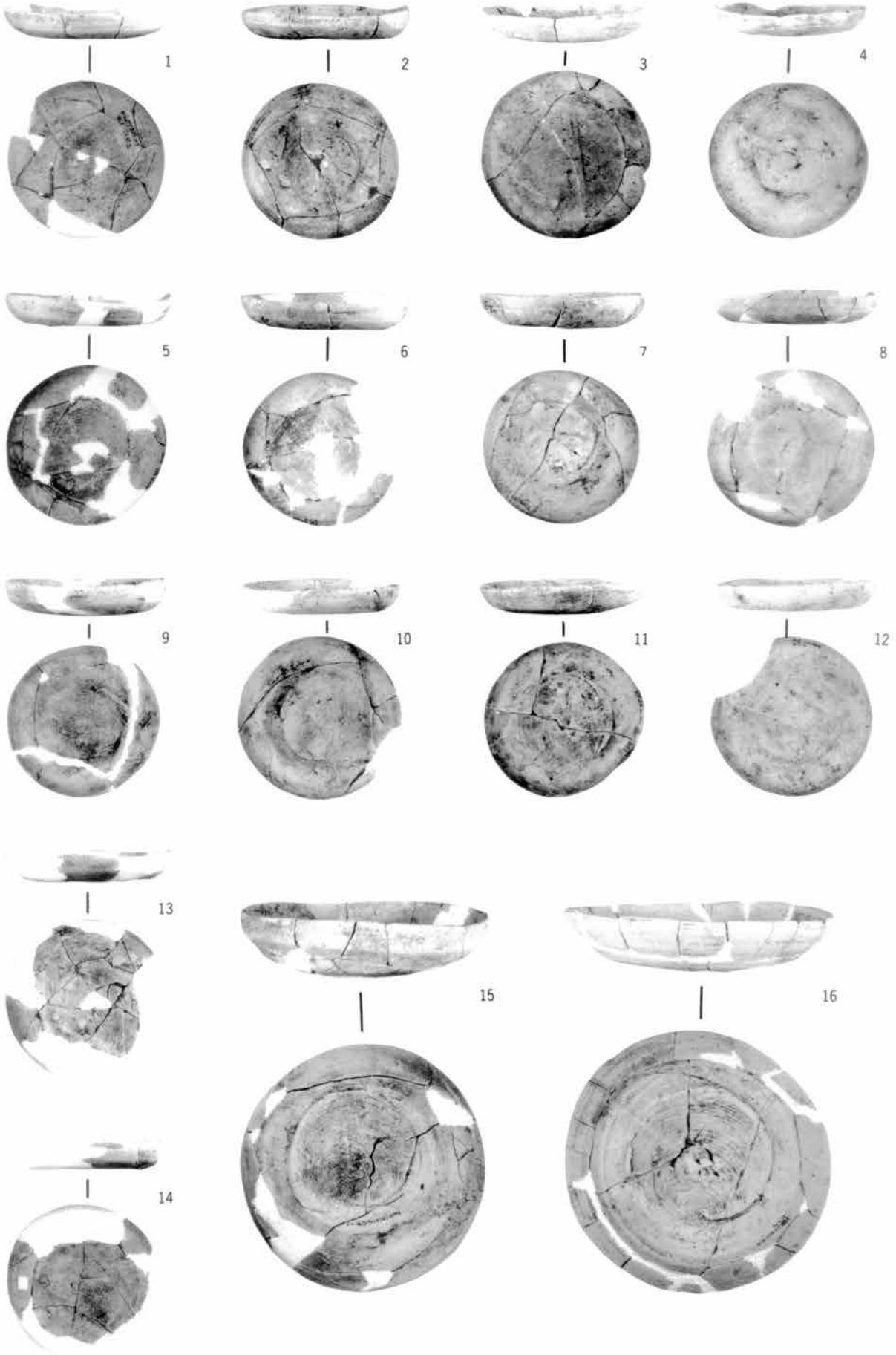
縄文時代石器(4) (1/3)



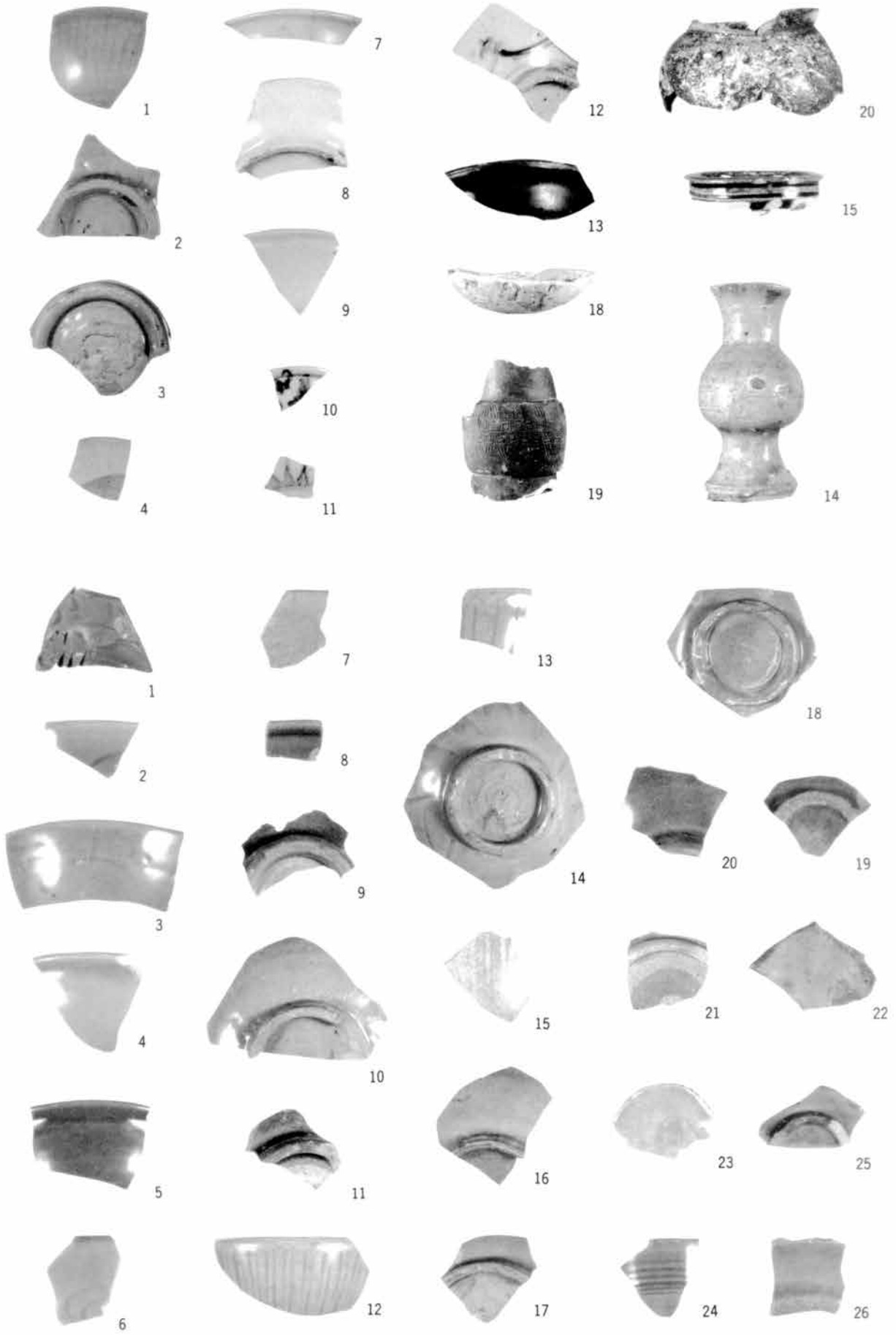
縄文時代石器(5) (1/3)



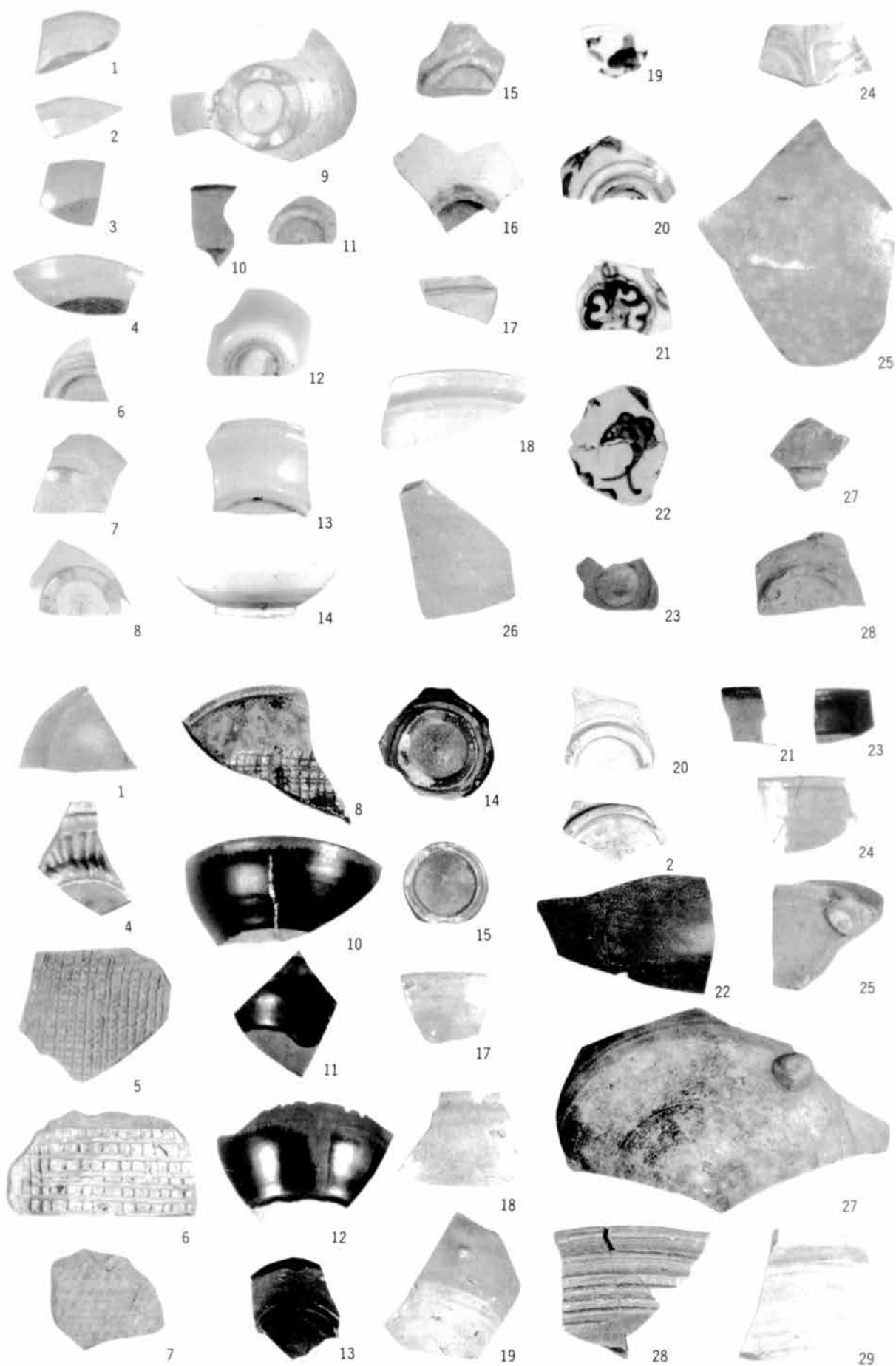
縄文時代石器(6) (1/3)



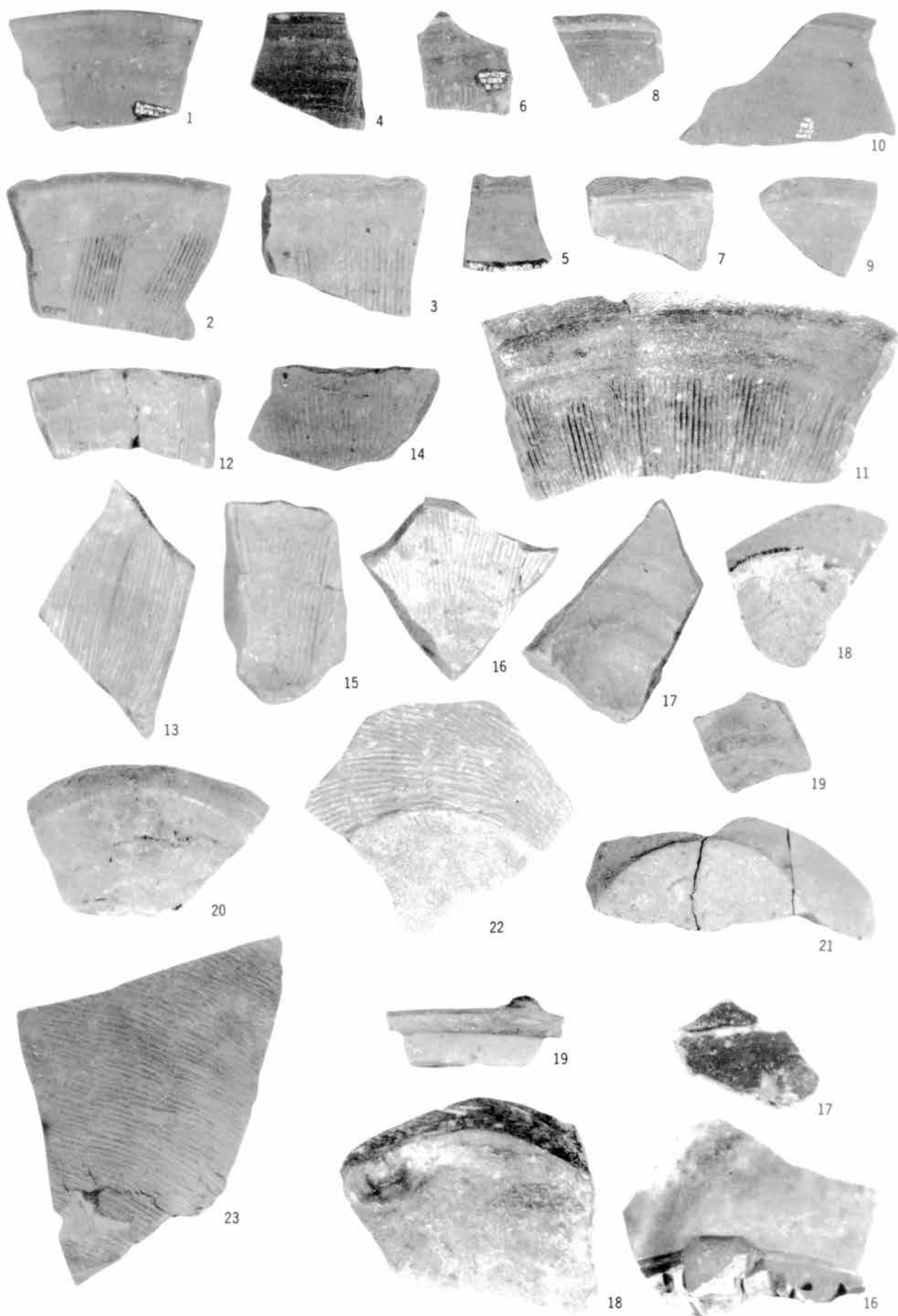
土師質土器 (第70図)



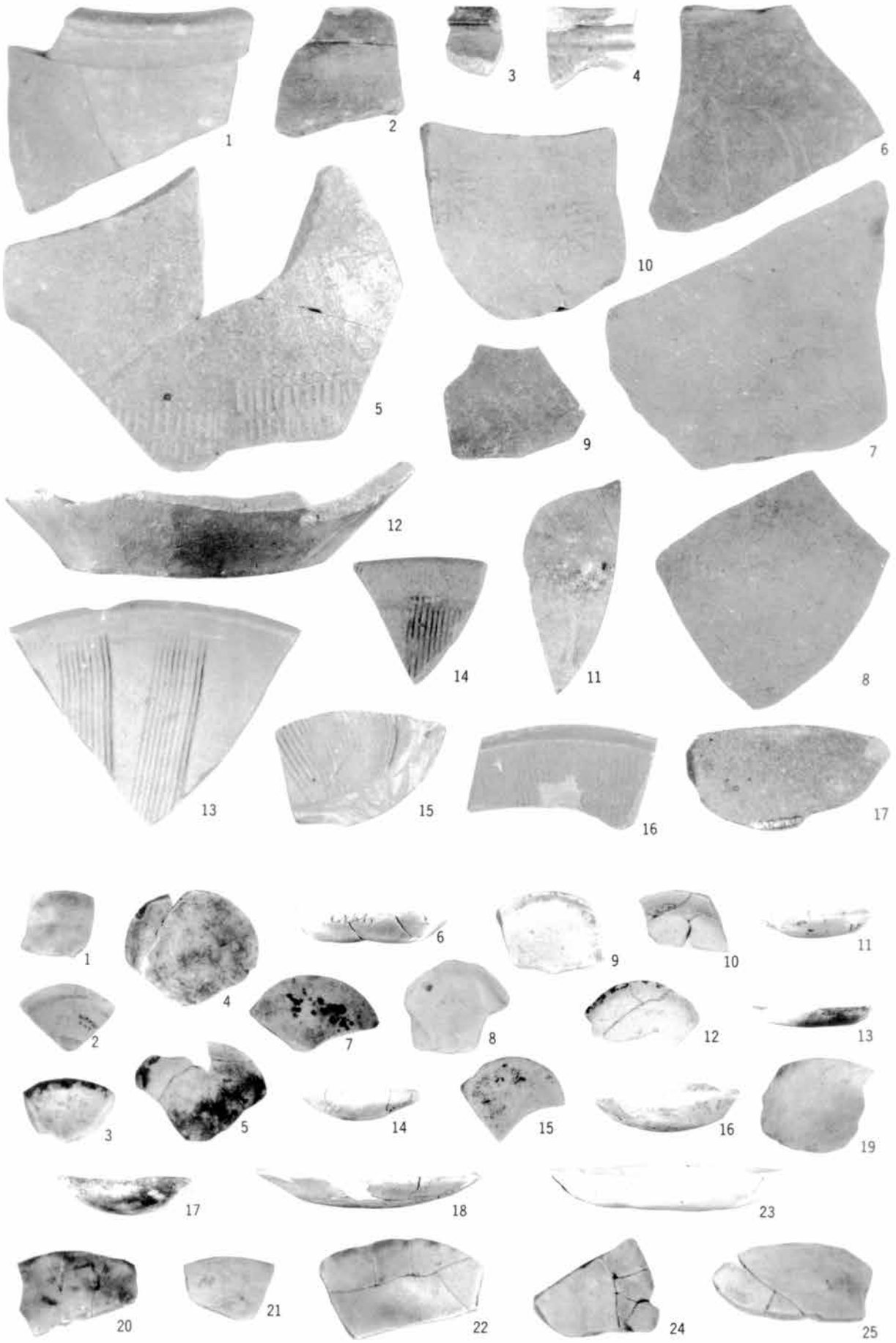
土坛出土遺物・青磁 (上一第71図、下一第72図)



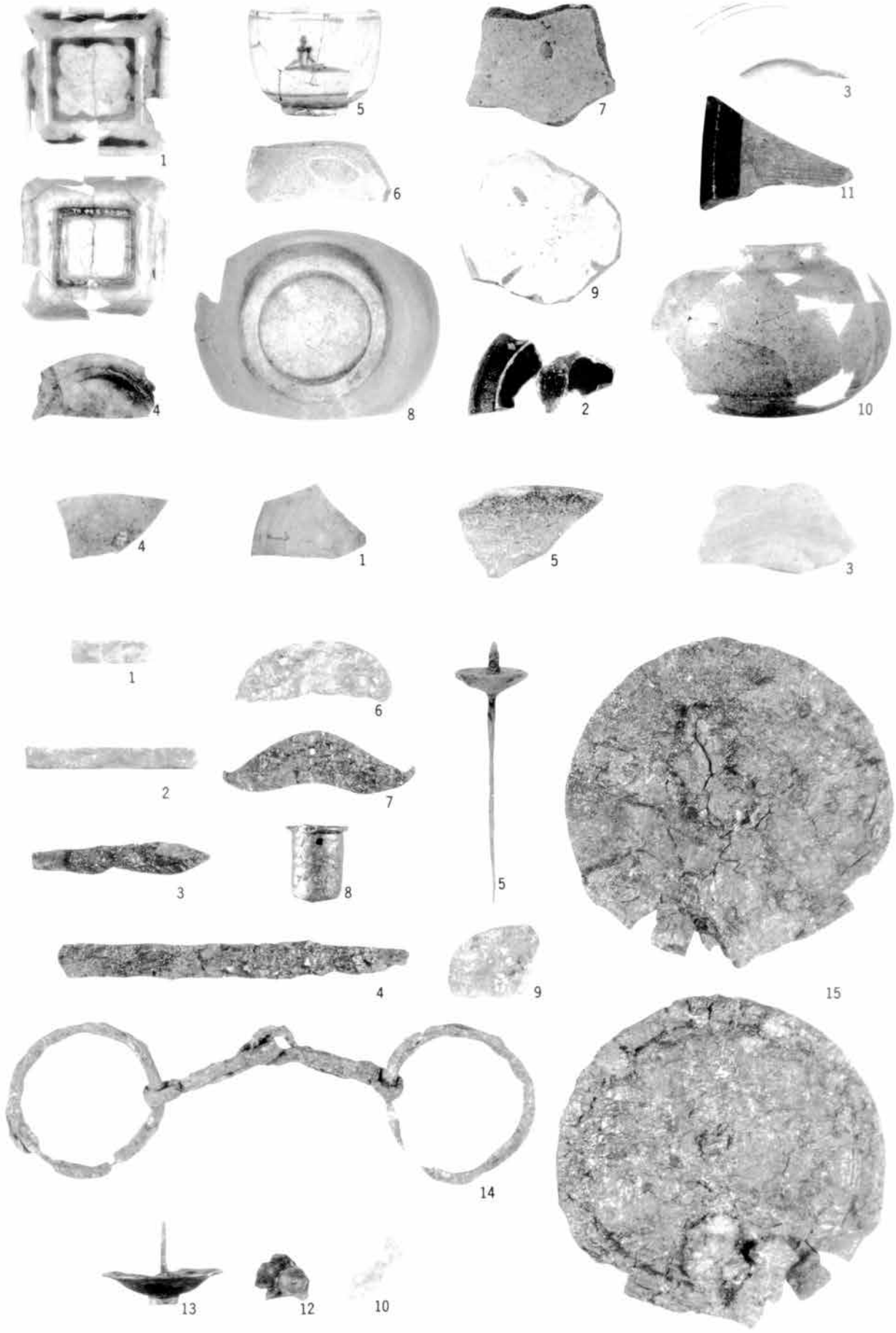
白磁・染付・瀬戸・美濃 (上一第73図、下一第74図)



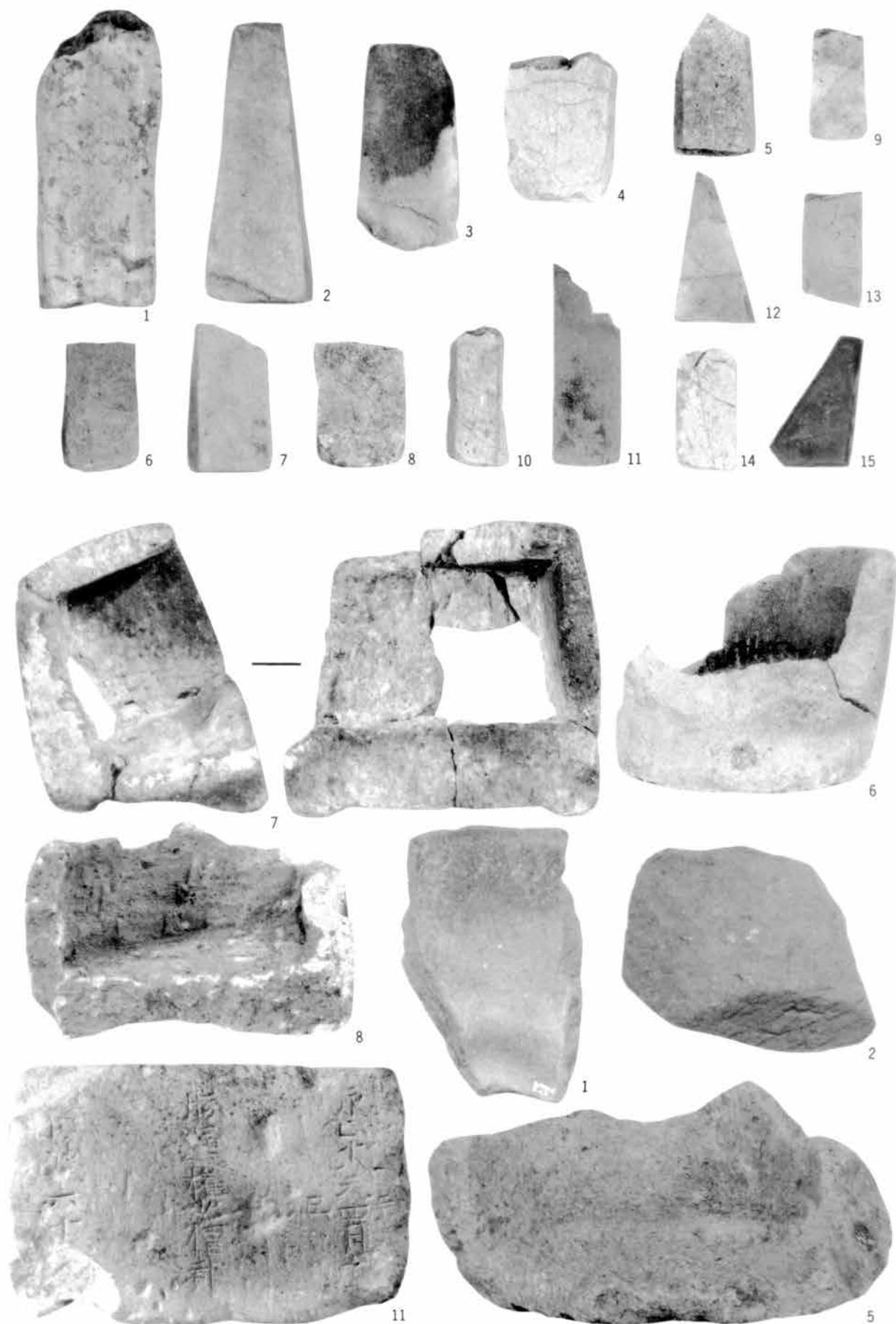
珠洲焼・瓦質土器 (上—第75図、右下—第80図)



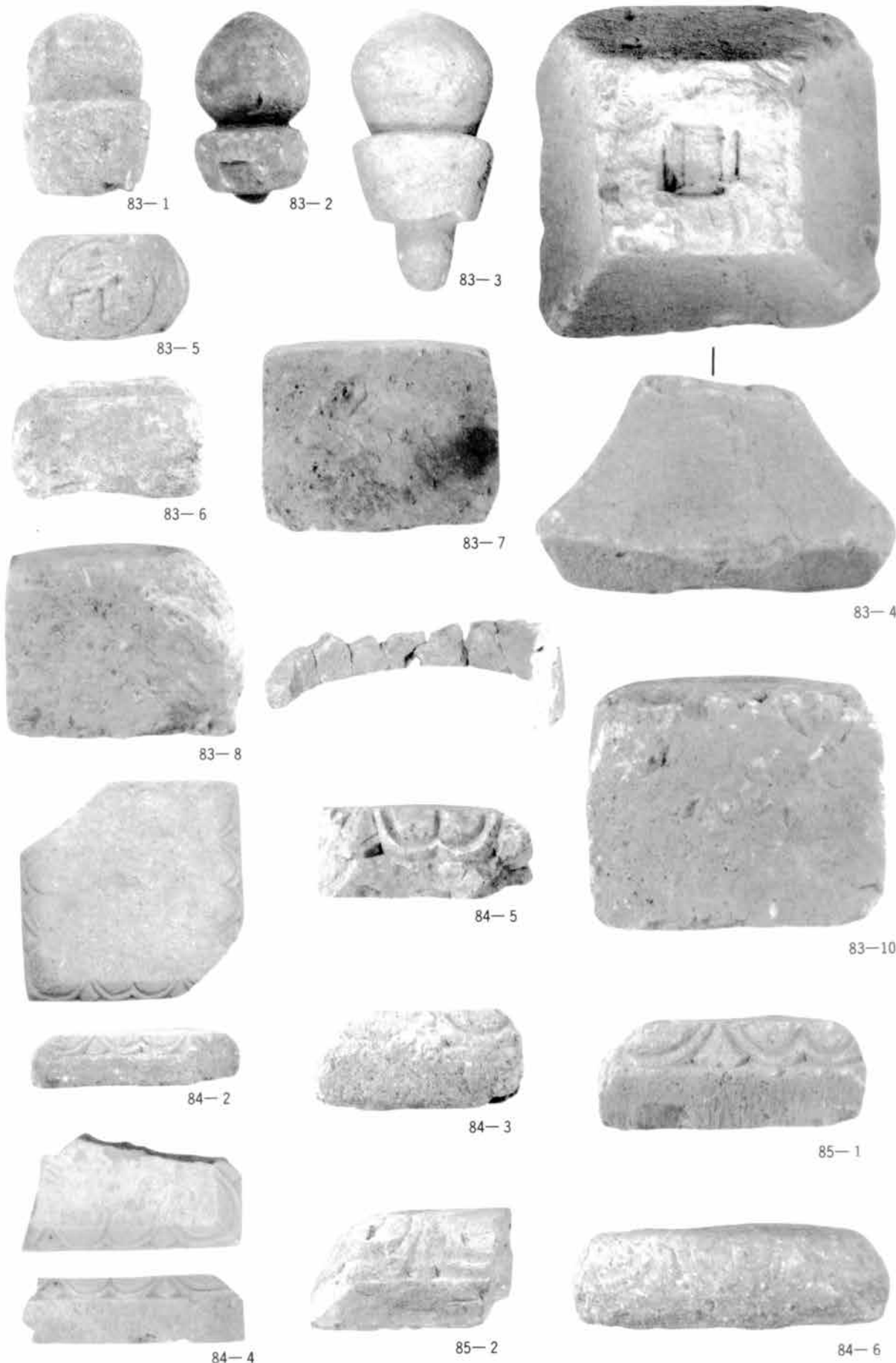
越前・加賀焼・土師質土器 (上一第76図、下一第77図)



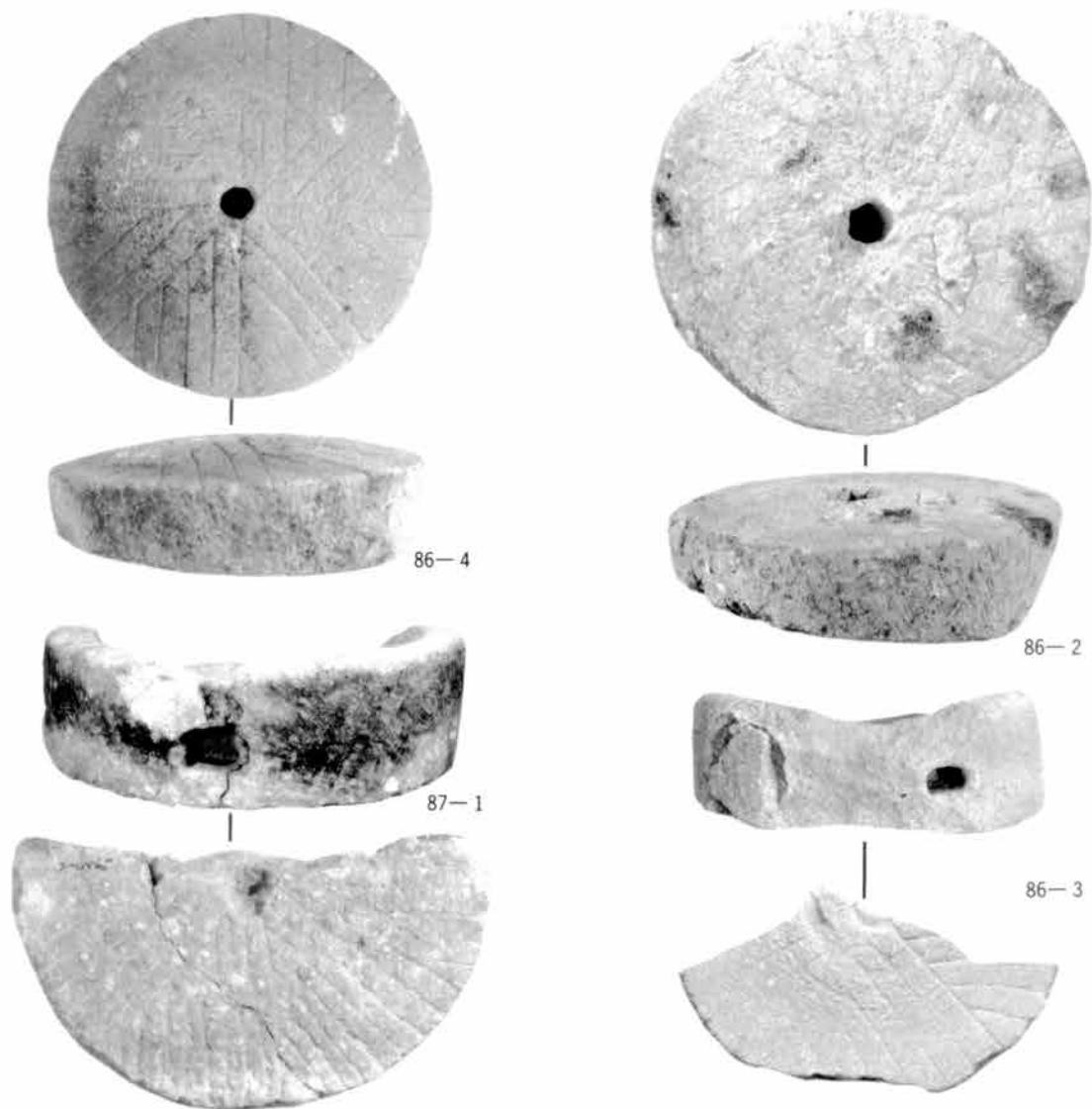
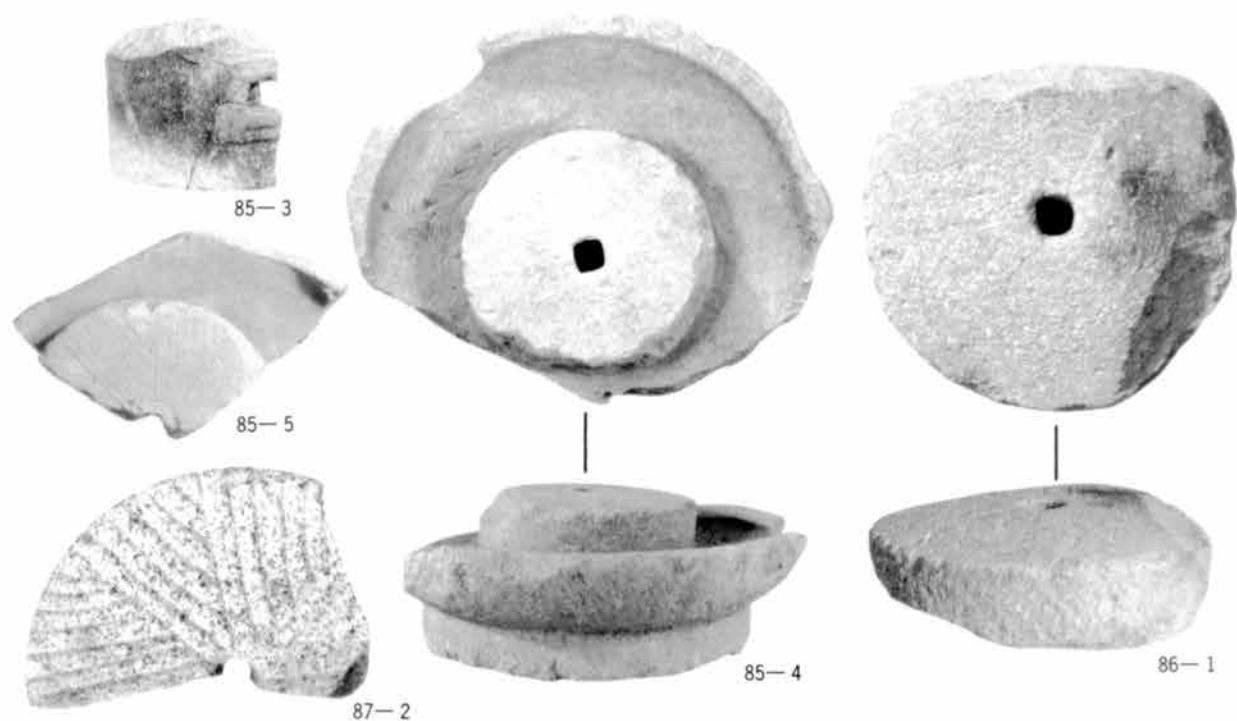
近世陶磁器・須恵器・金属製品（上-第77図、中-第79図、下-第81図）



砥石・石製品・五輪塔 (上—第80図、下—第82図)



石造遺物



石 白

鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡
(II)

一般国道 157 号改良事業に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

発行日 昭和60年 3 月31日 (1985)

編集
発行所 石川県立埋蔵文化財センター
〒920 金沢市米泉 4-133
電話 (0762) 43-7692

印刷所 株式会社 橋本確文堂
金沢市大手町 2-35

